

挿 図 目 次

	頁		頁
1 アフガニスタン遺跡図・	4	27 バーク・ヒンズー石窟・	38, 3
2 ハイバク 中央平頭部・	10	28 ハイバクのバラ・ヒッサール・	38, 3
3 ハイバク 側室 ii 出土遺物・	11	29 ドラライ・ジュアンダン石窟・	38, 3
4 ハイバク 刻画ヤギ・	12	30 ソルボーグ石窟 第一群・	38, 3
5 ハッダホダ・ラージャ洞(シンプソンによる)	13	31 ハワル石窟・	38, 3
6 ハッダ穹頂洞(シンプソンによる)・	13	32 ソルボーグ石窟 第二群・	38, 3
7 ダルンタヴィハーラ洞(シンプソンによる)	15	33 ソルボーグ石窟 第三群・	38, 3
8 ダルンタバザール洞(シンプソンによる)・	15	34 ソルボーグ石窟 第四群・	38, 3
9 ムルガブ双洞(タルボトによる)・	16	35 ハザール・スム石窟・	38, 3
0 ヤキ・デシク洞(タルボトによる)・	16	36 ハザール・スム石窟 内部・	38, 3
1 バーミヤーン 石窟群(アッカンのによる)・	17	37 ハザール・スム石窟 内部・	38, 3
2 ガンダーラ遺跡図・	22	38 ハザール・スム石窟 内部・	38, 3
3 カシュミル・スマスト地図・	23	39 ハザール・スム石窟 内部・	38, 3
4 カシュミル・スマスト洞窟図(ディーン による)・	24	40 カラ・カマール洞窟・	38, 3
5 カシュミル・スマスト洞窟 木彫板・	26	41 フェローズ・ナクシール石窟・	38, 3
6 カシュミル・スマスト洞窟 木彫板・	26	42 古フルム廃墟・	38, 3
7 カシュミル・スマスト遺跡 断面図・	28	43 シュール・テペ・	38, 3
8 ジャマル・ガリの建物・	31	44 シュール・テペ南斜面・	38, 3
9 トレリの建物・	31	45 シャーリ・バス・	38, 3
0 ドーム架構の諸形式・	33	46 シャーリ・バス土城址・	38, 3
1 トレリのドーム架構・	34	47 マザーリ・シェリフ東郊のテペ・	38, 3
2 サンガオのドーム架構・	34	48 クアル・ムハマッド・ハーン・テペ・	38, 3
3 タレリ祠堂の腰飾・	35	49 ドフタル・ハジャ石窟・	38, 3
4 祠堂開口部の諸形式・	35	50 アク・クブルクの村・	38, 3
5 ククティ・バヒ祠堂列・	36	51 ドフタ・パジャ石窟 亀形・	38, 3
6 アバサハブチナ祠堂(トッチによる)・	36	52 バルクのバラ・ヒッサール・	38, 3
		53 バラ・ヒッサールよりみたバルク・	38, 3

54	バルク古城南壁およびボルジ-アシ ヤラン・	38, 39	87	オブラウ-テペ・	38, 39
55	テペ-ザルガラン・	38, 39	88	カラ-テペ・	38, 39
56	チャルキ-ファラク・	38, 39	89	カラ-テペ 東南部・	38, 39
57	ナディール-テペ・	38, 39	90	塑造シヴァ神像 伝オルラメシュ発見 マザリ-シェリフ博物館蔵・	38, 39
58	タクティ-ルスタム・	38, 39	91	仏足石 伝アンホイ発見 マザリ-シェリフ博物館蔵・	38, 39
59	トーブ-イルスタム・	38, 39	92	彩文土器片 伝ウストハン-ザール発見 マザリ-シェリフ博物館蔵・	38, 39
60	アシアビ-コナク・	38, 39	93	塑造仏頭 伝タシュ-クルガン発見 マザリ-シェリフ博物館蔵・	38, 39
61	チェヘル-ドフタラーン・	38, 38	94	陶製手榴弾(?) 博物館蔵マザリ-シェリフ・	38, 39
62	ゴバクリ-テペ・	38, 39	95	緑釉刻紋陶鉢 伝タシュ-クルガン 附近マンカラ発見 マザリ-シェリフ博物館蔵・	38, 39
63	テペ-サラ・	38, 39	96	仏塔装飾 伝チャムカラ-テペ発見,	
64	サラール-テペ・	38, 39	97	バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
65	ハロバード-テペ・	38, 39	98	仏塔装飾 伝チャムカラ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
66	プレション-テペ・	38, 39	99	仏塔装飾 伝チャムカラ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
67	チシュ-テペ・	38, 29	100	柱頭浮彫 伝チャムカラ-テペ発見,	
68	アクチャの東方 19 kmのテペ・	38, 39	101	バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
69	ナスラット-テペ・	38, 39	102	柱頭 伝チャムカラ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
70	ファイザバード-テペ・	38, 39	103	浮彫 仏伝図 伝バグラン附近発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
71	モムレク-カラ-テペ・	38, 39	104	浮彫 仏伝図 伝リリ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
72	シャソリム-ポチャ-テペ・	38, 39	105	柱礎 伝リリ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
73	アクチャの東方 39 kmのテペ・	38, 39	106	甕と柱礎 伝リリ-テペ発見 バグラン, クティ-スタラ蔵・	38, 39
74	チャムカラ-テペ・	38, 39	107		
75	リリ-テペ・	38, 39	108	甕 伝リリ-テペ発見	
76	アリアバードの南 7 km のテペ・	38, 39			
77	ジェル-テペ・	38, 39			
78	クンドウズのバラ-ヒッサール・	38, 39			
79	チェヘル-ドフタラーン・	38, 39			
80	マルザ-ラマザン-テペ・	38, 39			
81	ホジャ-ガルタン-テペ・	38, 39			
82	クローラ-テペ・	38, 39			
83	テモールショ-テペ・	38, 39			
84	チェシュメ-カイナル-テペ・	38, 39			
85	チェシュメ-カイナル-テペの南 200 m のテペ・	38, 39			
86	カシュカリ-テペ・	38, 39			

	バグラ、クティ・スタラ蔵・	38, 39		18, 19, 23	ファイザバード・テペ	
09	陶製人頭 伝リリ・テペ発見			20	モムレック・カラ・テペ	
	バグラ、クティ・スタラ蔵・	38, 39	137	バーミヤーン採集陶器片・	38, 3	
10	陶製牛頭 伝リリ・テペ発見		138	ベグラム採集土器片・	38, 3	
	バグラ、クティ・スタラ蔵・	38, 39	139	バルファク採集土器片・	38, 3	
11	貝製垂飾と貝環 伝リリ・テペ発見		140	バルファク採集石臼・	38, 3	
	バグラ、クティ・スタラ蔵・	38, 39	141	シュール・テペ採集土器片・	38, 3	
12	青銅鈴 伝リリ・テペ発見		142	アフガニスタン北部遺跡図・	4	
13	バグラ、クティ・スタラ蔵・	38, 39	143	ハイバク南部遺跡図・	4	
14	ホジャ・ガルトン・テペ採集土器片・ . . .	38, 39	144	バーク・ヒンドゥ石窟・	4	
15	柱頭 伝アホンザダ・テペ発見		145	ソルボーグ石窟・	4	
16	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	146	ハザール・スム石窟・	4	
17	石彫仏伝図 伝アホンザダ・テペ発見		147	ハザール・スム石窟装飾・	4	
18	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	148	フェローズ・ナクシル石窟・	4	
19	石彫仏坐像 伝アホンザダ・テペ発見		149	クシュ・クルガン山峽・	4	
	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	150	陶製手榴弾(?)・	4	
20	石彫人像, 伝アホンザダ・テペ発見		151	ウストハン・ザール彩陶片・	4	
	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	152	穀類の圧痕・	4	
21	青銅腕環 伝カラ・ザール発見		153	シャリ・バス土器・	4	
	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	154	シャリ・バス土器・	5	
22	青銅鏡 伝カラ・ザール発見		155	シャリ・バス土器の文様と文字・	5	
	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	156	ベグラム土器・	5	
23	銅壺		157	シャリ・バス台付杯(カールによる)・	5	
24	クンドゥヅ, ナシール図書館蔵・	38, 39	158	タンギ・シャファ山峽・	5	
25	石製柱礎 チャール発見・	38, 39	159	バルクの遺跡図(フーシェによる)・	5	
26	シャリ・バス採集土器片・	38, 39	160	ナディール・テペ(フーシェによる)・	5	
27	プレション・テペ採集土器片・	38, 39	161	タクティ・ルスタムの土層・	5	
28	バルク採集陶器片・	38, 39	162	トープ・イルスタム復原図(フー		
29	アフガニスタン北部各地採集陶器片・	38, 39		シェによる)・	5	
30	1, 2 チェヘル・ドフタラーン		163	アジアビ・コナク・	5	
	3~6 シュール・テペ		164	プレション・テペ土器(1)・	6	
	7 カファル・カラ・テペ		165	プレション・テペ土器(2)・	6	
	8~13 ハザール・スム		166	プレション土器の文様・	6	
	14~17, 22, 24 ナスラット・テペ		167	土製円板 ナスラット・テペ発見・	6	
			168	チャムカラ・テペ・	6	

169	柱礎	チャムカラ・テペ発見	68	176	ホジャ・ガルタン・テペ土器	73
170	伝リリ・テペ発見土製品	69	177	ホジャ・ガルタン・テペの文様	75	
171	伝リリ・テペ発見装身具	69	178	柱礎	チャール	ランザ・ジョン・モス
172	バグラン北方テペ	70		ク発見	76	
173	伝アホンザダ・テペ発見柱礎	71	179	チャール遺跡図	76	
174	伝カラ・ザール発見青銅腕輪	71	180	バルファク土器	77	
175	ホジャ・ガルタン・テペ群	73				

第 一 部

ハ イ バ ク 石 窟

第 一 部

ハイバク石窟

は し が き

1

アフガニスタンの仏教文化について、もっとも詳細な記録をのこしたのは七世紀の唐僧、玄奘(602—664)であった。かれは、そのころチュー河(素葉水)のはとりにあった突厥王庭をで、南下し(A. D. 630)、いったんオクサス(縛娑)河の渡河点テルメツ Termez(胆密)にたちいたりながら、こゝでわたらず、オクサス河にそって東進し、そのころ活国とよばれてゐたクンドゥヅ Kundūz 方面からはいつてきた。クンドゥヅは、いま、この方面の中心都市で、その東南にあるバラ・ヒッサール Bala-Hissār の廃墟が活国のあとと推定されてゐる。こゝから、クンドゥヅ川をさかのぼってバグラン Baghlan(縛伽浪)国をへ、プリ・フムリ Pul-i-Khumri あたりにあつた¹⁾ 紇露悉泐健 Ho-lu-hsi-min-chien という国にたちよつた。紇露悉泐健の紇露を Ghorī の対音とみる説がある。こゝのプリはこの川の名でもあり、川の西にはゴリ・バザール Ghorī-bazār とよばれる町もある。ゴリ国のなごりをしるものであらう。玄奘は、こゝからわれわれとおなじく、西北に進路をとり、峠をこえてハイバク Haibāk で、タシュ・クルガン Tash-Kurgan のはざまをとほり、フルム(忽憐)国に到着した。フルムの廃墟はタシュ・クルガンのすぐ北にあるが、600m に3~400m、高さ 10m あまりのテペである。玄奘の記事によると、町の大きさは「周五、六里」、国の大きさは「周八百余里」といふ。五、六里は 2m ばかりだから、大きさは、ほゞこの廃墟に²⁾ 相当する。しかし、この廃墟はあまりにも新しすぎ、古いものをみない。これより、もう 5, 6km 北のシュール・テペ Shūr-Tepe の方が玄奘のフルムの廃墟としてはふさはしいとおもふ。こゝに伽藍が十余所、僧徒が五百余¹⁾ りゐたといふ。玄奘は、こゝから西にむかひ、バルク Balkh(縛喝)にいたり、バルク川、すなはちバンディ・アール Band-i-Amīr 川をさかのぼり、難路にあえぎ、盜賊におびえながら、ヒンヅウ・クシュの峠をこえ、バミヤーン Bāmiyān(梵衍那)国についたのである(Fig. 1)。

ハイバクは、プリ・フムリの平野とフルムの平野とのあひだにある山中の一オアシスである。仏教文化のなごり¹⁾ えてゐた当時でも、玄奘の注意をひくほどのものは、なにもなかったらしい、なんの記事もみあたらない。しかし、プリ・フムリからフルムまでは、およそ 145km ある。玄奘も、このあひだで十日ちかくはつひやした²⁾ であらう。

1) 足立喜六『大唐西域記の研究』上巻、東京 1942, p. 74.

2) Major E. C. Yate; *Northern Afghanistan* (Edinburgh and London 1888) p. 317. によると、1700年ごろに住民がみなタシュ・クルガンにうつり、廃墟になったのだといふ。いまみられる廃墟はそのときのものであらう。

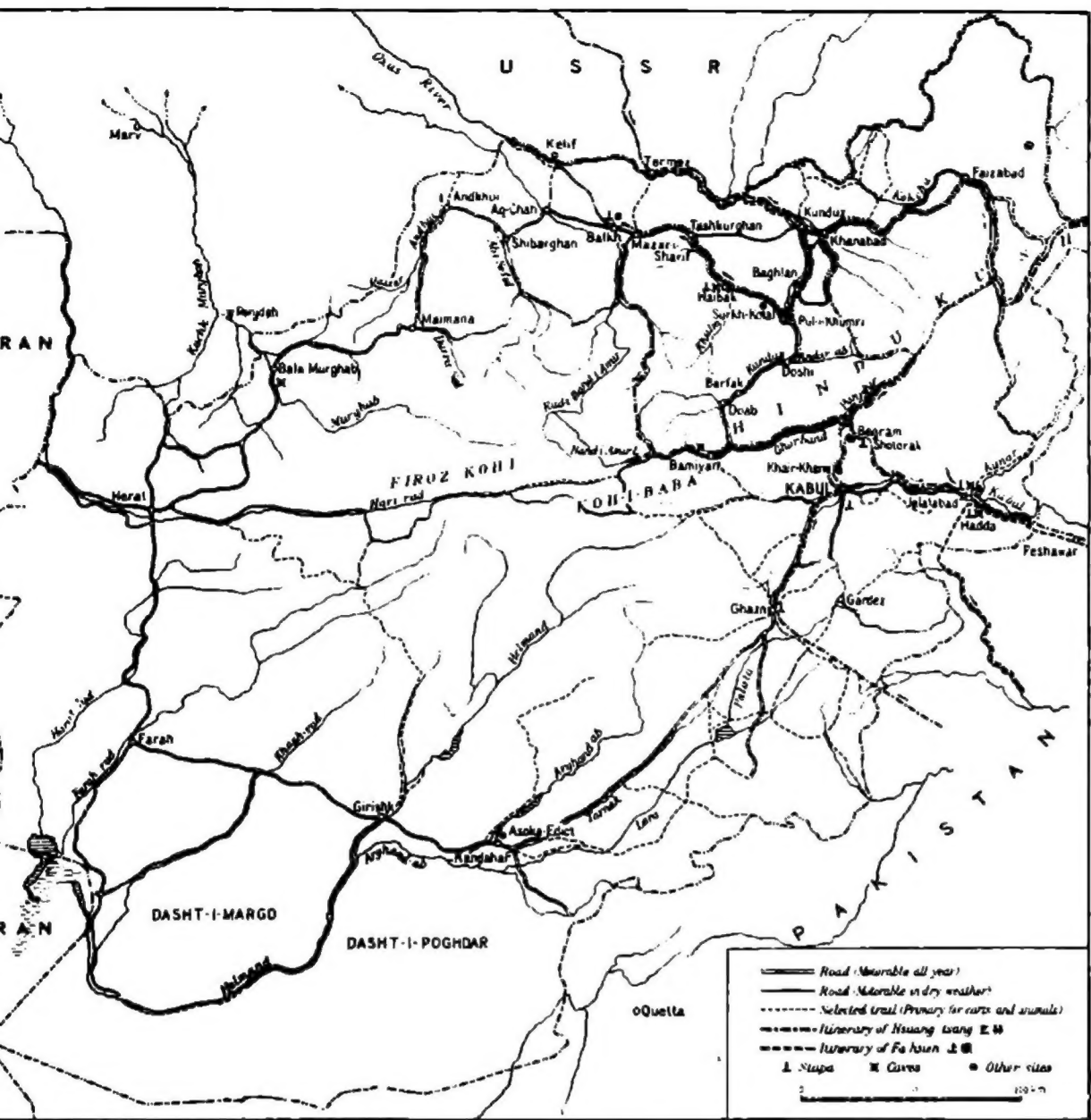


Fig. 1 アフガニスタン遺跡図 Archaeological Map of Afghanistan

のこととて、あまりゴツゴツした岩肌はでゝゐない。なだらかな、埃っぽい山にとりまかれて青々としたサマングアンがある。ほそいながれが町中を灌流し、並木をうるほすとともに、町をとりまく果樹園をめぐってゐる。サマングアンによくあるやうに、町のまんなかに円形のメイダン(中央広場)があり、これを取りまいてレスト・ハウスがあり、電信局があり、郵便局があり、小学校もあり、この地方の役所もある。それにバザールも北と南にある。住民は、ウズベク人を主にし、ハザラ人もをり、タジーク人もゐる。それにプシュト人もをる。イエートン(1900)の記事には、こゝの住民は、チャガタイだというのが、それはウズベクのうちの一族であらうか。海拔1,000mで、山中爽快の気にとむ。「サマングンの夜」といふ形容詞は、そうした爽快な夜をさすことばとして用ゐられてゐる。サマングン Samangan はハイバクの古名で、われわれのレスト・ハウスはホテル・サマングンと改題されてゐる。

2

いまこゝでとりあげようとするタクティ-ルスタムの寺院址は、この町を中心から2km とはなれてゐない。山の隅にあり、まさにこれから丘陵のはじまらうとするところである。不幸にして、玄奘の記載にはのぼらない。たけれども、アフガニスタンにはめづらしい石灰岩の石窟遺跡である。イスラム時代の破壊をへて、その彫像や装飾はすっかりなくなってゐるけれども、なほ若干むかしのおもかげをしのぶことができる。タクティ-ルス

あらう。してみると、ハイバクに泊ったこともない。もし泊つたら、キャラヴェンライよりはタクティ-ルスタムの寺院に宿をもとめたいかも知れない。

いま、カーブルから馬車にてマザリ-シェリフ Mazār-i-sherif にでるにしよう。どうしてもドアーブ Dohab に一泊、ハイバクに一泊しなければならない。ドアーブはヒンヅークシュの山をこえたばかりの山間の市場、ハイバクはクンドゥズの水域から、フルムの水にでたばかりの山間の市場、まはりの山々は荒涼たる秃山である。たゞ乾燥

・ルスラム、たゞしくはタクト・ィ・ルスラムで、「ルスラムの王座」といふことである。ルスラムは『シャー・ナマ (Shah-nāma)』にでゝくるイランの民族的英雄である。イランのイスラム教徒によって破壊された、この遺構が、そのイランの英雄の王座とよばれてゐるのは、いさゝか皮肉である。

この廃墟が世人の注意にのぼるやうになったのは、第二アフガン戦争(1879—81)で、アフガニスタンがイギリスの保護領になってからである。イギリスはロシアとの国境を劃定するため、多くの軍人をこの地方に派遣したが、国境委員会に配属されてゐたタルボット大尉 Cap. M. G. Talbot と、委員であつたイエート少佐 Major E. Yate の手紙に、まづこゝの記事がみえてゐる。前者は Journal of Royal Asiatic Society 新輯第十四巻 (London 1886) に登載され、後者はイエート少佐の旅行記、*Northern Afghanistan* (Edinburgh and London 1888) に収録されてゐる。

それによると、タルボット大尉は、1885年メイトランド大尉 Cap. P. J. Maitland にともなはれ、ハザラ地方を踏破したのち、バーミヤーンをおとづれ、ついでカラ・コタル Kara-Kotal へに、11月13日ハイバクについてゐた。その日、かれはさっそくシンプソン W. Simpson に手紙をかいて、バーミヤーン石窟の詳細報告してゐる。ついで、その翌年3月2日には、オクサス対岸のキリフ Kelif から手紙をかき、ハイバクのタクティール・スムのことを記し、ストゥパ洞のスケッチをおくつてゐる。かれは、われわれのいふ側室 ii をも入口通路とかがへたので、その床が伏鉢部まはりの床よりもたかいのを不思議におもひ、また、平頭部したの円頂円形室に仏像が安置されてゐたやうに解してゐる。また、かれは北方 15km のハザール・スム Hazār-sum の石窟群についても、記述をのこしてゐる。ハザール・スムとは「千の石窟」といふ意味ださうである。

イエート少佐のハイバクからの手紙は 1886 年 9 月 26 日づけである。主としてストゥパ洞のことをかき、山頂部の諸窟にもふれ、また北方のハザール・スムや、西南のスミ・サンギ Sum-i-Sangi の石窟のこともふれてゐる。たゞ今日とちがふところは、北丘のいたゞきに泥レンガの廃墟があつたという点だけである。

しかし、これがはじめて學術調査の対象にのぼつたのは、今世紀も二十年代にはいつてからで、それはフォーシェ A. Foucher を主班とするフランスのアフガニスタン考古學調査隊 Délégation Archéologique Française en Afghanistan の活動による。フォーシェは、まづ 1923 年 12 月 15 日に、こゝをおとづれ、さっそく Journal Asiatique 第二百五巻 (Paris 1924) に *Notes sur les Antiquités Bouddhiques de Haibâk (Turkestan, Afghan)* と題して報告を發表してゐる。そののち、これは同隊の正式報告書 *La Vieille Route de l'Inde de Bactres à Taxila* 第一巻 (Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, Vol. 1, Paris 1942) に、そのまゝ採録されてゐる。

われわれのイラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊は、1959 年 8 月、ヘラトより北まはりの道を走り、マイマナ、バルク、カーブルとすゝんだが、このとき途中のハイバクで一泊し、この石窟群をおとづれた。そのときは水野と田中、それに細川護貞氏と石黒孝次郎氏、およびアフガン文部省より派遣されたイブラヒム Mohammed Ibrahim Khan 君であつた。礫岩 conglomerate の層にほりこんだ小石窟の多いアフガニスタンで、かういふ石灰岩の石窟は、まったくめづらしい。そのうへ、第一洞の天井大蓮華もよくのこり、第六洞、すなはちストゥパ洞の偉容も注意をひいた。よつて翌 1960 年の調査では、これを目標にアフガニスタンには入り、9 月 5 日から 10 月 5 日まで、約一カ月の調査をした。主たる調査者は水野、田中、西川、小谷の四人で、ハイバクまで同行した林、佐原、勝藤、それからアフガン文部省派遣のゴラム Gulam Sakhīb 君は、もっぱらバ

、あるひはクンドゥツ方面の一般調査にしたがった。調査隊は終始ホテル・サマンガンに宿泊してみたが、林、佐原、およびゴラム君は、9月23日こゝをでゝパキスタンにむかった。本篇は、その期間中の調査だが、もっぱら測量調査にかぎり、発掘することはなかった。

第一章 山麓の諸石窟 [Pls. 2~22]

タクティ・ルスタムの地はハイバクの西南、町はづれにあり、町の中心から2 km とはなれてゐない。こゝから西の、ひくいなだらかな山地がはじまり、そのひとつのをねのはしに、われわれの第六洞とよぶストゥック洞(塔洞)がひらかれてゐる(Pl. 1)。これにたいする北側に、独立した小丘があり、その南側に第一洞から第五洞までの諸石窟(Pl. 2-1, Plan 1)がひらかれてゐる。みな石灰岩に直接ほりこんだ石窟である。この山のあひだ、東の方からポプラの樹林がくひこみ、これをやしなふ用水路がめぐってゐる。そのうへ用水路は土堀で、東の方はまったく目かくしになってゐる。まったくの別天地で、どちらからもわざはひされるところでない。閑静このうへなく、修道にはもっとも適したところである。そのうへ、また町はちかく、托鉢にも便利であつたらしい。

いま山のあひだには、廃屋の残骸が若干のこつてゐる。第二洞の入口も泥レンガの修理がみられる。たゞちかい時代にも人が利用したことはあきらかである。こゝで採集された釉のかゝった陶器片は、アフガニスタンのどこにでも採集されるものであり、またどの時期のもの(赤絵陶、割花陶、鉄絵陶)をもふくんでゐる。また赤焼土器は緻密堅牢で、クシャーナ期にのぼる壺形土器その他がみられた。

第一洞] 西端にある円頂洞(Plan 2)である。前室と主室とにわかれてゐるが、前室(Pl. 2-2)は天井がない。10 m に11 m の長方形で、もともと天井はなかったのだとおもふ。いま、これにはいってゆく道がはっきりしてゐるが、東のすみの岩がきれてゐるから、こゝからかとおもふ。底まで掘れば見当がつくかも知れない。後壁には東よりに主室にはいってゆく道がある。道はくだってゆき、三段の階段がみられる。前室と主室の差は約2.00 m である。入口の左右に二つの明窓がうがたれてゐる。これとはべつに、前室よりうへへ、よりおくに、またひとつの明窓がある。明窓のまはりはかなり不規則で、光のはいる方の口は大きく、反対側の口は小さくつくつてある。このやうに門口と明窓がおなじ壁面になつてゐるのは、前壁の切りとりがすくないからである。インドとか中国では門口と明窓とが、おなじ壁面の上下にひらかれてゐるのがつねである。主室(Pls. 4, 5)はまるく、円天井である。直径10.50 m、高さ10.80 m、後壁上下に龕形がある。たぶんストゥックの仏像を安置したものとおもふ。下龕の方は龕へのぼる階段のごときものが彫りのこされてゐる。雲岡石窟にあれば、うへに交脚菩薩像があり、したにシャカムニ仏の坐像のあるところである。龕形、うへはあさくはなはやく、下はやゝふかいが、龕底はいづれも彎曲せず、平坦である。ストゥック像をさゝへる支木のための小孔がみられる。龕形は完好な円形アーチをなす。

洞壁下半部はなにものこつてゐない。たゞ凹凸のはげしい壁面がみられるだけである。このうへにストゥック

ぬって平らにし、また装飾をつくったのであらう。上半部(Pl. 7)には大きな蓮華文を四段にならべて彫っている。大部分は風化してゐるが、よくのこった蓮華文もある。むっくりした八瓣複葉の蓮華らしい。雄蕊が大きく円周をふさがき、なかに子房をあらはす点がみられる。また蓮華文のあひだには、さまざまな三葉文、四葉文、つくり空白をうめてゐる。これらは、みな石灰岩にちかに彫りつけたもので、わりによくのこっている。側壁から天井になるところは急にをれて、完好なドームとはいへない。妙に扁平なドームである。このドームの壁面全体にわたって大蓮華文(Pl. 6, Plan 3)が彫ってある。中心に花托があり、これから雄蕊がでゝゐる。花托のなかに七つの子房がある。蓮瓣は一周二十六あり、それが九層にかさなっている。しかも各葉ごとに、雄蕊と子房とを、ねもとにあらはしてゐるのが異様である。とにかく、みごとな大蓮華文である。最外周の蓮瓣の中には、また小さい蓮瓣がのぞいてゐる。

このやうな大蓮華文、いはゞ千葉の大蓮華を窟頂いっぱいには彫った石窟はどこにもない。インド、パキスタンにもないし、トルキスタンにも、中国にもない。アフガニスタンでも唯一の、めづらしい例といへよう。

[第二洞] 第二洞(Plan 4)はすぐ第一洞に隣接してゐる。前面をひろく切りとって、ながい外壁を形づくっている。外壁(Pl. 3-1)の全長は約42m、風化した場所はおぎなはれて塼築の壁がつくられてゐる。いま出入できる入口は、西よりと東よりとにひとつづゝある。階段をつけて内部におりてゆくやうになってゐる。内部の壁がひくいけれども、雨のふらないところであるから、雨水のながれこむ心配はない。もとは、中間にもなほ四つの入口があいてゐたらしい。

西の入口からなかにはいると、おくふかい廊下(Pl. 9-2)になってをり、そのながさ12m、円筒形の天井になっている。このはいって左手に側室、おくに後室の口がひらいてゐる。後室は長方形(Pl. 10-2)、7.50mに3.00m、円筒形の天井である。龜形などはない。室外の床に円形のあさい凹みがある。用途は不詳。

側室も5.00mに2.50mの長方形(Pl. 10-1)、円筒形の天井である。奥壁に円拱の、ふかい龜形があるが、こゝあたりいったいは黒くくすぶってゐて、尊像をおさめたやうな形跡はない。たぶん燈火などをおいた棚だらうとおもふ。その左手したにも龜形のくぼみがある。やはり、なにか物置であつたかとおもはれる。それから奥に円形で、やゝふかい穴(Pl. 10-3)がある。しかも、一方に水のながれこむやうな溝がついてゐる。はたして、なににつかつたのか、水をいれておくにしても、壺をすゑておくにしても、あまり部屋のまんなかであるのに不審がある。あるひは煮たきの竈ででもあらうか。いづれにしても、この石窟が僧房のやうなものだとすると、こゝは厨房とかんがへるのが至当であらう。

この廊下から東の方に二つの口がひらいてゐる。さうして、それから、ながい廊下が平行してはしっている。前廊は長さ41m、後廊も41m、どちらも円筒形の天井がある。前廊(Pls. 8-1, 9-1)の高さ3.70m、後廊(Pl. 8-2)はこれよりたかく4.20mある。前廊の東端には上段に龜形がある。また北側にはひくい壇がはしり、そこから後廊に通ずる空洞が十三あいてゐる。このために、いま村人たちはバザールとよんでゐる。ちよつと市店の軒下に似てゐるからである。インド、パキスタンのごとく、壁でしきられた僧房ではないが、このひとつ、ひとつの空洞は僧房とみるよりほかはない。アフガニスタン独特の僧院窟 vihara で、ジェララバードのダルン¹⁾ arunta 石窟にも一例ある。後廊の方は前廊よりもせまくてふかい。さうして空洞のまへにながくとほる縁

1) H. H. Wilson ; *Ariana Antiqua*. London 1841, Chapter II, Memoir on the Topes and Sepulchral Monuments of Afghanistan by C. Masson, pp. 97, 98.

うの壇もない。

前廊東端の龕形も、尊像をおさめたやうにはかんがへられない。

〔第二A洞〕 第二洞東端のそでのやうなところに、西むきの小石窟(Pl. 3-2)がある。階段でおりてゆけば、形になる。奥壁、左右壁にも小龕形がある。西の側室同様に物置の龕であらう。第二洞に接し、居住めの石窟であらう。

〔第三洞〕 この石窟も前室と主室(Plan 5)とからなる。入口の左右に明窓があり、上方にはまた明窓(Pl. 1)がある。この点は第一洞におなじであるが、こゝでは左右の明窓は前室のため、うへの明窓は主室のためである。雲岡石窟やインド諸石窟のごとく整然たる形になってゐない。たゞ明りをとるための孔で、小さく、ふとゝのってゐないのが、特色といへば特色である。

前室へは五段の階段をおりてはいる。これは補修でできた階段だが、とにかく石窟内が外部よりさがってゐることは、第二洞とおなじで、本来のものとおもふ。

前室は 6.50m に 13.50m の広大な長方形(Pls. 12-1, 13-1)である。円筒形の天井、東端に大龕形がある。その用途はわからないが、あるひは尊像のためかも知れない。左右にせりだしアーチ squinch arch ができて(Pl. 12-2, 13-2)、上部は半ドーム状になってゐる。壇は泥の補修があり、すっかりくすぶってゐるのは、後世にも住居とつかはれたからであらう。壁面にはなにも装飾らしいものはない。

主室への通路(Pls. 12-2, 13-2)はやゝ西よりにある。幅 2.70m の拱形であるが、すゝむと幅 1.40m にせりだし平頂の隧道になる。左右に柱やうの彫りだしがある。拱形から平頂にうつるところに小さい壁面ができて、その角にせりだしアーチがある。この通路によって主室にたつと、前壁大龕の左わきにでる。主室の軸に平行してゐない。しかし、ほゞ正方形、一辺のながさ約 10.80m、各壁中央に大龕がある。そのうち前壁の大龕はいくらかあさい。

後壁と左右壁の大龕は左右に柱を彫り、うへに円拱をつくる。龕内左右壁に、水平のしきりがあり、後壁(Pls. 14, 17)では、小さい柱頭のたかさに、ちよつとしたたて線の装飾がある。左右大龕(Pls. 15-1, 16-1)にそれにせりだしアーチ(Pls. 18-3, 4, 5)があるのが特色であるが、後壁大龕は左右壁ほどにたかい宝壇はなくて、ひくい宝壇があつて、壁面よりまへにつきでゝゐるのは第一洞後壁の龕形に似てゐる。たぶん、後壁に大きな本尊がすわり、左右壁により小さな脇侍がすわり、前壁にも、これに応じて大龕(Pl. 16-2)があり、やうな尊像がおかれたのであらう。

前室の円筒形からうへにはなげしやうの横木がつくられ、そのうへにせりだしアーチをもうけて穹隆天井(Pls. 16-1, 18-1, 2)をうけてゐる。第一洞にくらべて、これは、みごとな穹隆天井である。なんのかざりもないけれども、完好的な球形がうつくしい。せりだしアーチのうへにはドームのしたばを割する一線がひかれてゐる。その中央に短柱がある。柱礎、柱頭をそなへた円柱で、なかなか力がある。

天井のしあげがこまかく、龕内のしあげがあらひのは、龕内にストッコの像があり、壁面もストッコでとられてゐるからであらう。尊像を中心にした尊像窟であることはあきらかだが、その一片だにのこつてゐない。かへすがへすも残念である。

〔第四洞〕 この石窟は四室よりなる複雑なもの(Plan 6)である。せまい入口をはいると、天井のない前室(Pl. 19-1)になる。6.70m に 5.80m のほぼ正方形、西南隅に用途不明の円形のくぼみがある。後壁の東辺と右壁のおもむきで通路がひらき、一方は中室、一方は小室にゆきあたる。

中室のおくに長方形の後室がある。4.40 m に 3.20 m, 円筒形の天井で、ほかになにもない。前方の床に円形のくぼみがある。通路の左右上下に小孔があるのをみると、扉でもしつらへたものとみられる。個人の居室であろう。

中室は 5.00m に 5.50m の、ほぼ正方形(Pl. 19-2)、三方にベンチやうの、ひくい壇があり、後室への入口は、この壇のうへにひらいてゐる。また左奥隅に物置やうの小龕がある。床の中央右よりに大きな水槽(Pl. 20-4)がある。一辺 1.60 m のほぼ正方形、深さ 1.60 m, 底のすみにまるいくぼみをつくってゐるのは、底をさらへるばあひの便宜かとおもはれる。さうして、この池には右の側室から、ほそい溝がみちびかれ、その溝は側室の水をすべてうけるやうにできてゐる。天井はいたって高く、まるい。さうして前方に明窓がある。側壁から天井へうつるところには、まのびしたせりだしアーチがみられる。

横の入口からはいったところ(Pl. 20-1)は、すこしひろくなり、そのおくに小室がある。小室はたゞ一人寝る程度の、せまい部屋である。はいて右手に側室にむかふ入口(Pl. 20-2)がある。側室は左右にながいき、3.20m に 3.50m の部屋(Pl. 20-3)である。天井は、もちろん、円筒形の天井、まはりにたかい壇がとりまいてゐる。もちろん南側はきれてゐるが、入口のところにも闕のごとく、ひくい岩の堤防ができてゐる。それは、この部屋の用途に関連して意味のあるものとおもはれる。つまり、この部屋の床の水はあつまつて東側の樋口からでゝ、中室の水槽のなかにながれこむものとみられる。そのため床もいくらか東に傾斜してゐる。村民が浴槽だといふのも、これをみるとあながち根拠のないものでもない。もし側室でシャワーをすれば、その水はあつまつて樋にはいり、中室の水槽におちるとおもはれる。中室とのあひだは水のとほるほか、大きな口があり、人ひとりとはれるくらゐになってゐる。

〔第五洞〕 これはすこぶる不思議な小石窟(Plan 6)である。岩を切った、せまい通路(Pl. 21-1)があり、これをはいると右手に入口がある。入口(Pl. 22-1)をはいると、円筒形天井の小室になってゐる。奥行 3.00m, 幅 2.00m ばかり。床に小孔(Pl. 22-2)がみられるが、この小孔をつらねて暗渠が東の方にのび、洞外にでゝゐるらしい。その反対側は樋(Pl. 21-3)になってゐて、それは、この石窟の西側の壁をつらぬいて外壁(Pl. 21-2)に通じてゐる。もし、この外壁の縦ながの穴から水をながせば、その水は樋をとほり、床したの溝をとほって、うへへ出て洞外にながれでるやうになってゐる。村人たちは厠だといふが、あるひはむし風呂であつたかも知れない。円形アーチの入口のうへには楣をおさめたかとおもはれる水平のくぼみがある。こゝになんらか扉がしつらへてあつたものとおもふ。めづらしい、類のない石窟である。

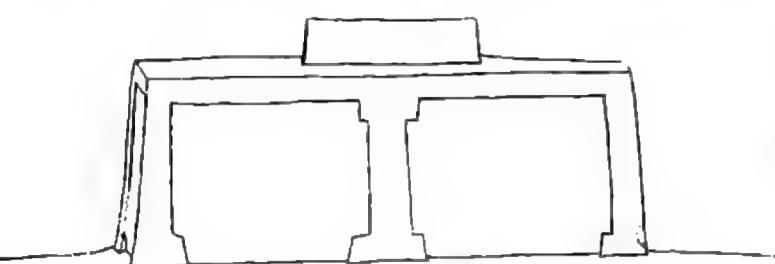
第二章 山頂のストゥパ洞 [Pls. 1, 23~31]

〔第六洞(塔洞)〕 ストゥパ洞(Plan 7)はタクティールスタムの中心で、丘のうへにあり、したの諸石窟とは

離で 240 m、高さで 38 m ほどはなれてゐる (Plan 1)。西むきに岩をけづって外壁 (Pl. 23) をとゞのへてゐる。は、他の石窟の方に面をむけたからであらう。20 m あまりの、この面に入が三つみられるが、むかって、この石窟への入口 (Pl. 24-2) である。現在、この外庭に 27 m の間隔をおいて二つの方孔があいてゐる。ひは庇をつくるためであらうか。あるひは聖所をしきる幅のやうなものをたてたのであらうか。

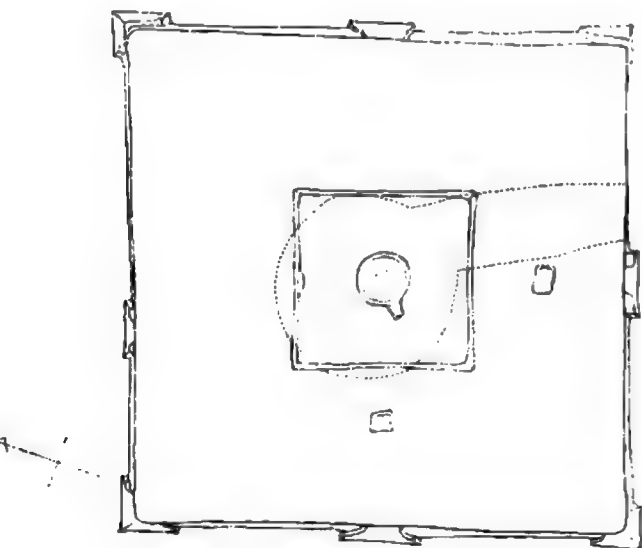
この入口通路 (Pl. 24-4, Plan 8) は、なんのかざりもなく、ながく、約 17 m ある。天井は平らで、はいつ手に一段たかく広間 (Pl. 24-3) がある。みえるのは柱のやうであるが、柱ではない。未完成なのであらうか。ま広間の一角はこはれて、孔が外壁に通じてゐる。

この通路をでると、天井はない。ストッパの伏鉢部につきあたるから、右か左にそれてまはらなければならぬ。まはれば、伏鉢部を一周できる。つまり繞道 pradaksina の礼をおこなへるやうになってゐるのである。は 2.00 m くらゐ、北がたかく、かなりの傾斜になってゐる。一方は不規則に切りとった壁 (Pls. 25-2, 3)、はまるい伏鉢部 (Pl. 25-1) である。もっとも、この不規則な壁面も、よくみると、高さ約三分の二のところで突出してゐる。これからうへは上縁までは直線であるが、したはえぐられたやうにくぼんでゐる。これ

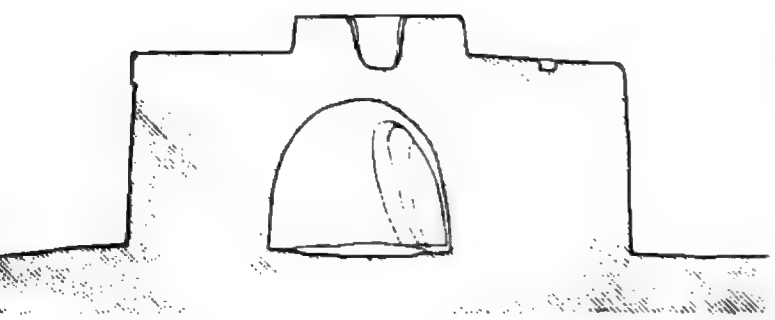


ところには、からうじてうへからおりてこられるステップの道がきざまれてゐる。したから一本梯子をかければ昇降することは可能である。

それから入口のおく、伏鉢部にむかって右手であるが、こゝには広間があつたらしい。いますっかり埋没してゐるのはこゝが洞内でもっともひくいからである。



伏鉢 dome は直径約 28.00 m、高さ約 8.00 m、肩のやうな球状 (Pls. 26, 27) をなす。もっとも、厳密にいへば AB 断面の直径は 28.00 m、CD 断面では 29.00 m で、なかりいびつではあるし、伏鉢部の高さも東北は 7.00 m、西南は 11.00 m で、かなりの差がある。この自然の岩はりぬいた伏鉢部に平頂部 harmikā がつくりだされてゐる。一辺 8.00 m の方形で (Pls. 28, 29)、主軸はほぼ東から西南にはしつてゐる。外壁の面とは、まったく無関係である。



0 5 m

Fig. 2 中央平頂部 Harmikā, Cave 6, Haibak

平頂部 (Fig. 2)、つまりハルミカはもと欄楯でかこまれた方形の平面で、そのなかに刹柱がたつしくみであつた。しかし、もうこゝでは欄楯でかこまれた部分がフック化し、このうへに刹柱をたてるやうになってゐる。だから平頂部の頂上には方 2.30 m の壇ができ、こゝに直径 0.80 m、深さ 0.60 m の円孔 (Pl. 28-3) がほつてある。これでどの程度の刹柱をたてたのか、傘蓋 chatra の大

などわからないが、あまり大きなものはたてられさうにない。平頭部の側面は葛石にあたる水平のきりだ。これをうける三本の柱形があり、わづかに欄楯のなごりをとくめてゐる。柱形は、中央の方は方形の柱礎に頭飾をつけてゐるが、隅の柱には柱礎しかつくりだしてゐない。

なほ、この平頭部東南面には細だかい円形アーチの入口(Pls. 29-1, 31-2~4)があいてゐる。このせまい通路はいると、ちょうど平頭の中心部に円頂円形の部屋(Pl. 31-2)がある。直径約2.30m、いまなにものこつてゐるが、もとより仏舎利をおさめた奉安室であつたらう。

かういふわけで、石窟は入口の隧道をとほつてはいるのであるけれども、はいれば中心の伏鉢は露天にあらはれてゐる。しかも、あたりから伏鉢の頂が見えるやうに、多少とも周囲の岩を削りとつてゐる。この削りとれた岩の面をあるくと、こゝに小さいながら溝のやうなものがみえ、それをつたつてゆくと南側にある水槽(Pl. 30-2)に達する。これは雨水をあつめるしかけである。水槽の大きさは約6.50mに約6.00mの方形、いまも澄みきった、つめたい水をたゞへてゐる。方形の窓が二つあいてゐるし、水をくみにおりる階段もある。くづれにも最近の修理の手がはいつてゐるが、もともとあつた施設に加工したことはあきらかである。かういふ水のないところに住むくふうとして、なかなか巧妙な設備である。

ストゥパを中心とした石窟、いはゆるインドのチャイトヤ洞chaitya caveである。このタクティールスラム寺の、いちばんの聖所として、この丘頂にひらかれたのであらうか。これに付随して二、三の僧房らしいものをつくられてゐる。入口隧道に平行してあけられた側室i(Pl. 24-1, Plan 8)、これは入口隧道のやうにながく18.00mある。幅は5.00m弱。いま後壁がくづれおちてゐるので入口のごとくにみえるが、さうではない。頂の大広間(Pl. 24-5)で、壁面も整然としてゐる。はいったところの左手(Pl. 24-6)が、すこしひろくはつてゐるのが、異状である。

この北にならんで側室ii(Plan 8)が口をひらいてゐる。不規則で、小さい部屋である。入口(Pl. 23-1)が二つあって、入口のところがふかくなつてゐる。そのふかは洞内を一段たかい床として利用したのであらうか。このふかいところから鉄のナイフ(長さ5.5cm)、および鉄の鋸の断片(長さ8.4cm)、青銅器断片、それから二、三の赤焼土器片(Fig. 3)がでた。この土器片のうちには細緻堅牢で、仏鉢形の器もある、その石窟当時のものとみられる。

側室iii(Pls. 30-1, 31-1, Plan 8)は東部にある。伏鉢部にたいして口をひらいてゐる。不規則な小窟で、入口も二つある。こゝにせまいステップがきざしにあらはれて、これによって丘の東側にのぼれるやうにできつてゐる。これも僧房のひとつと解される。

*

*

フーシェは、この石窟を未完成とかんがへてゐる。したがつて側室ii, iiiも、工事にしたがつたものの宿泊



Fig. 3 側室ii出土遺物 Finds from Room ii, Cave 6, Haibak



Fig. 4 刻画ヤギ Engraving of Goat, Cave 6, Haibak
(上) 伏鉢上面 (左下) 平頭上面 (右下) 側室 i 他壁

りこまれたヤギの絵 (Pl. 30-3, Fig. 4) である。それは線彫で、原始的な作であるが、ともかく、この石窟
堂よりのちにつくられたことはたしかである。アフガニスタン、パキスタンに多い、この種の線刻画の年
知るうへの一助となる。フーシェ²⁾はゴルバンドとラーグマンにおいて、フランケ³⁾はスリナガルの東方に
この種の線刻画を報じてゐる。われわれはイランのパスルガダエ Pasargadae の石造物に、この種の線
あるのをみた。また、イスラエルの南部、ネジェブの荒野にある石にも、これと酷似した線刻がみられる
るひは石窟造営中の工人が彫刻したものであらうかと推察される。

総 括

1



ハイバクの諸石窟は、どれが古いといふことはいひがたいが、なんといつても、南の丘頂にあるストゥパ
六洞)が、その中心であらう。この石窟が平頭部の方向と無関係に、入口を西面させてゐるのは、北方の
を考慮にいれたものともとれるが、あるひはさうでなかったかも知れない。この丘頂の南には丘陵がの
るので、南に口をあけると見はらしはよくない。さうして、もし北面をさけるといふ事情があれば、西

¹⁾
と解する。工事中、伏鉢東北部に裂罅があらはれ
中止したばあひと、エフタル Ephthalite (嚙嚙) の
入によって中止したばあひとを想定してゐる。ヒ
ザー教徒は、いまでも、造像中にひびがあらはれ
と、造像を中止するならばしがあるといふ。しか
いづれも証拠がない。といふより、これはこれな
に完成したものとも解した方がよい。いくらか繞
の側壁が不始末であるが、繞道そのものにはさし
かへないし、伏鉢部の方はりっぱにしあげられて
る もともと伏鉢部を、サンチー Sanchī のやうな
天のストゥパにするかんがへのなかったことは、
口の隧道や、側室 i, ii の存在や、また前壁の整備
ないし水槽のやうなものまであげて証明できるで
らう。

なはおとすことのできないのは、伏鉢部上面や
頭部の東北、それから側室 i の壁面や北側の岩壁

1) A. Foucher ; *La Vieille Route de l'Inde de Bactre à Taxila* (MDAFA, Vol. 1) Paris 1942, pp. 126, 127.
2) A. Foucher ; *Op. cit.* Paris 1947, Pl. XXXIX.
3) A. H. Francke ; *Antiquities of Indian Tibet* (A S I, New Imperial Series, Vol. 38) Calcutta 1914, Pl. 44.
4) E. Anati ; *Rock Engravings in the Central Negev* (Archaeology, Vol. 8, No. 1) Spring 1955.

になるのは至極当然なりゆきであつた。

したの諸石窟は南面してストゥパ洞にのそんでゐる。中央の第三洞が、いはば丘陵の中心部にあつてゐるから、こゝらあたりから石窟がはじまつたのかも知れない。さうして、左右におよんでいったが、そのうち端の蓮華洞(第一洞)と中央の第三洞とは、ともに尊像窟である。ストゥパ洞一、尊像洞二に対して僧房洞(第三洞)があり、それに浴室とか、厠を推想させる小石窟までついてゐる。小さいながらに完備した寺院であつたといふはかはない。

僧房洞のベツトの数はたゞの十三である。けれども、このほかに地上の建造物もあつたであらうから、僧侶数もこれにかぎられたわけではなからう。塔洞の天水タシクの設備、石窟内の床が外部よりひくい点、明窓内部に傾斜してゐる点など、みなかうした乾燥地帯の特色といふはかはない。

ストゥパ洞と尊像洞のほかに、僧房洞があり、そのなかに僧房らしきものがあり、しかも浴室、廁の石窟を有するのは、じつにこれらの石窟に僧侶が、じつすみ、くらひ、且つねたあとをしめすものとして興味がふか。ストゥパの石窟には、地上の寺院にみるごとく、さういふ生活の場所、施設を往々にみる。とくにカーン・Kanhari 石窟などには顕著であるが、東トルキスタンにはいると、ほんの一、二の僧房がみられるのみで、国内部になると、それもなく、生活のあとは石窟からまつたきえる。そこで、たゞストゥパのため、僧のための禮拜洞になつてしまふのである。

第一洞(蓮華洞)の大蓮華が希有なことは、すでにいふた。かういふ大蓮華を天井にあらはしたものは、どこにもない。たゞ蓮華の多少ちかひものといへば、さすがにタキシラの蓮座においてみとめられる。

第六洞(ストゥパ洞)の大ストゥパも類例がない。基壇がなく、ちかに伏鉢部がつくられてゐる。伏鉢部はさたかくないが、さうかといつてタキシラのダルマラージカー塔やサンチーの大塔ほどに古いとするわけはよくまい。平頭部にある大きな舍利率安室も、まはりの浮彫柱も、めづらしい例である。もうすつかり欄楯の

もかけをうしなつてゐるのも、古い形式とはいへない。

こゝでとくにいちじるしい建築細部はルームと円形フーチとせりだしフーチであらう。ルームも、円形フーチも、せりだしフーチもレンガ建築と密接な関係をもつてゐることはあらそへない。たゞ、このうちルーム形フーチとは、すでにインドの古い石窟においてみとめられるから、レンガ建築ではじめてあらはれたわけはない。これに反し、せりだしフーチはレンガ建築でなければあらはれない。その起源については、まだ⁴⁾を欠くが、ササン朝の始祖アルダシール Ardashir (226-242) がたてたというアルザバー Fīrāzābād 宮殿⁵⁾にあられるし、東の方は東トルキスタンの Miran ミーラーンの寺院にもみられる。せりだしフーチが流行したのはササン朝のこゝはやい時期からであるから、その成立はすでにバルチヤ時代にあつたものとおもはる。しかも、それはいちはやく東方にも伝播した。ミーラーン寺院は三世紀といはれてゐるが、せりだしフーチとともに、ローマふうの壁画もある。ハイバク石窟が、これよりあつてゐることは、もうすまでもなくあ

1) 龍門石窟の蓮華洞はいくらか、これに似てゐるがこゝになに大きくはない。長広敏雄、水野清一「龍門石窟の研究」東京1940、Fig. 47。北魏の石窟、仏龕には窟頂に蓮華のあるものがある。

2) John Marshall; *Taxila*. Cambridge 1951, Pl. 100(b).

3) J. Fergusson and J. Burgess; *Cave Temples of India*. London 1880, p. 41.

4) O. Reuther; *Sassanian Architecture* (A Survey of Persian Art, Vol. 1) London and New York 1938, p. 502.

5) Aurel Stein; *Serindia*. Vol. 1, Oxford 1921, pp. 485-538.

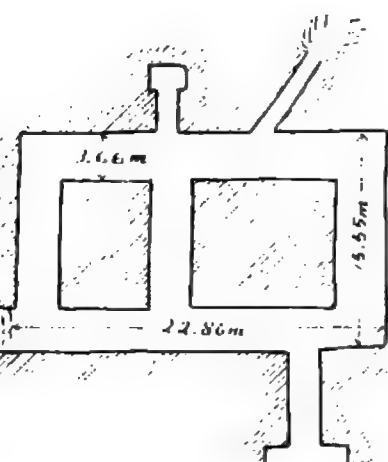


Fig. 5 ハッダ、ホダ・ラジャ洞
Hoda Rajah Cave, Hadda

れにしても、これらの石窟を四、五世紀の作とみるのは、もつとも無理のすくないところだとおもふ。

らかである。

ガンダーラでは、とがりアーチ ogive をしばしばみるが、こゝでは全然み
い。また蓮華拱系統のさきのとがったアーチもない。第三洞主室後壁の円形
ーチが、こゝの代表的なものであらう。さういふことで、ほゞササン朝併行
いふ時代を推定するが、それ以上のことはいへない。たゞ、もしエフタルの
入をおもくみて、これで仏教なり、仏教美術の壊滅をかんがへるならば、そ
はほゞ460年と推定されてゐるから、それ以前の建造をかんがへることが
きよう。しかし、エフタルによる仏教文化の壊滅は、まだいくた未解決の問
をもつてゐるから、いまたゞちに、かうだと断定するわけにはいかない。た

2

いったい、アフガニスタンにはバーミヤーン、ハイバクのほかにも、あちこちに石窟がある。その大部
礫岩層にほりこまれた小石窟であるが、そのうちにも注意さるべき石窟が二、三ある。それはジェラバ
Jelālābād にちかいバサワル Basawal, ハッダ Hadda, ダルンタ Darunta など、ムルガブ Murghab 流域のバ
ルガブ Balā-Murghāb, ムルチャク Murchak, それからソ連領にはいってペンジュデュー Penjdeh 付近のヤキ
ク Yaki-Deshik などである。

バサワル] カーブル河の左岸、ダカ Daka の対岸である。¹⁾ コーベ・ドゥルト Kōh-be-Doulut とよばれる岩山
にそ100あまりの石窟がうがたれてゐる。幅3~3.60 m, 奥行6~9 m の矩形で、円筒形天井である。

ハッダ] こゝは玄奘の随羅城に比定されてゐるところである。フランスの考古学調査隊は、こゝでテペ

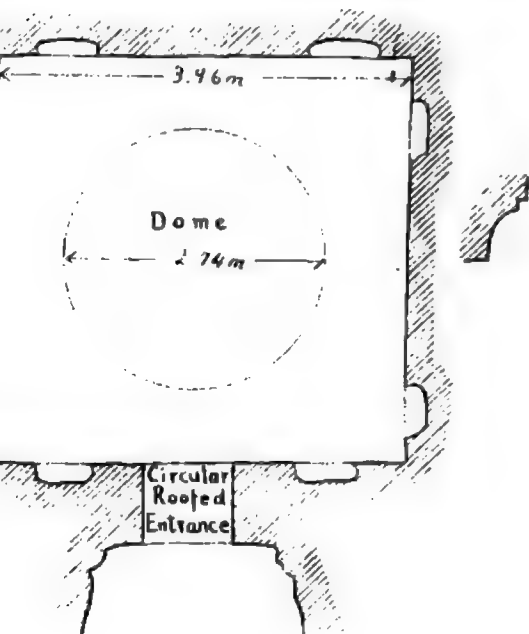


Fig. 6 ハッダ穹頂洞
Domed Cave, Hadda

の方3.90 m の石窟(Fig. 6)がある。天井はドーム、せりだしアーチが、これをうけてゐる。各壁の左右

ラン Tepe-Kalan, ガル・ナオ Gar-Nao, バーク・ガイ Bagh-Gai, テペ
・カファリハ Tepe-i-Kafariha, デー・グンディ Deh-Ghundi などの地
寺院を多数発掘してゐるが、若干の石窟もある。そのうちタパ・ザル
ラン Tappa Zargarān(鍛冶屋の丘)とよばれるところには、「ホダー
ジャー宮」Palace of Hoda Rajah の名のある石窟(Fig. 5)がひらか
ゐる。15 m に 22.50 m の長方形の室で、長辺の一方に入口があり、
辺の隅に開口がある。中央に方7.10 m の方柱と7.10 m に 9 m の矩形
とがある。中央柱の意味ははっきりしないが、中国における石窟の
うにストゥパを意図したものでなく、ダルンタ石窟にみるごとく、
はりに僧房をならべるためにできたものらしい。ほんらいなればウ
ハーラの内庭として除去さるべきものであったのである。

1) W. Simpson ; *The Buddhist Caves of Afghanistan* (J R A S, N. S, Vol. 14) London 1882, pp. 319 sq.

2) A. Foucher ; *Les Fouilles de Hadda* (M D A F A, Vol. 4) Paris 1933.

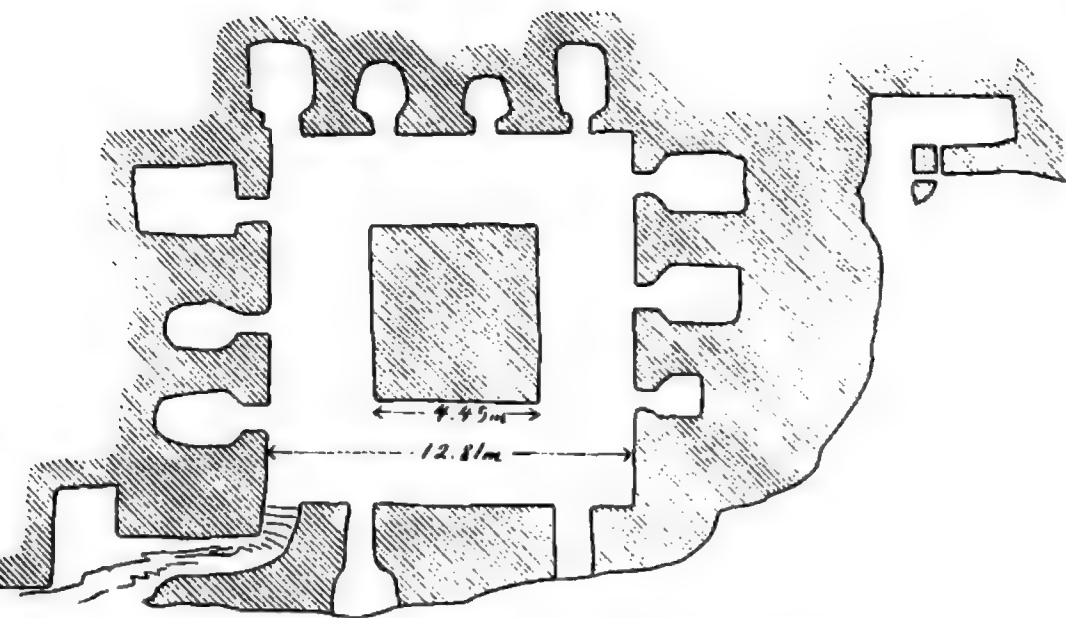


Fig. 7 ダルンタ ヴィハーラ洞 Vihāra Cave, Darunta

そのうちの一つヴィハーラ洞(Fig. 7)は、12.30 m に 12.60 m の方形で、中央に方 4.20 m の方柱がのこされ、壁と北壁にはそれぞれ 3 室、東壁には 4 室、合計 10 室の僧房がひらかれてゐる。西壁には採光の明窓が二つあり、方柱には蛇腹がつけられてゐたとおもはれる。

いまひとつ、バザール洞(Fig. 8)とよばれてゐるヴィハーラ洞がある。これはカーブル河に面した絶壁にある。こゝに高さ 9 m の龕形があり、パーミヤーン大仏のやうな尊像がつくられたかとおもはれるが、この南に面して五つの石窟がならぶ。それは背後に隧道をつくり、それへの通路がつくられてゐる。その点はハイバクのバザール洞とよく似て、あきらかに僧房窟である。

〔ムルガブ〕 バラ・ムルガブ付近、ムルガブ河の左岸、ひくい山のなかに幅 2.10 m、奥行 9.00 m と 13.50 m の、一つの長方形石窟(Fig. 9)が平行してある。さうして、この二室のあひだをつなぐ、とがりアーチの隧道が掘られてゐる。

ムルチャクにも、二、三あるさうであるが、ソ連領のペンジュデ付近には、ベシュ・デシク Besh-Deshik とか、ヤキ・デシク Yaki-Deshik とか、ガレビル Gharebil とよばれる石窟があるといふ。そのうちヤキ・デシクの石窟(Fig. 10)は、高い砂岩の山にあり、まづ中央の通路を外壁と直角につくる。幅 2.70 m、高さ 2.70 m、奥行 45.00

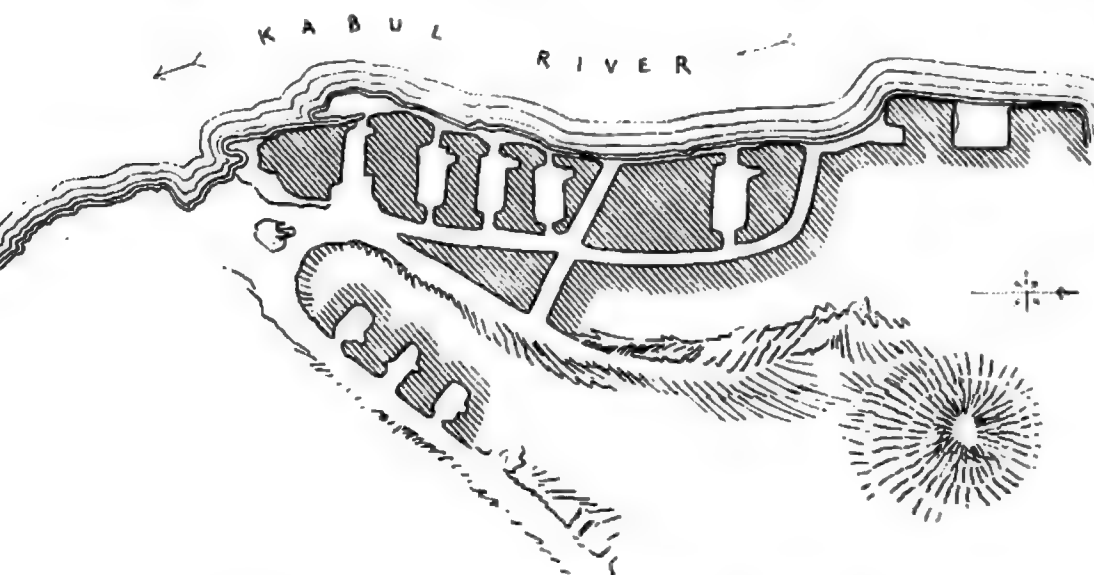


Fig. 8 ダルンタ バザール洞 Bazar Cave, Darunta

1) W. Simpson ; *Op. cit.* pp. 319 sq.

龕形がつくられ、その一面の中央に門口がある。尊像を安置した一種の尊像窟である。

長方形の石窟に円筒形の天井をつけたものもある。

〔ダルンタ〕 カーブル河の左岸、ダルンタ村のフィール・ハナ・トープ Pheel-Khana Tōpe の丘には、多数の僧院やストゥパの廃墟があり、河岸には注意すべき石窟¹⁾もある。

m である。この左右に 7 室と 8 室の僧房が枝状にひらかれてゐる。部屋の大きさは幅 2.70 m、長さは 2.70 m から 3.05 m あり、洞口は、幅 0.60 m、長さ 1.20 m の通路である。どれも僧房とおもはれるが、さらに小室がついたり、井戸があったり、ほかへの通路がひらかれていたりしてゐる。貯蔵庫とおもはれる室が二階にあって、階段でむす

れてゐる。各室はとがりアーチであり、通路もさうである。アーチのしたばには、ちょっとした水切り¹⁾ lip がみられる。

時代や性質はよくわからないが、やはり、この地方の仏教時代である七世紀までとみるのが穏当であらう。入口のそとで八、九世紀の古銭の埋蔵を発見した。それはこの石窟の廃棄後にうめられたものであらうといはれてゐる。

〔パーミヤーン〕『西域記』にいふ梵衍那国である。ヒンヅックシュの山中、スルク・アブ Surkh-Abの上流にあり、南面する礫岩の崖に、石窟がひらかれてゐる。その数は無慮二万といはれてゐる。西方に53mの大石仏あり、東方に35mの大石仏がある。これは前面がひらいて、石窟といふよりは龜形である。この二仏はみな坐像である。これより小さい坐像が四カ所にあるが、これらも石窟でなく、みな龜形である。このほかは小石窟で、長方形あり、方形あり、八角形あり、円形もある。方形室はせりだしアーチのドームか、三角持送り天井である。八角形、円形の室もドームがかけられてゐる。せりだしアーチは、まへにのべた通りであるが、三角持送り天井も、その起源はわからない。たゞ、この構架法は中央アジアの現在の石窟にみられ、アフガニスタン、またカシュミールにみられる。パンドラントーン Pandrenthān 寺などにもある。インドの古い石窟にみられないことからいへば、石室の建築意匠とされたのは、アフガニスタンあたりに始まるかも知れない。

こゝでは不思議に、ストゥパを中心にした石窟はほとんどなく、その他はもっぱら尊像をまつた石窟である。石灰でととのへた龜形にストッコの仏像を安置したのである。さうして尊像の祠堂に付設して、集会室、それから僧房をつくったものもある。しかし、けっしてインドふうのチャイトヤ洞もなく、ヴィハーラ洞もない。アフガニスタン独特の石窟である。石窟群、すなはち寺院²⁾ (Fig. 11) である。

要するに、インドのチャイトヤ洞は地上にあっては馬蹄形の塔院、ヴィハーラ洞は地上では四面僧房の僧院

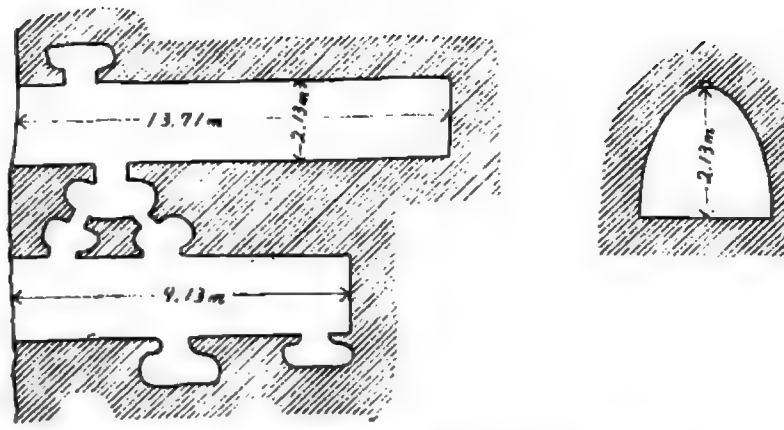


Fig. 9 ムルガブ双洞 Twin Cave, Murghab

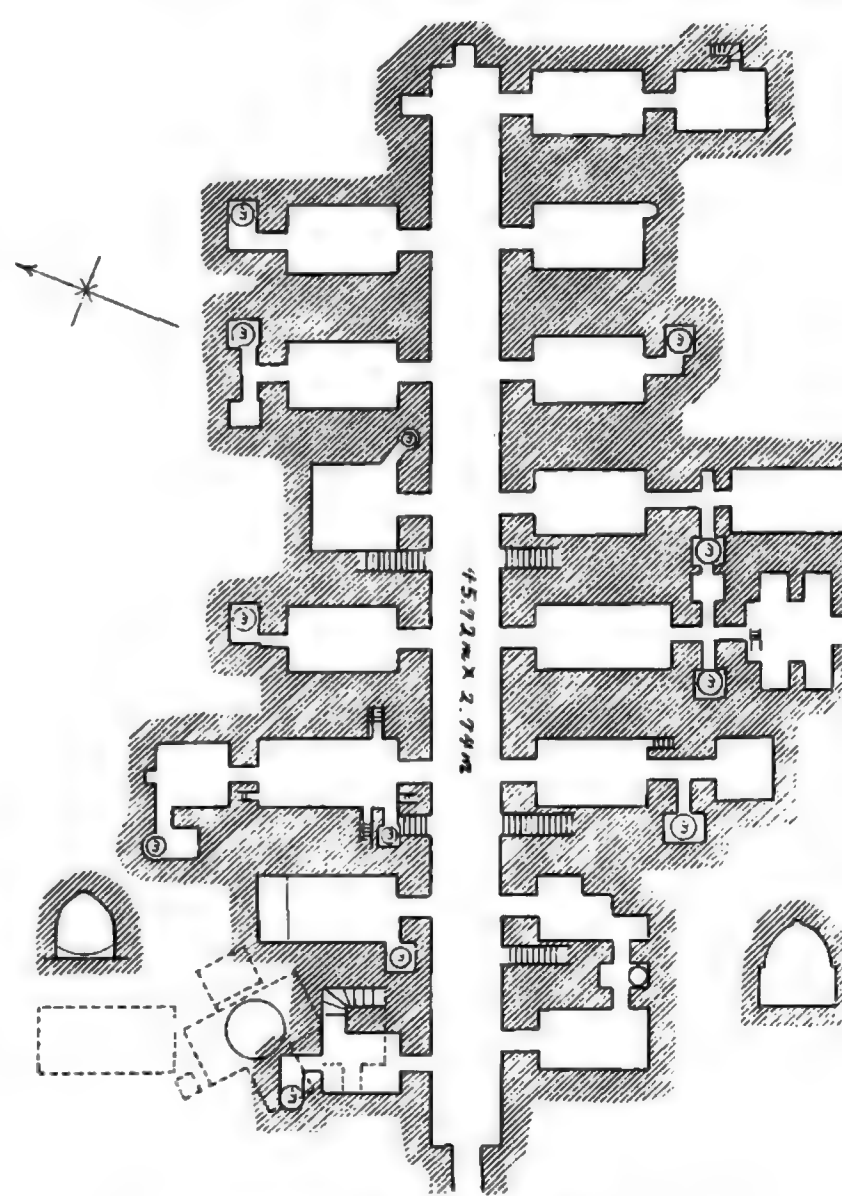


Fig. 10 ヤキ-デシク洞 Yaki-Deshik Cave, Murghab

1) De Laessle and M. G. Talbot ; *Discovery of the Murghab* (JRAS, N. S, Vol. 18) London 1886, pp. 92-102.
2) A. et Y. Godard et J. Hackin ; *Les Antiquités Bouddhiques de Bamiyān* (MDAFA, Vol. 2) Paris et Bruxelles 1928, Figs. 13, 14, 15, 16.

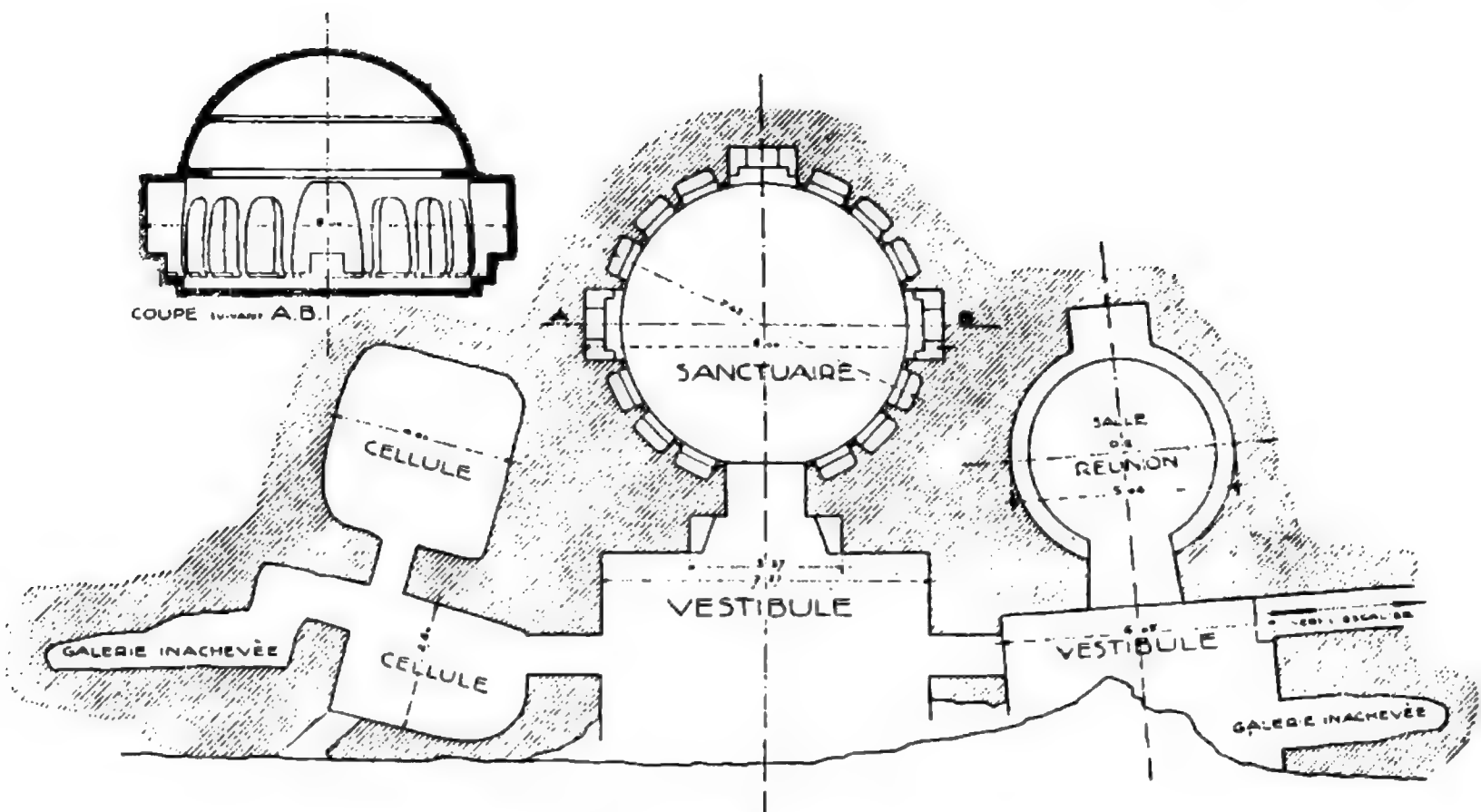


Fig. 11 パーミヤーン石窟群 Group of Caves, Bamiyān

る。それらはタキシラまでみることができるが、インダス河西のガンダーラでは馬蹄形塔院をみない。アフガニスタンにも、もちろんない。たゞヴィハーラはハツダにあり、そのヴィハーラ洞の退化したものは一例として、ダルトンタにあり、さらに退化したものとして、ダルンタとハイバクのバザール洞がある。馬蹄形以外の塔院も、ハイバクにはほとんどない。たゞハイバクとパーミヤーンに一例づつあるのみである。そのうちハイバクのストッパ洞は、あらゆる意味で異例である。岩山をほりぬいた地山のストッパだといふ点は、インドの石窟にも、例はあるが、基壇もない伏鉢部の大きな大塔だといふことはサーンチーにしか例がない。しかし、サーンチーの大塔、タキシラのダルマラージカー大塔などとは、伏鉢の形がちがふ。完好な円形でなく、肩のはつた円形であることは、のちのドラムのかくったストッパをおもはす。時代がちがふからであらう。

ハイバクの諸石窟は、要するに、インドのチャイトヤ洞ともヴィハーラ洞とも縁のきれた存在である。仏教寺院であるけれども、ローマ、ササン風の円形アーチ、せりだしアーチのドームといったやうなもの、それと三角持送り天井などもいれて、西方的であり、中央アジア的である。また尊像が重視されて、尊像中心の寺院ができたことも、尊像中心の寺院がない、すくなくともすくないガンダーラ地方にくらべて、パーミヤーンとともに、やはりアフガニスタンの特色がみられる。さうして、これは中央アジア、また中国へとつづいていく。中国でも、初期にはインド、ガンダーラのやうに、ストッパと尊像とが平行した。けれども、雲岡、龍門なるにおよんで、しだいに尊像中心にきりかへられていった。それは中央アジア風であり、またアフガニスタン風ですらあったといへる。

水 野 清 一
西 川 幸 治

1) Jules Barthoux ; *Les Fouilles de Hadda* (MDAFA, Vol. 4) Paris 1933, Bagh-Gai, Gar-Nao, Deh-Gundi.

第 二 部

カシュミル-スマスト洞窟

第 二 部

カシュミル-スマスト洞窟

は し が き

インドでは、紀元前三世紀から石窟寺院がつくりはじめられ、爾来およそ 1000 年間に 1200 あまりの石窟が各地にあらはれた。そのうち約 75% は仏教に属するが、のこりはヒンズー教とジャイナ教のものである。これらのなかには、アジャンター Ajantā とか、エローラ Ellūra とか、有名な石窟寺院がすくなくない。これを紹介したのも、ファーガッソン J. Fergusson とバージェス J. Burgess の有名な *Cave Temples of India* (London, 1880) という書物があって、その一般は容易にうかゞふことができる。

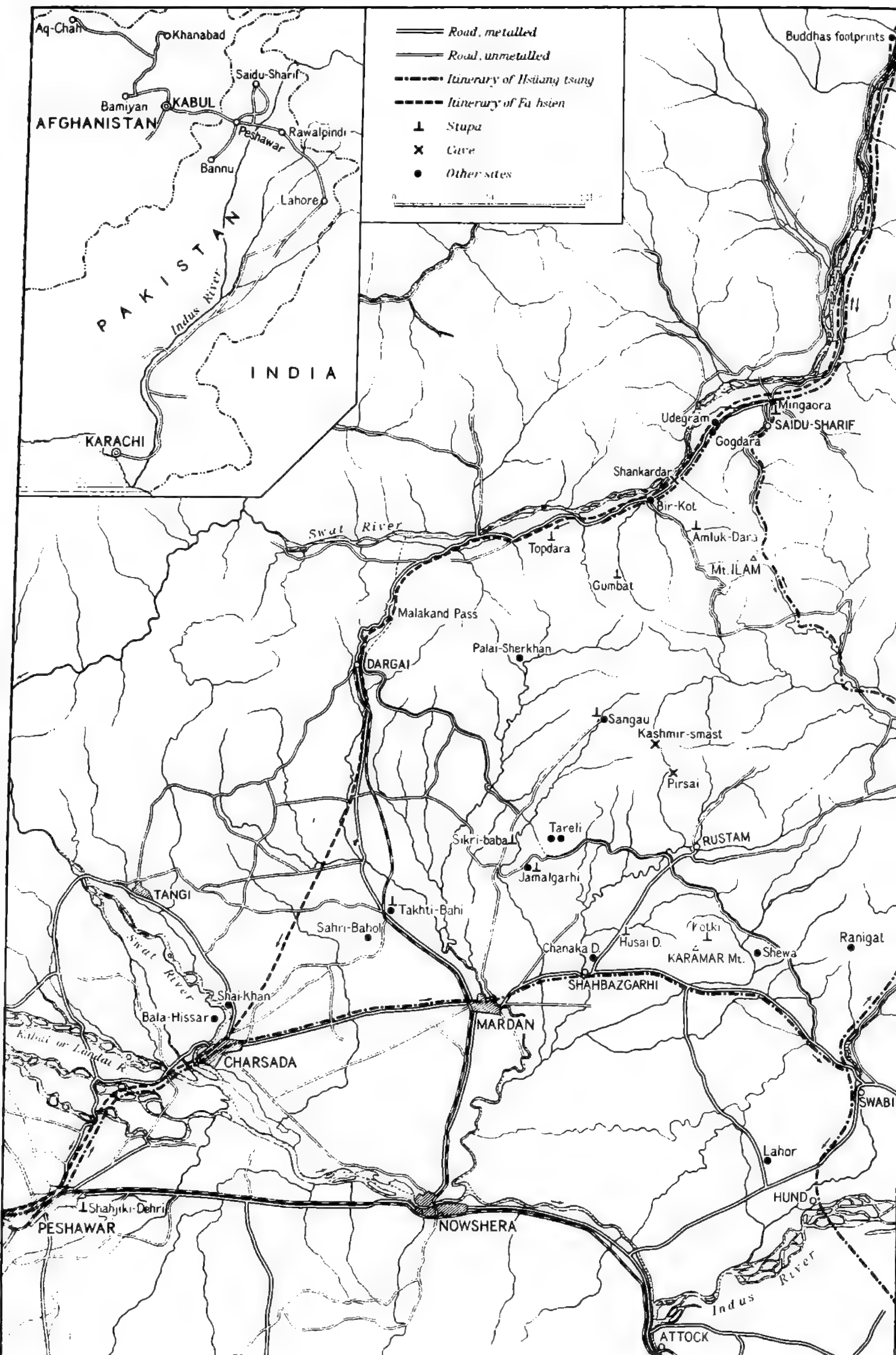
しかし、パキスタンになると、石窟寺院はまったくない。カシュミル-スマストといふ洞窟は、その例外的な存在である。パキスタンにおける唯一無二の石窟寺院である。この洞窟は、インドや中国の石窟のやうに、人によってひらかれたものではない。自然の石灰岩の洞窟である。この自然の洞窟を利用して、そのなかに寺を建設したのである。建設にあたって、多少洞内を改修したかもしれない。明窓とか、僧房処とかには、さおもはれるところもある。だが全体としては、自然の洞窟をそのまま利用して、そのなかに建物をつくったものである。

1959 年 10 月 16 日、水野と田中およびパキスタン考古局派遣のイスティヤック Ahmad Istiaq 氏は、この洞窟寺院をはじめて踏査した。ついで翌 1960 年には、11 月 3 日から 16 日にかけて、一般的な測量調査をおこなった。そのときのメンバーは、水野、田中、林、陳、西川、佐原、小谷およびイスティヤック氏であったが、主として測量にあたったのは、田中、陳、西川の三名であった。また、この山頂のバンガローを所有するリシ・ハーン Rishad Khān 氏も、われわれと行をともにし、いちいち調査の便宜をはかられたのは、まことに銘記すべきことである。

われわれの宿舎があったシャバズ-ガリ Shāhbāz-Garhi から、北にゆくこと約 20km でルスタム Rustam に着く。こゝでルスタム川をわたり、ジープで道のない畑のなかを北へすゝむことしばしで、ピルサイ Pirsai なる荒涼たる谷あひにはいってゆく。わづかに灌木のしげる、石の多い谷間である。ルスタムからピルサイのほとりまで約 16km, こゝまでくると、もうジープはつかへなくなる。こゝで荷物をラクダにつみ、人は歩かなければならない (Fig. 12)。

ピルサイは、およそ 50 戸ばかりの村 (Fig. 13)、谷のおくの、耕地にもこと欠くような村である。村人は枯れ木をあつめて、ラクダにつんで、ルスタムのバザールに売りにゆく。

第2部 カシュミル-スマスト洞窟寺院



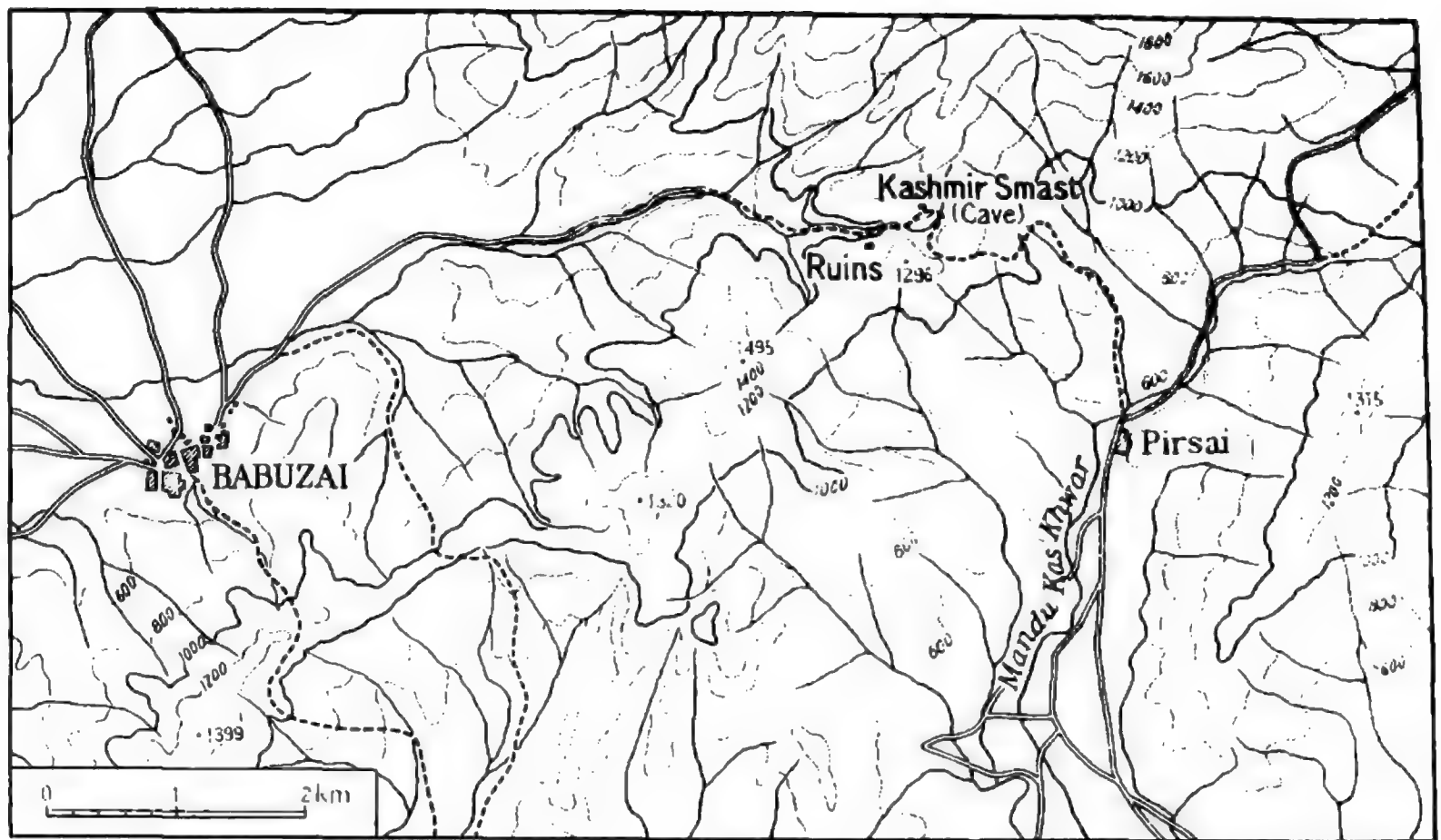


Fig. 13 カシュミル・スマスト地図 Site of Kashmir Smast

こゝから、はるかにカシュミル・スマストの山頂をのぞむと、峨々たる岩の屏風がめぐって、白くかゞやいてゐる。その一角に、リシャド・ハーンのパングローが、はるかに望見される。ピルサイから山頂までは約6km、約三時間の行程である。途中の山のふところに一軒だけ民家があり、畑地がある。山上の鞍部には、リシャド・ハーンのパングローがあり、ほかに牧人の小屋が二、三ある。

こゝをこえとバブザイ Babuzai 側の谷になる。はるかにカトラン Katlang 方面の平野がみえ、バブザイも、のあたりかとおもはれる。バブザイまでの道のり、およそ8km、谷はふかい。

いまから80年ほどまへ、こゝをおとづれたイギリス人ガーリック H. B. Garrick の記録には、

午前7時半出発、すぐけはしい道ののぼりになり、いちばんしたの廃墟にたどりついたのは正午、大洞窟のすぐしたにある垂直の岩壁をのぼりはじめたのは午後1時であった。こゝの、のぼりはすべてけはしく、ひじょうに困難で、およそ50歩ごとに一休みさせられたが、洞窟直下の岩壁はとりわけけはしいものであった。まへにいったごとく、この岩は壁のごとく「垂直」である。大洞窟へゆくには、でたらめの間隔にあるわれ目に、注意ぶかく足をおかなければならない。さいわひ、岩のさけ目からでゝある、丈夫な草がときどき手がかりになる。われわれにしたがったもののうち、いくらか勇敢な従者たちは、雲のうかんた足下の谷間は、目まひがするから、ふりかへるなど注意された。わたくしは、この行で三十人以上の、山になれた男をつれていったが、かれらは自分の武器——ひどくながい火縄銃——をもち、それで、たくさんゐるサルやヤギを射つてたのしんだ。歌もまた、この勇敢な男たちのふけるなぐさみで、かれらはよくうたった。たゞ歌だけではそんなに魅力的でなかったが、かれらの声がラハープ(ペルシアの、とくにアフガニスタンの)

1) H. B. Garrick ; *Report of a Tour through Behar, Central India, Peshawar, and Yusufzai* (ASI, Vol. 19) Calcutta 1885, pp. 111-116.

ガンのギター)にともなはれ、それにあはされると、不思議と、かれらの歌が、このひろい山なみに、このほかうまくひびきわたった。(pp. 111, 112)

記してゐる。その当時は、まだ行政も滲透せず、プシュト Pushto 人の住む危険地域ともおもはれてゐたかのように、ことさらものものしく感じられたのであらう。いまではそれほどでもないが、それでもサ、カモシカ、ウサギ、鳥などがたくさんゐて、このあたりの絶好の猟場になってゐる。それに、山かげのは、トラが水をのみにくるともいはれるから、まだまだ、さびしい土地にちがひない。バンガローのある鞍部から、けはしい谷をすこしくだると、右手の崖に洞窟が口をひらいてをり、これにるせまい道(Pl. 33)がついてゐる。左手の谷間(Pl. 32)には、つきでた尾根が三つあり、その二つは平らに、その平地には石づみの建物がまだたつてゐる。しかし、北の平地はすっかり耕されて、隅の方に小屋が。おそらく、こゝにも、かつては南の尾根の平地にみるやうに、廃墟があつたのだとおもふ。廃墟はこれだけでなく、よくみると四方の山々にも分散してすこしづゝみとめられた。

カシュミル・スマスト Kashmir-Smast は、こゝの大洞窟をさす名称であるが、またイスマス・ガール Ismas-ghar もよばれてゐたらしい。スマストもガールも洞窟の意味である。カシュミルはインド、パキスタン北方のシュミールをさす。なんでも、この地方の住民には、カシュミールはひとく霊場とかんがへられてゐたらしく、このやうな洞窟をとほして、そのやうな霊場にゆけるといふ伝承が一般にあつたのである。それは、カイバル Khyber 峠のかなた、アフガニスタン側のバサル Basawal 石窟群を調査したシンプソン William Simpson¹⁾も、このことをつたへてゐる。

カシュミル・スマストの遺跡については、このガーリックの報告が、いちばん古いやうである。かれはカンニングham A. Cunningham の指揮のもとにインド考古局の助手をしてをり、1881年から1882年にかけてチャルサダ Charsada, シャバズ・ガリ Shahbāz-Garhi などガンダーラ各地の遺跡とともに、こゝをおとづれたのである。報告は Archaeological Survey of India, 第十九巻(Calcutta 1885)にでゐるが、それは文章だけでスケッチもない。

これについて1888年、ディーン H. A. Deane が調査した。かれはチトラール Chitral, またスワート Swāt の行政官をしてゐたが、とくに玄奘の『西域記』の関心から *Note on Udyana and Gandhara* と題する文章を Journal of the Royal Asiatic Society, 新輯第十八巻(London 1896)に発表した。そのなかで、カシュミル・スマストのことをかなり詳細に報告してゐる。かれはカンニングham にしたがって、ルス²⁾の西北にあるパロ・デリ Palo-Dheri を玄奘の跋婁沙城にあてるか

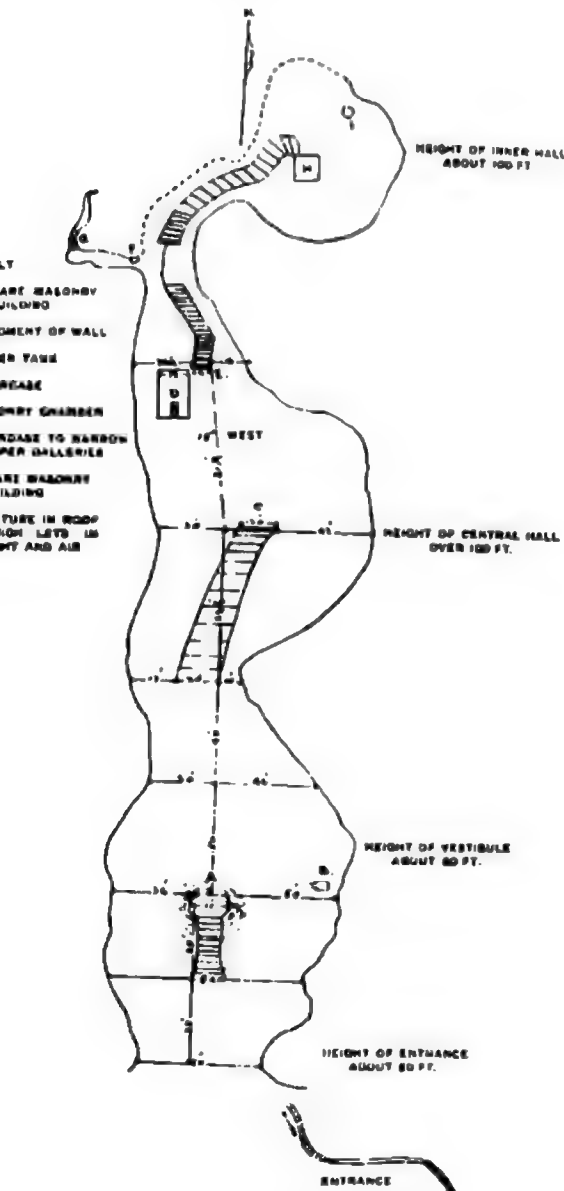


Fig. 14 カシュミル・スマスト洞窟図
(Deane による)
Cave of Kashmir-Smast

1) W. Simpson; *The Caves of Afghanistan* (JRAS, N. S., Vol. 14) London 1896, p. 319.

2) A. Cunningham; *Ancient Geography of India*. Calcutta 1871, p. 60.

その東北二十余里の弾多落迦山(檀特山) Tan-to-lo-chia-shan はブネール国境のサナワル Sanawār 山になり、麻
 間の石室、スダーナ太子と妃の習定したところはカシュミル・スマスト谷底の小窟になり、その文中に「谷中の
 木樹は枝をたれて帷のごとく」になったといふのは、まさに、この谷のしげみをさすのだと解してゐる。そのう
 へ、そのかたはらにあったといふ古仙人の石窟を、カシュミル・スマストの大洞窟にあてゝゐる。この比定はか
 ならずしもしたがひがたいが、その洞窟の測図(Fig. 14)をつくり、こまかい記述をのこした功績は大きい。
 とに、わるい情況のもとに、これだけ正確に特徴をつかみ、彫刻の木板を発掘保存したことは、ふかく感謝さ
 れなければならない。

1915年、フーシェ A. Foucher は *Notes on the Ancient Geography of Gandhāra* (Archaeological Survey of
 India, Calcutta 1915)¹⁾ を発表した。かれは直接にカシュミル・スマストのことは研究しなかったけれども、カン
 ニングムの跋婁沙城をパロ・デリとする説を否定し、これをシャバズ・ガリ Shāhbāz-Garhi にあてたから、自然に
 カシュミル・スマストを檀特山とする説を否定したことになる。フーシェの説は、全体としてカンニンガムより
 一段とすぐれてゐることはいふまでもないが、跋婁沙城のシャバズ・ガリ説が確定的だとはいひがたい。

第一章 洞窟寺院 [Pls. 33~37]

洞窟は、きりたった崖にそうた、せまくけはしい道を 100m ばかりあがったところにある。道はかなりこ
 してはゐるが、石をつんでつくってあり、一部にはもとの石づみ(Pl. 33-2)がのこってゐる。

洞窟の入口(Pl. 34-1)は高さ、幅ともに約 20 m、はゞ南にむかってひらいてゐる。しかし、谷は西の方にひ
 け、こゝからはるかにバブザイの平野をのぞむことができる。入口のかたちは、もとより不規則で、まったく
 自然のまゝである。海拔は約 1,100 m といふ。

入口のむかって右側にまるくくぼんだところがあり、幅は 8.00 m、奥行約 4.00 m、いまもこの地方の人たちの
 営用につかはれてゐる。入口から約 30 m はいると、すこしうづたかくなり、石片がちらばってゐる。これは
 八角堂のあとである。このあたりでは、洞窟の高さ約 18 m、幅は約 25 m である。こゝから約 40 m すゝむと
 洞窟はまたひろくなり、幅約 30 m、高さ約 25 m となる。これをすゝむと、右手にコウモリが群棲するところ
 あり、そのコウモリの糞にうまって残壁が一条のこってゐる。また、このあたりには大形のレンガもちらば
 る。赤焼の堂々たる方壇で、クシャーナ時代にさかのぼるものとおもふ。このおくから石階がはじまるが
 の手前、入口より約 100 m のところに、水槽がある。このあたりでは、洞窟天井までの高さ約 35 m、幅は約
 30 m である。だんだん石階をおくへおくへとのぼりつめると、洞窟が右へまがり、石階もまた右に折れてくる
 のあたりでは、洞窟の天井がひくゝさがり、高さは約 13 m、幅も約 13 m、やゝくびれた形になる。石階は
 あたりで崩壊し、おくからさがってきた土砂にうもれて、まったくわかりにくゝなる。奥壁の左手に大きな
 龕がある。これはせまくおくにのび、たかくなり、身をかゞめてやうやくはいれるやうな、不規則な小室
 になってゐる。

1) これははじめフランス文で Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient, Vol. 1, Hanoi 1901 に *Notes sur la Géographie Ancienne
 du Gandhāra* と題して発表された。

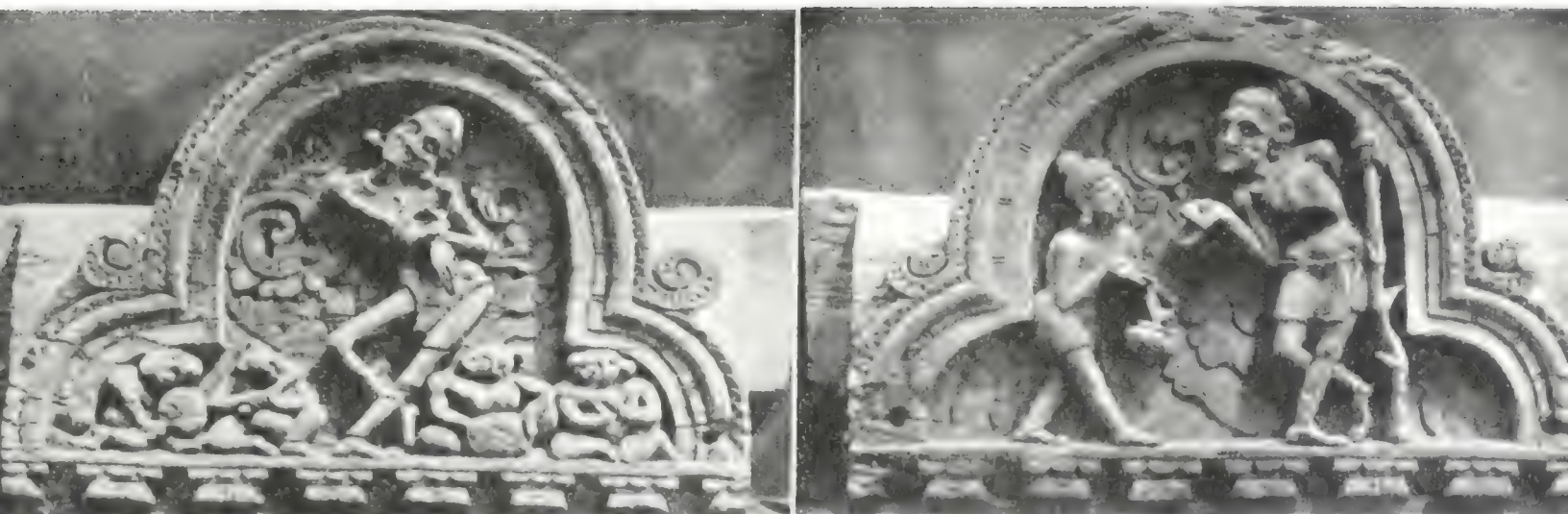


Fig. 15, 16 カシュミル・スマスト洞窟出土木彫板 Wood-Carvings from Kashmir Smast Cave

奥壁の左手にそって、べつに急な石階の一部がのこってゐる。その右手に大きな岩塊があり、そのうへはの祠堂がたつてゐる。この床から洞窟の天井までの高さは約 38 m ある。天井の東側、ちょうど最後の壁面の方約 43 m のところに明窓がひらかれてゐる。こゝからはいる自然光線は、あかるく祠堂とあたりの壁をて、静寂の気をたゞへてゐる。明窓は、天井のうすくなったところにひらかれたもので、ゆがんだ矩形をな根をこえた北側に口をひらいてゐる。このあたりは幅 30 m あり、洞窟のもっともおくまったところにな面はまったく不規則で、自然のまゝである。

洞窟は入口より直線にはかつて奥壁まで約 130 m、こゝで右へ折れるが、さらにこれを直角にはかると全約 180 m といふことになる。おくへいくほどたかくなり、入口ともっともおくの壁との高低差は約 50 m あり急な坂である。一般に洞窟の壁は凹凸がはげしく、加工したあとはまったくない。一部分には地下よる石灰の堆積もあるが、大部分は荒々しい劈開面をのこしてゐる。

〔八角堂〕 八角堂(Pl. 34-2, Plan 12)といつても、いまはその前方がこはれてゐるので、よくわからない。1906 年ディーンが調査したときには、八角堂のまへに幅 5.50 m、長さ 12.40 m の石の階段(Fig. 14)があったといふ。

室は前後にみじかく 3.23 m、左右にながく 5.24 m の八角形で、屋頂部もこはれ、床はふかくうまってゐる。つみは切石にちかい長方形の石塊を中心に板石小口つみでうめた形式で、あまり整然とはしてゐない。石この山に豊富な片岩をもちひ、石灰岩は全然つかつてゐない。

ディーンによれば壁面に小龕があつて素焼の燈火皿があつたといふ。ディーン¹⁾の調査にさきだつて、この堂のちかくで、木棺とおぼしきものが発見された。蓋はゆたかな装飾がほどこされてゐたので、村民がたといふが、ディーンは、これを木棺とかんがへ、がんらい八角堂のなかにおさめられてゐたものとししとらうだとすれば八角堂は一種の墓のやうなものになるが、それよりは、この洞窟全体の構成からみて、の祠堂のやうなものとする方がより適當であらう。たとへ、発見されたものが、まことに木棺であつたとそれが一次的のものであつたか、どうかはうたがはしい。

ディーン¹⁾の調査では、この八角堂の右手に小さな方形の室があつたといふが、われわれの調査では、ついでに跡もみられなかつた。かれはこの小室のちかくで、1888 年、彫刻のある箱の板四枚と彫刻のある木板

1) しかし、これはあまり古いものではないであらう。われわれも、洞内北方のところで、二つの燈火皿を手に入れた。

高さ1.20mの木製柱形とを発見した。そのうち、二枚の彫刻板は、ロンドンの大英博物館におくられ、いまもここに收藏されてゐるが、どちらにも三葉形の龜形がつくられてゐる。そのひとつ(Fig. 15)には、笛、太鼓、また手の四人の樂人をしたに、おどるバラモンを、大きく彫りだしてゐる。痩せこけたからだを大きく屈曲させた、また頸をつよく折りまげたりして、まことに大きなうごきをみせてゐる。もうひとつ(Fig. 16)は、左手に瓶をもった若者にたいして、杖をもった痩せこけたバラモンがゐる。手、足、頸のうごきが大きいので、生き生きとしてゐる。瘦形の人物像やその姿態のこなしをみると、ミルプル・カース Mirpur-Khas の焼レンガ像や¹⁾ナランダ Nalanda のテラコッタ像をおもはすものがあり、時代も、およそこのころのものとおもはれる。²⁾背にある雲形の曲線は、ブマラ Bhumara の扉の側柱にある唐草文によく似てゐる。また三葉形の龜形も、ガン³⁾ーラ彫刻にしばしばみるもので、その末流とみられる。ヴィンセント・スミス Vincent Smith は八世紀をくたぬ作としてゐるが、妥当な見解といへよう。おどる老形をシヴァ神かといつてゐるが、かならずしもヒンズの的だとはいへない。

〔残壁〕 左右にのびて一辺(Pl. 35-2, Plan 12)だけしかのこつてゐないので、いかなる構造物かあきらかでない。しかし、前方部の一辺であることはあきらかである。基壇のうへにたつ建物で、壁の厚さは約 80cm、石づみの形式は八角堂とおなじである。

ディーンによると、こゝにいたるまでに、まだもうひとつ階段があつたらしい。幅が 6.96 m、長さが 20.87 m といふ。

〔水槽〕 水槽(Pl. 35-1, Plan 12)は、タキシラ Taxila のダルマラージカ Dharmarājika 塔院にあるのと同形で⁴⁾ある。ただ石のつみ方はまったくちがふ。ダルマラージカのは乱石づみ rubble、こゝのは切石づみ ashlar である。れもきちんと切ったカンジュール石でつむ。しかし、表面をあつく石灰でおほふことはおなじである。長さ 25m、幅 3.40m、深さ 2.30m である。入口からみて右手に残壁が一条ある。全体にめぐつてゐたものか、右側だけのものだったかわからない。どのくらゐ高かったかもわからないが、右側だけでも覆ひの役をはたすことにはできたであらう。この石づみは切石にちかい石塊と板石小口づみで、八角堂とはゞ似てゐる。水槽はダルマラージカ塔院におけると同様、僧侶の沐浴用であらう。いまは干からびてゐるが、当時は洞内に湧く水をうまみ結したものとおもふ。

〔石階〕 石階(Pl. 35-3)は幅 2.50 m で、ひくい段を小きざみにかさね、わりにたかくまでつみあげてある。幅 4.00m すゝむと、5.00m のおどり場がある。さらに 8.00m 階段をすゝむと、階段は右に折れて 7.00m ほどつゞく。その東端は、東の方からながれおちる土砂のためにうもれてゐる。これとはべつに、奥壁にそつ僧房の方からあがってくる石階がもうひとつある。かなりの急傾斜で、崩壊もはなはだしい。石づみの方式は八角堂におなじである。

〔僧房〕 奥壁の左手に大きな裂罅がある。このまへに小さな矩形の水槽やうのものがある。ディーンの調査とききだつこと一、二年、こゝから若干の宝物がでたことを、ディーンは記録してゐるが、はたしてどのやなものかはわかつてゐない。こゝからおくにすゝむと、石をつんで石垣(Pl. 37-2)をつくり、段をつくつて

1) ミルプル・カースのものはボンベイのプリンス・オブ・ウェルズ博物館 Prince of Wales Museum, Bombay にある。

2) Benjamin Rowland; *The Art and Architecture of India*. Harmondsworth 1956, Pl. 79.

3) Vincent Smith; *A History of Fine Art in India and Ceylon*. Oxford 1911, pp. 365, 366.

4) J. Marshall; *Taxila*. Cambridge 1951, Vol. 1. p. 247; Vol. 3, Pl. 53a.

りやすくしてゐるが、そこから急にたかくなり、細くなって、つひには人間ひとり、やっとはいれるやうな
 る。ふつうの僧房といったやうなものとはちがふが、とにかくだれかの住房にあてられたものにちがひ
 えず出入したとみえて、摩琢のあとが光るほど岩面にのこつてゐる。すくなくとも i, ii, iii の三室には
 ことができたであらう。時代は不詳であるが、こゝにも素焼の燈火皿があった。
 ガーリックは、この大裂罅の入口で、グプタ朝の刻文を発見してゐるが、それには「クリシュナ・グプタ
 は奉納物」とあるといふ。またディーンはおくの急な階段をのぼりつめた壁面に、パーリ語らしき刻文
 かにのこつてゐたと記してゐる。しかし、いま、どちらにも、それらしきものはみあたらなかった。
 村人の、いはゆるカシュミル・スマストのカシュミールに通ずるとか、カシュミールがみえるとかいふ
 細ながくのびた裂罅のことである。

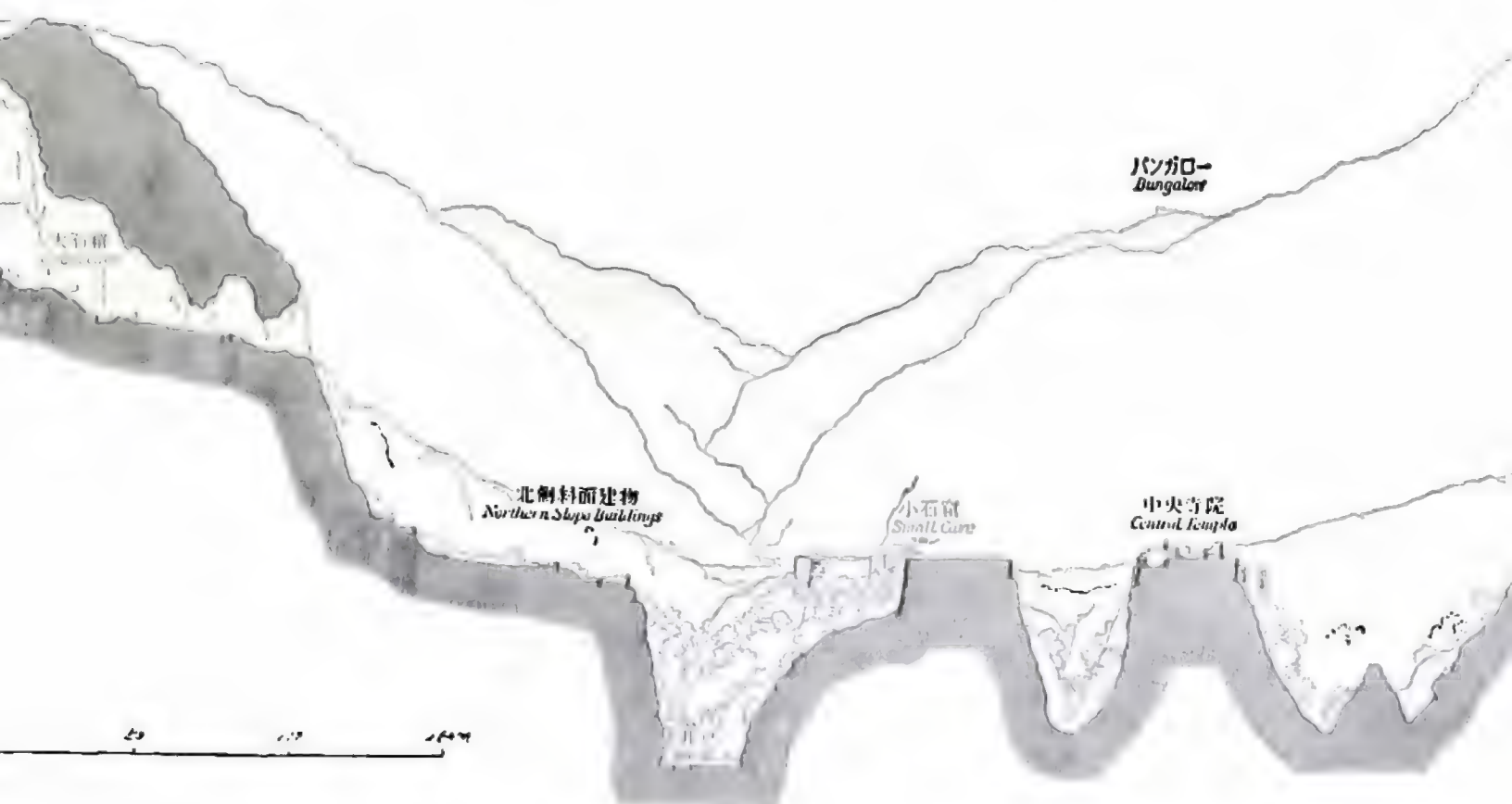


Fig. 17 カシュミル・スマスト遺跡断面図 Section of the Site of Kashmir-Smast

堂〕 洞窟のいちばんおく、階段をのぼりつめたところに、明窓の光を燦然とうけて方形の祠堂(Pl. 3
 12)がたつてゐる。こゝは洞窟のふところも、もっとも大きく、ゆったりとしてゐる。祠堂は、大き
 うへに、整備した石づみの基壇をもち、そのうへにたつてゐる。おそらく、この洞窟のもっとも中心
 建物であつたとおもはれる。この祠堂の規模(Pl. 36)は、東南の角がくづれてゐるので、はっきりしない
 はりの方 3.80m、内の方は方 2.20m の方形祠堂である。

堂の内部西壁には、小さな梯形の龕がある。燈火でもおいたものであらう。

井は、ほんの一部しかのこつてゐないが、ドームである。方形の室に円形のドームをのせるのであるが
 の隅にせりもち squinch 石をおく。せりもち石は、こゝでは井桁にくまれたが、その大きさが方形の
 であつたから、その両端はふかく壁体にくひこんで、こゝに三角形の凹所をつくることになった。
 の祠堂だけの特別な形式で、ほかではみられない。あるひは燈火皿でもおいたかも知れない。カシ
 マストでは、隅せりもちはあるが、隅せりもちアーチ squinch arch はつかつてゐない。

外部の軒にあたる場所は、腕木をならべたやうな軒蛇腹の装飾がある。

方形の祠堂だから尊像を安置したかとおもはれるが、龕形もなく、それらしい痕跡もない。小さなストゥパを安置したこともかんがへられないことはない。

＊

＊

洞内には、八角堂、水槽、石階、祠堂など、さまざまの建造物があるが、石づみの方式はみな似てゐる。多少組のちがひはあつても、要するに切石にちかい長方形の石塊をならべ、そのあひだに小さい板石を小口づみしたものである。タキシラの方式からいっても、その最後のものに照応するとおもふ。この方式は、タクテバヒ Takht-i-Bahi、タレリ Thareli や、スワート Swat 地方のジャララ Jalala、ビルコト Birköt の遺跡の石づみとも共通してゐる。

八角堂のちかくからでた木彫の年代が、もしこの洞窟の年代を指示するとすれば、八世紀といふことになる。また、ガーリックのいふごとくグプタ朝 (A. D. 320-647) の刻文があつたとすれば、おそくとも四、五世紀にはじまつてゐたであらう。しかし、七、八世紀までつかはれた洞窟とみてよいのは、例のナーランダ風の刻のほかに、洞の内外に散布する土器があるからである。この土器は、グプタ末からイスラム初期にかけたものとおもはれるから、それまでは、ひきつゞき住まはれてゐたにちがひない。

紀元 460 年ごろにおけるエフタル嚙嚙の征服が、すっかり仏教を潰滅させたとかんがへるのは早計である。慧祥の『西域記』の時代、つまり七世紀のなかごろにも、まだまだ仏教はおこなはれてゐた。ことにスワート溪谷¹⁾などには、ガンダーラ Gandhara 様式といへない後期の仏像様式があり、おそらく七、八世紀の製作とかんがえられるものである。だから、ガンダーラの、とくに北方山間には、当然、そのころまで仏教寺院が存続したものとおもふ。こゝの石窟の諸建造物が、そのころまでつかはれてゐた可能性は充分にある。

第二章 洞外建造物 [Pls. 32, 38~48]

カシュミル・スマストの大洞窟の入口から、東の方 (Pl. 32) をみおろすと、東の高所から三つの尾根 (Fig. 17) 平行して、ひくゞ西にのびてゐるのがわかる。その中央の尾根のうへに大きな廃墟、中央寺院址がある。北の尾根には畑とバブサイからの監視人の小屋がある。この北の尾根と大石窟とのあひだの谷間には、谷底の平に大きな井戸がある。それから、また、その大石窟側の斜面にも、建物址が二、三カ所ある。中央寺院の南の谷間をへだてた、けはしい崖のうへに祠堂がひとつ、また、洞窟の背後の西北の山頂にも祠堂とそれに付属した小室の痕跡がみられる。さらに、鞍部のバンガローにモールドィングをもつ建物の遺構と井戸がある。ガンダーラ地方にある多くの、いはゆる「井戸」が、たいていストゥパの中心室であるのとちがひ、こゝにみられる井戸はまったく本来の井戸である。また、この中央寺院内の祠堂は南の崖頂と、北側の山頂にある方形の祠堂と同形式であることが、注目される。

1) Giuseppe Tucci ; *Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat* (East and West, N. S. Vol. 9, No. 4) Rome 1958, Figs. 6, 11.

〔中央寺院址〕 中央寺院(Pl. 38-1, Plan 10)は、きりたった崖を利用し、それにたかい石垣をくみあはせて台地をつくり、そのうへにたてられてゐる。

中央寺院の中心は、この台地のほぼ中央の一段と高くなつたところにある。現在もかなり高い壁体(Pl. 38-1)のこり、方12.5 mの室がみとめられる。この北壁にはとがりアーチ(Pl. 39)の出入口があり、そのうへは彫刻してうめた窓のあとがみられる。東壁と南壁にも、それぞれ、幅1.50 mの出入口がついてゐる。また西壁に長方形の高窓(Pl. 38-2)がもうけられ、その下辺は銃眼にみるやうに、ななめに切りこまれてゐる。これとクティ・パヒ、タレリやスワートのアバサヘブチナ Abbasahebchinaなどにみられるものと同形式である。この部分は、まったく崩壊してゐてわからない。

この主室の南には、小さな室が二つ(7.5×3.5 m, 5.5×3.5 m)東西にならび、その隔壁には二階、または三階むかふ階段の痕跡がのこつてゐる。主室の東にはひろい中庭があり、その北側に6×9 mの小室があり、その中にいくつか室がある。東の部分は、すこし高くなつて、方10 m, 方8 mの、かなり大きな室が二つならび、その東北に小室に区劃された遺構が、草木におほはれながらのこつてゐる。

主室の西の、一段とひくくなつてつきでたところに三室あり、東の二室にはちがつた二つの時期の石づみがある。また、この部分の南の壁は、かなり低くなつてゐる。

また主室の北には、ほぼ方形の祠堂(Pl. 40)がある。この祠堂は外まはり方3.30 m, 内のり方2.00 mある。その西面はすこしくづれてゐるが、小壁のあひだに1.20 mの開口がある。方形の壁体のうへにドームがのこつてゐる。その四隅には四半円の円弧をもったせりもち(Pl. 43-2)がつくられてゐる。ドームの上部はくづれてゐる。狩人たちの一時しのぎの小屋になるのか、上部はほそい材木をかけて屋根をつくり、床には焚火のあとがみられる。また軒にあたる部分には、腕木をならべた装飾がほどこされてゐる。

中央寺院の主室はひろく、集会室にでもあてられたらしく、その付屬に僧房や祠堂がとりまいてゐたものと思われる。また、この部分の南の壁は、かなり低くなつてゐる。

〔北尾根建造物〕 中央寺院の北にある尾根にも、たかい石垣をきづいて台地がつくられてゐる。いまは遺構はすこしものがなく、畑地と監視人の小屋のみであるが、1881年ガーリックの踏査した記録には、
「8 kmほどすゝむ——山麓から山頂までは約13 kmといはれてゐる——と、寺院 Büt khane がみえてくる。強力な望遠鏡では、さして大きくなく、屋根もくづれた、いくつかの廢墟に二、三の彫像のたつてゐるのを見うつつ。さらにのぼると、谷の北側には大きな耕された平地があり、それに接して大きな方形の水槽と、数々の壁面とがのこつてをり、また南側には大きな、部分的にとゞのへられた石塊をつみ、おなじ材料の板石をさしこんだ古い要塞のやうな壁がある。(p. 112)」

この台地の北側、ほぼ中央に谷間の井戸や北側斜面の建物にむかふ小道があり、石垣にそつてくだつてゐる。また東端とに壁の一部と小室とがわづかにのこつてゐる。この台地も、かつては中央寺院のやうな建築物であつたとおもはれる。ことに仏教寺院だとすると、このあたりにストゥパがあつてもよささうであるが、それらしい定さすやうな跡はない。

この台地の北側、ほぼ中央に谷間の井戸や北側斜面の建物にむかふ小道があり、石垣にそつてくだつてゐる。また東端とに壁の一部と小室とがわづかにのこつてゐる。この台地も、かつては中央寺院のやうな建築物であつたとおもはれる。ことに仏教寺院だとすると、このあたりにストゥパがあつてもよささうであるが、それらしい定さすやうな跡はない。

〔小石窟〕 小石窟(Pl. 44-1, Plan 13)は、大石窟とむきあつて、谷をへだてた山のすそにある。こゝから中央寺院や崖上の祠堂にいたる小路がある。この石窟は、片岩質の岩山をきりひらいたもので、入口は

90 m, ゆるい傾斜の階段がはりだされ, 左右の壁面にはかんぬきのはぞ穴がうがたれ, さうさう摩滅してゐるのをみる。内部は入口側で幅5.50 m, おくへゆくにつれてひろくなり, 奥壁で幅3.40 m ある。高さは入口で1.40 m, 奥壁で1.60 m ある。掘鑿は片岩の節理を利用したもので凹凸がはげしく, 天井, 側壁にはわれ目が多い。側壁には, 燈火皿でもおいたとおもはれる四角の穴がうがたれてゐるほか, なんの施設も見られない。おそらく僧房としてもちひられたものであらう。



Fig. 18 ジャマル・ガリの建物 Building of Jamar-Garhi

〔北側斜面建造物〕 谷間の井戸から, 急な坂道を大洞窟の側にのぼると, 建物址(Pls. 46-1, 2, 3)がある。この建物址は, 急な山腹の傾斜面に石垣をつくって構築したものである。

したの方の建物は長方形の三, 四室からなる。中央の室の東壁にはとがりアーチの窓(Pl. 45-2)がもうけられてゐる。切石にちかい長方形の石をつみ, 小さい板石をすくなくしてゐるのが特色である。この平面構成は, やうどジャマル・ザリ(Fig. 18)やクレリの遺跡(Fig. 19), それからブネールのアバサハフチオの三室なる僧院とよく似てゐる。カシュミル・スマストの僧院とみるべきであらう。

うへの方の建物は, 南面した石垣と, そのうへの石づみとをのこすのみで, 荒廃がはなはだしい。おそらく, したの建物址と同様, 僧院の一字であつたものとおもはれる。一部にはほとんど切石のやうな長方形をつけた基礎工事(Pl. 46-3)がみられるが, やゝ粗雑である。

〔谷底の井戸〕 洞窟のした, 深い谷底の平地に大きな井戸(Pl. 45-1)がある。この井戸は, 径約5.00mの円形で, まはり石づみである。いまは内部に泥がたまつてゐる。この東南のきりたった崖のしたに石室がうがたれ, このなかで湧きでる地下水を, 溝で井戸にひきこんだものらしい。井戸の西にある石づみは, そのうへに石灰が堆積したもので, 大きな自然石のやうにみえる。そのなかに, 内ころび梯形の水路がつけられ, 井戸水の排水に利用されてゐる。

この井戸は, 自然の湧水を利用したもので, カシュミル・スマスト一帯の給水源になつたものであらう。ディーンは, この崖下の石室をスデーナ太子習定の石室とみたが, 湧水があるので, 住居とするには不適當であらう。

〔崖上祠堂〕 中央寺院と谷ひとつへだてた南側の尾根は, きりたった崖がそゝりたち, その大岩のうへに, 外まはり方2.20 m, 内のり方1.10 mの方形祠堂(Pl. 47-1)がたつてゐる。これはカシュミル・スマストにみら

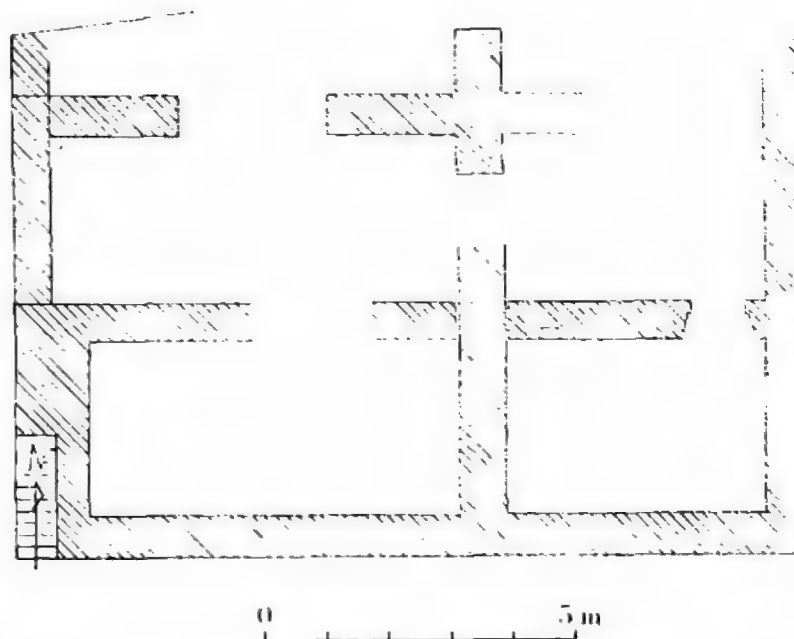


Fig. 19 クレリの建物 Building of Thareli

る祠堂のうちで、もっとも形のととのったものである。

東壁の中央に、幅 60cm の内ころび開口がもうけられてゐる。戸口の詳細は前面に凸部をもち、内側へ斜
きった開口で、タレリやスワート地方のビルコトやウデグラム Udegram のものとおなじ方式である。

方形の壁のうへにのるドームは四隅の小さなせりもち (Pl. 42-1) でさへられてゐる。石づみは、表面を
にした石塊の左右、上下に板石を小口づみにしたもので、表面は石灰で被覆されてゐた。また、祠堂の軒
る部分や胴まはりには、腕木をならべたやうな装飾がほどこされ、そのうへにも石灰が塗布されてゐた。

北壁の中央、祠堂内の床面と推定される高さに、10cm×15cm の排水口のやうな孔があげられてゐる。

〔山頂祠堂〕 中央寺院から西北をみると、大石窟の山頂に、祠堂がみえる。この祠堂 (Pl. 43-1) は、10 m
m の石垣をめぐるした基壇のうへにある。祠堂の南には、方 2.00m, 2.50m×2.00m, 1.00m×1.50m の小
室が三つある。

この祠堂も、いままでみた祠堂とはおなじ構成をなし、西面して内ころびの開口がある。外まはり
0m, 内のは方 1.50 m の方形祠堂で、南面の外壁には、とがりアーチの小さな龕がついてゐる。円形のド
(Pl. 42-2) は四隅に小さな三角のせりもちをつくつてのせてゐる。

石づみは、他の祠堂にくらべて少々あらいが、石塊の上下左右に、板石を小口づめにするとはおなじで
胴部、軒まはりに装飾はない。

この山頂の三室の遺構は、僧院といふより、祠堂のやうにおもはれる。

〔バンガロー遺跡〕 ピルサイ側からバブザイ側へこえる鞍部には、リシャド・ハーン氏が所有するバンガロー
たかい石づみのうへにたつてゐる。しかし、よくみると、これも古い遺構を利用したもののやうである。
東側の壁 (Pl. 44-2) には、このやうにモールディングをもった基部がのこつてゐる。たゞもとの構造を知
ないのが残念である。

〔鞍部井戸〕 ちょうど、この鞍部の路傍にある。石づみ、円形の井戸で、たしかに塔の中心円室ではない

*

*

大石窟の南方、ふかい谷をへだてた尾根には、高い石垣をつみあげて平地をつくり、そのうへに寺院建物か
られてゐる。中央には集合する大室もあり、尊像を礼拝する祠室もあり、住居にあてられた僧院もあった。
湯や厠も完備してゐたにちがひない。北の尾根も同様であつたらう。北側の斜面にも、北の山頂にも、シ
ン・ガリやタレリ、サンガオ Sanghao, コトキ Kotki の斜面にみるごとく、住房らしい小建築が散在してゐる。

*

*

〔ピルサイ遺跡〕 以上のほか、もうひとつ注意すべきはピルサイにある山頂の遺構と谷間の小石窟群であ
山頂の遺跡 (Pls. 47-1, 2) はたゞ遠望するのみで、これにちかづく時間がなかったが、おそらく、北側斜面
に似てゐるとおもはれる。

小石窟の方は部落の北にあり、干あがった川岸にならんでゐる。すべて小さい、くすぶったドーム状、い
形にちかい石窟 (Pl. 48) である。礫岩 conglomerate の層にならんでうがたれたところは、まさしく、これ
アフガニスタンにかけて豊富にみられる龕窟である。シンプソン William Simpson が、アフガニスタンの
ル石窟群で正しく推定したやうに、僧侶たちの住房であるとおもはれる。

1) W. Simpson ; *Op. cit.* p. 321.

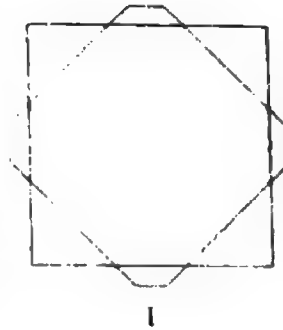
総括

以上、洞内と洞外の諸遺跡についてのべたが、それらは、その石づみや建物の遺構の一致する点から、ほぼ同一時期に構築されたものとみられる。

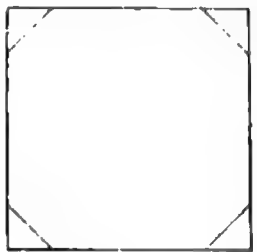
しかし、このカシュミル・スマスト一帯の遺跡には、彫刻や浮彫の散布するものなく、古銭などの出土もみられない。したがって、これらの遺構がなにの遺跡であり、また、いつの遺跡であるかを明確にする手がかりはまったくない。たゞ、かういふ山のなかで、生産の手段もないのに、これだけ大きな造営ができたのは、宗教的な建築であるか、王侯の山荘であるかしか、かんがへられない。ところが、いま王侯の山荘らしい根拠がどこにもないとすれば、やはり宗教的建築とかんがへざるをえない。さうして、この近傍に建てられた山寺が、たいてい仏教寺院であるのをおもへば、これもまた、仏教寺院となすべきであるとおもふ。

ガンダーラ地方の仏教寺院においても、礼拝の中心がストゥパにあることはいふまでもない。ところが、このカシュミル・スマストでは、洞内はもちろん、洞外にもストゥパらしい遺構はみあたらない。もっとも、中央寺院の谷をへだてた北尾根の平地に、ストゥパがあったかしれないとおもふが、これを確証する痕跡はまったくない。また、鞍部ツンガローの壁には、古建築の基部がのこり、まるいモールディングのあることは、すでにのべたが、これはコトキとか、トレバス Trebas の塔基にみるところで、あるひはストゥパでなかったかとうたがはれるが、これだけでストゥパと断ずるわけにはゆかない。ストゥパはみられないが、方形の祠堂は、洞内、中央寺院、崖上、山頂、また南の山こえた谷間の泉のほとりにもある。これらの祠堂は、ほぼ形式と大きさを一にしており、その石づみもほぼ同一である。つまり、やゝ長方形の石塊の上下左右に小さい板をつめ、表面を石灰で被覆したものである。方形の壁体の隅にせりもちをもうけ、ドームをさへてゐる。隅せりもち、すなはちスキンチ squinch は、方形または多角形の室ドームでおほふばあひの一方法である。壁体上部の隅を、(1)特別の装置をせずに、ただドームをおく、(2)隅三角せりもちを、いく層にもかさね、うへにゆくほど出をふかくする、(3)隅にいくつものアーチをつみかさねる(スキンチ・アーチ squinch arch)、(4)隅半ドーム状の龜形をまうける、(5)隅に円錐ヴォールト conical vault をおき、外面、隅にアーチをつけるなど、方式がある。¹⁾

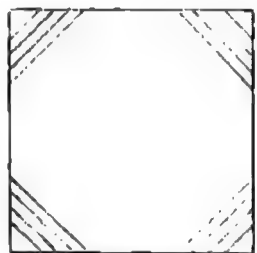
カシュミル・スマストの祠堂のドーム架構は、この第1類に属する。これをこまかくみると、またいく種類の形式(Fig. 20)がある。洞内祠堂では四隅に三角形にせりだし石をかけ、井桁をくむが(Fig. 20-1)、洞外の崖上と山頂の祠堂では、隅に小さな三角のせりだしをもつ方形隅きり式(Fig. 20-2)、中央寺院の祠堂は隅に円錐ヴォールトをおき、外面、隅にアーチをつけるなど、方式がある。



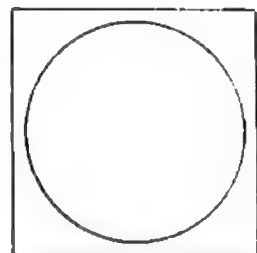
1



2



3



4

Fig. 20 ドーム
架構の諸形式
Variations of Dome

1) *Encyclopaedia Britannica*. 14th edition, London 1929, Vol. 21.



Fig. 21 トレリのドーム架構
Dome in Tharēli

弧のせりもちをもつ円形式 (Fig. 20-4) である。最後の形式は、タクティ・バヒ、タレリの祠堂 (Fig. 21) にもみられ、ドームの円形が、面の方形にほぼ内接した形式である、サンガオの祠堂 (Fig. 22) のドーム架構は、四隅に三角せりだしをかさね、うへになるほど出がなくなる形式 (Fig. 20-3) で、さきの分類では第2類に属する。

祠堂の軒したには、いちやうに腕木やうの装飾がある。崖上の祠堂では、その腰まはりにも同様の装飾がみられる。この腕木やう装飾はタクティ・バヒ、タレリの祠堂 (Fig. 23) やスワートのシンカダール Shankardār やアムルク・ダラ Amulūk-dāra のストゥパの胴まはりにもつかはれてゐる。

祠堂の前面には、かならず左右に小壁 (Fig. 24-1) がある。その形式はタクティ・バヒのやうなコの字型の祠堂 (Fig. 24-3) とはちがふ。タクティ・バヒのはむしろ龜形といはるべきであらう。こゝではすべて小壁がつき、開口部 (Fig. 24-1) には、かならず、左右から突出があり、そのなかはなゝめにきりこまれてゐる。たぶん、扉

をこす必要からかうなったかとおもはれるが、スワート地方のビルコト、ウデグラム、それからタレリの祠堂の一部にもみられる。

カシュミル-スマストのぼあひは、どの祠堂も独立で、どこにも従属してゐないのが特色である。これに反して、ジャマル・ガリでは円形ストゥパのまはりにあり、タクティ・バヒでは方形ストゥパのまはりを取りまく。

、これらのぼあひには祠堂が連続してならんでゐる。

カシュミル-スマストのぼあひは、すべてが単独である

1) タクティ・バヒの祠堂 (Fig. 25) は、1871 年の発掘のさい、
な屋蓋部のよくのこった祠堂が二つあったので、いま
それによって、みな復原されてゐるが、それによれば

の小壁を欠くコの字型で、四半円のせりもちをもつド
をのせてゐる。カシュミル-スマストの祠堂屋蓋部に、

に似た大きな屋蓋があったかどうかはわからないが、

2) 屋蓋形が、スワートのアバサハブチナ (Fig. 26) でも、バ

3) Balu のゴンバトでもみられる、ごく一般的なものであ

ら、カシュミル-スマストのも、かういふ形を推測して
いふではなからうか。

タレリの遺跡は、散布する仏像や浮彫の断片から、あき



Fig. 22 サンガオのドーム架構 Dome in Sanghao

1) D. B. Spooner; *Excavation at Takht-i-Bahi* (Annual Report of ASI, 1907-8) Calcutta 1911, p. 133.

2) G. Tucci; *Op. cit.* Fig. 28.

3) A. Stein; *An Archaeological Tour in Upper Swat and Adjacent Hill Tracts* (Memoirs of ASI, Vol. 42) Calcutta 1930, pgs. 6, 7.

かに仏教遺跡とみられるが、これは円形天井の主建築
 山上にあり、その周辺にさまざまな建築遺構をもってゐ
 。そのうちにはストゥハをとりまく祠堂列もあるが、単
 一の祠堂もある。その後者のうちに、カシュミル・スマスト
 崖上祠堂とまったくおなじもの、中央寺院のそれと類似
 してゐるものがある。とにかく、こゝにはカシュミル・スマ
 ストのごとく、独立、単独のものがあることが注意される。
 また、サンガオ廃寺では、中心の主要建造物の一部に祠堂
 おなじ、ドーム天井の方形室がみられるのは注意をひく。
 パサハブチナでは、ストゥハのちかくに、チャウどタク
 ティー・バヒにみられるやうな大きな屋蓋をもった祠堂が発
 見された。その構造、意匠が、まったくカシュミル・スマス
 の崖上祠堂と一致してゐるが、イタリアの調査隊は、こ
 の祠堂に仏像の安置されたことを推定してゐる。

カシュミル・スマストの石づみはこの谷に豊富な片岩をつかつてゐる。だから、多少とも長方形の石塊を中
 し、これにあしらふに板石の小片をもってしてゐる。洞内、洞外の建築にわたって、だいたい似たやうな石
 づみがみられるが、また、そのあひだに多少のちがひがないでもない。ほぼ水平にならぶ石塊の上下左右に板
 石小片をうめた第一式、石塊が方形にちかくなるとともに左右の板石がはぶかれ、上下の板石もうすくなる第二
 式、それにほとんど切石のごとくになって板石小片をはぶいた第三式、かういふふうに、
 ちがいを区別することができる。もちろん、ほとんどが第一式でできてゐるが、タキシラ
 の方式でいへば、いはゆる半切石半地文様 semi-ashlar, semi-diaper といはれる式で、後出
 の形式といふほかはない。第二式は第一式の変形といったやうなもので、あまり重要では
 ない。第三式も北側斜面の建造物でみるばかりで、ほかにはない。完全な切石といふには
 大さはしくないほどのものばかりであるが、水槽はがっちりした切石づみである。必要が
 れれば、かういふ切石づみもできたのである。しかし、いづれにしても、ザンダーラ建築
 一般にみるやうに、みなあつい石灰の被覆をかけたことはうたがひない。

大洞窟からでた木彫板には三葉形アーチ trilobe がみられたが、しかし、一般にはとがり
 アーチ ogive が普及してゐるらしい。中央寺院の出入口にも、北側斜面の建造物にも、また
 小さい棚用の龜形にも、とがりアーチが採用されてゐた。まことに、とがりアーチはザン
 ダーラ地方の一般的特徴であつたらしく、タクティー・バヒにも、ラニザット Rānigat にもみ
 られるのである。

このとがりアーチが流行して、円形アーチの発達しなかったことと、せりもちアーチがあ
 りはれなかったこととは関係があるらしい。このドーム架構は、みなせりもち squinch 法
 で、せりもちアーチ squinch arch 法は、まったくみられない。これをアフザニスタンにお
 ける、せりもちアーチの流行にくらべると、パキスタンの一特色とすることができよう。



Fig. 23 タレリ祠の腰飾 Cornice of Shrine in Tharshah

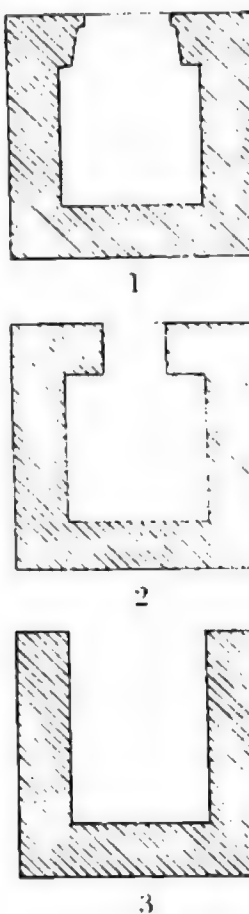
Fig. 24 祠堂
開口部の諸形式
Variations of Shrine



Fig. 25 タクティ・バヒ祠堂列 Shrines of Takht-i-Bāhi

北側の大洞窟をふくんでゐた。中央寺院と大洞窟内の寺院と、どちらが古いかといふやうなことは、たゞのまかすほかないが、こゝがかういふ寺院としてえらばれたのは、やはりこの神秘的な自然の大洞窟があるからにちがひない。中央寺院は、もとより、かれらの公的生活のばしょであり、付近の住房と小石窟とはかれらのすまひであり、節定のばしょであつたらう。食は、もとより里まで托鉢にいったであらうが、水は谷のくぼみにある井戸にあほいだのである。

大洞窟には会堂もあり、水槽もあり、祠堂もあるから、ガーリックが推測したやうな倉庫の役わりをはたした¹⁾ものではない。やはり特別の聖所として、奥の院的な存在であつたかと思ふ。この洞窟のおくに、二、三の僧房があることも、けつしてこのことへの妨げにならない。かうして崖や峰のうへの祠堂は、こゝで修道する僧侶たちの遠征にふさはしい目標をあたへたことであらう。

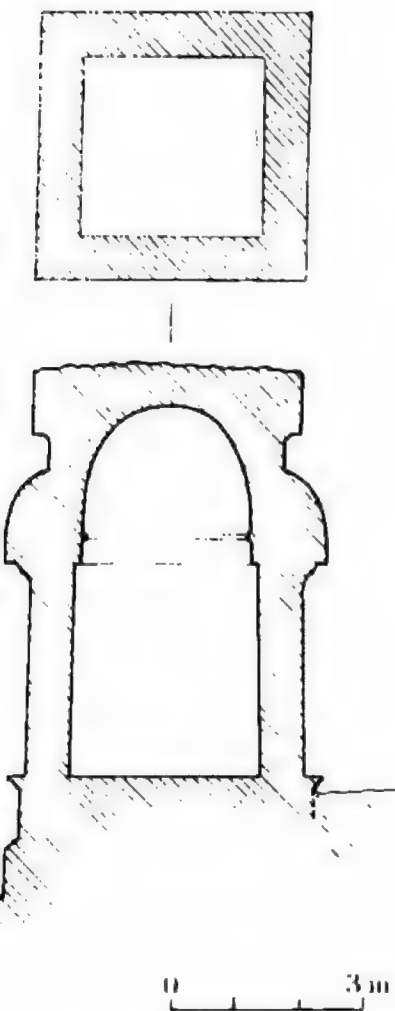


Fig. 26 アバサハブチナ祠堂
Shrine of Abbasahebchina

1) H. B. Garrick ; *Op cit.* p. 116

おそらく、アフガニスタンにおける流行は、セム系のもちアーチの根源ともいふべきササン・ペルシアにちかく、また、その建築の影響をつよく受けてゐたからであらう。したがって、アフガニスタンでは、そのためとがりアーチよりも、円形アーチの方が一般におこなはれてゐたのである。要するに、カシュミル・ススマスの遺跡は、グザイ側にひらいた谷でつゞまれた二つの崖にある寺院を中心とし、鞍部や北側斜面の僧房それから谷底にある井戸や峰々に散在する石窟

たびたびいったやうに、この寺院の年代を、はっきりしめすものは、ない。しかし全体の遺構からかんがへ、グプタの刻字を考慮にいれば、仏教の盛時、とくにその後半、五、六世紀に、その盛時があつたものと察せられさうして彫刻木板がしめす七、八世紀まで、ひきつゞいたことも推察される。さらに、この洞窟内外に散布する土器をみれば、仏教盛時の終末期、ほかでそろそろイスラムの信仰がひろがりつゞある十一世紀ころまで、ひきつゞき教寺院としての生命をたもつてゐたのではないかとおもはれる。

水 野 清 一
西 川 幸 治

第 三 部

アフガニスタン北部の考古学的調査



27 バーグ・ヒン
ノール石窟
Bāgh-Hindu
Cave



28 ハイバクのバラ・ヒッサール Bālā-Hissār of Haibak



29 ドララ・ジュ
アンダン石窟
Drara-i-Juandan
Cave



30 ソルボーク石窟, 第一群 Sorhōg Caves, First Group



31 ハワール石窟
Khawal Cave



32 ソルボーク石窟, 第二群 Sorhōg Caves, Second Group



33 苏尔博格第三组洞穴
Sorbōg Caves, Third Group



34 苏尔博格第四组洞穴
Sorbōg Caves, Fourth Group



35 哈扎尔苏姆洞穴
Hazār Sum Caves



36 哈扎尔苏姆洞穴内部
Hazār Sum Cave, Inside



37 哈扎尔苏姆洞穴内部
Hazār Sum Cave, Inside



38 ハザール・スムイ
窟、内部
Hazār-Sum Cave,
Inside



39 ハザール・スムイ
窟、内部
Hazār-Sum Cave,
Inside



40 カラ・カマール
窟
Kara-Kamār Cave



41 カラ・カマール窟、外部
Kara-Kamār Cave,
Outside



42 古フールム城跡 Old Khulm



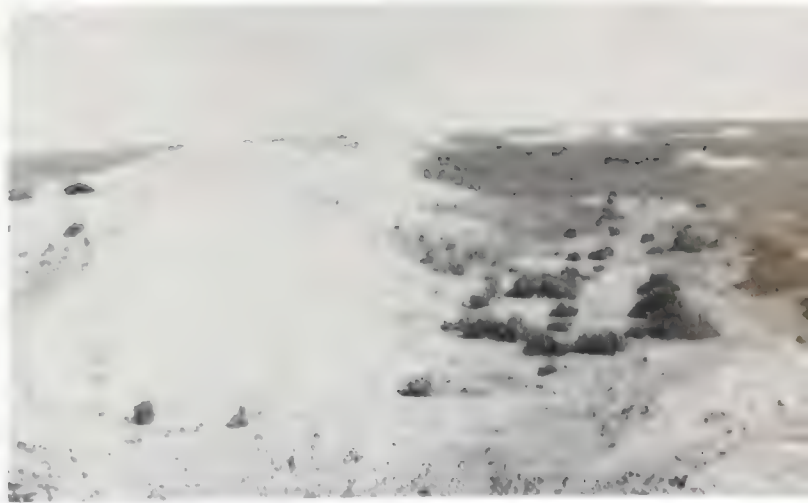
43 シュール・テハ Shul-Tepe



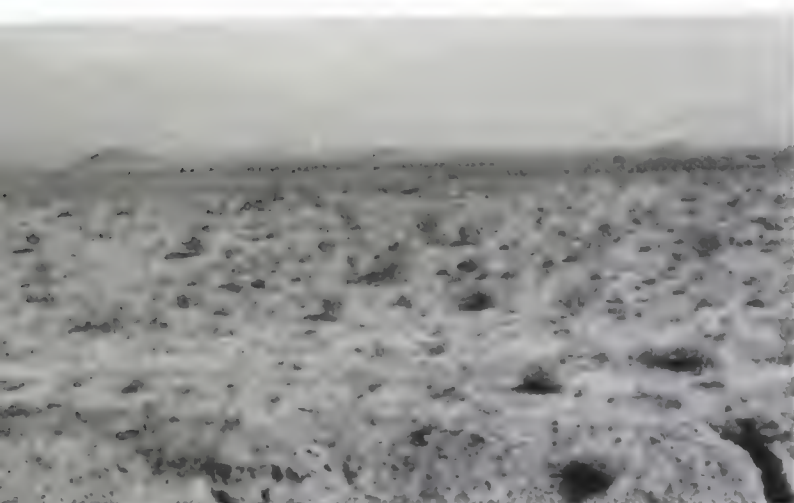
44 シュール・テハ南
斜面
South Slope of Shul
Tepe



45 シャー・イ・バナス Shār-i-Banu



46 シャー・イ・バナス上城址 Ruined Walls of Shār-i-Banu



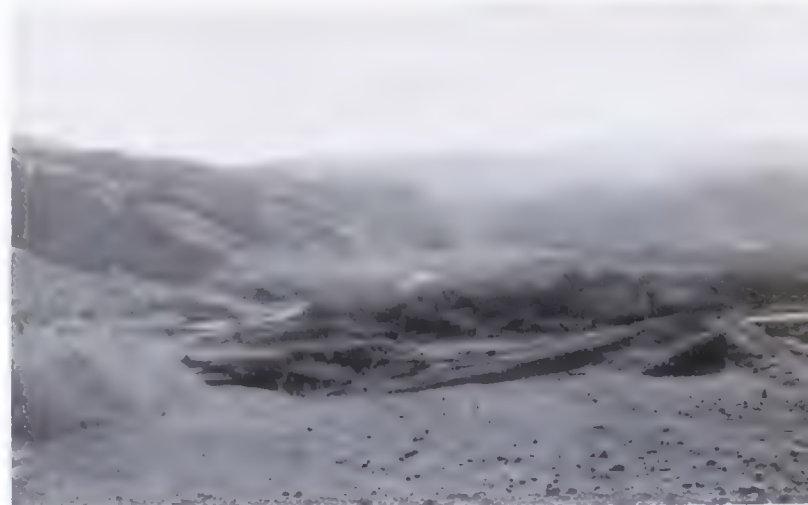
マザリ・シェリフ東郊のテペ Three Tepes East of Mazār-i-Sheriif



48 クアル・ムハマッド・ハーン テペ Qual-Muhamad-Khan Tepe



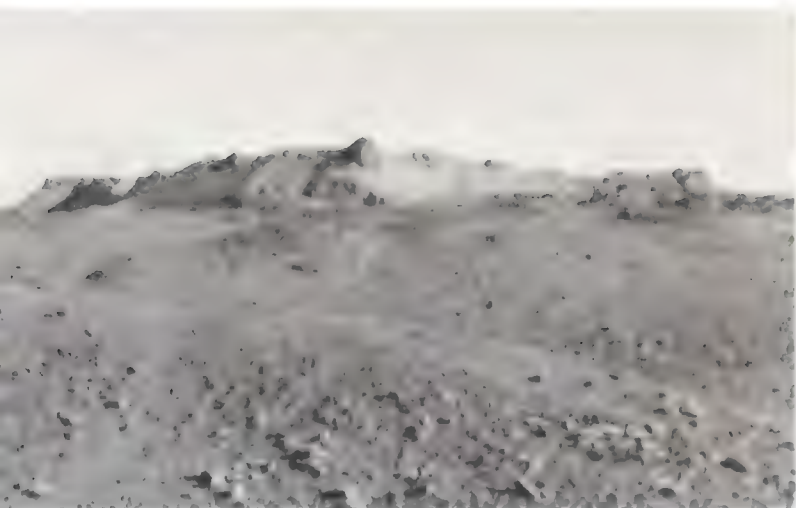
49 ドフタル・パジャ 石窟 Dokhtar-Padsha Cave



50 アク・クフルクの村 Aq-Kupruk Village



51 ドフタル・パジャ 石窟の龕
Dokhtar-Padsha
Cave. Niche



52 バルクのバラ・ヒッサール Balā-Hissār of Balkh



53 バルクをバル・ヒッサールより見たバルク Balkh seen from Balā-Hissār



54 バルク古城南壁およびボルジ・アシャラン
South Wall of Old Balkh and Bolj-i-Asyaran



55 テペ・ザルガラン Tepe-Zargaran



56 チャルキ・ファラク Charkh-i-Falaq



57 ナディーール・テヘ Nadīr-Tepe



58 バルクのタクティールスタム Takht-i-Rustam, Balkh



59 トーヒルスクム Tōp-i-Rustam



60 アシアビ・コナク Asyab-i-Qonak



61 チェヘル・ドフクラーン Chehel-Dokhtarān



62 ゴバクリ・テペ Gobakli-Tepe



63 テペ・サバ Tepe Saba



64 サルミ・テペ Salmi Tepe



65 ハロバード・テペ
Halobād-Tepe



66 フレション・テペ
Preshon-Tepe



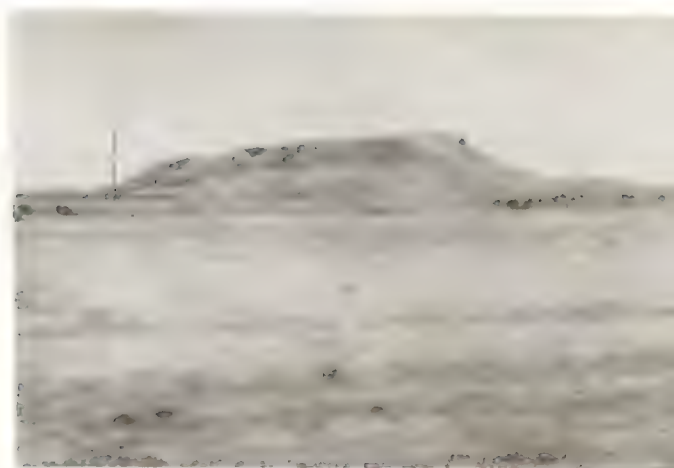
67 チシュ・テペ
Chish-Tepe



68 アクチャの東方
19 km のテペ
Tepe 19 km East
from Aq-Chah



69 アベ
Nasrat-Tepe



70 ファイザバード・テペ Faizabād-Tepe



71 Momlek Kala Tepe



72 シャソリム・ポチャ・テペ Shasolim-Podcha-Tepe



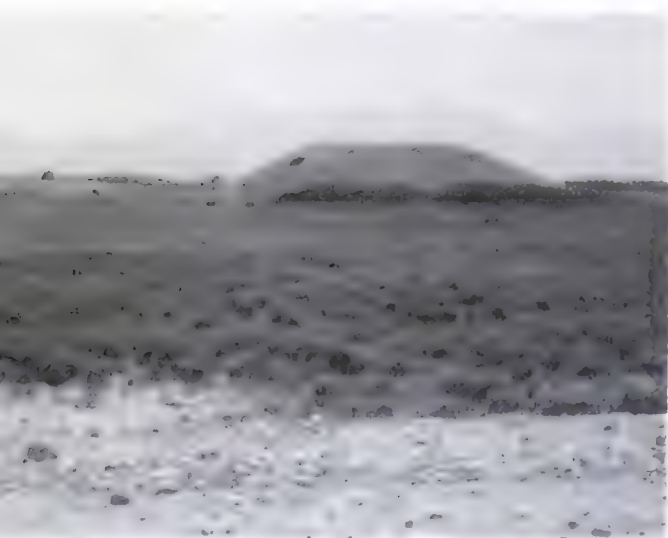
73 アクチャの東方 39 km のテペ
Tepe, 39 km East from Aq-Chah



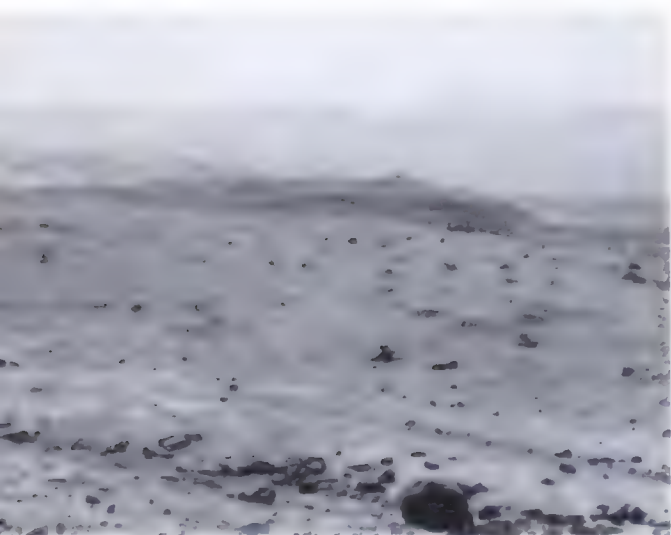
74 チャムカラ・テペ Chamkala-Tepe



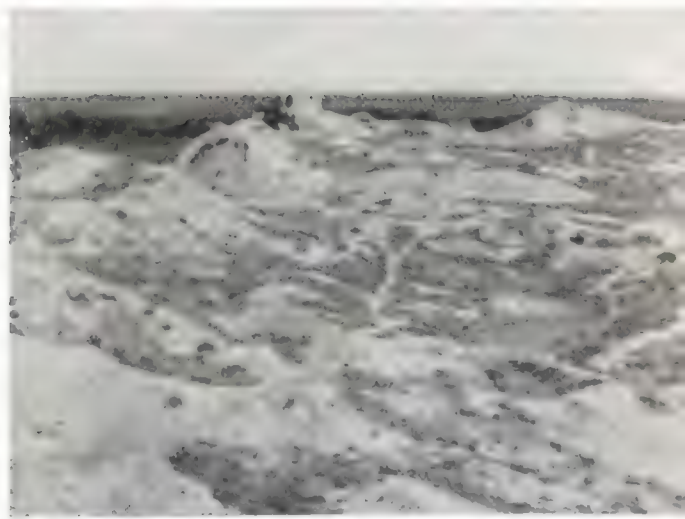
75 リリ・テペ Lili-Tepe



76 アリアバードの南方7kmのテペ
Tepe 7km South from Aliabād



77 ジェル・テペ Jel-Tepe



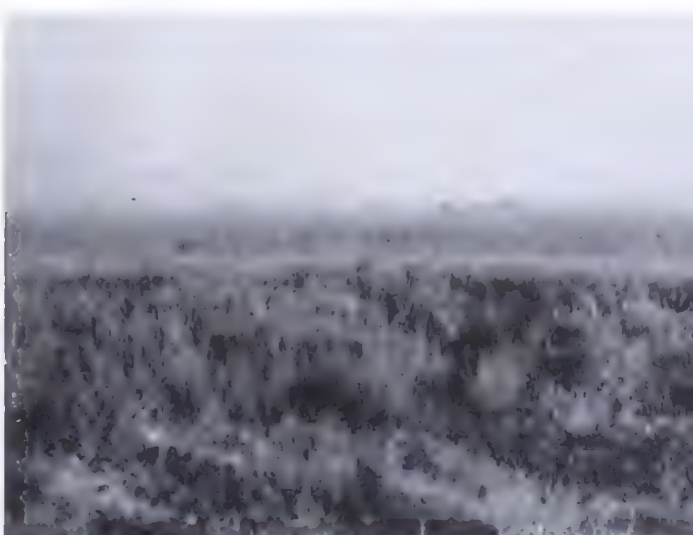
78 クンドウヅのバラ・ヒッサール Balā-Hissār of Ku



79 チェヘル・ドフタラーン Chehel-Dokhtarān



80 マルザ・ラマザン・テペ Marza-Ramazan-Tepe



81 ホジャ・ガルタン・テハ Khoja-Ghaltan-Tepe



82 クロラ・テペ Klōla Tepe



86 ベルディ・オ・テペ Beldi-ao Tepe



83 テモルショ・テペ Temorsho Tepe



87 オブラウ・テペ Oblau Tepe



チェシュメ・カイナル・テペ Cheshme-Kainar Tepe



88 カラ・テペ Kala Tepe



85 チェシュメ・カイナル・テペの南200mのテペ
Tepe 200m South from Cheshme-Kainar Tepe



89 カラ・テペ, 東南部 Kala-Tepe, South-East Corner



90 彫造シヴァ神像, 伝オルラメシュ発見,
Stucco Figure of Shiva, from Orlamesh (?)



91 仏足石, 伝アンホイ発見
Buddha's Foot-print from Anhui (?)



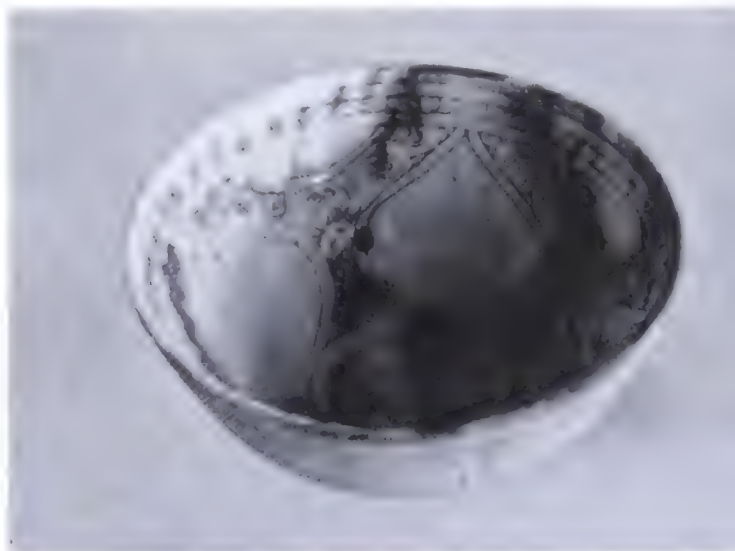
92 彩文土器片, 伝ウストハン・ザール発見
Painted Pottery, from Ustkhan-zār (?)



93 塑造仏頭, 伝タシュ・クルガン発見
Stucco Head of Buddha from Tash-Kurgan(?)



94 陶製手榴弾(?)
Pottery Grenade(?)



95 緑釉刻紋陶鉢, 伝タシュクルガン附近マンカラ発見
Green Glazed Bowl from Man-Kala near Tash-Kurgan(?)
マザリ・シェリフ博物館蔵
Mazar-i-Sherif Museum

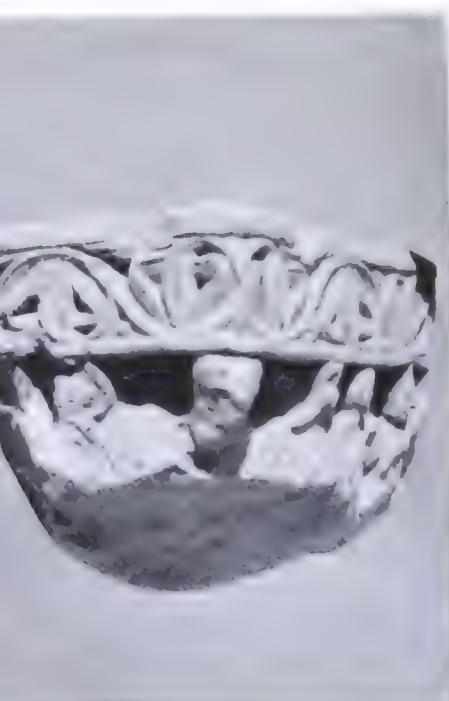


96, 97 仏塔装飾, 伝チャムカラ・テベ発見
Stone Relief for Stūpa from Chamkala-Tepe



98 仏塔装飾, 伝チャムカラ・テベ発見
Stone Relief for Stūpa from Chamkala-Tepe(?)

99 仏塔装飾, 伝チャムカラ・テベ発見
Stone Relief for Stūpa from Chamkala Tepe



100, 101 仏塔装飾, 伝チャムカラ・テベ発見
Stone Relief from Chamkala-Tepe(?)



102 仏塔装飾, 伝チャムカラ・テベ発見
Stone Relief from Chamkala-Tepe(?)
バケラン, クティ
Kuti-Stara, Bāgh



103 浮彫仏伝図，伝バグラン附近発見
Stone Relief representing Buddha's Life from Tepe east of Bāghlan(?)



104 浮彫仏伝図，伝リリ・テヘ発見
Stone Relief representing Buddha's Life from Lili-Tepe(?)



105 柱礎，伝リリ・テヘ発見
Pillar Base from Lili-Tepe(?)



106 甕と柱礎，伝リリ・テヘ発見
Pottery Urn and Pillar Base from Lili-Tepe(?)



107, 108 甕，伝リリ・テヘ発見
Pottery Urn from Lili-Tepe(?)



109 甕，伝クティ・スタラ発見
Pottery Urn from Kuti-Stara, Bāghlan



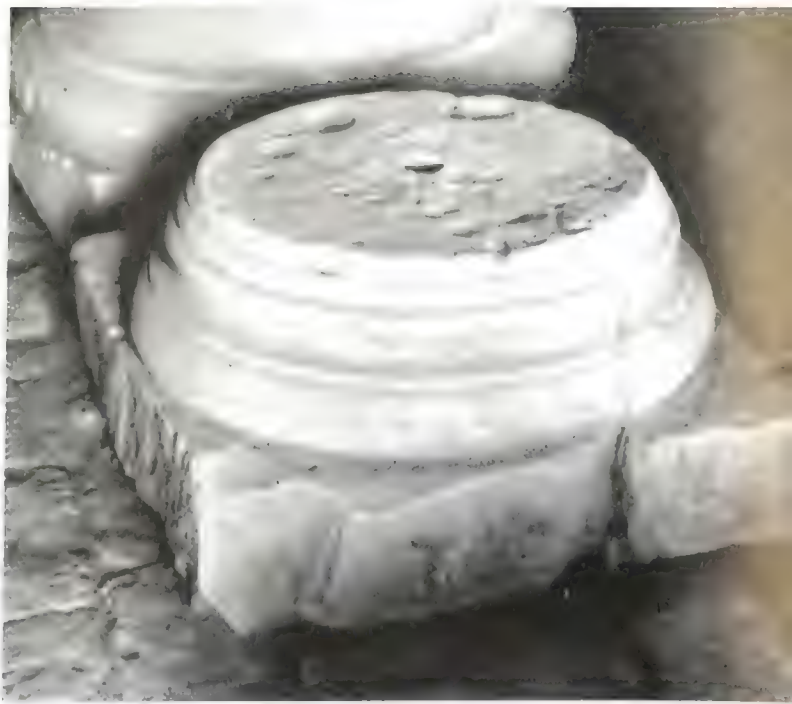
109 人類人頭人牛頭，伝リリ・テペ発見
 110 人類人頭人牛頭，伝リリ・テペ発見
 109 人類人頭人牛頭，伝リリ・テペ発見
 110 人類人頭人牛頭，伝リリ・テペ発見



111 貝製串飾と環 Shell Pendants and Rings 112, 113 青銅鈴 Bronze Bells
 伝リリ・テペ発見 From Lili-Tepe(?)
 クティ・スタラ蔵 Kuti-Stara, Bap



114 ホジャ・ガルタン・テペ採集土器片 Pot-sherds from Khoja-Ghaltan-Tepe



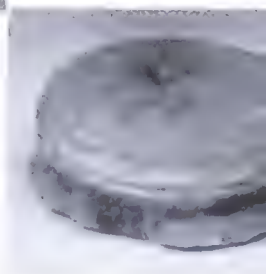
116



118



120



121

115-121 柱礎，伝アホンザダ・テヘ発見
Pillar Bases from Akhonzada Tepe(?)



122-124 石版刻の、ブッダの生涯の場面
Stone Relief representing Buddha's Life from Akhonzada Tepe



125 石版刻の、ブッダの坐像
Stone Figure of Seated Buddha from Akhonzada Tepe
ケタブ・ハネ・ナシール、クンド
Ketab-Khane-Nashir, Kundū



126 石彫人像，伝アホンザダ・テペ発見
Stone Relief representing a Stand-
ing Man from Akhonzada-Tepe(?)



127 青銅腕環，伝カラ・ザール発見
Bronze Bracelet from Kala-zal(?)



128 青銅鏡，伝カラ・ザール発見
Bronze Mirror from Kala-zal(?)



129—131 青銅壺 Copper Vase
カンドゥツ，ナシール図書館蔵
Ketab-Khana-Nashir. Kundu



132 石製柱礎，チャール発見
Pillar Base found at
Char

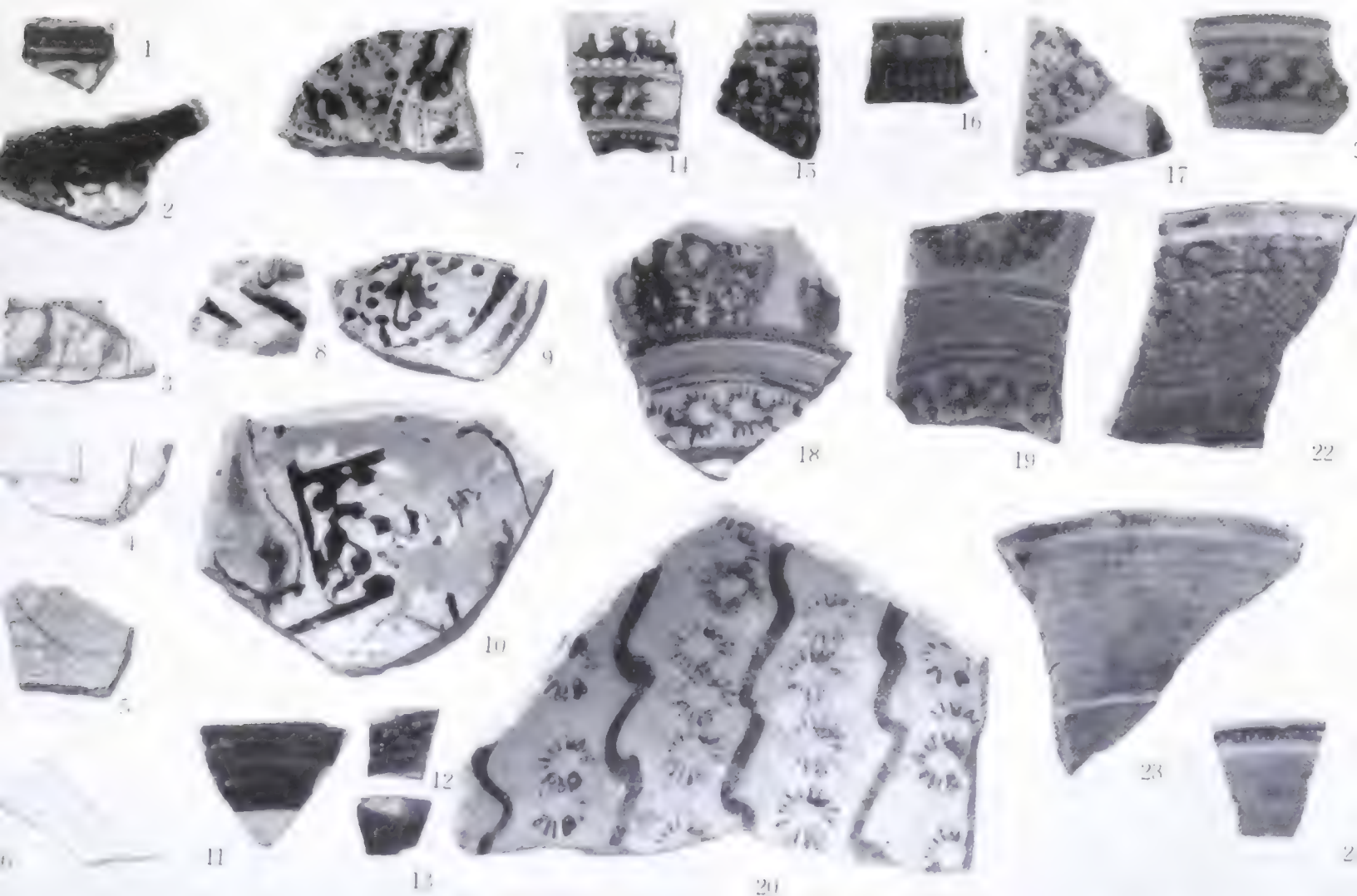


133 シャリ・バス採集土器片 Potsherds from Shar-i-Banu

134 プレション・テペ採集土器片 Potsherds from Preshon-Tepe



135 バルク採集陶器片 Potsherds from Balkh



136 アフガニスタン北部各地採集陶器片 1, 2 チェヘル・ドフクラーン 3~6 シュール・テヘ 7 カファル・カ...
8~13 ハザール・スム 14~17, 22, 24 ナスラット・テベ 18, 19, 23 ファイザバード・テベ 20 モムレック・カラ・テ
Potsherds from Northern Afghanistan: 1, 2 Chehel-Dokhtarān 3~6 Shūl-Tepe 7 Kafar-Kala-Tepe 8~13 Hazār-Sum
14~17, 22, 24 Nasrat-Tepe 18, 19, 23 Faizabad-Tepe 20 Momlek-Kala-Tepe



137 巴米揚出土の土器片 Potsherds from Bamiyān



138 ベグラム採集土器片 Potsherds from Begām



139 バルファク採集土器片 Potsherds from Barfak



140 バルファク採集石臼 Millstone from Barfak



141 シュール-テへ採集土器片 Potsherds from Shūl-T

第 三 部

アフガニスタン北部の考古学的調査

細 目

I. ハイバクよりタシュ・クルガン	41	4. チャルキ・ファラク	57
1. ハイバクのバラ・ヒッサール	41	5. ナディール・テペ	57
2. バーク・ヒンズー石窟	42	6. タクティ・ルスタム	58
3. ドラライ・ジュアングン石窟	42	7. トープ・イ・ルスタム	58
4. ハワル石窟	42	8. アシアビ・コナク	59
5. ソルボーグ石窟	42	9. チェヘル・ドフタラン	59
6. ハザール・スム石窟	43	IV. バルクよりアクチャ	59
7. カラ・カマール岩陰遺跡	44	1. プリ・イマム・ブクリよりイマム・サヒ	
8. フェローズ・ナクシール石窟	44	ブ間のテペ	59
9. その他	45	2. ゴバクリ・テペなど	60
II. タシュ・クルガンよりバルク	45	3. テペ・サラ	60
1. 古フルム	45	4. サラール・テペ	60
2. シュール・テペ	45	V. アクチャよりバルク	60
3. ウストハン・ザール	46	1. ハロバード・テペ	62
4. シャリ・バスその他	47	2. プレション・テペ	62
5. マザリ・シェリフ東郊のテペ	53	3. チシュ・テペ	65
6. マザリ・シェリフ博物館	53	4. 名称不明テペ	65
7. カファル・カラ・テペ	54	5. ナスラット・テペ	65
8. ドフタル・パジャ石窟	54	6. ファイザバード・テペ	65
III. バルク附近	56	7. モムレク・カラ・テペ	66
1. バルクの古城	56	8. シャソリム・ポチャ・テペ	66
2. バルクのバラ・ヒッサール	56	9. 名称不明テペ	67
3. テペ・ザルガラン	56	10. 名称不明テペ	67

VI. プリ・クムリよりクンドゥヅ	67	7. クンドゥヅ周辺	74
1. チャムカラ・テペ	67	VIII. イシュカミシュよりチャール	75
2. リリ・テペ	68	1. ランザジョン・モスクの礎石	75
3. バグランのテペ	70	2. クローラ・テペ	75
4. バگران北方のテペ	70	3. テモールショ・テペ	76
5. ジェル・テペ	70	4. チェシュメ・カイナル・テペほか	76
VII. クンドゥヅ付近	71	5. カシュカリ・テペ	76
1. キタブハナ・ナシール	71	6. オブラウ・テペ	76
2. クンドゥヅのバラ・ヒッサール	72	7. イシュカミシュのバラ・ヒッサール (カ	77
3. アホンザダ・テペ	72	ラ・テペ)	77
4. チェヘル・ドフタラン	73	8. イシュカミシュ西方のテペ	77
5. マルザ・ラマザン・テペ	73	IX. バルファク付近	77
6. ホジャ・ガルタン・テペ	74	1. バルファク城塞	77

は し が き

1960年における京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の隊員として、われわれはアフガニスタン北部、すなはち古代のバクトリア地方の一般調査を行った。ハイバクのサマンガン・ホテルを本拠とし、ジープを使用して各地を踏査した。調査には林、佐原のほか、カーブル大学に留学中であつた京都大学人文科学研究所助手勝藤猛氏が参加した。アフガニスタン政府は、カーブル博物館員ゴラム・サヒ Gholam Sakhi 氏を派遣して、われわれの調査を援助された。ゴラム氏は地方官憲との連絡、折衝、宿舍の手配、調査の通訳等、不案内なわれわれのために献身的協力を惜まれなかった。今回の調査は、9月4日より23日にいたる20日間にすぎなかったが、この短時間になんらかの収穫があったとすれば、ゴラム氏に負ふ所が大である。記して感謝の意を表したい。

調査地域はハイバクよりタシュ・クルガン近傍にわたるフルム河流域、バルクよりアクチェにいたる

バンディ・アミール河流域、クンドゥヅを中心とするクンドゥヅ河流域とイシュカミシュ盆地 (Fig. 142) の3つにわかれる。これらの遺跡を、旅行の途次とあはせて記述したい。

また、イスラム時代以前の土器は、上記の3地域からそれぞれ代表的な遺跡としてプレション・テペ¹⁾、シャリ・バヌ²⁾、ホジャ・ガルタン・テペ³⁾の3つをえらび、その測図と写真をしめして概観し、全体の理解に資したいと思ふ。

イスラム時代の釉陶については、つぎのごとく述べる。すなはち、採集した釉陶には数形式があるので、サマルカンド式以外のものについては、バーミヤーン (Fig. 114)、ハザール・スム (p. 43, 44)、ファイザバード・テペ (p. 65)、シュール・テペ (p. 45) で採集した陶片を標準資料として、これらをそれぞれの形式名としてもちひたい。

1) 本書 pp. 62~65. 2) 本書 pp. 47~33 3) 本書 p. 7

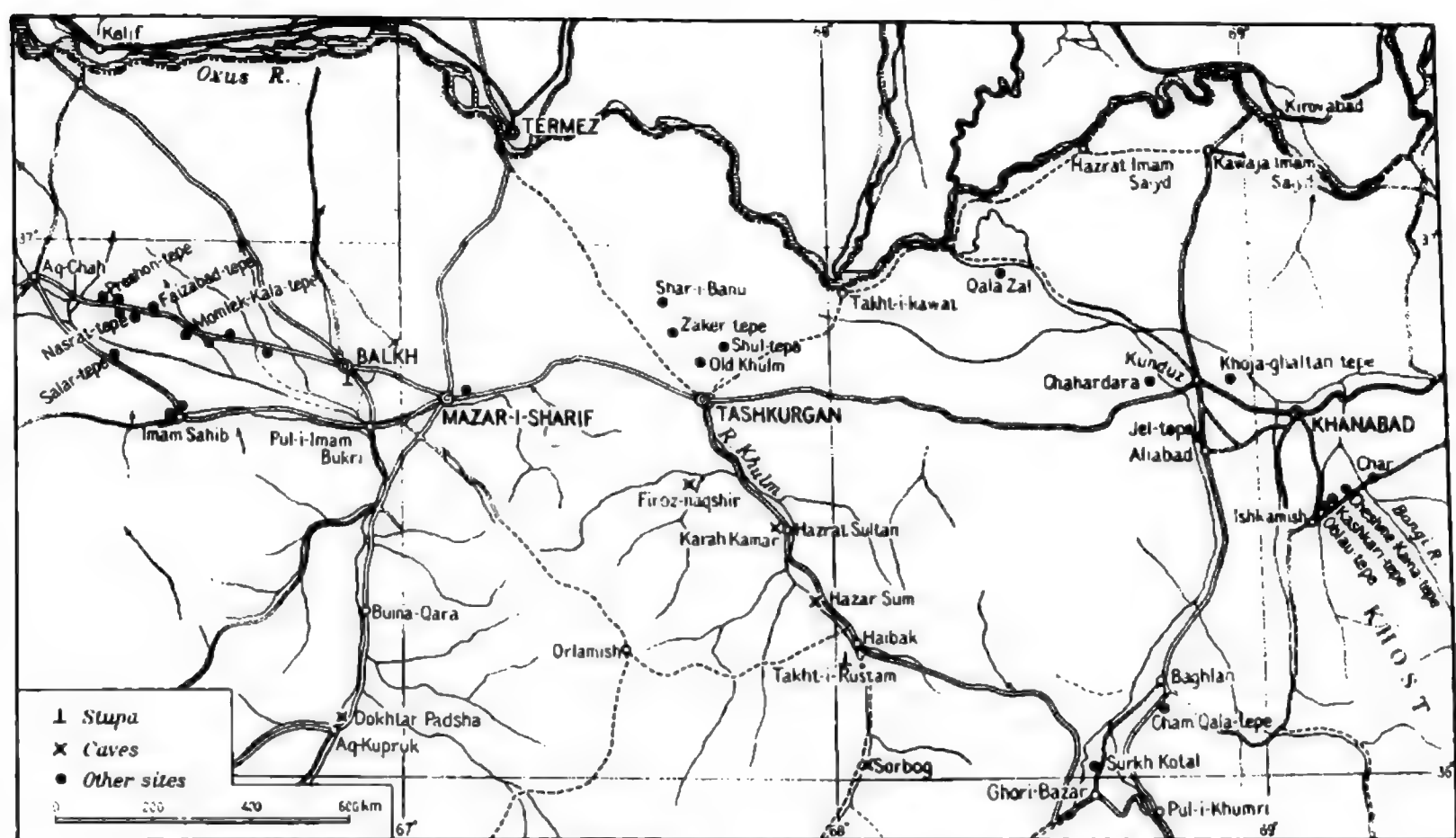


Fig. 142. アフガニスタン北部遺跡図 Archaeological Sites in Northern Afghanistan

I ハイバクよりタシュクルガン

9月4日より8日までハイバクに滞在し、附近遺跡の一般調査を行った。テペはみあたらず、洞窟遺跡が多い。フーシェ A. Foucher のハイバク石窟調査¹⁾記には、附近に同様な石窟のあることを記してゐるが、具体的に地名をあげてゐない。ハイバクの茶店で住民にたづね、適当な案内人をえて現地(Fig. 143)におもむき調査した。

1. ハイバクのバラ・ヒッサール Bala-Hissār

—9月4日—

ハイバクよりプリ・クムリにいたる街道を南行、右に折れて村をぬけると、左手に岩の丘がみえるのがそれ(Fig. 28)である。南北約150m、東西約50m、高さ約30m東南の崖したをハイバク河がめぐり、そこには壘城があり、一種の要塞になってゐる。丘の頂部には泥レンガの壁がのこってゐる。

採集した陶片にはファイザバード式の3種類のく

みあはせ、すなはち、三彩花文陶、青釉陶、飴釉陶がみつめられるほか、染附を模した陶片などがある。またトンボ玉1個を採集した。

しかし頂上にある建物の遺構は、その保存状態からみて、ずっと新しいと思はれる。バーンズ A. Burnesが1932年、こゝを通った時、ハイバクを支配してゐた首長バーバ・ベグの居城を望見したと記す

1) A. Foucher ; *La Vieille Route de l'Inde* (MDAFA, Vol. 1) Vol. 1, Paris 1942, p. 129

2) A. Burnes ; *Travels into Bokhara*. London 1834, p. 203

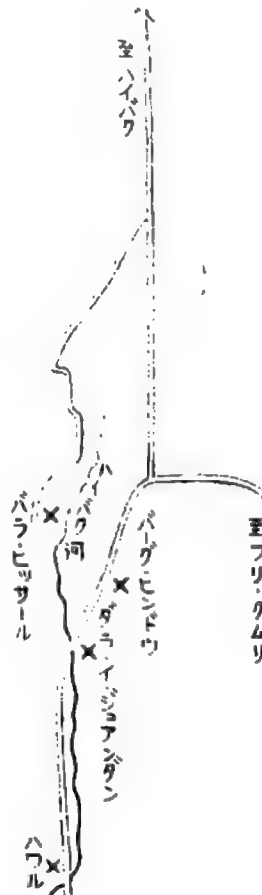


Fig. 143. ハイバク南部遺跡図
Archaeological Sites South to Haibak

が、それであらう。

2. バグ・ヒンズー Bagh-Hindu 石窟

— 9月4日 —

バラ・ヒッサールより東方を望むと、ハイバク盆地の東端をかぎる崖があり、崖の中腹に小石窟 (Figs. 144, 27) がみえる。サマンガン・ホテルより街道を南行し、約 4 km の所でプリ・フムリにいたる街道は直角に左折する。こゝを反対に右に折れて約 5~600 m 行き、こゝから農園に入り、石窟のある崖に到達するのである。石窟は地上 5 m ほどのところに口を開いてゐる。年代を判定する方法はない。

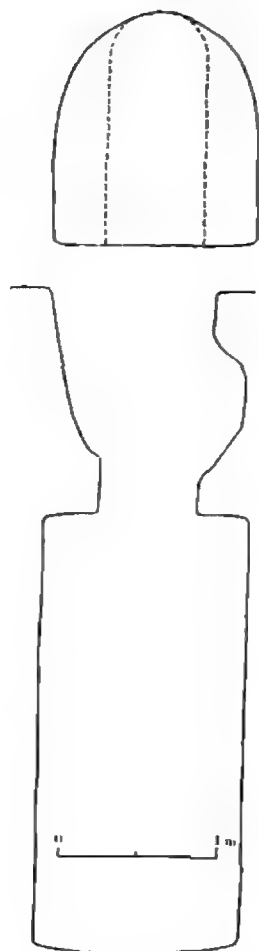


Fig. 144. バグ・ヒンズー石窟
Bagh-Hindu Cave

3. ドラライ・ジュアンダン

Drara-i-Juandan 石窟

— 9月4日 —

バグ・ヒンズーから、さらに

ジープで 5~6 分行くと、道がさきの崖の続きの真下である。崖の中腹、地面から約 7 m のところに石窟 (Fig. 29) がある。崖が切りたてゐて、入ってみることはできなかったが、双眼鏡でみた所では、形式はバグ・ヒンズーのものと同様で、入口の幅は約 1 m、高さ約 1.5 m、奥行約 2 m とみられる。

4. ハワル Khawal 石窟

— 9月4日 —

さきのプリ・フムリへの道の分岐点より右に折れ、河ぞひに南方へ約 5 km いった所、道の右側の崖 (Fig. 31) にある。道の上方 3 m ばかりの所に、南に向かって高くなる岩棚があり、上面は泥と石でテラコッタ状に固められてゐる。この岩棚の中央より左、岩

棚から約 4 m 上方、垂直の岩壁に洞穴がある。前面に泥レンガで壁をつくり、うへにアーチ状の入口がある。その奥に幅 1 m 強の洞穴の入口がひらく。のぞくことができなかったので、内部のことはわからない。年代を判定する手がかりもない。

5. ソルボーグ Sorbög 石窟 — 9月8日 —

ハワルに行くのと同じ道をさらに南へゆく。ハイバクのサマンガン・ホテルより約 30 km。ハイバク河にそった道はジープがとられる。ソルボーグの村は、谷間のやゝ開けたところ、幅数百 m、長さは河ぞひに数 km にわたる。村のてまへ、河の東の山麓に岩をうがった石窟群が二つある (Figs. 30, 32)。下手よりかぞへて第二群のみを実査した。道路が西岸をはしるため、こゝに達するには河を徒渉せねばならない。石窟の形式は Fig. 145 にしめすごとく、バグ・ヒンズー、ドラライ・ジュアンダンと同様である。南より第 1~5 洞と名づけた。第 2 洞は奥壁しかのこってゐない。第 5 洞入口の左手には、岩を掘って水槽が二つ作られてゐる。

こゝより南へ、村をぬけてゆくと、村のなかほど、東の山の中腹に、同様な小窟群 (Fig. 33) がみえる。

村の南端ちかく、村長宅を通りこして少しゆくと、

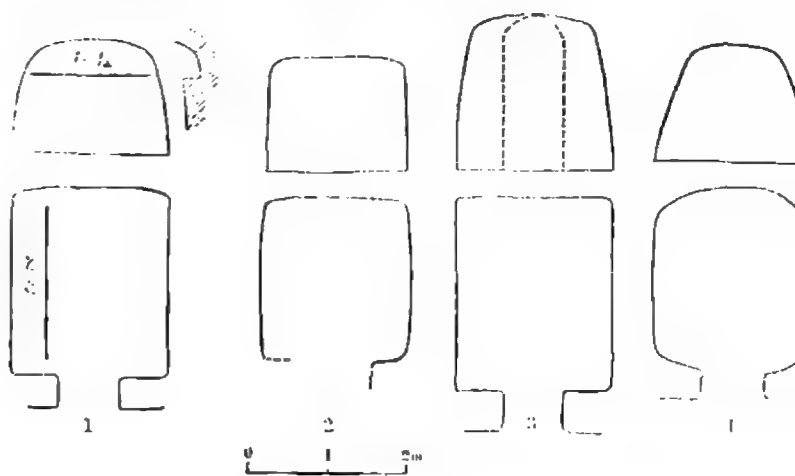


Fig. 145. ソルボーグ石窟 Sorbög Caves

道のすぐ東側の崖に自然の石窟と思はれるものが四つあり、最も高いところにあるひとつは、入口に泥レンガで壁や入口をつくること、ハワルのものと同

である (Fig. 34)。のぼるには長い梯子を要するた
め、検分することができなかった。

6. ハザール・スム Hazār-Sum 石窟 — 9月6日—
ハイバクよりタシュ・クルガンに通ずる街道を北
に14~5km いったあたり、道が丘陵の裾にそって蛇
行してゐる。橋をひとつ渡ったすぐさきを、丘の裾
どひに西に折れる。特別に道はなく、たゞ家畜の踏み
跡とをゆく。500mばかりで遺跡に達する (Fig. 35)。
1)
J. Hackin はこの遺跡について「イエート C.
Yate 大佐、ついでフーシェ A. Foucher は、ハイ
バクのはかに二群の石窟に注意してゐる。『谷の北
端にある丘のなかにある』ハザール・スム (トルコ語
Ming-öi にあたり、千の石窟) および西南に位するス

ミ・サンギ Sum-i-sangi (石の石窟) である。タルボッ
ト Talbot 大尉はハザール・スムを訪れ (1885年)、わ
れわれも1924年の6月にいってみた。この大きな一
群の石窟は、残念ながらなんら興味ないものである。
現在のこつてゐる若干の壁面の痕跡は、粗いシッ
クヒの上塗りのうへに描かれた幾何学的な文様にかぎ
られる」と述べてゐる。石窟は表面の平坦な丘が侵
蝕された地溝の、高さ4~5mの崖の中腹に、あひなら
んで無数に掘りこまれてゐる。丘の表面に近い所
は、湖沼の底に堆積した高師小僧の固まつた堅い層
が水平にひろがり、石窟の掘られてゐるのはその下
のやゝ軟い地層である。石窟は土や岩塊が落ちこん
でふさがったものが多い。数が多いのと時間不足の
ため、全部にわたってしらべることができなかった。

見取図にしめすごとく、単室のものから、
数室連結したものまで各種あるが (Figs.
146, 35~39)、室の平面、天井の形などは
ハイバクの石窟に共通する。石窟の内壁
は、泥で下塗りしたうへに、うすくシッ
クヒの上塗りをし、随所に龜をつくり、
図にしめすごとく龜や通路の周縁に低い
レリーフの単純な装飾をつけ、朱で彩色
してゐる。鳥ないし紋章的な意匠を彩色
でぬったもの (Fig. 147) もある。時代を
推測する手掛りはないが、石窟の形式か
らみて、ハイバクのものに近い時期であ
らうか。

洞外の平地で採集した土器片には、ブ
レション C 式のものが多い。また釉のか
ゝったものとしては、白地に緑と濃褐色
の彩文のあるもの (Fig. 136-8~10) と緑
釉陶 (Fig. 136-11~13) とが多い。両者は
質も一致し、また前者の緑と後者の緑の

1) J. Hackin ; *L'Oeuvre de la Délégation
Archéologique Française en Afghanistan.*
Tokyo 1933, p. 57.

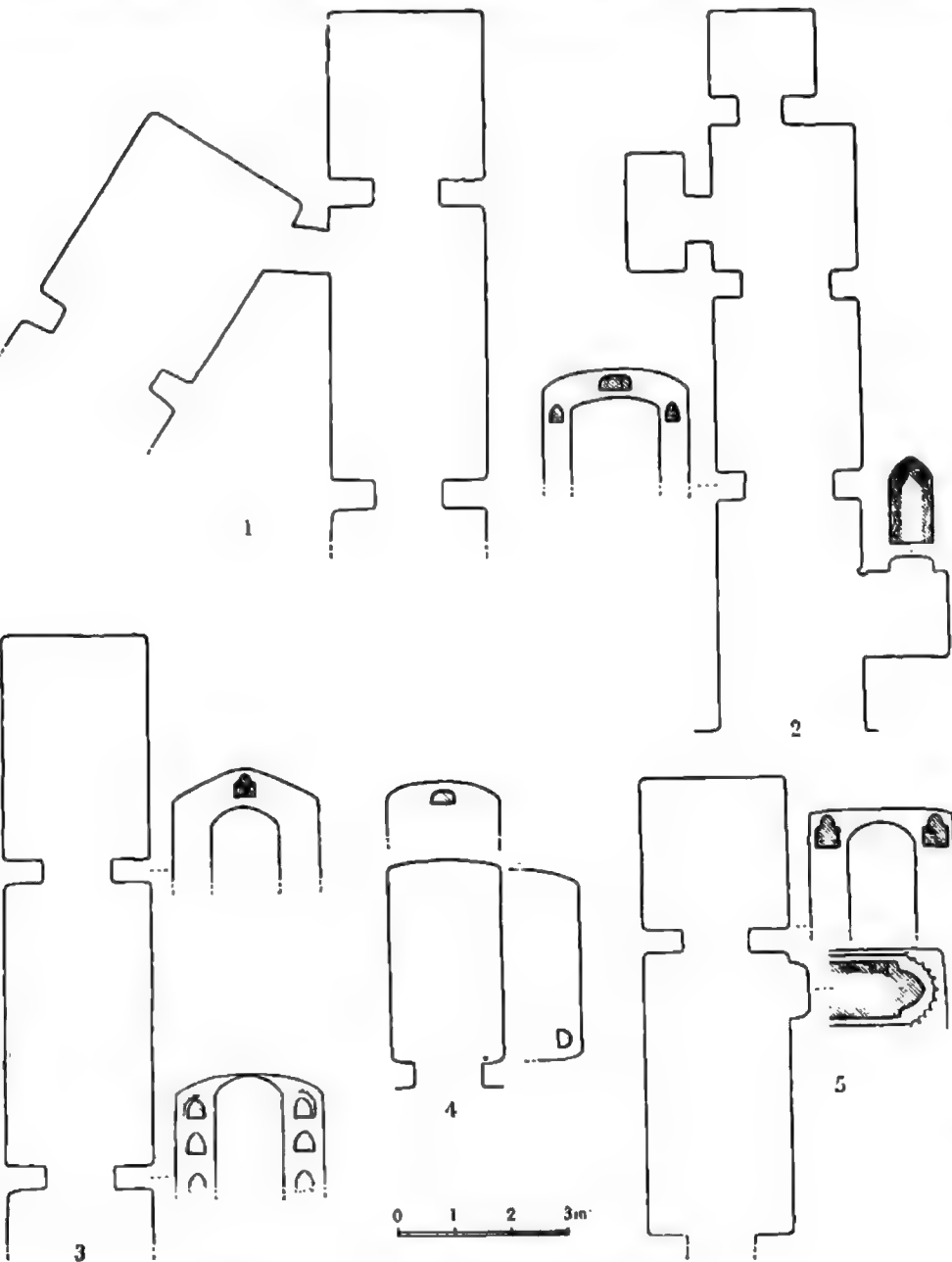


Fig. 146. ハザール・スム石窟 Hazār-Sum Caves

色も一致してゐる。そしてこの両者はハザール・スム以外の遺跡でも一緒にみいだされてゐるので、同一の形式にぞくするものと考へられる。ハザール・スムは、われわれの調査した遺跡のうち、この種の釉陶がもっとも豊富にみられる遺跡である。

そこでそれぞれをハザール・スム式三彩陶、ハザール・スム式緑釉陶とよぶことにする。

ハザール・スムには、ファイザバード式の釉陶がほとんどみられない。また、ファイザバード式を採集した遺跡にはナスラッ

ト・テペ、モムレック・カラ・テペをはじめとして、ハザール・スム式釉陶をまったくみないものが多い。

このやうな事実、ハザール・スム式とファイザバード式の時代差を推測させる。そして、ハザール・スム式の三彩の色のかみあはせが、バーミヤーン式三彩刺文陶のそれと一致することは、ハザール・スム式がよりふるく、ファイザバード式がよりあたらしいといふ可能性を考へさせる。

ハザール・スムでは、このほか若干のプレジョンAのちかい土器、サマルカンド式陶片、石製容器片などを採集した。

7. カラ・カマール Karah-Kamār 岩陰遺跡

—9月7日—

ハイバクの西北約30km、タシュ・クルガンに到る街道ぞひのハズラト・スルタン Hazrat-Sultan の村にある。街道の西側、村のすぐ北、カラ・カマール山の麓に岩陰遺跡(Fig. 40)があり、クーン C. S. Coon が¹⁾発掘調査し、旧石器を発見した。

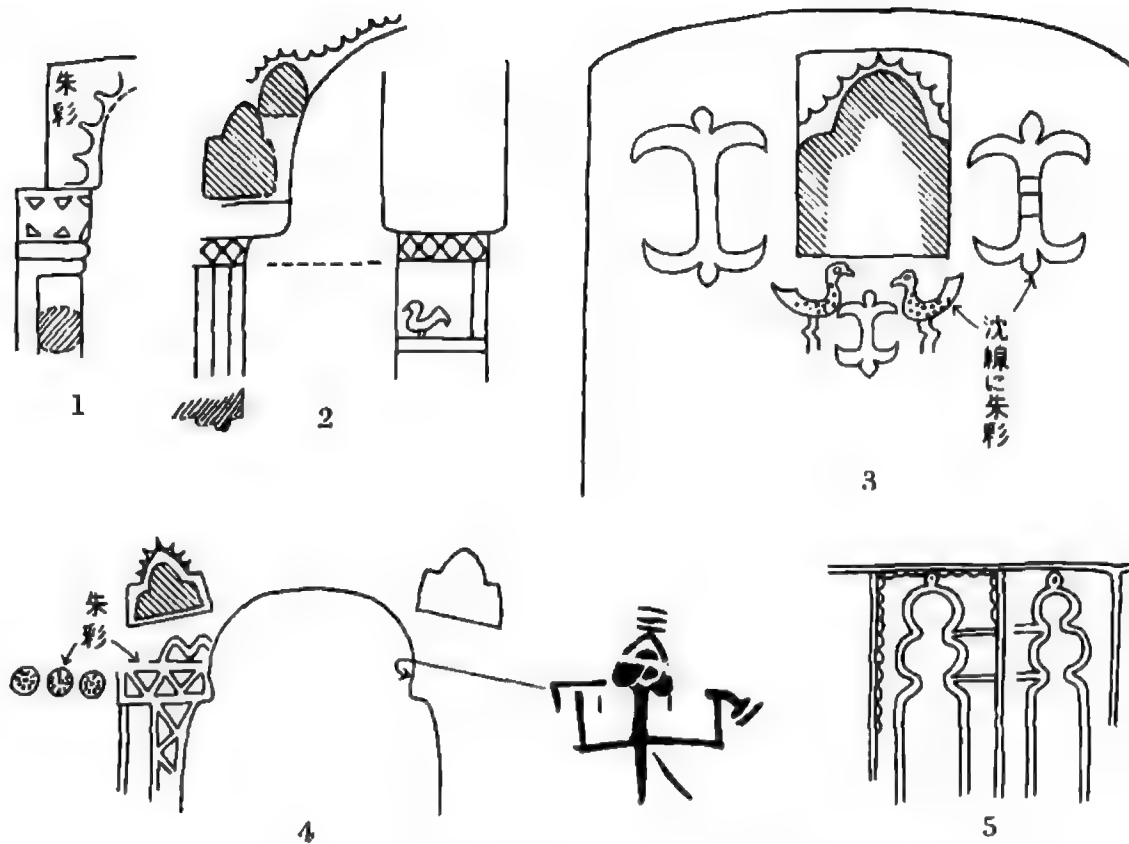


Fig. 147. ハザール・スム石窟装飾 Decorations of Hazār-Sum Caves

8. フェローズ・ナクシール Ferōz-Naqshīr 石窟

—9月15日—

タシュ・クルガンより南に約20kmの所を西にたれ、ほゞ東西にはしる山の南麓にそって約8kmの所とフェローズ・ナクシールの村がある。マザリ・シェリフの博物館で、こゝに彫刻があると聞いて訪れたのであるが、それらしきものはない様子であった。こゝより南に山あひを1kmばかり行つたところ、南側の石灰岩(?)の山腹に案内された。地上より約15mの所にある平面円形の小石窟(Figs. 148, 41)がある。付近にも、岩が自然に侵蝕されてできた小石窟が多数あったが、夕暮になったため調査することができなかった。

これらの石窟より最近放りだされたと思はれる土器が崖したに堆積し、なかに土器片が混ってゐた。なにかいスリップのあるもの、外方に突出するに縁をもち、その上面にふとい溝をめぐらした特色ある大形土器などがあった。

1) C. S. Coon; *Seven Caves*. New York 1957, p. 235.
C. S. Coon and H. W. Coulter; *Excavation of the Kamar Rock Shelter* (Afghanistan, Vol. 8, No. 1) Kabul 1955.

がある。またプレションB式がある。プレションB式としては、めづらしく混入の白色の石の脱落がすくない。なかには刻目文、波状文をつけた破片もある。ほかに釉陶片として青釉のものがある。

9. その他
石窟をがあるときいていて、自然の石窟であったものはつぎの二つである。(a) カフタル・ハナ Kaftar-Khana。

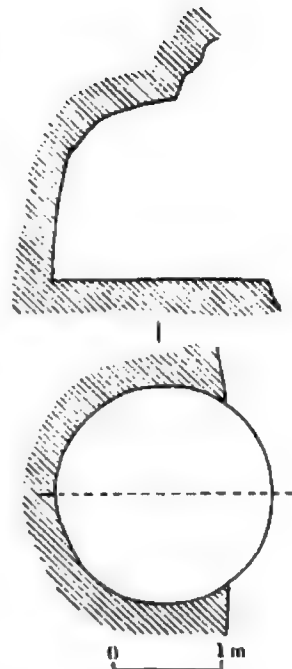


Fig. 148. フェローズ・ナクシール石窟
Ferôz-Naqshîr Caves

ハイバク部落西方の山塊の北西麓を福川ぞひに西に入り、サマンガン・ホテルより約10kmでさらに支谷にはいる。すこしゆくと左手の崖の中腹に石窟がある。入口は小さいが、なかはひじょうにふかい。人工のあとはない。(b) ゴール・ダラ Gôr-dara。ハイバクよりタシュ・クルガンに通ずる街道を、ハイバクより北に約8kmいったあたりを西北に折れ、丘陵地を約15kmゆくと、道が丘陵にえぐられた深い谷につきあたる。谷の底に深い洞穴があり、狭い口がひらいてゐる。付近の丘陵にはフリントの石塊が大量に散布し、バルブをもつものもあり、人工の疑ひのあるものがある。カラ・カマールとの関連で将来の精査を期したい。

II タシュ・クルガンよりバルク

遺跡としてはテペが多い。テペはタシュ・クルガン北方に散在し、マザリ・シェリフ付近にも若干ある。しかし、バルク付近までの途中にはまれである。ハイバクから北上してタンギ・タシュ・クルガンの巨大な岩の裂け目(Fig. 149)を通りぬけると、タシュ・クルガンの町である。こゝから北は一望千里の平原がひらけてゐる。

1. 古フルム Khulm-i-Kohna — 9月15日—
タシュ・クルガンのバザールをぬけ、北にむかふ路をとり、墓地をとほりこすと、やがて畑のなかにくづれのかった廃墟(Fig. 42)がある。こゝが古クルムと¹⁾よばれるところである。イエート A.C. Yateによるといまから約200年前、アーマッド・シャー・アブダリがいまのタシュ・クルガンを建設し、こゝを破壊したのだといふ。

2. シュール・テペ Shûl-Tepe — 9月9日—
タシュ・クルガンより北に約10km、古フルムをぬ

けてゆくと、右前方に大きなテペ(Figs. 43, 44)がみえてくる。高さ約10m、南北約400m、東西約300m、西側を底辺とする不規則な梯形をなす。東南隅に若干レンガの堆積があるのみで、建築物は陵夷し、上面は平坦である。陶片が多数散乱してゐる。

採集した陶片には、サマルカンド式の白地多彩(褐、濃褐、鶯)陶、バーミヤーン式三彩(白、緑、濃褐)²⁾刻文陶、ハザール・スム式三彩(白、緑、濃褐)陶、同緑釉陶のほか、われわれの採集品のなかにはシュール・テペのみにみられる釉陶があった。それは三上次男氏がセルジュク時代(11~12世紀)といはれるもので、刻文のうへ、あるひはじかに黒色で線紋をふかき、これにあざやかな青釉ないし透明釉をかけたもの

1) C. E. Yate ; *Northern Afghanistan, or Letters from Afghanistan Boundary Commission*. London 1888. p. 317.

2) L. Dupree ; *Shamshir Ghar: Historic Cave Site, Kandahar Province, Afghanistan* (Anthropological Papers of the American Museum of Natural History Vol. 46, Part 2) New York 1958. この分類の Graffito I-IV (初期イスラムに相当する)。



Fig. 149. クシュ・クルガン山峽 Gorge of Tash-Kurgan

(Fig. 136-3~5)である。白磁を模したとおもはれる白釉刻文陶(Fig. 136-6)もまたシュール・テペ以外にはみなかった。釉のないものには、プレジョンCが多い。ほかにやゝやはらかい質で、スタンプで鳥や花弁文をつけた初期イスラム土器(Fig. 114-1,2)、白色の上器片でバグラムのスタンプ文と同様のもの(Fig. 141-3)があった。

ほかに特殊なものとして、非常に堅く焼かれた水型の上器(Fig. 150-2)がある。底のとがってゐると、口のきはめて小さいことが特徴である。しかも、この厚い底や小さい口が、往々たてに割れてゐる。これは、この種の土器として尋常な割れ方ではない。マザリ・シェリフ博物館には完形品(p.54, Fig. 150-2)があり、同博物館のアリ・ハチェ・モハマッド・サリム Albach Mohamad Salim 氏のいふところでは、ガズニー朝マフムード Mahmud 時代(998--1030)の手榴弾だといふことであつたが、その抛所をあきらか

にしない。とはいへ、この異常な割れ方は、なかばつめた火薬の爆発によるものとするのが、もっとも妥当と思はれる。この細い口に導火線を通したものであらう。

同種類の土器は、バルクの試掘においては、テペ・ザルガランのトレンチ4, E1でブレ・モンゴールの層から、バルク新市の試掘坑では年代不明層から、ラ・ヒッサールの試掘坑ではチムール期の層から¹⁾掘されてゐる。

これに関連して考へられるのは、中国東北で焼かれた黒釉陶器の一種(Fig. 150-1)である。これは、とげをつけた球形のもので、中心の大孔のほか、わきに小さい孔がある。こゝに導火線をいれて、やはり手榴弾のやうにしてつかつたといふ。推定年代は1115--1234である。宋の曾公亮等の『武経総要』巻12には蒺藜火毬といはれるものがある。とげのついた手榴弾である。これらの点からシュール・テペの尖底土器が火薬をつめて投げられたものである点に首肯できる。たゞマフムード時代では、すこし古過ぎるやうに思はれる。中国でいへば金、元時代、12、3世紀のものである。シュール・テペはジン・カス・カーンに破壊されたと伝へられてゐる。

なほ同様な陶片はテペ・ザルガラン、ガズニー近郊、パキスタンのシンド州ブラーフミナバード(Fig. 158-3)で採集した。

上器以外のものとしては、うすい青、ないし緑色のガラス容器片と青銅器片を採集した。

3. ウストハン・ザール Ustkhan-zār

—9月14日—

マザリ・シェリフ博物館蔵の彩陶片(Fig. 92, 151)が、フルム付近の、ウストハン・ザールからでたといふので、これをたづねてみた。クシュ・クルガンを経て北にむかふ。道で出あつた人ごとにきいたが、

1) J. C. Gardin ; *Céramique de Bactre* (MDAFA, Vol. 15) Paris 1957, p. 34, p. 117.

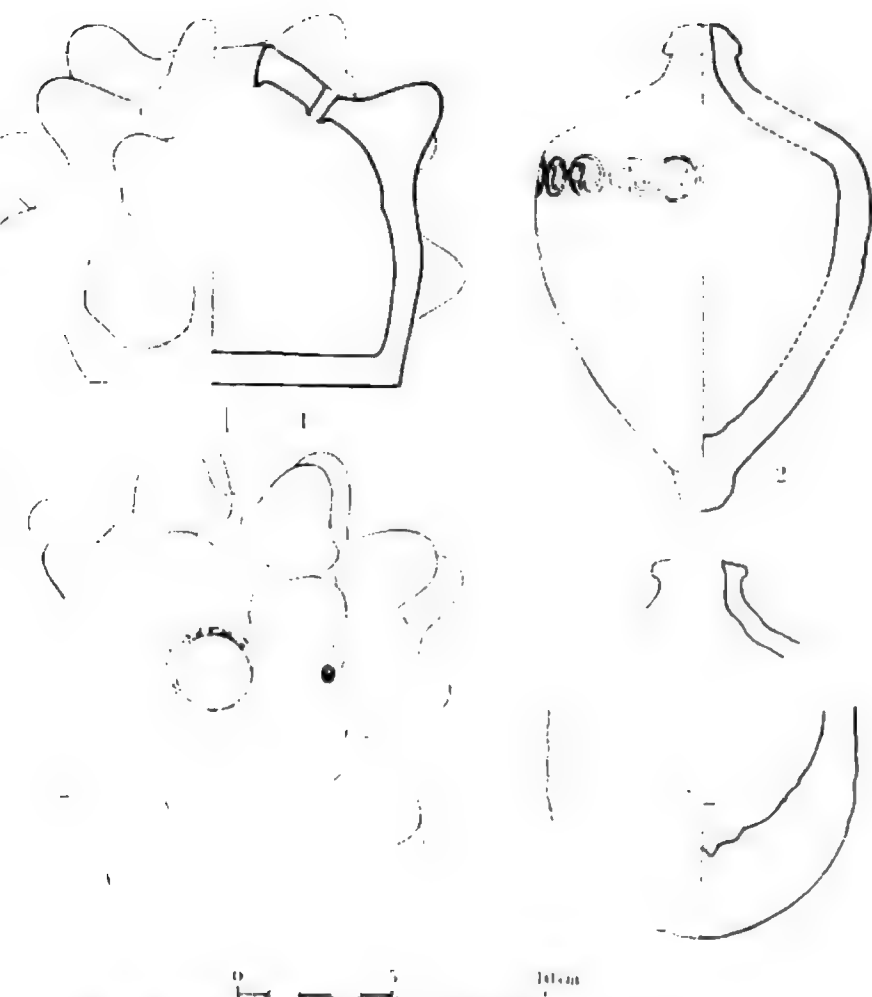


Fig. 150. 陶製手榴弾 1, 中国撫順 2, シュール-テペ (アフガニスタン) 3, ブラフミナバード (パキスタン)

Pottery Grenade 1, Wu-hsün, China 2, Shul-Tepe, Afghanistan 3, Brahminabad, Pakistan

っきりしない。農民がジープに乗りこんできて案内してくれたが、かれのおしへたところはタシュ・クルガンの東北約 20km, 平坦な荒蕪地で、テベもみえず、比較的近代の小さい家の廃墟が 1 つあるのみで目的の彩陶は発見できなかった。

4. シャリ・バス Shar-i-Banu その他 — 9月15日 —
タシュ・クルガンの北、シュール-テペより北々西にむかふと、タシュ・クルガンから約 10km のところに 10 個ちかいテペの一群があり、さらに約 3.5km すゝむと畑がをはり、荒蕪地にでる。砂が、低い灌木の根に吹きよせられて、点々と小山をつくってゐる。このあたりをシオ-レグ Sio-reg といふ。

そこからさらにすゝみ、タシュ・クルガンから 20 km ばかりの所にでると、土器が一面に散布し、数 km 四方にわたってゐる。ひくい土塁あと、それからテ

へがかたまつた所 (Figs. 45, 46) がある。これがシャリ・バスである。1938 年、39 年にフランス考古学調査隊の アッカン J. Hackin が短期間の試掘をおこなつて、若干の建築物を掘り出した。土器、土偶のほか、めばしい遺物はでなかったが、上層からクシャーナの、下層からエウティデモスおよびヘリオクレスの古銭が出土してゐる。¹⁾ われわれも多数の土器片のほか、四足獣の土偶、自然石を利用した磨石、指環等の青銅器片を採集した。

なほ最初に記したタシュ・クルガンの北約 10 km の所にある一群のテペのなかに、カルル J. Carl が 1938 年に 2 週間試掘をおこなつたザケル-テペ Zaker-Tepe があると思はれるが、ちかよつてみなかった。カルルの試掘によると、地層は 4 層あり、最上層あたりからクシャーナ、クシャノ・ササンの銅銭が若干でたほか、土器、紡錘車、銅鏝などが出土したといふ。

シャリ・バスの土器は、質やしあげにかなりの変化があるから、さらにいくつかの形式にわかれる可能性がある。しかし、明確な細別はむづかしい。

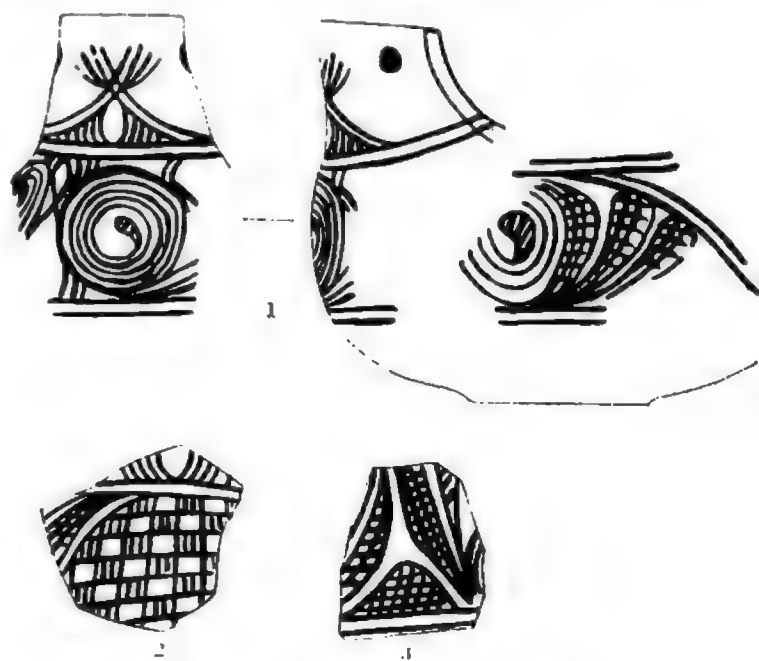


Fig. 151. ウストハン・ザール彩陶片
Painted Pottery from Ustkhun-zār

1) J. Carl ; *Sondages au Zaker-Tépe* (MDAFA, Vol. 8) Paris 1959, pp. 59~81.

2) J. Carl ; *Op. cit.*

細別を困難にする大きな原因の1つは、シャリ・バスの土器が、いちじるしく風蝕をうけてゐることである。風蝕によって、胎土中の砂粒が土器表面にあらはれて目立つやうになり、さらに風蝕がすすむと、その砂粒が脱落して小さなくぼみとなる。風蝕の程度は、もちろん土器片のひとつひとつでちがってゐる。だからスリップの有無、精製と粗製とを区別をすることはむづかしい。

シャリ・バスの土器の大部分は、シャリ・バスA式

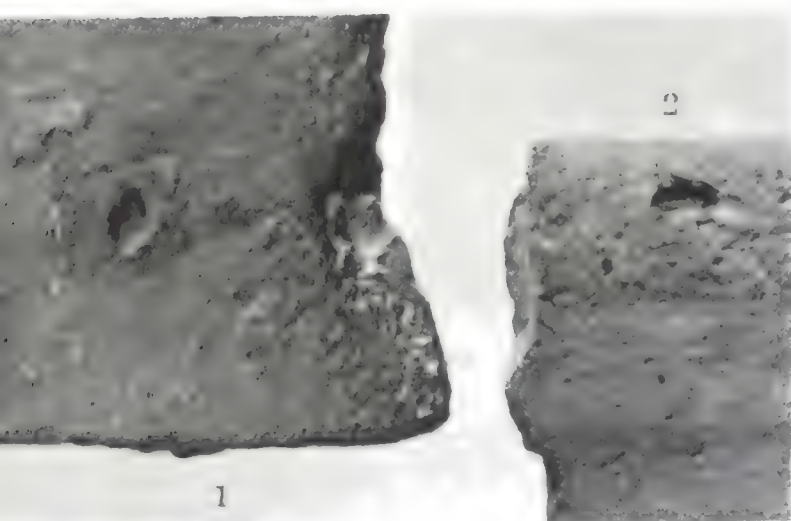


Fig. 152. 穀類の圧痕 1, シャリ・バス 2, プレション・テベ
Impression of Cereal 1, Shār-i-Banu 2, Preshon-Tepe

の名で一括するものによってしめられてゐる。しかし、わづかながら、のちにあげるプレション・テベの土器と一致する土器もみいだされる。プレションB式、プレションC式に対応する土器をそれぞれシャリ・バスB式、同C式とよぶ。

[A] シャリ・バスA式(Figs. 153-1~30; 154-1~6, 10~44, 47~49; 133-1~3, 5~28)

淡褐色ないし赤褐色の土器が多い。砂粒をふくまない良質のものと、かなりの砂粒をふくむものとがある。スリップは赤いもの(Figs. 133-1~3)が多い。ほかに黒色(Figs. 133-6)と暗褐色(Fig. 133-20)のものがある。しかし、同一破片のスリップで、赤~暗褐色、あるひは、暗褐~黒色と変化してゐるものがあり、同質のものが焼成の状況によって、ことなつたしあがりとなつて、あらはれたものとみとめられる。

壺a (Figs. 153-5~13, 19; 133-1~3) 陶車製の比較的小型の壺で、はゞまっすぐにたつ口縁部をつけてゐる。すべて良質精製で、スリップがある。

壺b (Figs. 153-14~17, 21, 22, 26; 133-8, 13, 17) つばまった頸から口縁がそとにそるもの。やゝ粗質のかたいやきものが多い。粘土紐をかさねてつくられてゐる。このうちの1例(Figs. 153-14; 133-17)は外面に穀類の圧痕(Fig. 152-1)をとどめてゐる。

壺c (Figs. 153-18, 23~25, 27; 133-11, 12) 比較ふとい頸がつき、口端の下部が下にわづかに突出する。やゝ粗質のものが多い。ことに、Figs. 153-23, 27; 133-7は粗質で、色も白い。つくりのやゝとなるFigs. 153-25; 133-19は、良質でスリップをとどめてゐる。これはあるひは鉢かもしれない。Cには把手のついたものがある(Figs. 153-2; 133-7)。こゝで把手についてまとめて記述しよう。

把手は非常に多い。口縁からすぐ把手がつくもの(Figs. 153-1, 4; 133-6, 7)と、壺の頸部と胴部とをすぶもの(Figs. 153-3; 133-5)とがある。把手のつくりは特徴的で、陶車でひねってつくった輪をちがへて把手にしあげたものらしい。保存良好のものは全面にはそい平行線がはしり、その外側に、2, 3のあさい溝をつけたものが多い。この特徴をもつ把手を以下有溝把手とよぶ。

鉢a 良質でスリップをとどめるものが多い。径3cmをこえる大形のものでは、外にひらくもの(Figs. 154-1~6; 133-21, 28)のほか、内曲するもの(Figs. 154-10, 11)がある。鉢のひとつには内面に記号がある(Figs. 154-1; 155-3)。

鉢b 単純な、あさい器形で、円弧にちかいカーブをふがくもの(Figs. 154-14, 15; 133-17)と、口縁がちかくで内曲するもの(Fig. 154-17, 18)とがある。

鉢c (Figs. 154-12, 13; 133-15, 16) 下半が円錐形をなし、上半が直立するものである。良質で、赤いし暗褐色のスリップをかけてゐる。

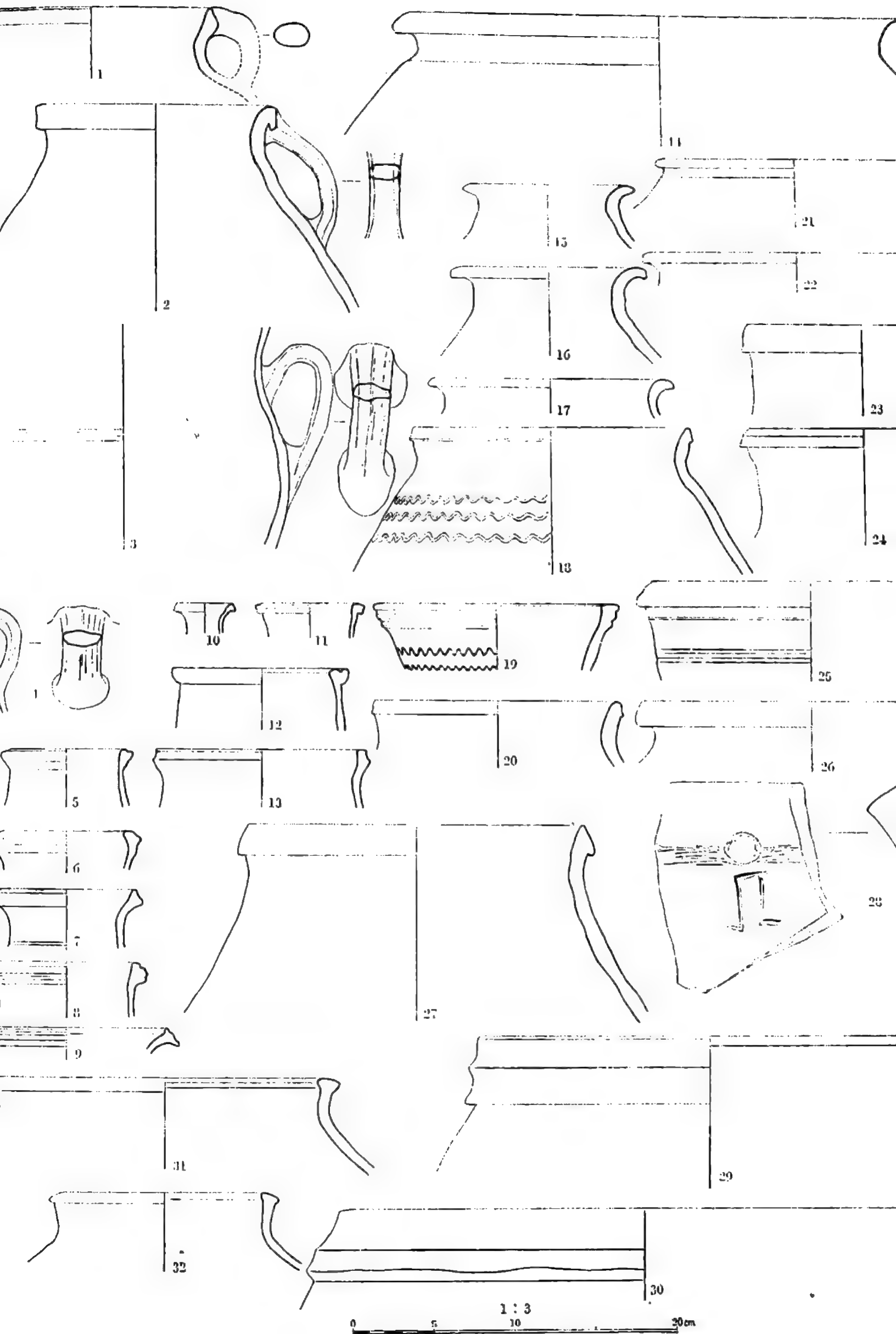


Fig. 153. シャリ-バナ土器 (1) Shar-i-Banu Pottery (1)



Fig. 154. シャリ-バナ土器 (2) Shār-i-Banu Pottery (2)

鉢d (Figs. 154-16, 22, 23) 大きくひろく口縁をもつが、Fig. 154-21, 23 は、はたして鉢とかんがへてよいかわからない。鉢には、ほかに黒いスリップのある細片(Figs. 153-20, 21)がある。

皿(Figs. 153-19 ; 133-20) 黒から暗褐色のスリップがかゝってゐる良質の土器。底はすどくけづつにあげてゐる。

台付杯の台部(Figs. 154-25~36 ; 133-23~26) 複雑なものから簡単なものまでいろいろあり、良質なものが多いが、スリップをとどめるものはすくなく、このほかやゝ粗質のものもある。

いままでうへにあげた器形のうち、鉢cのほかはこの台をもつにふさはしい器形はみあたらず、カルル Carl の復原図(Fig. 157)に対応する、口径10cm内外のものは他にみられない。

底には円筒状に、ほそく突出した特殊なもの(Figs. 154-37 ; 133-22)があるほか、小さな底をもつもの(Fig. 154-38~40)、平底、わづかにあげ底となったもの、高台つきのものなどの各種がある。糸切痕をとどめたものは、むしろ例外的である。土器の上半をあげたのち、陶車のうへにさかさにのせて回転し、へらで底をあげたものが大部分である。Fig. 153-55は、内面に風蝕をあまりうけてゐない。白彩のうへに、藍色で梅鉢文様をかいたものである。シャリ・バスで採集したほとんど唯一のイスラム陶で

ある。外面は、風蝕のためざらざらの面となり、淡褐色の地色をしめしてゐる。この一片をみても、うへに一括した土器のなかには、後代のものゝふくまれてゐる可能性を否定できない。

大形土器(Figs. 153-28~30 ; 133-27)うへにまがる口縁の外側に、幅ひろい帯状の突出をつけた器形である。記号や文字をつけたものがある(Figs. 153-28 ; 155-5, 6)。

シャリ・バスA式の装飾としては、鉢aや皿bにへらがき直線文、波状文、点列文をつけたものがある(Figs. 153-19 ; 154-2, 3 ; 155-1 ; 133-10, 12, 18, 28)。これらの文様とともに、スタンプによる樹木文様をあはせもちひたもの(Fig. 155-2)もある。これらの土器は概して良質である。ほかに型押によって菱形の文様をつけた特殊な破片が1つある(Fig. 155-4)。

シャリ・バスA式は、純粹単一の土器形式とはいへないけれども、そのなかには、台付杯や、樹木文様のスタンプ文のやうに、バگرام遺跡の土器と比較できる要素がみとめられる。ギルシュマンは、バگرام遺跡の年代を三つにわけ、バگرام I は前2世紀~後2世紀中頃、バگرام II は後2世紀中頃~3世紀中頃、バگرام III は、3世紀中頃~4世紀後半頃までとしてゐる。黒色の彩文ある台付杯の盛行するのはバگرام II であり、樹木文様ほかのスタンプ文はバگرام III でもっとも発達してゐる。われわれが

バگرام遺跡で採集した土器 (Figs. 138, 156) にも、それぞれに相当するものとおもはれるものがあり、バگرام II の台付杯もある。

シャリ・バスの台付杯をカルルが復原したところ(Fig. 157)では、バگرامの台付杯とだいぶ形が

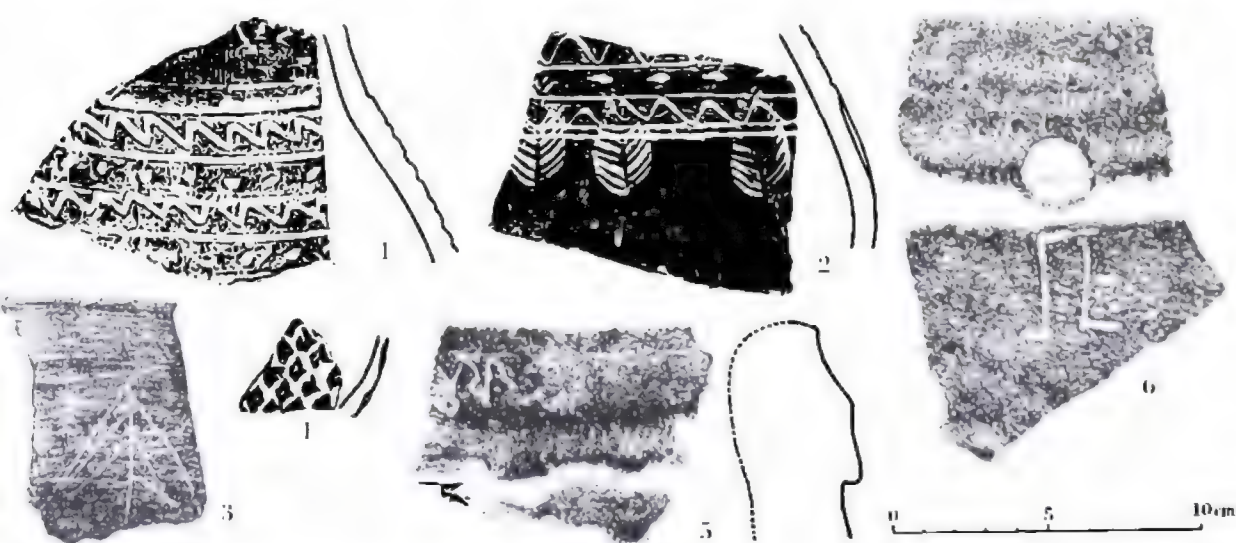


Fig. 155. シャリ・バス土器の文様と文字 Patterns and Characters of Shar-i-Banu Pottery

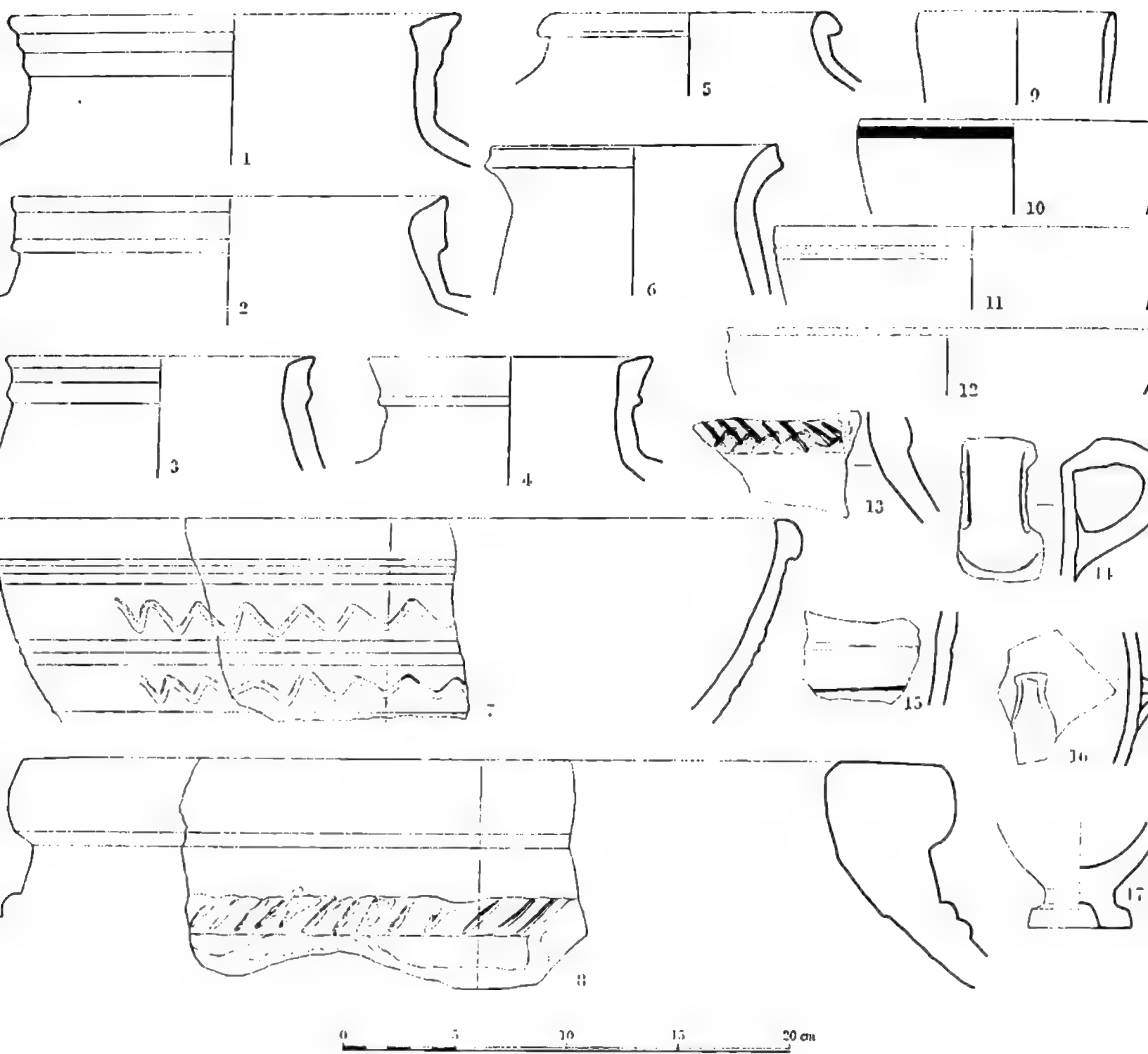


Fig. 156. ベグラム土器 Begram Pottery

ふ。しかし、台付杯と樹木文スタンプの存在は、
跡の年代的親近をしめすに十分である。

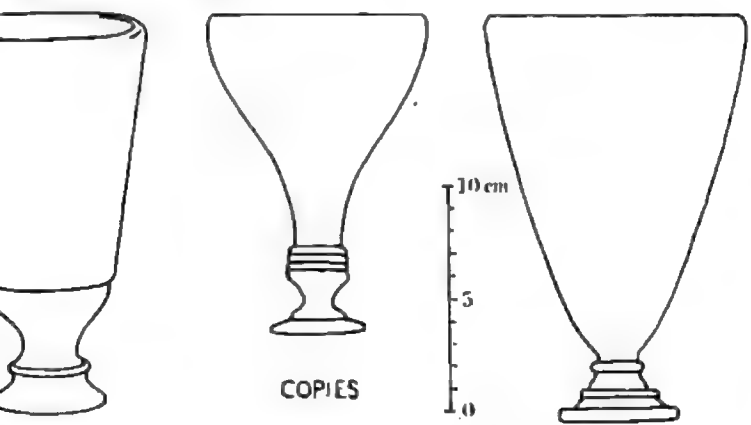


Fig. 157. シャリーバナ台付杯
Goblets Restored, Shār-i-Banu Pottery

また、ジアコーノフは、「カフィルニガン河下流域¹⁾の考古学調査」で、この地域の編年を古代バクトリア期(前7～4世紀)、グレコ・バクトリア期(前3～2世紀)、トカラ期(前1～後1世紀)、クシャーナ期(後2世紀)、続クシャン期(後3～4世紀)とつづけてゐる。これらの編年によれば、台付杯はグレコ・バクトリア期に多く、トカラ期と続クシャーナ期にもある。樹木ス

1) M. M. Diakonov ; *Arkheologicheskie Raboty v Nijinei Kafirnigana (Kobadian) (1950-1951 gg.)* (Materialy i Issledovaniya po Arkheologii SSSR, 37) Moskow and Leningrad 1953, pp. 253-293.

ランプは、グレコ・バクトリア期とトカラ期にある。
シャリ・バヌA式の土器は、このグレコ・バクトリア
期とトカラ期の土器にちかい。

1947年のフランス考古学調査隊がおこなったバ
ルク¹⁾の試掘のガルダンの正報告が出版され、各層位
の土器の編年図²⁾がつくられてゐる。ガルダンは、バ
ルクの土器をIからIVに編年し、III, IV, はさらに
前後にわけてゐる。Iはプレ・クシャーナ(前5-3世
紀), IIはクシャーナ(前1-後2世紀), IIIはササン期
であつて, IIIaは小クシャーナ(3世紀末-4世紀),
IIIbはエフタル・突厥(5-8世紀), IVはイスラム期
で, IVaはプレ・モンゴール(9-12世紀), IVbはチ
ムール期(15世紀)としてゐる。ガルダンは、シャリ
バヌAと同種の台付杯をバルクII式にふくめ、他地
域との詳細な比較研究をしてゐる。³⁾

[B] シャリ・バヌB式

プレションB式と質、焼成、つくり、すべて一致
するので、くはしくは、その説明にゆづる(p. 63参
照)。壺a(Figs. 153-31, 32; 133-29, 30)のほか、ち
小さな半円状の突起をつけ、これに穿孔したもの
(Fig. 133-9)がある。

[C] シャリ・バヌC式(Figs. 154-7, 8, 50, 51)

プレションC式と同様、緑色がゝった、しるい土器
である(p. 164参照)。長頸壺(Fig. 154-50)には体部
に格子の叩目がついてゐる。いまうしなはれた把手
は、プレションC式の把手(Figs. 164-32; 134-22)に
似たものだったろう。鉢形土器の一例(Fig. 154-8)
には暗褐色のスリップをのこす。底は篋けづりであ
る。壺の装飾に櫛描文のみられることもプレション
テペにおけると共通である。

シャリ・バヌには、ほかに、灰色で、かたく焼かれ
た土器(Figs. 154-48, 52)がある。鉢形土器にも、こ
れにちかいものが1例(Fig. 154-9)ある。

5. マザリ・シェリフ東郊のテペ ー9月9日ー

タシュ・クルガンからマザリ・シェリフにいたる道
は荒蕪地で、テペも見あたらない。マザリ・シェリフ
の町がみえてくるあたり、町へ自動車で十分内外の
ところになると、街道の南に三つのテペ(Fig. 47)が
ある。いってみなかったので時代は不明。そこから
すこしゆくと街道のすぐ右にテペがある。クアル・
モハマッド・ハーン Qual-Mohamad-Khan といふ(Fig.
48)。陶片を採集。15~7世紀ごろのものと思はれ
る。更に5分ほど西にはしったところ、街道の北に
も小テペあり。更に3, 4分はしったところ、南の方
に遠く大きなテペがみえる。いづれもいってみなか
ったので時代については不明である。

6. マザリ・シェリフ博物館 ー9月12日ー

政府建物の二階をつかった小博物館で、主として
イスラム期の写本、武器、武具、工芸品、貨幣等を
陳列する。われわれの注意を惹いたのは、つぎのご
ときものである。

(1) タシュ・クルガン付近のウストハン・ザール発
見とつたへる、淡黄褐色地に紫黒色で彩色した土器
(Figs. 151, 92)。

(2) タシュ・クルガン付近発見といふストックの小
仏頭(Fig. 93)。くはしい発見地は不明。

(3) アンホイ Andhui 発見といふ黒色の滑らかな
石でつくった仏足石(Fig. 91)。発見地の所伝に誤り
なければ、『西域記』にもあるごとく、仏教がマイマ
ナ方面にもひろがってゐたことが証せられて興味が
ふかい。アンホイからさらに西南方、ムルガブ河ぞ
ひのバラ・ムルガブ Bala-Murghab 付近、ペンジュ
デ Penjdeh その他に、その形式がジェララバード付
近の仏教関係石窟とちかく、玄奘の記す仏教分布圏
の記述からも、仏教徒の僧院ではないかといはれる

1) O. Shlumberger, ; *La Prospection Archéologique de Bactre (Printemps 1947)* (Syria 26)1949. pp. 174~190.

2) J. C. Gardin, *Ibid.*

3) J. C. Gardin ; *Ibid.* pp. 23~26.

1)

石窟遺跡が報告されてゐる。

(4) オルラメシュ Orlamesh 発見とつたへるストッコのシヴァ神像(Fig. 90)。末期的な形式で体の肉づけは平坦にちかく、目などは墨で粗雑に点かく。建造物の浮彫装飾の一部と思はれる。オルラメシュはハイバク西方直線距離で約 35kmにある。われわれは時間の都合でいくことができなかった。

(5) ハイバクのタクティ・ルスタム発見といふガズニー朝マフムードの小銀貨 1 山。これは出土の所伝が正しいとすれば、僧院としてつかはれなくなつてから、こゝが隠し場所につかはれたことを示すものと思はれ、遺跡の下限を証すると考へられる。ムルガブ河畔のベンジュデ遺跡からも約 100 枚の金、銀貨が出土し、7~8 世紀のものといふ。これも、石窟が使はれなくなつて入口がすこし埋つてから、そこに隠されたものといはれる。²⁾

(6) ガズニー朝マフムード時代のものといはれる陶製小尖底壺(Fig. 94)。やゝ緑色をおびた灰色で、かじやうに硬く、厚手であつて、さきにシュール・テペの項でとりあげた手榴弾である。

(7) タシュ・クルガン付近マン・カラ Mang-Kala 発見といふ刻文緑釉碗(Fig. 95)。パーミヤーンのシャ・ゴルゴラに同様な刻文の釉陶が多く散布し(Fig. 24-8~23)、本稿でパーミヤーン式三彩線刻文陶と推定するものにあたる。マン・カラの地は、タシュ・クルガンでたづねたが、知る人がなかった。

以上の遺物出土地の情報は、博物館の番人サリム Hach Mohamad Salim 氏によるものであるが、その正確さの度合は、前記ウストハン・ザール、フェーズ・ナクシールについての経験から推して、さういふと思はれない。

7. カファル・カラ・テペ Kafar-Kala-Tepe

— 9 月 9 日 —

マザリ・シェリフからバルクへの街道を、約 50 分はつた所に、フリ・イマム・ブクリ Pul-i-Imam-Bukri

の町がある。南方山脈中より北流してきたバンデ・アミール河が、山から平原に出てきたところである。この町のすぐ南にカファル・カラ・テペがある。河にのぞむ城塞址らしい。

採集の土器にはプレジョン B 式の破片、プレジョン C 式の把手つき土器破片、フアイザバード式三花文陶、パーミヤーン式の三彩刻文陶器がある。



Fig. 158. タンギ・シャファ山峽
Gorge of Tang-i-Shafa

このテペからみると河の対岸の崖に点々と小石の入口がみえる。いってみなかつたので時代、性は不明である。

フリ・イマム・ブクリより街道を西に自動車で分ゆくと、北方にテペが二つみへる。これからさバルク近郊まで、街道付近にテペはみえない。

8. ドフタル・パジャ Dokhtar-Padsha 石窟

— 9 月 13 日 —

フリ・イマム・ブクリの南約 60km, アク・クブル Aq-Kuprukのちかくにある石窟遺跡である、フリ・

1) De Laessioz and M. G. Talbot; *Discovery of Caves on the Murgab* (JRAS, N. S. Vol. 18) London 1886, pp. 92~102.

2) De Laessioz and M. G. Talbot; *Op. cit.*

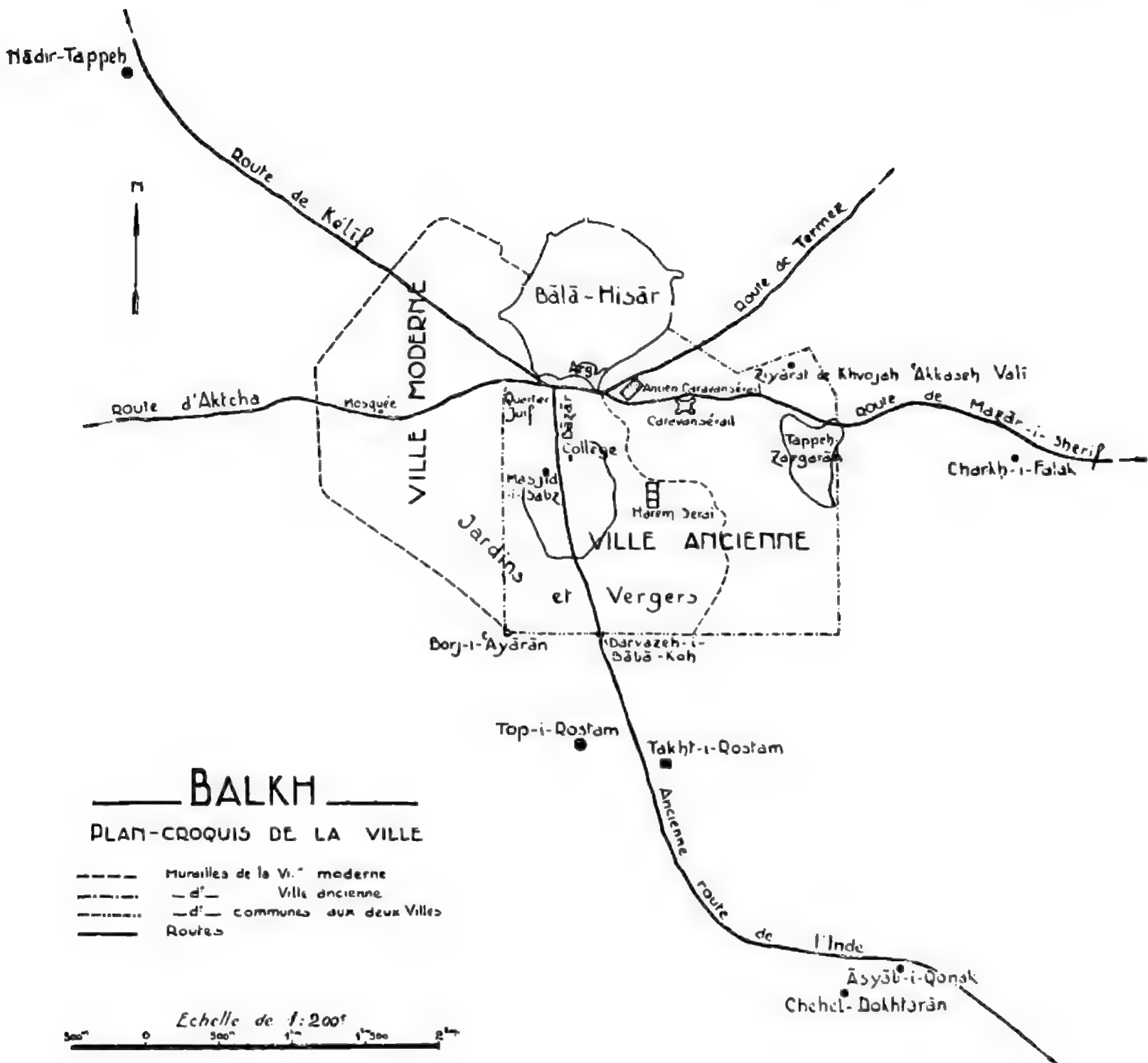


Fig. 159. バルクの遺跡図 (フーシェによる) Archaeological Sites in Balkh (after Foucher)

マム・ブクリよりバンディ・アミール河にそひ南にむかふと、約9kmでタンギ・シャファ Tangi-Shafaの山峡(Fig. 158)につく。この山峡をでると、幅2,3kmの河ぞひの細長い肥沃な盆地がある。中心の町はシュール・ガラ Shūr-gara。タンギ・シャファより南に約14km、ブイナ・カラ Buina-Kalaのバザールで、この盆地をはる。こゝより狭い谷を河ぞひに南下、プリイマム・ブクリより約49kmの地点に橋がある。プリ・バラク Pul-i-Barak といふ。こゝより右岸にうつり、老年期侵蝕の小山の連続をこえ、プリイマム・ブ

クリより60kmでバンディ・アミール河と湫川の合流点にある小盆地アク・クブルク(Fig. 50)にくだる。玄奘がバルクからバーミヤーンにむかったときの道といはれる。

アク・クブルクの村より、バンディ・アミールの河右岸ぞひに、3~400mくだったところ、河岸の礫岩の崖に、ドフタル・パジャの石窟(Fig. 49)がある。地上より12~3mの高さにある自然洞窟に、多少手をくはへたものである。崖に手がうりがなく、のぼるに危険を伴ふ。北西にむかって口をひらき、幅約

15m, 奥行約7m, 高さ3~4m, 東南隅のおくに奥行約3mの亀状の自然洞がある。床は東部に泥レンガの壁がのこってをり, 土をおいて平らにならしてあったらしい。洞内は, もと全体に泥で上塗りしてあったらしいが, 現在は東壁, 南壁西部に泥がのこり, シックヒの薄い上塗りのうへに黒, ラピス・ラズリ色, それよりやゝくすんだ青, 緑青, とのこ色, 橙, ベンガラ色の壁画のあとがみえる。傷みがひどく, 画題は判じがたい。石窟入口の西南, 入口に接して外側の崖にも高さ, 幅1mほど泥の上塗りがのこり, 亀(Fig. 51)がまうけられてゐる。壁画の色の使ひ方

は, パーミヤーンにちかい。

この石窟の北数10mのところにも, オーバーハングの崖があり, その中腹, かなりの高さにつくられた石窟がある。こゝにのぼる栈道をさへた杣の穴が, そのわきに連続してのこってゐるが, のぼる方法がなく, 調査ができなかった。

アク・クブルクよりドフタル・パジャにいたる途中, 河の左岸にも小石窟が2カ所あり, 右岸からみたところ方形, アーチ形入口に人工のあとがみとめられたが, これも河流にさまたげられて調査することができなかった。

III バルク付近

フーシェが1923~25年に調査した遺跡(Fig. 159)をまはってみた。以下それについて簡単に記す。

1. バルクの古城

— 9月10日 —

バルクの古城は南壁(Fig. 54)が, もっともよくのこってゐる。いま高さ7~8mはありとおもふが, そのうへはイスラム時代の追加である。下半部は, なクシャーナ時代の壁が, そのまゝのこってゐる。じり型のくぼみがつくられてゐるのは, まったくバルク・コタルの壁とおなじである。

2. バルクのパラ・ヒッサール Bala-Hissar

— 9月10日 —

現在のバルクの北に接した廃城址, 径約1kmの不規則な円形をなし, 周囲には近世の土城がくづれたる(Figs. 52, 53)。フーシェは, その南端にある高丘アルク(東西110m, 南北80m)の一部を, 1924~25年に試掘した。しかし, イスラム期の層が確認され¹⁾まか, それ以前の層をみいだすのには失敗してゐる。

1947年, シュランベルジェらのアフガニスタン

考古調査隊は, バルク各所に試掘坑を掘り, バラ・ヒッサールにおいても, イスラム期以前の文化層が²⁾存在することをたしかめた。われわれの採集した陶片には, フェイザバード式の青釉陶, 三彩花文陶などがあり, ほかに濃コバルト色とエメラルド色, クローム黄の象嵌タイルがある。

3. テペ・ザルガラン Tepe-Zargaran — 9月10日 —

バルクを東にぬけ出るところ, 町はづれにある低いテペ(Fig. 55)。高さ3~4m, 南北450m, 東西300mの不規則な形をなす。シュランベルジェらは1947年こゝに12個の試掘坑を掘り, カロシュティ文字のある陶片, クシャノ・ササンの古銭, 建築の一部を³⁾掘りだした。われわれは道路の切通しで道路の高さの層よりサマルカンド式の白地多彩(褐, 濃褐, 柿)陶(Fig. 135-5~7)を採集した。テペのうへでは, ハザール・スム式緑釉陶, シャリ・バスA式にちかい精

1) A. Foucher, *Op. cit.* pp. 110~112.

2) J. C. Gardin; *Op. cit.*

3) D. Schlumberger, 1949; *Op. cit.* pp. 181~5.

製土器(台付杯の台部をふくむ)、シュール-テペ同様の手榴弾、ガラス容器片を採集し、また付近の農夫より元時代と思はれる青白磁(Fig. 135-2)と青花大盤の底(Fig. 135-1)とをゆづりうけた。

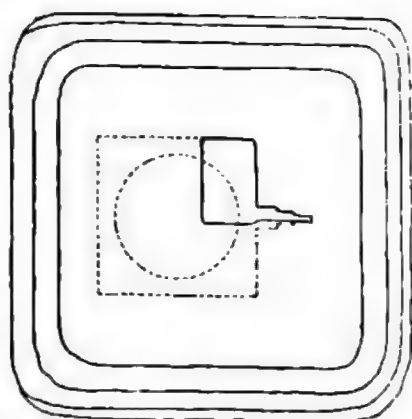


Fig. 160. ナディール-テペ
(フーシェによる)
Nadir-Tepe (after Foucher)

4. チャルキ-ファラク Charkh-i-Falaq

— 9月10日 —

テペ-ザルガランの東方数百 m のところ、畑のなかにそびえてゐる(Fig. 56)。泥レンガづみの中実な塔状の建物で、フーシェは「市の東方でわれわれは」¹⁾
「なかば廃墟と化しながらも、すくなくとも、ある角度からみると、仏塔の性格をしめす塚にであった。アシャビ-コナクと同様、こゝでもモスクのミラーブが東西によせかけてつくられてゐる。これはそのもとの偶像崇拝的な目的をもった建物を潔めようとしたものとも、また新政宗者が昔きたと同じ場所により喜んで礼拝にくるやうにといふこととも考へられる。チャルキ-ファラクには、この新宗教への再利用の例として、近代の小型レンガできづいた偽龕が、基壇の北東隅にも高い所にひらいてゐる。しかし、南東側では、その伏鉢の円筒状の胴と丸い頂部はもとと同じ高さにそびへ、時とともに生じた裂け目からは、もとの基礎をなしてゐた大きな泥レンガがみえてゐる」と記してゐる。

5. ナディール-テペ Nadir-Tepe — 9月10日 —

バルク城外、西北約 2km、道路のすぐわきにある小テペ(Fig. 57)。一辺数十m、高さ数m、うへの平らな方形の丘である。うへに長さ10mほどの、泥レンガの長方形建造物のあとがのこつてゐる。フーシ

2) は「わたくしの考へによれば、これはテラスに達する階段が東部に半分のこつた古いストゥパの方形の基壇の四分の一がのこつてゐるものといへないだらうか。もし、この推測があつてゐるとすれば、この周囲にひろがる方形の中庭は、周囲を僧坊でかこまれてゐたことになる。そしてこれは現在のこつてゐる唯一の、この種のかこひのある建物であるから、いつの日か、この遺跡全体を明らかにする日をまらしたい」(Fig. 160)と記してゐる。とはいへ、テペのうへに建つ泥レンガの建物の残壁と、テペの周縁をとりかこむ、あるかなきかの高みからなる周壁とは、その崩壊の程度がまったく異なり、同時期のものとはとても考へられない。また周壁のうちには、フーシェのいふごとき室の壁の痕跡はみられない。ゴバクリ-テペの³⁾ごとき小堡塁の遺跡ではなからうか、

採集した土器には、フアイサバード式が豊富であ



Fig. 161. タクティ-ルスタムの土層
Pounded Earth of Takht-i-Rustam

1) A. Foucher ; *Op. cit.* p. 68.

2) A. Foucher ; *Op. cit.* p. 68

3) 本品, p. 60.

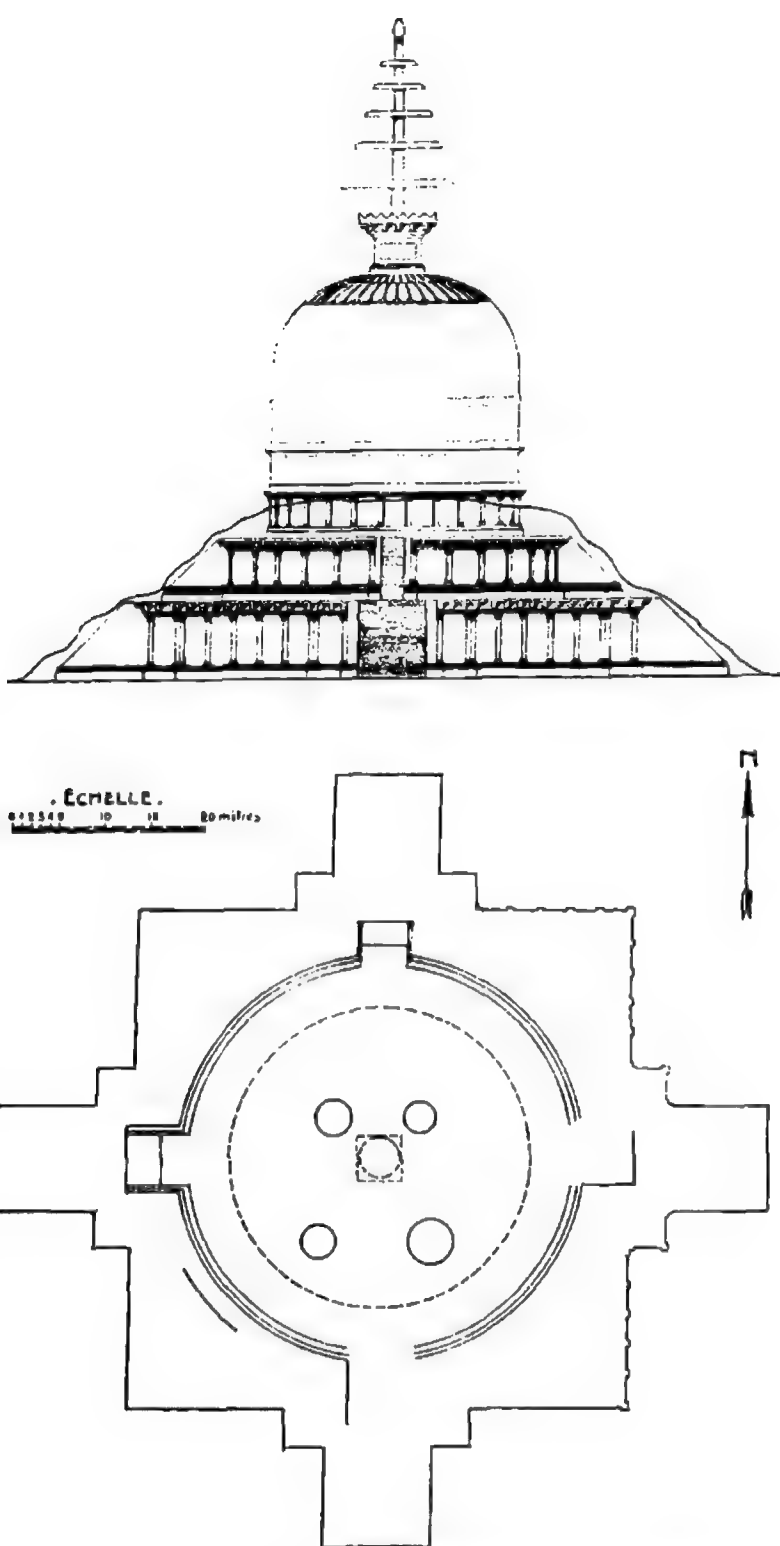


Fig. 162. トープ・イルスタム復原図（フーシェによる）
Töp-i-Rustam (after Foucher)

る。こゝにおいても、その三彩花文陶、青釉陶、白釉陶の三者が共存してゐる。ほかに、同心円と格子の型文をもつた褐色の土器がある。

6. タクティールスタム Takht-i-Rustam

— 9月10日 —

バルクの南1km足らずのところ、道路の東側にある台地状のテペ(Fig. 58)。フーシェは「高さ12m、崩壊してゐるにもかゝらず、100mに70mの方形の

原形を推測しうる。これは厚さ80cmのつき固めた土の層(Fig. 161)できづきあげられ、完全に中実である。……この裂け目のはいった台地には、なんらその目的を推測せしめるものはみつからず、これが仏教関係であったことを証するものはなにもない」と記してゐる。われわれはつき固めた土の層のなかから若干の土器片を採集したが、その年代はわからない。

7. トープ・イルスタム Töp-i-Rustam

— 9月10日 —

バルクの城壁の南数百mのところにあるストゥパ(Fig. 59)。1924年1月から3ヵ月半、フーシェが発掘調査をおこなった。フーシェは玄奘の『大唐西域記』巻1、縛喝(バルク)国の条に「城外の西南に納縛僧伽藍あり、この国の先王の建つところなり、伽藍の北に峯塔波あり高さ200余尺あり」といふストゥパにあて、こゝにいふ納縛僧伽藍(Nava-Sangharāma)は初期のアラビア地理家のNau-behar(Nava-vihār)の訛)であるとした。フーシェはこの遺跡は古い城壁に対してみた時、その西南隅にあるボルジ・アラン Borji-Ayaranの方によってゐる点、玄奘の「西南」といふのに合致するといひ、また付近にジアラットが多いのはこゝが昔の聖所であったことの傍証¹⁾とした。

フーシェの希望も空しく、発掘後保護が加へられなかったため、現在は表面にかぶせたレンガがうはれ、荒れはてゐる。かれが掘りだしたときの状況で記すと、つぎのごとくである(Fig. 162)。全体の芯は泥レンガできづかれ、中壇からうへの表面はレンガをかぶせる。全体の表面にはシッケヒの塗りがあつたと思はれる。ストゥパの基壇は一辺約50mの方形をなし、四方に幅11mの階段がつく。そのうへに径約43mの円形の基壇がのり、そのうへ

1) A. Foucher; *Op. cit.* Vol. 1, p. 69, pp. 84~5.

に伏鉢部がおかれる。これらの側面はシックヒでしあげをした柱形、軒蛇腹でかざられる。伏鉢基部には不規則に四つ、ドーム天井をもった小室が掘りこまれてゐる。また基部には人のとほれる高さのトンネルが中央で十字形に掘られてゐる。これらの穴の目的は、発掘によってはたしかめられなかった。

8. アシヤビ・コナク Asyab-i-Qonak

— 9月10日 —

バルクを南にで、約3 kmほどゆくと、村の屋根のうへにそびへた塔状のものがみえる。基部の径約15 m、高さ8 m ばかりの泥レンガづみの塔(Fig. 50)。基部の東面、北面に、ストゥバの側面にでる階段の残存(Fig. 163)であるかのごとき突出がのこつてゐる。フーシェは、これは、たしかにストゥバだ⁽¹⁾といつてゐる。とはいへ、周囲からは、その時代、性格を証すべきなものも採集できなかった。



Fig. 163. アシヤビ・コナク Asyab-i-Qonak

9. チェヘル・ドフタラン Chehel-Dokhtarān

— 9月10日 —

バルクの南へ、トープ・イルスタムをすぎてゆくと、アシヤビ・コナク(Fig. 61)が立ってゐるのがみえる。泥レンガづみの、塊状の建物で道路にむいた側がえぐられてゐる。基部の径約15 m、高さ約5 m、フ

ーシェはその内壁の一部が龜形にカーブしてゐるのをみると、これはアシヤビ・コナクがストゥバである⁽²⁾に對し、ヴィハーラのやうだと記してゐる。これについても、はたして仏教関係の建築物かどうか判断する材料はえられなかった。

IV バルクよりアクチア

ゆきはバルクよりブリ・イマーム・ブクリにもどつて、そこから山の麓ぞひに西にむかふ新道をとほり、かへりにはこれよりも北よりの、平野のなかの旧道をとほった。こゝには調査の順序にしたがひ、新道ぞひには東から、旧道ぞひには西から順に記す。

1. ブリ・イマーム・ブクリ Pul-i-Imam-Bukri より

イマーム・サヒブ Emam-Sahib 間のテベ

— 9月10日 —

ブリ・イマーム・ブクリより西に自動車で45分ほどのところ、バンディ・アミール河の1支流のむかふの平原にテベが一つみえたが、いってみることができ

1) A. Foucher, *Op. cit.* Vol. 1, p. 69.

2) A. Foucher; *Op. cit.* Vol. 1, p. 68.

なかった。プリ・イマーム・ブクリとイマーム・サヒブとの間には、このほかにテペがみえなかった。

2. ゴバクリ・テペ Gobakli-Tepe など — 9月10日 —
プリ・イマーム・ブクリからアクチャに通ずる街道を、西にジープで約1時間15分ほどゆくと、街道は直角に折れて、西北の方アクチャにむかふ。その村をイマーム・サヒブといふ。この村のなか、北に折れた道のすぐ西方にあるテペ(Fig. 62)が、ゴバクリ・テペとよばれる。一辺 30 m ほどの方形の平面をもち、中途が平らな段をなし、中央に円い小丘がのってゐる。高さ10mほど。バルク付近のナディール・テペと相似た形をもち、フーシェがみたらストウパの跡と推測することであらう。わづかの土器片を採集した。なかにプレション A 式のやうな、赤いスリッ プをかけた良質のものがあつた。また口縁上面に櫛描波状文のあるプレション C 式に似た土器と、バーミヤーン式三彩刻文陶にちかい土器がある。

このテペより西方を望むと、2~3km の距離に3つほどテペがみえる。

ゴバクリ・テペの北 100 m ほどのところにも、小テペがある。こゝでも少量の土器片を採集した。

3. テペ・サラ Tepe-Sala — 9月10日 —
上記のテペの北方約 500 m の所、街道の東側にも約 30 m、高さ 10 m ばかりのテペが二つ(Fig. 63)ある。若干の土器片を採集した。プレション A 式のやうな

赤いスリッ プのある良質土器、プレション B 式、プレション C 式にちかく、格子その他の叩目文ある土器片がある。1959 年にも、われわれの調査隊は、こゝで良質のスリッ プをかけた土器片を採集してゐる。その記録によると、その名はテペ・サラ Tepe-Sala といふ。

4. サラール・テペ Salar-Tepe — 9月10日 —
イマーム・サヒブ村よりさきは、しばらく街道かきつゝ、テペがみえなくなる。イマーム・サヒブ村から車で行くのは 4~50 分、アクチャへ約 1 時間のあたり、街道の右手 2 km ばかりのところの大きなテペがある。これがサラール・テペ(Fig. 64)である。東北面はバンディ・アミール河の、最南の一支と思はれるものにのぞみ、直径約 150 m、高さ 15 m ほどの大きなテペである。川面に面した崖でみると、麓から高さの三分の一以上は土層にも重なった灰層があり、多量の土器片が露出している。採集した土器には、プレション B 式が多い。ほかに赤いスリッ プをかけた良質土器片、プレション C 式の把手がある。陶片としては、ファイザバード式の青釉陶がある。

このテペより東方をのぞむと、平野のなかに大テペが数へ切れないほどのテペがうかんでゐる。ところが、西の方にはない。バンディ・アミール河が平野で分岐する範囲が、テペの分布地域であることが知られる。

なほこゝで夕暮になったため、こゝからアクチャまでのあひだの遺跡は探索できなかった。

V アク・チャよりバルク

日数の都合でアクチャより西に調査をすゝめるのをやめ、アクチャよりバルクにひきかへした。かへりにはゆきとはべつに二つの町をほぼ直線的にむす¹⁾旧道をとほった。バージャーとライトが 1938 年

²⁾に、またシャクルが 1939 年に調査を行ったのは、

1) E. Barger and Ph. Wright; *Excavations in Swat and Explorations in the Oxus Territories of Afghanistan* (Memoirs of ASI, No. 64) 1941, pp. 53~55.

2) M. A. Shakur; *A Dash through the Heart of Afghanistan, being Personal Narrative of an Archaeological Tour with the Indian Cultural Mission*. Peshawar 1947, pp. 68~71.

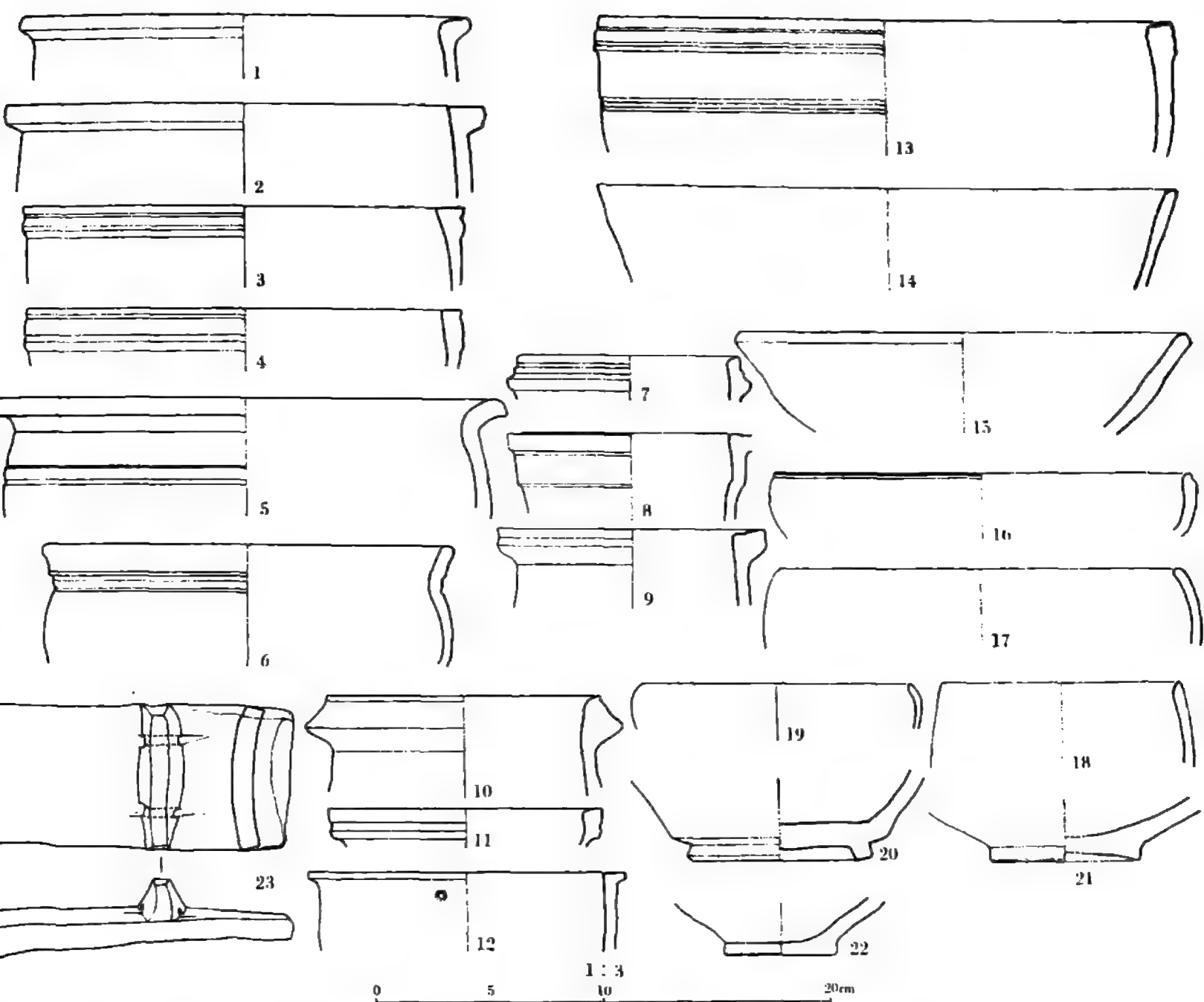


Fig. 164. プレション-テペ土器 (I) Preshon-Tepe Pottery (I)

の道にそってであったとおもはれる。アルチン F. R. Allchin とコドリングトン K. B. Codrington が1951年 オクサス流域の遺跡を調査して遺物を表面採集してをり、この辺も調査したかと思はれるが、その報告は、まだみてゐない。

1. ハロバード-テペ Halobad-Tepe — 9月11日—

アクチャの東方 13 km, 北方に通ずる道を北に折れて間もなくの所にある (Fig. 65)。高さ約 10 m, 広さ約 35×25 m。ほぼ長方形をなし、東南隅に望楼のくづれたごとき高みがある。アクチャよりの里程に照すと、バージャーとライトの MG はこれであらう

か。採集品にはプレション B 式が多い。ほかにプレション A 式と同じく良質のあかいスリップのある土器片、暗褐色のスリップのある土器片、また、シャリ・バヌ A の鉢 c, 台付杯の台部とおぼしきもの各一例があり、ファイザバード式の飴釉陶、青釉陶、三彩花文陶がある。

2. プレション-テペ Preshon-Tepe — 9月11日—

アクチャより 15 km 東方、道路の北にある巨大なテペ (Fig. 66)。高さ約 15 m, 一辺約 150 m と目測した。シャクールの No. 90, 氏は四分の三マイルの地域にひろがると記してゐる。シャクールは付近のス

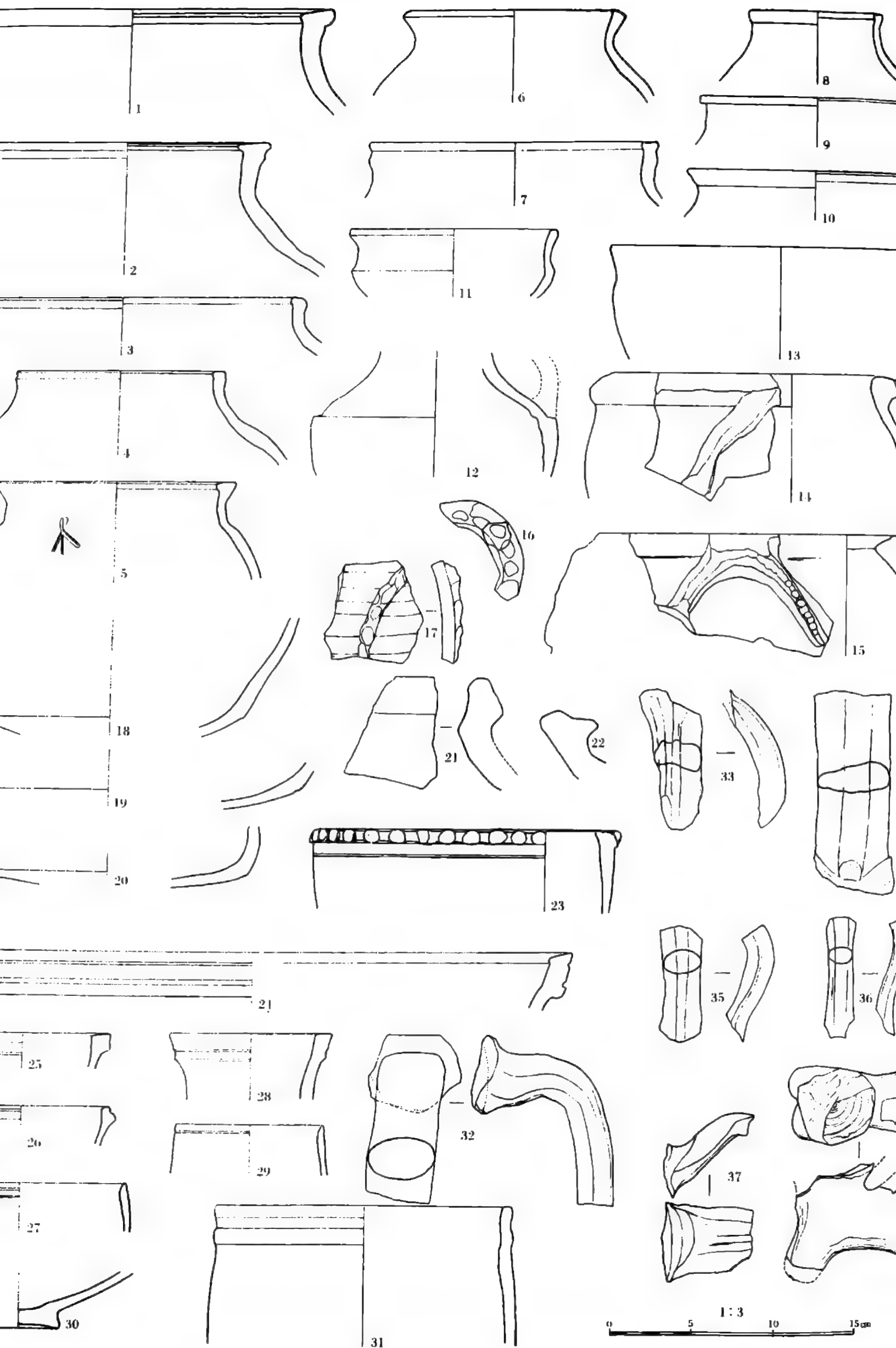


Fig. 165. プレション-テペ土器 (2) Preshon-Tepe Pottery (2)

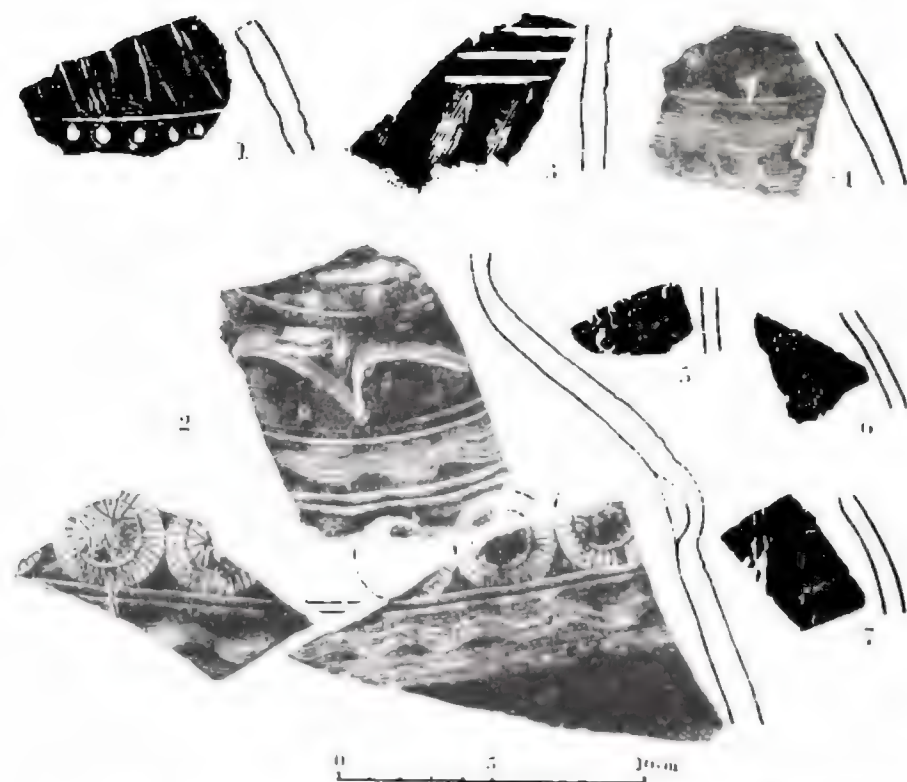


Fig. 166. プレション土器の文様 Patterns of Preshon-Tepe Pottery

レイマン・キリ Suleman-Kili 村の住民はこゝで多くの古銭を採集すると記し、またイスラム期の陶片が欠如してゐる点に注意してゐる。われわれも土器片(Figs. 164~166)を多数採集した。

プレション・テペの土器は、A, B, C の三形式にわけられる。

[A] プレション A 式(Figs. 164 ; 134-1~10)

赤いスリッ プをかけた、良質精製の土器で、陶車で作られてゐる。地は白っぽい淡褐色のものが多く、焼きはかたい。ほかに、やゝ粗質の土器(Figs. 164-10, 20, 21 ; 134-8, 19, 20)がある。これは別にあつかふべきかもしれない。

器形には、口径10cm 内外の壺(Figs. 164-7~11 ; 134-2, 3)と鉢とがある。鉢はさらにつぎの四種に大別される。

鉢 a(Figs. 164-1~4, 12, 13 ; 134-1, 4)まっすぐたつ口縁の端の外側にはりだしをつくつたもの、内面のスリッ プは、上1cm 余の幅のみにかぎられてゐることが特徴的である。鉢 b (Figs. 164-5~6 ; 134-5)まるく、そとにまがる口縁部をもつもの。鉢 c (Figs. 164-14~15 ; 134-6~7)口縁部がなゝめそとにひら

くもの、鉢 d (Figs. 164-16~19)内ぞりぎみの口縁をもつもの。このほか、細片で、非常にきれいなスリッ プをかけた土器がある

装飾はすくない。たゞ上にあげた、良質のスリッ プをかけたものに暗文をみることは注意されてよい。これ以外には、口縁部付近に直線文があるのみである。ほかに壺の胴部にへらがき波状文と突刺文のあるもの(Fig. 166-1)、鉢 c の、内面にへらがき波状文を何帯かかされたものがある。把手(Figs. 164-33~37 ; 134-9~10)はシャリ・バス A 式の説明で有溝把手とよんだものである

プレション A 式には、シャリ・バス A にみたような台付杯がないし、黒、暗褐色のスリッ プの例なく、また装飾文様にもとぼしい。また、プレション A 式に特徴的な鉢 a は、シャリ・バス A 式にはない。だから、プレション A 式と、シャリ・バス A とは、ことなつた土器形式とみられる。しかし両者が、どのような年代関係をもつかはわからない。

[B] プレション B 式(Figs. 165-1~23 ; 134-11~18, 27)

小石まじりの胎土をもちひる。その土器表面にあはれた白い小石が、風化分解して消滅したゝめ、そこに小孔をのこし、あばた状をていしてゐることが特徴的である。スリッ プはみられない。地色は、断面では灰色から黒色であるが、表面ちかくは紫紅色褐色になってをり、焼きは非常にかたい。粘土紐をまいてつくつてをり、整形によるこまかい平行線が内外にのこつてゐる。それは多く水平にはしり、ときに斜行してゐる。口縁部付近の整形のみは、回転運動を利用した可能性があるが、陶車をもちひたものはほとんどない。

壺 a (Figs. 165-1~10, 18~20 ; 134-12~14, 16~18)直立する口縁端の内外、あるひはその一方が突出してゐるか、これにかはつて口縁端直下にあさい凹

線がはいってゐるのが特徴である。底は、胴部とのさかひの段のところで仕上げ方がちがひ、粗雑のまゝにのこされてゐる。底の内側は、ていねいにしあげたものと、指頭でなでたものがある。この底の状態は、火にかける器形にふさはしく、口縁部や胴上部に煤のあることとともに、この壺の用途を示唆するものとおもふ。

壺 b (Fig. 165-12) 把手をもった小形の壺である。例外的に陶車製である。

釜 (Figs. 165-14~17; 134-11) うちにまがる口縁部をもち、弧状の把手を、おそらくあひたいして一対つけた土器である。把手のうへには指頭圧痕をつらねてゐる。ただし、Fig. 165-14のみは陶車製らしく、質も他とやゝちがひ、把手上に圧痕がない。

このほか鉢 (Figs. 165-11, 13; 134-15), 大形土器 (Figs. 165-21, 22) がある。

プレション B 式は、ガルダンの分類では灰色土器とよばれ、バルク II にぞくしてゐる。ガルダンはこれを、前 2~1 世紀頃、スキタイ系の民族のバルク侵入とともにもたらされたものとしてゐる。¹⁾

[C] プレション C 式 (Figs. 165-24~32; 166-2~4; 134-22~25, 27~31)

縁がゝった白地の、良質精製の土器で、陶車製のものが多く、大部分は焼きがかたい。暗褐色のスリップを一部にとどめた土器があるので、本来はスリップがかゝってゐたものもあるのであらう。

器形には、壺 (Figs. 165-25, 26, 28; 134-23), 鉢 (Figs. 165-24, 27, 29, 31; 134-28) などがある。口縁部付近には直線文しかないが、壺の頸部、胴部には、つうの直線文とともに、櫛がきによる直線文、波文、短斜線文がかさねもちひられ、また、半球状突出するスタンプ文様がある (Figs. 166-2; 134-29~30)。把手には、口縁から長頸壺につけられたものとおもはれるもの (Figs. 165-32; 134-22) のほか、平板状で末端の表裏に指頭圧痕文をみるものがある。い

づれも、回転運動を利用してしあげた可能性をもつ有溝把手である。唯一の底 (Figs. 165-30; 121-31) は土器の上半がつくられたのち、土器を陶車上に置き、さきにのせ、へらで底をつくりだしたものである。なほ、この底部は内面に暗褐色のスリップがのこり、その中央から放射状の暗文をとどめてゐる。

プレション C 式はガルダンのバルク IVa (9~12 世紀) にほゞ相当するやうである。たとへばプレション C 式の櫛描文様 (Fig. 166-2~4), スタンプ文様 (Fig. 166-2), 把手と、同種のものがバルク IVa に分類されている。²⁾

ほかに土製品として、容器の蓋とおもはれるもの (Figs. 165-23; 134-21) と、四足獣の土偶 (Figs. 165-38; 134-26) とがある。前者は、陶車製の円筒を四角にくりぬき、把手をつけ、これに二つの孔をあけたもので、後者は、頭部に相当する部分が皿状になつてゐる点で普通のものとなる。

プレション・テペには、ほかにプレション C 式と同じ色の硬質、または軟質うすての鉢形土器で、その内面にはそい線刻文をもつ土器がある。直線文で劃した帯のなかに S 字状文、渦巻文をつらねたり、連弧文でふちどりした区劃のなかに、突刺文を充填したもので、線は、大部分 2 本ならべてつかつてゐる (Fig. 166-5~7)。同形式の土器は、バーミヤーンのシャムシール・ゴルゴラにもある (Fig. 137-27)。このばあひは、³⁾ らしく、焼きはかたい。デュプレによれば、ガンダール附近のシャムシール・ガールの発掘において、この線刻文土器は、プレション C 式に相当する土器と同じ層から出土してをり、初期イスラム期にぞくするものと考えられてゐる。なほ、これら線刻文をもつ土器にちかひが一部に緑色の痕跡をのこし、バーミヤーン式三彩刻線文陶とおぼしきものもある。ほ

1) J. C. Gardin; *Op. cit.* pp. 48~53

2) 櫛描文様は Pl. 16-1a, スタンプ文様は Pl. 15-1c, 把手は Pl. 6-15d, Pl. 13-5,

3) L Dupree; *Op. cit.* Table 5 参照

に、また石製容器片、うす青色のガラス容器片、青銅の細片を採集した。

3. チシュ-テペ Chish-Tepe — 9月11日—
アクチャより 17km, 街道の北にある。高さ約 4m, 長さ 15m ほどの小テペ(Fig. 67)。シャクール調査の No. 7 にでもあたろうか。

こゝにのぼって、双眼鏡でテペをかぞへると、周囲に 15 ばかりのテペがみえる。チシュ-テペには、プレション B 式土器が多い。また、大形土器の破片(形態は Fig. 165-22 に類似)、ムギカイネのやうな穀物の圧痕があり、もみがらのまぜられたものが二片ある(Fig. 152-2)。ほかに、プレション A 式にちかい良質の赤いスリッパをかけた土器、ファイザバード式三彩花文陶、ガラス容器片、土器成形の際土器の内面にあてがった土製品(コノラス)かとおもはれるものがある。

4. 名称不明のテペ — 9月11日—
アクチャより 19km, 道路の南側に(Fig. 68)ある。高さ約 5m, 径約 20m。シャクール調査のテペ相互間の距離、道路に対する方向と、われわれの調査とを対照してみると、氏の No. 6, タパ-イ-ニムリ Tapa-i-Nimli がこれにあたるらしい。氏は No. 6 のテペのかたはらで、ギリシア文字のある壺の破片を採集したと述べてゐる。文字は残欠して ATROS とのこつてゐるのみといふ。

5. ナスラット-テペ Nasrat-Tepe — 9月11日—
アクチャより 23km のところ、道路南側にあるテペ(Fig. 69)。高さ約 15m, 一辺約 50m の方形。アクチャからの距離、道路に対する方向、大きさの記述を照合すると、これはバージャーとライトの MKK にあたるとおもはれる。バージャーらは「テペの周囲にはあさい堀がめぐり、高さ約 1m の外壁がある。

塚の周囲、堀の外側に波状の凹凸があるのは建物の跡である。テルの頂上には粗製の陶器と近代の陶片があるだけである。急な斜面のしたの方には明瞭に初期イスラムの陶器(堆線文および二、三の斑釉の)があり、またおそらくササン朝とおもはれる少量の陶片がある¹⁾と記してゐる。

われわれの採集した土器には、プレション A 式同様の良質のものもわずかにあるが、プレション B 式と C 式類似の破片が多い。釉陶には、ファイザバード式の三者、すなはち三彩花文陶、青釉陶(おほまかな刻文をもつものもある)、飴釉陶が共存してゐる。特殊な遺物として、土製円板(復原径約 18cm)の一面の中心に軸状の突出をもったもの(Fig. 167)がある。ミノアのロクロのうへにのせる円盤としてクサントオジデス Stephanos Xanthoudides²⁾が紹介したものを想起させる遺物である。

6. ファイザバード-テペ Faizabad-Tepe

— 9月11日—
アクチャより 25km, 道路北側(Fig. 70)にある。約径 25m, 高さ約 10m。相対的距離からみて、シャクールの No. 5 にあたるらしい。距離からいふとバージャーとライトの ML に該当するが、道路に対する方向が反対になってゐる点が合致しない。

ファイザバード-テペで採集した土器片には、台付杯の台部をふくむ良質の土器が少量ある。しかし、大多数はわれわれが仮にファイザバード式とよぶ三種類の釉陶と、プレション B 式とである。釉陶の第一は三彩花文陶(Fig. 136-14~20)で、白地に、青、紫で彩文したうへに透明釉をかけ、線の描出には青と紫とをもちひ、これにスタンプで紫の花文をおしてゐる。第二は青釉陶(Fig. 136-22, 23)である。第三は飴釉(Fig. 136-24)で、この色調には、越州窯の青

1) E. Barger and Ph. Wright; *Op. cit.* pp. 54, 55.

2) S. Xanthoudides; *Some Minoan Potter's Wheel Discs* (Essays in Aegean Archaeology) Oxford 1927.

磁に似たとおもはれるやうなうすい色あひのものから、濃いものまでいろいろある。三者とも鉢形土器が多く、青釉陶、飴釉陶では、口縁内部にあさい凹線がはいるものゝ多いことが特徴的である。また、この両者には、内面の口ちかくに、釉かけるまへにおをほまかな波状文、螺旋文(Fig. 136-22)、直線文をきざんだものがある。少数ながら青釉陶に紫のスタンブ花文様をおしたものがある(Fig. 136-21)。また青釉陶の青は、三彩陶の青と一致し、しかも、内面飴釉で、外面青釉のものがある。これら三者は同質で、またあげ平底といふ器形上の共通性をもっている。そしてこの三者は、ファイザバード・テベ以外でもつねにくみあはされて発見されてゐる。

以上の点からこれら三者が一つの形式にぞくすることはあきらかである。ファイザバード・テベでは、このほか少数ながらハザール・スム式の三彩陶と緑釉陶がある。しかし、ハザール・スムの項でもふれたやうにハザール・スム式とファイザバード式とは、共存しない遺跡が多く、共存してゐても、遺跡によって両者の比例が極端に一方にかたよつてゐる。両者が近代をことにすることはあきらかである。なほ、ファイザバード式三彩花文陶は、ガルダンのバルク発掘陶器の分類でポリクローム B (15世紀以後)にぞく¹⁾てゐる。

7. モムレク・カラ・テベ Momlek-Kala-Tepe

— 9月11日 —

アクチャより 33km、道路の南側 150 m にある (Fig. 71)。高さ 10m、長さ 150m、シャクール氏の No. 10 にあたるとおもはれる。またアクチャからの距離、遺跡の状況からみると、バージャーとライト MN がこれであるらしい。周囲は空堀にかこまれ、上東側と北側に土壁があり、城塞としてつかはれ²⁾らしい。バージャーとライトは道路のすぐ南にある、半マイル四方にわたるひろい廃墟(家屋、泥壁、

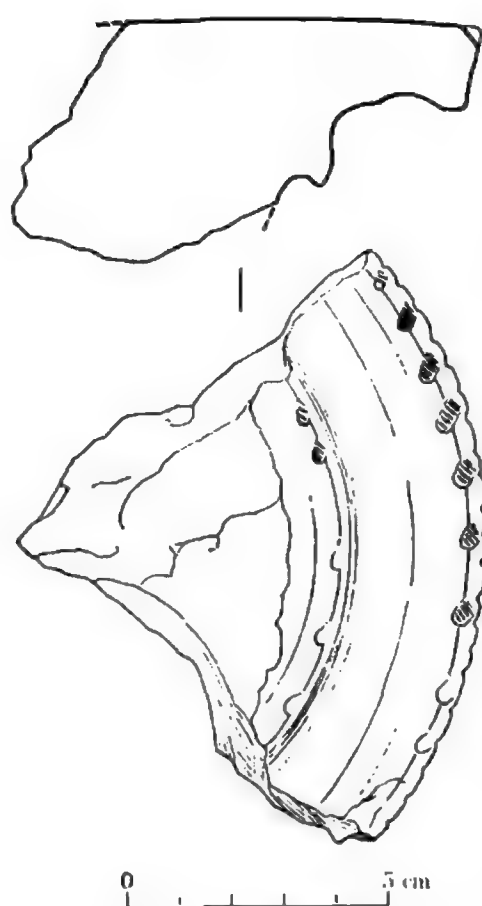


Fig. 167. 土製円板、
ナスラット・テベ発見

Pottery Disk from Nasrat-Tepe

アーチ)のなかには、
あり、「頂上の凹凸
は建物(比較的近
代の)のあとをし
めし、ところど
ろに小さな泥レン
ガできづいた残壁
がのこる。テベの
頂上には大量の陶
片があるが、初期
のものと考へられ
る釉陶はみあた
らない。若干のシ
クヒ片(9×6イン
チ)や製陶用の精
土が頂上に発見さ
れた。斜面のなか

ほど以下には堆文釉陶片が多量にある」と記してゐる。

モムレック・カラ・テベも、ファイザバード式の三彩花文陶、青釉陶、飴釉陶の多い遺跡のひとつである。ほかに、プレション A 式類似の、赤いスリッパをかけた良質の破片、暗褐色のスリッパをかけた破片があり、前者には格子状の暗文をつけたものもある。プレション B 式も多く、とくに壺 a が多い。またプレション C 式と似てゐるが、褐色で、櫛がき文のほか、平行あるひは格子叩目文の豊富な一群の土器がある。

8. シャソリム・ポチャ・テベ Shasolim-Pocha-Tepe

— 9月11日 —

アクチャより 36km のところ、道路の南側に二つの小テベがある。道にちかい方のものがこれで、高

1) J. C. Gardin ; *Op. cit.* p. 74~75.

2) E. Barger nad Ph. Wright ; *Op. cit.* p. 55.

3m, 径 10m ほどの小テペ (Fig. 72) である。シャクルの No. 3 にあたるかと思はれる。プレション B 式の格子叩目文ある褐色土器少量を採集した。

9. 名称不明テペ — 9月11日 —
アクチャより 39km のところ、道路の北側にある (Fig. 73)。径 70 m, 高さ 10 m ばかり。周囲の斜面は急で、うへに建物の遺跡がのこり、近代の墓がつくられてゐる。シャクルの No. 2 にあたるらしい。ファイザバード式三彩花文陶, 青釉陶, 飴釉陶と、少量のハザール・スム式三彩陶, 緑釉陶, プレション B 式, プレション C 式の土器片を採集した。

10. 名称不明テペ — 9月11日 —
アクチャより 46~7 km のところ、道路の南側に高さ約 10 m, 長さ 100 m ほどのテペがみえたが、時

間がおそくなったのでいってみなかった。道路に対する方角, アクチャよりの距離, 規模を考へあはせてみると, バージャー, ライトの MP/P にあたるかと思はれる。バージャーらによると「100×50ヤードの方形, 高さ50フィート, 頂上が平たく, 側面は雨で陵夷してゐる。基部は稜角でかこまれ, 高さ 3m。空堀, 付随的なテペはない。大量の粗陶と少量の堆線文陶片が頂上ちかい斜面で発見された」といふ。

その他バージャー, ライトの MG, ML, シャクルの No. 1 にあたるものは, われわれの記録からはみいだせなかった。これを最後に, チャハル・バラク Chahar Balak をへて, バルクまではテペがみあたらなかった。シャクルの記録も, 距離の記載からみて, われわれの (10) のあたりからはじまる。夕暮となったために, われわれがみおとしたわけでもないらしい。

VI プリ・クムリよりクンドゥヅ

プリ・クムリの平野には, フランス調査隊が発掘をつづけてゐる スルク・コタル Surkh-Kotal 以外に, 遺跡があるかどうか, 調査しなかったのだからわからない。しかし, 自動車の窓からみたかぎりでは, テペの類はみあたらなかった。遺跡はプリ・クムリから北にむかうかひ, 山のせまつた所をとほりぬけたバグランの盆地に多い。

1. チャムカラ・テペ Chamkala-Tepe — 9月22日 —
バグランの町の, ほゞ中央にある十字路を東にとり, バگران盆地の東辺をかぎる台地にそって南下すると, バグランの町より約 6km で, このテペに到達する (Fig. 74)。一辺約 60 m, 高さ約 10 m の方形台状をなし, 周囲に空堀 (Fig. 168) がのこってゐる。南辺には, くづれて不規則な丘状になった泥レンガ

の建物のあとがある。三年ほどまへ, 上面をけづって整地し, 北辺ぞひに建物を建てた。その工事のさいに, ストゥパの装飾と思はれる浮彫が発見され, 現在バグランのクティ・スタラ Kuti-Stara (次頁リリ・テペの項参照) に保管されてゐる。これらの彫刻は, スルク・コタルの建築にもちゐられてゐるのと同様な, 白っぽい石灰岩である。出土の状況は不明である。カタガン州長官の厚意によって, われわれの調査した所によれば, つぎのごとくである。

(1) 仏塔装飾 (Figs. 96, 97) これは一石の二面である。一は幅 42 cm, 他は 38 cm, 高さは約 18 cm。上辺にパルメットの唐草波状文をかざり, した四隅に翼をひろげた鳥を配し, その中間に坐仏, もしくは立仏, その左右に供養者をつくる。ストゥパの基部といふよりも, 平頭 harmika のかざりとおもふ。さうすれば隅がけに鳥をおいた意匠も類例がある。

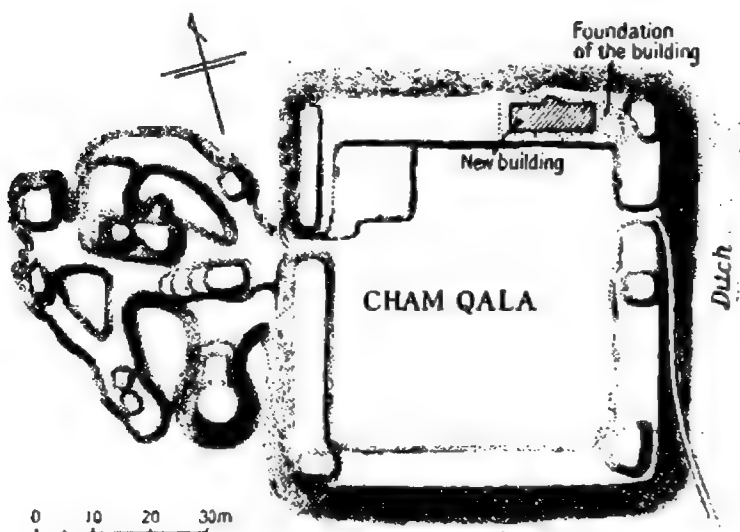


Fig. 168. チャムカラ・テペ Chamkala-Tepe

(2) 仏塔装飾(Figs. 100, 101) これも一石の二面である。一は幅32cm, 他は幅16cm 高さは19cm。上辺の唐草波状文は前項と同様, たゞし, この方がよくのこってゐる。隅の鳥形もおなじ, 中央の三人はとがり帽のクシャーナ貴族を中心にしてゐる。前項の石と二つで, ひとつの塔の平頭をかたちづくったものとおもふ。クシャーナ貴人の像がうつくしい。

(3) 仏塔装飾(Fig. 98) 幅34cm, 奥行32cm, 高さ15cm。椀木をならべた軒蛇腹で, 台座の一部と, 平頭の一部ともとれる。

(4) 仏塔装飾(Fig. 99) 幅35cm, 奥行30cm, 高さ12cm。上におなじ。

(5) 浮彫柱頭(Fig. 102) 幅32cm, 奥行33cm, 高さ27cm。浮彫で柱頭があらはされてゐる。蛇腹でかざられた, まるい台座のうへに, 有翼の獅子を配し, 柱頭をつくってゐる。なかなか繊細な作ゆきである。

チャムカラ・テペ採集の土器にはホジャ・ガルタンの大形土器の破片が多い。復原径40cmにちかい部もある。また胴部には一部平行叩目文をとどめものがある。ほかに有溝把手, 糸切痕をのこす厚の底などがある。

2. リリ・テペ Lili-Tepe ー9月17日, 22日ーカタガン州政庁のあるバグランの町のなかにあ

る。テペを整地して, その頂上にクティ・スタラとづける美しい円形の建物(カタガン州長官の役所)つくってゐる(Fig. 75)。その工事のさい, 仏伝図彫, 円形の礎石, テラコッタ, 鈴その他の装身具どが出土したといふ。いま, この建物のうちに保されてゐる。カタガン州長官の好意によって撮影実測ができた。それについて記すと, つぎのごとである。

(1) 仏伝図浮彫(Fig. 104) 白っぽい石灰岩。さ54cm, 幅53cm, 厚さ30cm。中央にあらはされたのはシッダルタ太子。妃の眠る床よりおりようとて, いま半跏の状態にある。これからいよいよ出世の大志を実行にうつさうとする光景。ストウパの面をかざった浮彫と思はれる。侍女たちが右に二をり, その背後にある柱に, さきのペルシア式柱頭みえる。うへには大きな梯形龕形があり, 一隅にあらはされてゐる。

(2) 柱礎2個(Figs. 169, 105, 106) 白っぽい石灰岩製。ひとつはFig. 106の大竈のしたに敷かれてゐた。クンドゥズ, チャールでみたものより単純である。

(3) 陶製人頭(Fig. 170-3; 109) 以下に記すものが仏伝図などの仏教遺物とどういふ関係にあるかあきらかでない。この人頭は長さ10cmばかり, 淡褐色の焼きで, 中空である。頸はあらはされず, また胴のうへにと

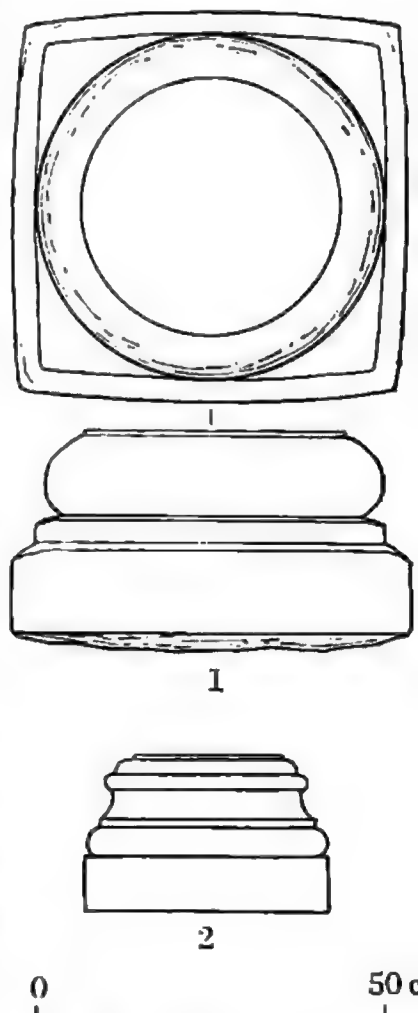


Fig. 169. 柱礎, リリ・テペ発見
Pillar Bases from Lili-Tepe

りつけるべき孔ないし突起もなく、これだけで完結したものゝごとくである。頭上におわん形のかざりのついた帽子をかぶるやうにもみえ、また頭髪を頭上にくくってあるやうにもみえる。額に平玉を連ねた形のディアデム(?)をつけ、眉間にもまるい白毫のやうなものがつく。どぜうひげをはやし、口に小

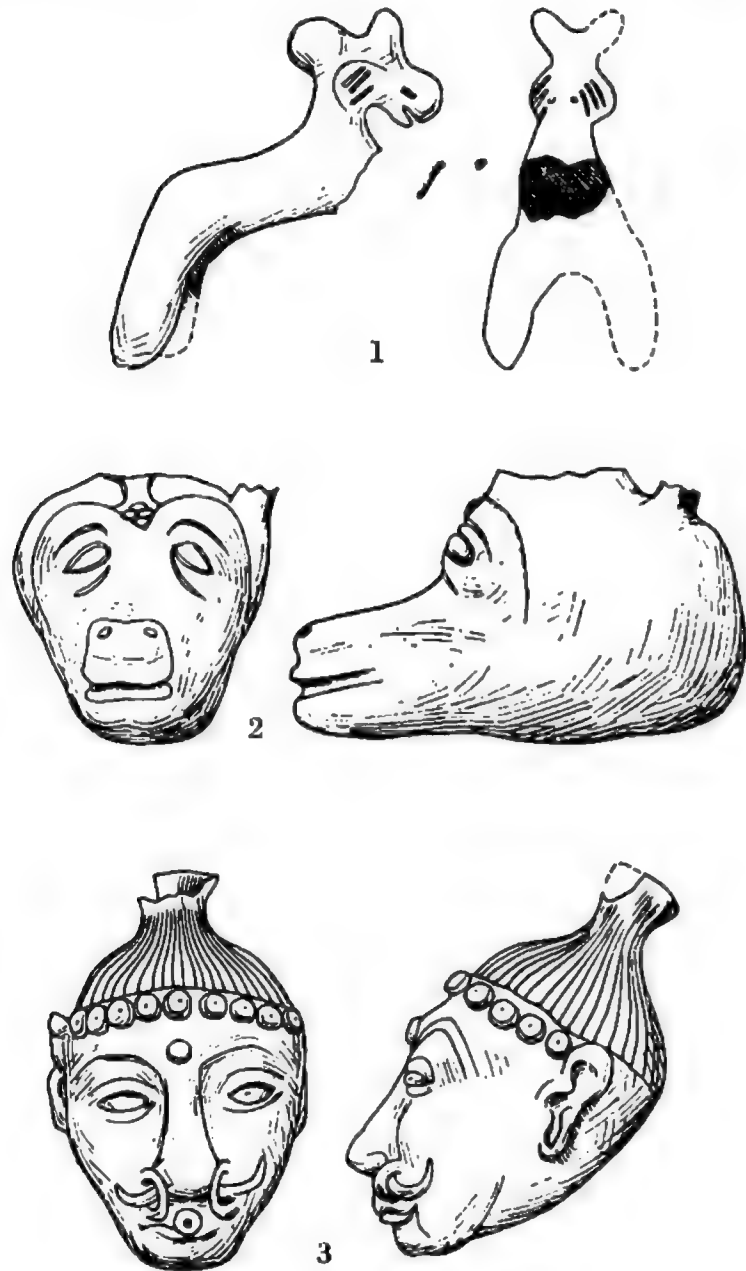


Fig. 170. 伝リリ・テペ発見土製品
Terra-cotta Figures from Lili-Tepe (b)

さい孔のあいた短い管をくはへた形は、何につかはれたものかわからない。

(4) 陶製牛頭(Figs. 170-2 ; 110) 人頭と同様な焼きで、これだけで完結し、胴にとりつけるべき装置はみあたらない。長さ12~13cm。頭のうへに、耳と角のとれたあとがある。このウシも眉間に小玉を四つあつめたかざりをつけてある。用途不明。

(5) 陶製動物像(Figs. 170-1)。淡褐色の焼き。何の動物か不明。後足より頭までの長さ12cm。

(6) 青銅丸形鈴七個(Figs. 171-1~5 ; 113) 大小、したの切り口、うへの鉤などの形式は、さまざまである。やゝ相似た形式の例はベグラム II にある。¹⁾

(7) 青銅円錐形鈴四個(Fig. 112) これも形式は

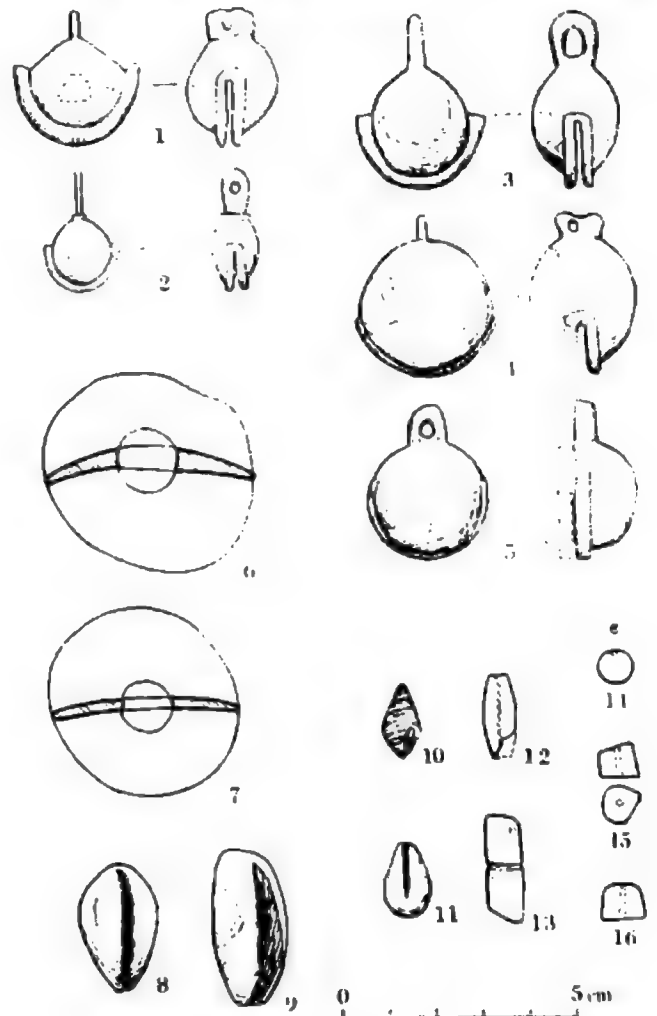


Fig. 171. 装身具、伝リリ・テペ発見
Small finds from Lili-Tepe (?)

さまざまである。相似た形式の鈴はベグラム III にある。²⁾

(8) 貝製環(Figs. 171-6, 7 ; 111) 大形の二枚貝を切りぬいてつくる。

(9) 子安貝, 小形巻貝(Figs. 171-8~11 ; 111) 装飾品とおもはれる。

(10) 小玉類(Figs. 171-12~16) 12は陶製, 13は赤珊瑚製で紐をかける溝をつくる。14はカーネリアン

1) R. Ghirshman ; *Bégram* (MDAFA, Vol. 12) 1946, Pl. 37.

2) R. Ghirshman ; *Op. cit.* Pl. 47.

ン, 15は象牙(?), 16は緑色の石。

(11) 径8.6 cmの鉄製の弾丸があったが、時代はもっと新しいものと考えられる。

(12) 土器甕(Figs. 106~108) 肩に刻目突帯をめぐらし、やゝつくりのていねいなもの1個(Fig. 106)と、突帯なく、やゝつくりのあらいもの2個(Figs. 107, 108)がある。前者は淡褐色の土器で口径29 cm, 高さ89 cm, 平行線の叩目が全面についてゐる。後者は表面がしろっぽく、断面が赤い土器で、底部がたひらでなく、やゝ凸面をなしてゐる。Fig. 107の土器は口径38 cm, 高さ89 cmある。

(13) 小形土器 灰白色粗質で、口径5.6 cm, 高さ8.8 cmの丸底の鉢で、口縁部から腹部にかけて把手がつき、その反対側が片口になってゐる。

3. バグランのテペ

—9月18日—

前記のリリ・テペよりのぞむと、道の西側にリリ・テペと似た形の、円い小テペが三つ四つみえる。時間の都合でよってみななかった。またクティ・スクラ保塞の仏伝図浮彫の一つ(Fig. 103)は、バグラン東方の丘から発見されたといふ。幅75 cm, 高さ36 cm, その遺跡の所在、性格をたしかめることができなかった。やはり、塔の基壇にでもはめたものとみられる。下半身をのこすのみで、なにの図か不明だが、姿態の柔軟なのが注意するに足る。

4. バグラン北方のテペ

—9月18日, 22日—

バグランをでゝクンドゥヅにいたる街道を北上すると、この盆地をかぎる山峽にいたるまでのあひだ、約1 kmにひとつの割で、道の左右にテペがみえた。

径約2~30 m, 高さ2~4 mほどの小テペが多く、さらに大形のものもある。帰途に調査するつもりであったが、かへりにも時間がなく、左記の三つのほか

は、たちよることができなかった。右の一群のうち、アリアバードの南約39 kmのところ、街道の東側にあるテペ(Fig.

76)は、Fig. 172のご

とく小テペ三つからなる。2号テペで大形土器の破片と、土管とおもはれる円筒とを採集した。円筒は粘土ひもをつみあげてつくり、のちに内面をロクロで整形、外面をへらでしあげたものである。

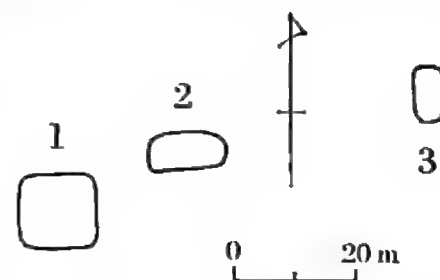


Fig. 172 バグラン北方テペ
Tepes North of Baghlan

5. ジェル・テペ Jel-Tepe ほか

—9月22日—

バグラン盆地から山峽をぬけ、クンドゥヅ平野のぞむところにアリアバードの町がある。この町の北約2 km, 道路の西側の台地にあるテペ(Fig. 77)は一辺約50 m, 高さ約15 mの方形をなし、周囲の斜面は二段になってをり、西北よりにさらに一段高い台地がある。址のごとき高みがある。保塞のあとのごとくである。採集した土器には、プレションB式に混入してあると同様の白い小石を多量にふくむ大形土器がある。これはホジャ・ガルタンとたゞちに同一視できず、時代はわからない。小形土器には、口縁の内面におりかへしのある鉢などがある。

このテペの南西約1 km, 台地の端に一辺約150 mの台状のテペがみえた。

VII クンドゥヅ付近

クンドゥヅ河がヒンヅウ・クシュの前山から平野にでたところにあり、付近は水がゆたかな農地にかこまれ、カナバードにかけての低地には水田が多い。クンドゥヅ—カナバードの街道をゆくと、約15kmのあひだの低地には、草におほはれた小テペが多数散在する。

1. キタブハナ・ナシール Ketab-Khana-Nashīr

—9月18日—

クンドゥヅの棉花会社々長グラムサルヴァール・ナシール Ghulamsarvar Nashīr 氏の図書室、すなはちキタブハナ・ナシールに、この地方出土の遺物が保管

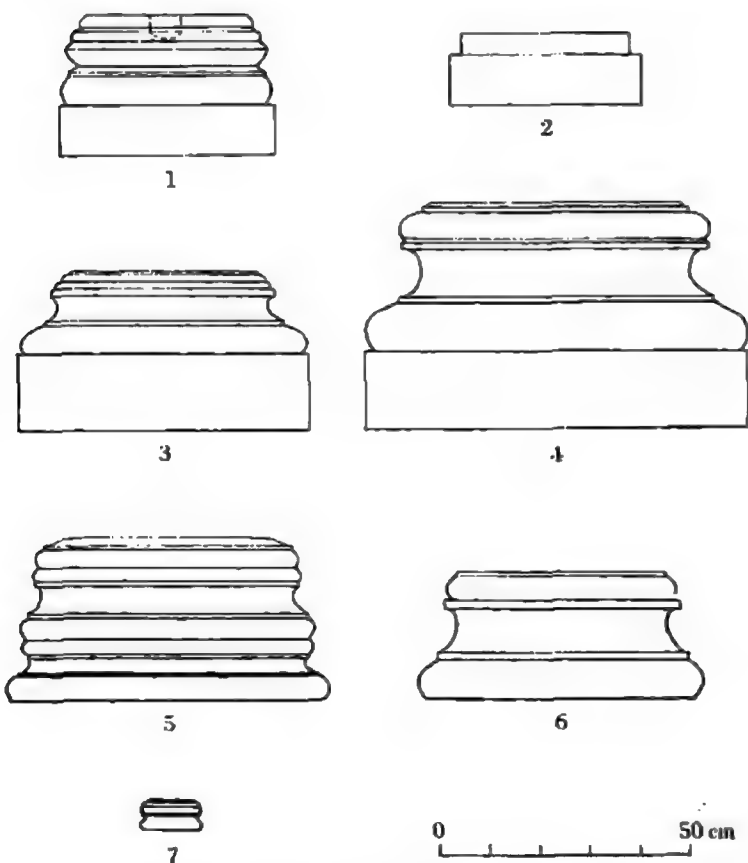


Fig. 173. 柱礎, 伝アホンザダ・テペ発見
Pillar Bases from Akhonzada-Tepe (?)

されてゐる。ナシール氏の好意により遺物を調査する機会をえた。それはつぎのごとくである。

(1) 柱礎七(Fig. 172 ; 115~121) つぎの仏伝図浮彫3点と同じ所から発見されたといふ。はじめき

くところによるとチャール・ダラ発見といふことであったが、同出といふ仏伝図がアホンザダ・テペ出土のことがほぼ確かと思はれるので、これもアホンザダ・テペ出土といふことになる。白っぽい石灰岩製。上面に小さいほぞ孔がある。

(2) 仏伝図浮彫三(Fig. 122~124) Fig. 122は高さ55cm, 幅54.5cm, 厚さ16cm。Fig. 123, は高さ54cm, 幅35cm, 厚さ14cm。124は高さ54cm, 幅35cm, 厚さ15cm。大小、構図がおなじであるから、ひとつのストゥーパに属してゐたものとおもふ。いずれも上面中央に、背面から固定するための梯形のほぞ穴、両端に隣の石と接続するための方形のほぞ穴がある。下面には方形のほぞ穴が二つならんであけられてゐる。

この彫刻についてはフィッシャー K. Fischer がすでに紹介し詳細に解説を行¹⁾つてゐる。上下二段にわかれ、下段は梯形龜の並置、なかに菩薩立像をおく。上段は仏伝図の連続である。Fig. 123はシッダルタ太子がカピラ・ヴァストゥの城をでるところ。ついで白馬との別離がある。Fig. 122はシッダルタ太子が城外で

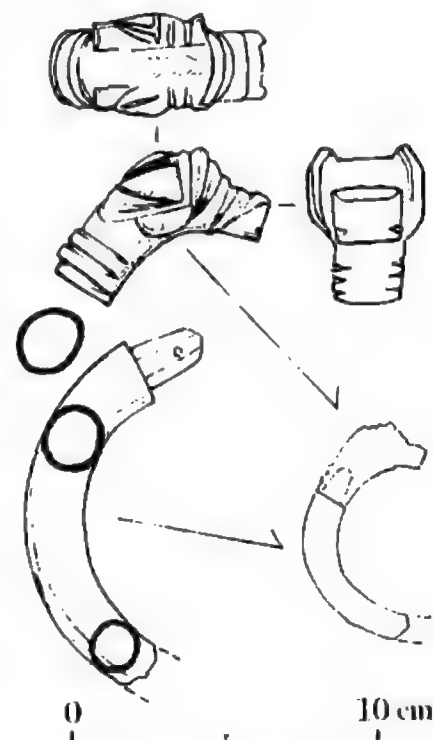


Fig. 174 伝カラ・ザール発見
Bronze Bracelet from
Qala-Zal (?)

1) K. Fischer ; *Gandhar an Sculpture from Kunduz and Environs* (Artibus Asiae, Vol. 21, 3~4) pp. 231~253, Asconu 1958.

て老、病、死、修行僧に出あふ物語。Fig. 124は太子時代の身心の鍛錬をあらはすものかとおもふ。構図はひじょうにすゝんでゐるし、梯形龜もアフガン独特の形がみられる。

(3) 石彫仏坐像(Fig. 125) 前者と同様アホンザダ・テペ発見といはれる。残高53cm, 灰色の石灰岩の彫刻。ずんぐりとし、横幅のひろい体格が、粗略な彫法とゝもに末期的な形式をしめしてゐる。四、五世紀とみてよからうか。

(4) 石彫人像(Fig. 126) アホンザダ・テペ出土。高さ22cm, 厚さ14cm。供養者の像とおもはれる。

(5) 青銅腕環(Figs. 174, 127) クンドゥヅ東北方カラ・ザール Qala-Zal 出土といはれる。両端を動物頭につくり、中空環状の体にはめこんでゐる。

(6) 青銅柄鏡(Fig. 128) 径14.5cm, 中央厚さ1.6cm, おなじくカラ・ザール出土といはれる。柄をとめるためのなかごの断面は長方形をなし、西方系の鏡である。

(7) 鉄鍋 同地発見と伝へられる鉄鍋の底部(底径10.5cm)がある。

(8) 銅壺(Figs. 129~131) 高さ22cm, 銅の槌製。壺の一方につき口がある。把手は欠失。胴に鑿彫で模様をつけてゐる。パルメット、連珠文で上下をかり、なかを列柱でしきり、一間に一人づゝ人物をあらはす。椅子にすわる男、水タバコ(?)をもつ男、ちわ太鼓をうつ女、逆だちする男などがみられる。

(9) グシュト・アルチャイ Dasht-Archai 発見品
ラコッタのウマとヤギの頭、ガラス容器片、イスラム期陶片、象牙浮彫小板、土器片などがあつた。

(10) スルク・コタール出土クシャーナ刻銘板石¹⁾6枚

(11) 出土地不詳大形磚2枚

2. クンドゥヅのバラ・ヒッサール Balā-Hissār

— 9月19日 —

クンドゥヅの町を東西にはしる大通を、ハズラト・

イマム・サイド Hazrat-Imam-Said に通ずる道にをれ、1kmほどいったところにある(Fig. 78)。東西250m、南北150mほどの方形のテペで、周囲にふかい空堀がめぐる。城壁はくづれながらも、かなりよくのこつたところがあり、堀の底から城壁の頂までは15mほどある。城壁のなかには起伏があるが、西よりほどくに平らな部分がある。レンガ片、陶片が若干散布する。城壁は泥レンガづみ。保存程度はタシュクルガン付近のシュール・テペにちかい。こゝは公園としての工事が多少すゝめられてゐる。

こゝで採集したホジャ・ガルタン式の大形土器はリリ・テペの土器と似た平行叩目文がある。ほかに褐色の土器若干あり、あるものはチェシュメ・イナル・テペに共通する。有溝把手もある。釉陶ではフェイザバード式三彩花文陶、飴釉陶のほかにつぎのものがある。

外面は濃コバルト・ブルー、内面はエメラルド色の光沢のある釉陶、これは14世紀初めのタブリーズのザニヤの象嵌タイルと同じ色調である。ほゞ同じ時代のものであらう。染付を模したとおもはれる陶片、緑釉陶片、灰白色の釉をかけた炉器にちかい陶片がある。

3. アホンザダ・テペ Akhonzada-Tepe

— 9月19日 —

クンドゥヅの町の中央十字路から、東へ約800mいったところ、道の北側約200mにある小テペである。土堀にかこまれて、そこからわかりにくい、5年ばかり前に、フランスの調査隊が発掘したといふ。その報告文献の有無はわからないが、東西20m、南北30m、高さ4mほどの小テペである。発掘トレンチに泥レンガの壁が掘りだされてをり、その北側には

1) D. Schlumberger ; *Surkh Kotal: Un Site Archéologique Kouchane en Bactriane* (Afghanistan, Vol. 9, No.1) 1954, pp. 44~54, Fig. 1.

円形の礎石が3,4個、霜で表面が大きく剝離しながらのこってゐる。案内してくれた、クンドゥヅ陶器工場の工員は発掘当時の人夫で、キタブハナ・ナシールにおかれてゐる石灰岩の仏伝図浮彫 (Fig. 122~124) は、こゝからでたものだとおしへてくれた。

こゝで採集した土器は、三片にすぎない。しかし、そのうちの二片は、大形土器で、ホジャ・ガルタン・テペのものと同形式である。仏伝図浮彫の出土をつたへるテペで、この形式の土器の出土した遺跡としては、さきにチャムカラ・テペをあげた。このアホンダ・テペにおいても、両者の年代的な関連性が考へられる。土器以外に、枢の石(復原径約10cm)の破片がある。

4. チェヘル・ドフタラン Chehel-Dokhtarān

— 9月19日 —

クンドゥヅの北、バラ・ヒッサールの南東数百mの土塀にかこまれた畑地のなかにある (Fig. 79)。高さ約5m、一辺約20mの方形、泥レンガできづいた堡塞状の外観をもち、外壁上部には外壁から突出する水平の木材が若干のこってゐる。中実で頂部の中央に4m四方の高まりがある。望楼のごときものであら

うか。時代不詳。付近の畑で縁軸刻文の陶片 (Fig. 136-1, 2) を採集した。

5. マルザ・ラマザン・テペ Marza-Ramazan-Tepe

— 9月19日 —

キタブハナ・ナシール保管の仏像がこゝからでたといふのでいってみた。クンドゥヅをでて渡船でクンドゥヅ河をわたる。クシュ・クルガンに通ずる街道を約8.5kmゆき、そこから北に折れて約4kmいったところにチャール・ダラの村がある。そこで仏像出土の情報をえようとしたが、要をえなかった。村の北に小テペが三つみえたので、そのうちのひとつ、マルザ・ラマザン Marza-Ramazan 氏所有のテペ (Fig. 80) にいってみた。25×

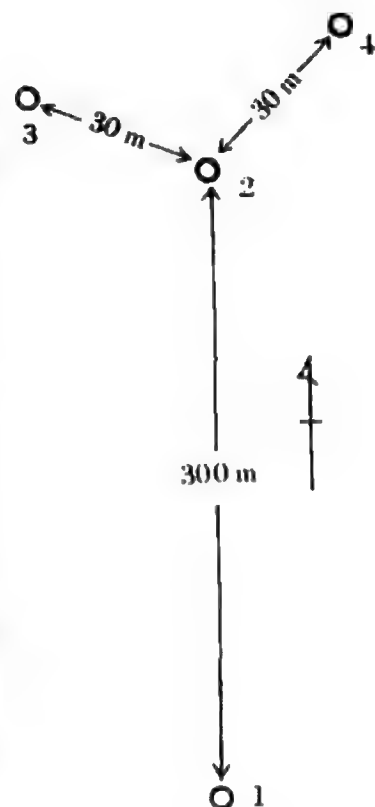


Fig. 175.
ホジャ・ガルタン・テペ群
Khoja-Ghaltan-Tepas.

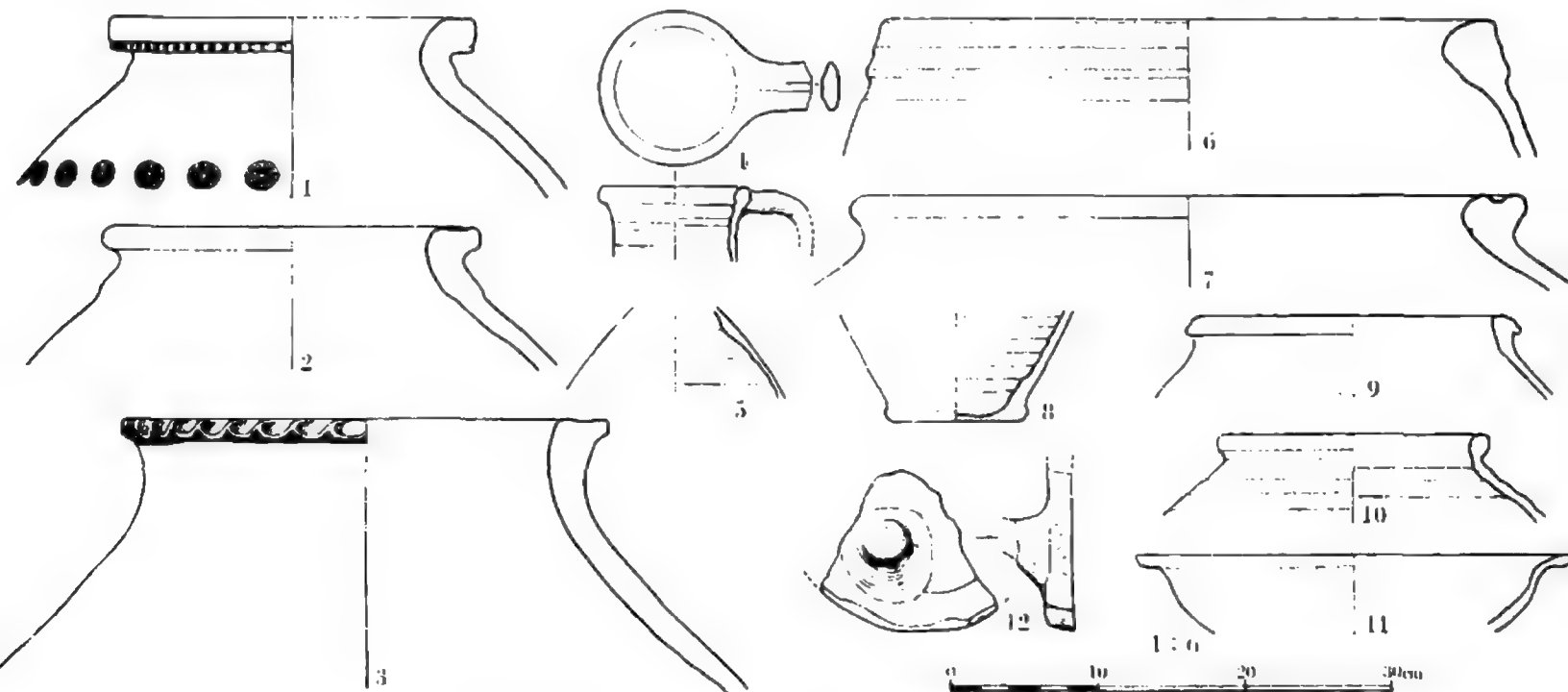


Fig. 176. ホジャ・ガルタン土器 Khoja-Ghaltan Pottery

20mほどのテペで、高さは7m、ホジャ・ガルタン式の大形土器とレンガとを採集した。

6. ホジャ・ガルタン・テペ Khoja-Ghaltan-Tepe

— 9月18日 —

クンドゥツの町よりカナバードに通ずる街道を、東南に約7kmいったところより、北方に水田のあひだをゆくこと約4kmでホジャ・ガルタンの村に達する。クンドゥツの東北にあたる。村の西、水田のなかにテペが四つ点在する (Figs. 175, 81)。

No. 1 径25m、高さ1.5m、四方より水田に侵蝕されてゐる。厚さ4~5cmのレンガ片若干を採集した。

No. 2 径30m、高さ3mばかり、No. 1と同様、レンガ片のほか厚手の土器片が多い。

No. 3, 4 いずれも径約15~20m、高さ2~3mと思はれる。夕暮となったため行ってみなかった。ホジャ・ガルタン No. 2 テペの土器 (Figs. 176-1, 2, 4~2; 177; 114-1~3, 5~13) は大部分良質でかたくやがれてゐる。色は断面と内面が赤く、外面が白つばくになってゐることが多い。

大形土器 (Figs. 176-1, 2, 6, 7; 114-1, 10~12) はいずれも口がせまくなった器形で、口縁部の形態には若干の変化がある。Fig. 176-1 (Fig. 114-1) は、口縁部の下端に、圧痕文をつけ、また胴上半にスタンプ文様をつけてゐる。スタンプといへば大きな花文様のスタンプを印した円板をはりつけた大形土器の破片 (Figs. 177; 114-2) がある。この土器の花文様の上、下には隆起帯をつけた痕跡がある。底部はオブリク・テペ、チャムカラ・テペなど他の遺跡の例から見て、厚さが胴部とおなじくらゐか、あるひはそれよりうすいらしい。

他の土器のうち、Figs. 176-4, 9~11は、大形土器同様の質、色であるが、Figs. 176-5, 8はやゝことなつてゐる。把手にはやはり回転してつくられたら

しいあとがのこり、あさい溝がつく。ほかに、円板状のものに、中実の足をつけたらしい土製品の破片 (Fig. 176-12) がある。

クンドゥツ付近のテペの多くは、草でおほはれてゐて、地はだの露出した、バンディ・アミール河流域、フルム河流域のテペにくらべて、土器の採集には都合がわるい。そのために採集資料では、大形土器がめだつた存在になってゐる。小形の土器については、まとめて分類できるやうな資料がえられなかった。また、この地域では、イスラム釉陶を採集した遺跡はほとんどなかった。

大形土器といへば、シャリ・バヌなどクルム河流域にも大形土器 (Figs. 153-28~30) がみられる。しかし、それとクンドゥツ、パンギ河流域、イシュカシム盆地のそれとは、質、色、形態などで区別される。そして、ホジャ・ガルタン No. 2 テペの土器で代表させた、この地域の大形土器は、バグランのチャムカラ・テペ、クンドゥツのアホンザダ・テペなどのやうに、柱礎や仏伝図浮彫の出土した遺跡にみられる。同様に柱礎と仏伝図をだしたリリ・テペの土器もこれにちかい。だから、この土器の年代をおよそクシャーナ期にもとめることができる。ホジャ・ガルタン・テペの蓮華文スタンプもまた、この時代にふさわしいものといへよう。

ガルダンのバルク II (クシャーナ期) にぞくする黒色土器にも、ホジャ・ガルタンと同形、同大の大形土器¹⁾がある。

ホジャ・ガルタン No. 1 テペの土器 大形の土器 (Figs. 176-3; 114-4) はホジャ・ガルタン No. 2 テペや、ふつうの大形土器とは異質で、むしろ、質、形態ともども、プレジョン B の壺 a に共通してゐる。

7. クンドゥツ周辺

1) J. C. Gardin; *Op. cit.* Pl. 8-4, 5a

バージャーとライトは、1938年、クンドゥヅの町から800m 足らず西方、河にいたる道路の南20m ばかりの地点、個人の邸宅内でコリント式石製柱礎を¹⁾三個発見したと記してゐる。われわれはその遺跡を

たづねあてることができなかった。

またアッカ²⁾ンらが1936年に発掘したクンドゥヅの東北約3kmにある仏教寺院址も、たづねあてることができなかった。

VIII イシュカミシュよりチャール

カナバードよりアリアバードに通ずる道を取り、台地上にでてすこしいったところを左に折れ、涸川をそって谷あひを北上する。つぎに、谷をはなれてひくい山の起伏するなかをさらにかみの方にゆく。ジャイルワJailwa村のところから東にむかふ。カナバードから自動車で一時間あまりで前方にイシュカミシュの盆地がひらける。坂を降りきったところがイシュカミシュの村である。東西数km、南北20数kmの盆地で、丘の麓に点々と泉がある。チャールにゆくためには、こゝの村長からチャールに連絡し、チャール峠まで迎へのウマをよこしてもらふ。イシュカミシュの盆地を縦断して、約18km、その北部をかぎる山にある低いチャールChar 峠までジープでのぼる。こゝで車をすて、迎へのウマに乗って急坂をバンギBangi河までくだる。河をわたって、サイ・チャラブSai-Chalab河ぞひに東北にすこしゆくと、チャールに達する。

イシュカミシュの盆地には、あまり大きくないテペが点在する。いづれも泉、またはそれから流れた小流のかたはらにある。草が生え、または耕作されてゐて、土器片はすくない。

1. ランザジョン・モスク Ranzajon Mosk の礎石 — 9月20日 —

チャールの村長の家の西隣に小モスクがある。木造で100年ほどたつてゐるといふ。このモスクのわきに墓地があり、そこにスルク・コタールその他に

みるごとき、ハレニズム風の円形礎石が、ひとつある(Figs. 178, 132¹⁾。35年ばかりまへからあるといふ。墓を掘るさいにでも掘り出されたものであろうか、地上

にころがってゐる。さきに岩村忍教授が、1959年にこゝをたづねて発見されたものである。この礎石のほかには、付近に同時代と思はれる遺物はみあたらない。

2. クローラ・テペ Klōla-Tepe — 9月20日 —

前記モスクの北100m ばかりのところにある。東西7~80m、南北約50mの長方形のテペ(Fig. 82)で、西部が一段高くなり、南北45m、東西20m ばかりある(Fig. 179)。東部は平らなテラス状をなし、古い墓が点在する。河にのぞむ有利な地形からみて城塞址であらうか。採集した土器は少量、しかも口縁部の破片がない。時代を知る手がかりはない。

赤いスリッパの磨研土器、サマルカンド式とおもはれる白釉陶と、炆器にちかい硬質の白釉陶がある。

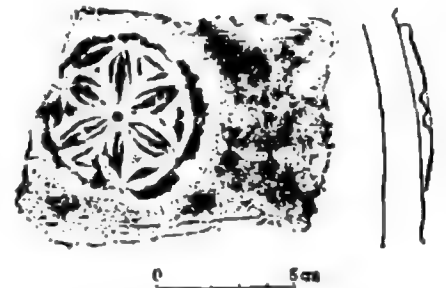


Fig. 177. ホジャ・ガルタン
土器の印文
Stamped Pattern of
Khoja-Ghaltan Pottery

1) F. Barger and Ph. Wright; *Op. cit.* p. 43, Pl. IX-4.

2) J. Hackin; *Fouilles de Kunduz* (MDAFA, Vol. 8) Paris 1959, pp. 19-21.

3. テモルショ・テペ Temorsho-Tepe

— 9月20日 —

前記のクローラ・テペの東南に約15mへだてゝあるテペ。南北40m, 東西30m。このうち南西に25×10mほどの一段と高い部分があり、この部分は周囲が土壁状にやゝ高まってゐる (Fig. 83)。プレションB式と同質の大形土器片、厚さ4~6cmのレンガを少量ひろった。

このほか村長の家のすぐ北側にひくいテペがあり、現在墓地につかはれてゐる。

4. チェシュメ・カイナル・テペ Cheshme-Kainar-

Tepe はか — 9月21日 —

チャール峠よりイシュカミシュにいたる道から、いくつかのテペがみえる。そのうち道路にちかいもの若干によってみた。このテペはイシュカミシュより約9km, 道路の西側にある (Fig. 84)。自然の丘に密接し、丘全体は100×50mばかり、高さ2~3m, 北部に一辺90mほどの方形で、やゝ高い部分がある。少量の土器片を採集。ホヤ・ガルタン式の大形土器、バルク粗製土器に似た土器、有溝手をふくむ褐色の土器若干がある。このテペの南約200mにも小テペがある (Fig. 85) が、土器片はみられない。

5. カシュカリ・テペ Kashkari-Tepe

— 9月21日 —

イシュカミシュより約5kmのところ、道路の西にある (Fig. 86)。周囲に堀がある。長さ約150m, 低い台状をなす。東よりに高さ6m, 長さ30mの高い部分がある。土器少量を採集。復原径28cmの底破片をふくむ大形土器破片、赤褐色の有溝把手や、がき直線文をもつ口縁部破片、白と紫の釉をとどめる破片がある。

6. オブラウ・テペ Oblau-Tepe — 9月21日 —

イシュカミシュより約2km, 道路の西側にある (Fig. 87)。高さ3.4m, 45×60mの方形をなし、南二山にわかれてゐる。中央西麓に泉がある。土器少量を採集。このなかに大形土器の底(径22cm)がある。底は胴部の器壁(1.3cm)よりもうすく1cmほである。

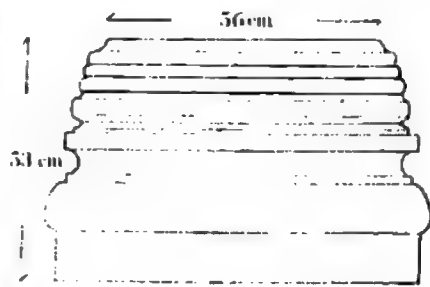


Fig. 178. チャール,
ランザジョン・モスク発見柱礎
Pillar Base from
Ranzajon Mosk, Char

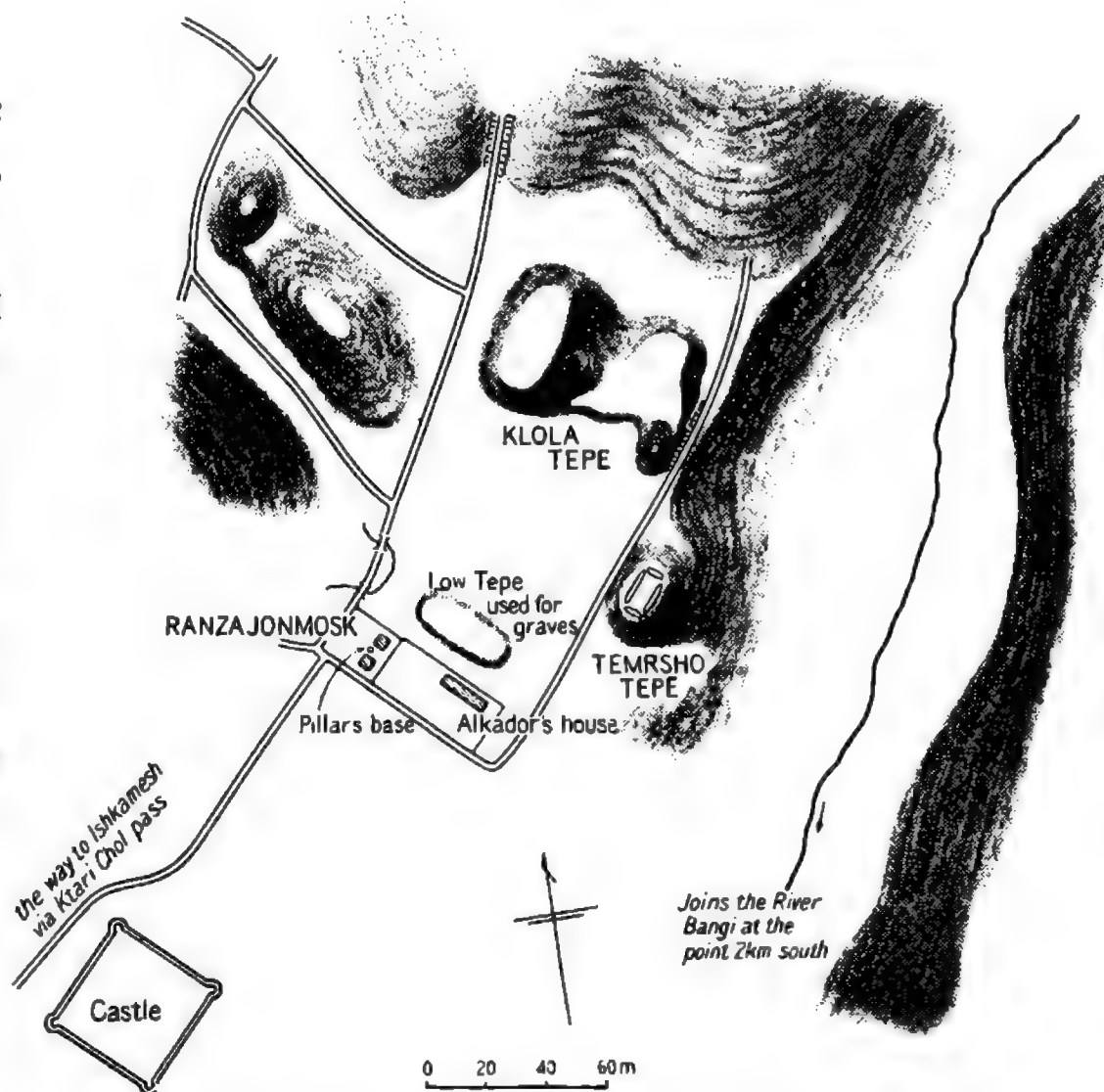


Fig. 179. チャール遺跡図 Archaeological Sites in Char

7. イシュカミシュのバラ・ヒッサール

Bala-Hissar またはカラ・テペ Kala-Tepe

— 9月21日 —

イシュカミシュの南東約1km, チャール峠にいたる道路のわきにある (Fig. 88)。一辺約130mの方形をなし、高さ数m。周囲に堀がめぐり、堀の一部に水が湧いてゐる。台地のうへは平らで、周囲にひくく土城の痕跡がのこり (Fig. 89), 東隅に高さ12~3mの高い部分がある。その麓にも空堀がのこる。土器

片少量を採集。大型土器としては浅い器形で口縁内部に波状文のあるものがある。小型土器にはシャリ・バヌAの壺 (Fig. 153-8) のやうな器形の土器もある。ファイザバード式三彩花文陶と、飴釉陶とがある。

(8) イシュカミシュ西方のテペ — 9月21日 —

イシュカミシュの西方、こゝにはいつてくる道路の南方傾斜地にも一、二のテペがのぞまれたが、いつてみなかった。

IX バルファク付近

カーブルよりハイバクへの旅行の途中、街道ぞひの若干の遺跡を見学した。そのうちバルファクの城塞では土器を採集した。

(1) バルファク Barfak 城塞 — 9月3日 —

ドァブ Doāb とドシ Doshi との間、ドァブより約20kmの所、街道の東側に突出した半島状の山の頂に、かなり原形をとどめた城塞が建つてゐる。泥レンガ

づみの長方形建物で、四隅、両長辺に平面円形の塔がつく。塔には銃眼がある。この付近で土器片を採集したが、建物との関係は不明である。

こゝで採集した土器は、砂まじりの粗質で、色は赤く、かたくやけてゐる。粘土紐をつみあげてつくられてゐる。彩文のない壺形土器 (Fig. 179-7) は、ロクロでつくられた可能性をもつ唯一の破片であつて、あかいスリップがかゝつてゐる点でも例外的で

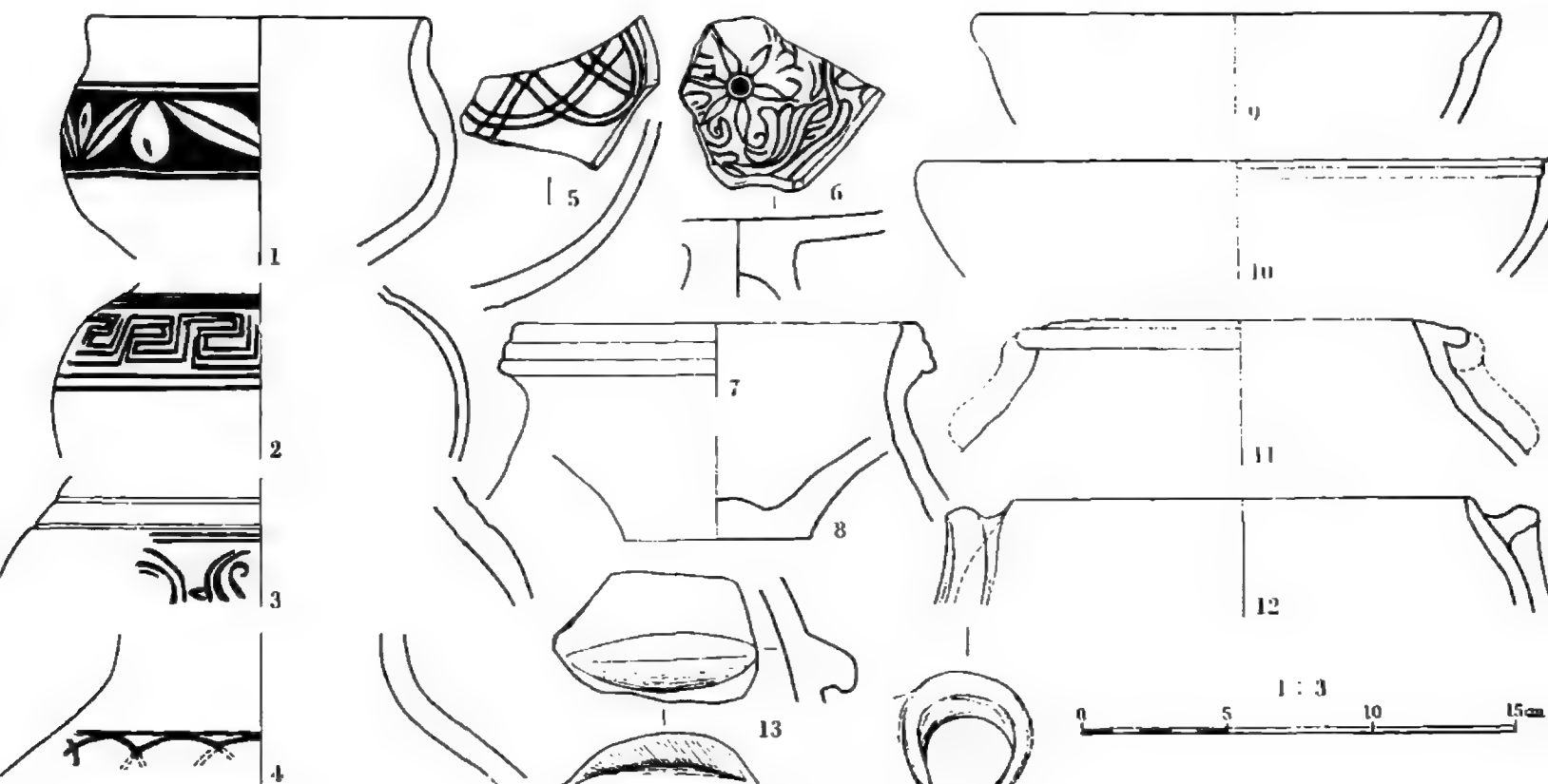


Fig. 180. バルファク土器 Barfak Pottery

ある。しかし、そのスリップにしても、プレション A、シャリ・バス A のそれとはくらべものにならぬ粗末なものである。

バルファクの土器を代表するものは、彩文の土器である。彩文は焼成の前につけられ、現状では 1 例をのぞき、すべてが黒い。その 1 例といふのは、あかっぱい茶色になってゐる (Figs. 139-2, 180-2)。彩文土器は表面がていねいに磨研されてゐる。壺には、比較的背のひくい、口の大きくひらいたもの (Figs. 139-1, 180-1) と、まるい器体にしまった頸のつくもの (Figs. 139-2~4, 180-2~4) がある。2, 3 は胴上半と頸とがあさい凹線によってへだてられてゐる。そして、1~4 のいずれも、頸部を無文帯とし、胴上半をかざっている。

鉢には、口縁内部に段のつくもの (Figs. 139-7, 180-9) と、それにかはって、口縁を下、またはすこしのあみだをおいて、あさい凹線をいれたもの (Fig. 180-

10) とがある。そして、この段または凹線より上の幅のせまい部分が彩文でかざられることがある。それらでは、それより下には文様がついてはゐない。しかし、Fig. 180-5 では、文様がふかくまではりこんでゐる。壺のばあひとちがって、鉢は内外ともにいねいに磨きあげてゐる。Fig. 180-6 は、おそらく高杯であらうが、十分にみがいた平らな盤の面。暗文で複雑な文様を表現してゐる。

バルファクと同形式の彩文土器は、他にバーミーンのシャリ・ゴルゴラにもみいだされてゐる。

バルファクにはこのほか、かざられない土器として、弧状の把手をつけた釜があり (Figs. 139-5, 8, 180-11~13) またシャリ・バス (Fig. 154-24) に似た形態の土器がある。これらはいづれも、すくけてゐるか、あるいは火熱をおびたあとがある。唯一の底 (Fig. 180-8) は、糸切痕をとどめてゐる。

む す び

以上を総覧するに、山中の谷間には洞窟遺跡があり、オクサス河流域の平原にはテペ遺跡がみられる。なかでも、テペはバンディ・アミール河下流域、フル河下流域、クンドゥヅ河下流域およびイシュカミシュ盆地に集中的にみられた。そのうちバンディ・アミール河が平原に流出して分流する地域には、大のものをふくむ無数のテペが散在し、紀元前後よ中世におよぶ土器、陶器片が多数散布する。フル河下流の平原には、シャリ・バスのごとき広大な

都市遺跡があるが、テペはまばらである。バグラ盆地、クンドゥヅ付近には概して小型のテペが多く、時代の知れるものについてみるとクシャーナ朝のものが目立つ。イシュカミシュ盆地も小型のテペが多い。時代不明のものが多いが、おほむねクシャーナ朝からイスラム期におよぶものらしい。前節で記したテペの採集遺物を、時代別に表にするとつぎのごとくなる。

遺跡 Site	陶器、土器形式 Pottery Type	シャリー・バナ A 式 Shār-i-Banu A Type	シャリー・バナ B (フレッシュン B) 式 Shār-i-Banu B (Preshon B) Type	シャリー・バナ C (フレッシュン C) 式 Shār-i-Banu C (Preshon C) Type	フレッシュン A 式 Preshon A Type	ホジャ・ガルタン 式 Khoja-Ghaltan Type	サマルカンド 式 Samar-kand Type	バミーヤン 式 Bamiyan Type	ハザール・スム 式 Hazar-Sum Type	ファイズアバード 式 Faizabad Type	その他 イスラム・釉陶 Other Islamic Glazed Pottery	その他 土器 Other Pottery
ハイバクより クシュ・クル ガン	From Haibak to Tash-Kurgan ハイバクのバラ・ヒッサール Bala-Hissār at Haibak ハザール・スム Hazār-Sum フェローズ・ナクシール Ferōz-Naqshīr		△		○				○	△		
クシュ・クルガン よりバルク	From Tash-Kurgan to Balkh シュール・テベ Shūr-Tepe シャリー・バナ Shār-i-Banu クアル・モハマッド・ハーン・テベ Qual-Mohamad-Khān-Tepe カファル・カラ・テベ Kafar-Kala-Tepe	○	△				△	○			△	△
バルフ附近	Balkh バルクのバラ・ヒッサール Bala-Hissār at Balkh テベ・ザルガラ Tepe-Zargaran ナディール・テハ Nadīr-Tepe	△					△			△	△	△
バルクより クチャク	From Balkh to Aq-Chah ゴバクリ・テベ Gobakli-Tepe テベ・サラ Tepe-Sala サラール・テベ Salar-Tepe		△	?	△			?				
アクチャより バルク	From Aq-Chah to Balkh ハロバード・テベ Halobād-Tepe プレション・テベ Preshon-Tepe チシュ・テベ Chish-Tepe ナスラト・テベ Nasrat-Tepe ファイズアバード・テベ Faizabād-Tepe モムレク・カラ・テベ Momlek-Kala-Tepe シャソリム・ポチャ・テベ Shasolim-Pocha-Tepe アクチャより 39 km 東のテベ Tepe 39km E. from Aq-Chah	△	○	△	△		△			△		
クンドゥツ より	From Pul-i-Khumli to Kundūz チャムカラ・テベ Chamkala-Tepe リリ・テベ Lili-Tepe ジェル・テベ Jel-Tepe			?		○						○
クンドゥツ附近	Kundūz クンドゥツのバラ・ヒッサール Bala-Hissār at Kundūz アホンザダ・テベ Akhonzada-Tepe マルザ・ラマザン・テベ Marza-Ramazan-Tepe ホジャ・ガルタン・テベ Khoja-Ghaltan-Tepe					△				△	△	
イシュカミシュより チャール	From Ishkamish to Chār クローラ・テベ Klola-Tepe テモールショ・テベ Temorsho-Tepe チェシュメ・カイナル・テベ Cheshme-Kainar-Tepe カシュカリ・テベ Kashkari-Tepe オブラウ・テベ Oblau-Tepe カラ・テベ Kala-Tepe		?			△	△					△

引用文献目録

MDAFA Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan
 ASI Archaeological Survey of India
 JRAS Journal of the Royal Asiatic Society

一 般

- Cunningham, A.; *Ancient Geography of India*. 1886.
 Calcutta 1871.
 Marshall, J.; *Taxila*. 3 vols, Cambridge 1951.
 Fergusson, J. and Burgess, J.; *Cave Temples of India*. 2 vols, London 1880.
 Foucher, A.; *La Vieille Route de l'Inde de Bactre à Taxila* (MDAFA, Vol. 1) 2 vols, Paris 1942, 1947.
 Laessle, De and Talbot, M. G.; *Discovery of Caves on the Murghab* (JRAS, N. S. Vol. 18) London 1942, 1948.
 Reuther, O.; *Sasanian Architecture* (A Survey of Persian Art, Vol. 1) London and New York 1930.
 Stein, A.; *Serindia*. Vol. 2. Oxford 1921.
 Wilson, H.; *Ariana Antiqua*. London 1841.
 Yate, E. C.; *Northern Afghanistan*. Edinburgh and London 1888.
 足立喜六 『大唐西域記の研究』二巻, 東京, 京大出版部 1942, 1948.
 長広敏雄, 水野清一『龍門石窟の研究』東京 1940

第 一 部

- Anati, E.; *Rock Engravings in the Central Negrev* (Archaeology, Vol. 8—1) Ohio 1955.
 Barthoux, J.; *Les Fouilles de Hadda* (MDAFA, Vol. 4) 2 vols. Paris 1930, 1933.
 Foucher, A.; *Notes sur les Antiquités Bouddhiques de Haibak (Turkestan, Afghan)* (Journal Asiatique, 205) Paris 1924.
 Francke, A. H.; *Antiquities of Indian Tibet* (AS New Imperial Series, Vol. 38) Calcutta 1914.
 Godard, A. et Y., et Hackin J.; *Les Antiquités Bouddhiques de Bâmiyân* (MDAFA, Vol. 2) Paris Bruxelles 1928.
 Hackin, J.; *Nouvelles Recherches Archéologiques de Bâmiyân* (MDAFA, Vol. 3) Paris 1933.

第 二 部

- Beane, H. A.; *Note on Udyâna and Gandhâra* (JRAS, N. S. Vol. 18) London 1896.
 Foucher, A.; *Notes on the Ancient Geography of Gandhâra* (A S I) Calcutta 1915.
 Harrick, H. B.; *Report of a Tour through Behar, Central India, Peshawar, and Yusufzai* (ASI, Vol. 19) Calcutta 1885.
 Howland, B.; *The Art and Architecture of India*. Harmondsworth 1956.
 Simpson, W.; *The Caves of Afghanistan* (JRAS, N. S. Vol. 14) London 1986.
 Smith, V.; *A History of Fine Art in India and Ceylon*. Oxford 1911.
 Stein, A.; *An Archaeological Tour in Upper Swat and Adjacent Hill Tracts* (Mém. of ASI, Vol. 42) Calcutta 1930.
 Tucci, G.; *Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat* (East and West, N. S. Vol. 9—4) Rome 1958.

第 三 部

- Barger, E. and Wright, Ph. ; *Excavation in Swat and Explorations in the Oxus Territories of Afghanistan* (Memoirs of ASI, Vol. 64) Delhi 1941.
- Burnes, A. ; *Travels into Bokhara*. London 1834.
- Carl, J. ; *Fouilles dans le Site de Shahr-i-Banu* (MDAFA, Vol. 8) Paris 1959.
- Carl, J. ; *Sondages au Zaker-tépé* (MDAFA Vol. 8), Paris 1959.
- Coon, C. S. and Coulter, H. W. ; *Excavation of the Kamar Rock Shelter*, (Afghanistan, Vol. 8-1), Kabul 1955.
- Coon, C. S. ; *The Seven Caves*. New York 1957.
- Diakonov, M. M. ; *Arkheologicheskie Raboty v Nijnem Techenii Reki Kafirnigana (Kobadian) (1950 -1951 gg.)* (Materialy i Issledo vaniya po Arkheologii SSSR, 37) Moskow and Leningrad 1953.
- Fischer, K. ; *Gandharan Sculpture from Kunduz and Environs*, (Artibus Asiae, Vol. 21-3/4) Ascona 1958.
- Gardin, J. C. ; *Céramique de Bactres* (MDAFA, Vol. 15) Paris 1957.
- Ghirshman, R. ; *Bégram* (MDAFA, Vol. 12) 1946.
- Hackin, J. ; *L'Oeuvre de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan*. Tokyo 1933.
- Hackin, J. ; *Fouilles de Kunduz* (MDAFA, Vol. 8) Paris 1959.
- Shakur, M. A. ; *A Dash through the Heart of Afghanistan, being Personal Narrative of an Archaeological Tour with the Indian Cultural Mission*. Peshawar 1947.
- Shlumberger, D. ; *La Prospection Archéologique de Bactres (Printemps 1947)* (Syria, 26) Paris 1949.
- Schlumberger, D. ; *Surkh Kotal: Un Site Archéologique Kouchane en Bactriane* (Afghanistan, Vol. 9-1) Kabul 1954.
- Xanthoudides, S. ; *Some Minoan Potter's Wheel Discs* (Essays in Aegean Archaeology) Oxford 1927.
- Yate, C. E. ; *Northern Afghanistan or Letters from the Afghanistan Boundary Commission*. London 1888.

HAIBAK
AND
KASHMIR-SMAST

FORWORD

In pursuit of our long study of the cave-temples in China, we have now extended our interest to those in Central Asia, Afghanistan, Pakistan, and India from which they evolved. When in 1960 we first began to survey the Buddhist remains of Afghanistan and Pakistan, we decided to concentrate on the cave-temples of Haibāk in Afghanistan and on those of Kashmir-Smast in Pakistan. The former are rare examples dug into limestone mountains and the latter is unique. Although both at present contain no images or mural paintings, they do have excellent architectural features such as dome and squinch-arches in the former and the fine masonry in the latter, which would seem to have contributed greatly to the history of Buddhist architecture. Our survey is, of course, far from complete, but our desire was to publish our findings as quickly as possible in the sincere hope that they will stimulate suggestions and criticisms from colleagues in the field.

The third part of this report contains the general results of our archaeological survey of Northern Afghanistan. Almost the whole volume is the outcome of the survey in 1960, but part also is the result of our 1959 expedition. In addition to the authors, Messrs. S. Tanaka, Chên Hsien-ming, N. Odani, and T. Katsufuji joined the expedition in 1960. Mr. Gholam Sakhil, of the Kabul Museum and Mr. Ahmad Istiaq Khan, Curator of the Mohenjo-Daro Museum, each sent by their respective governments, rendered most kind assistance in our work. Finally we would like to express our sincere gratitude to the Ministries of the two countries and to all the gentlemen concerned, especially to Dr. Abdul Rahim Ziyae, Director of the Kabul Museum, Dr. Fazal Ahmed Khan, Director of the Department of Archaeology in Karachi, Mr. Wali Ullah Khan, Superintendent of Archaeology in Lahore, and Mr. M. A. Shakur Khan, Director of the Peshawar Museum.

June 13th, 1962



S. MIZUNO

PART ONE

HAIBAK CAVES

INTRODUCTION

We are indebted to the famous monk-traveller, Hsüan-tsang 玄奘 (A.D. 602–664), for a very detailed account of the Buddhist culture of 7th century Afghanistan. Travelling southwards from the court of the Turkish Khan located on the side of the Chu river 素葉水, he arrived at Termez, a crossing point of the river Oxus (A.D. 630). However, he gave up the idea of crossing the river and turned in an easterly direction, passed through several countries situated on the north bank and at last reached Huo-kuo 活國, which can be identified as the ruin, Bālā-Hissār, to the north-east of Kundūz. From there, ascending the Kundūz river he visited Bāghlan and Ghorī, which he records as Po-chia 縛伽浪 and Ho-lu-hsi-min-chien 訖露悉泐健. From here, Hsüan-tsang crossed over a *kotal* or pass, journeyed through the Khulm valley, and at last arrived in Khulm. The site of Khulm, as described by Major E. Yate, lies to the north of the town of Tash-Kurgan and is about 600m by 3 ~ 400m large and about 10m in height. The circuit of the ruin fits Hsüan-tsang's description well but it seems somewhat too modern while Shūl-Tepe, a little north of this ruin, is more likely to be the site of the old Khulm of the 7th century.¹⁾ The record states that there were ten old temples and some 100 monks in the place. Hsüan-tsang proceeded from there to Balkh 縛呾 or ancient Bactria. He then entered the Hindu-kush mountains, undergoing the hardships of precipitous paths and in fear of robbers. He ascended the Aq-Kupruk valley and, probably passing by the Lake Band-i-Amir, he at last arrived in Bāmiyān 梵衍那, where he found several dozen temples and several thousands of monks in addition to two colossal Buddha statues.

Haibak is an oasis town in the Khulm valley surrounded by barren hills. Even though Buddhism was at its height, nothing existed there to induce this Chinese monk to mention the site. However, the distance from Puli-Khumri to Tash-Kurgan amounts to roughly 145 km, requiring about a ten day journey. He may have slept one night in Haibak. If so, he might well have preferred the temple of Takht-i-Rustam as a resting place to the caravan-serai in Haibak.

At present, the traveller must drive three days by car from Kabul to Mazar-i-Sharif, staying one night in Doab and one in Haibak. Although Haibak is situated in the centre of a dry area, the town itself is well planted and surrounded by green orchards being well irrigated by a tributary of the Khulm

1) Mayor E. C. Yate; *Northern Afghanistan*. Edinburgh and London 1888, p. 317.

river. Situated around the *meidan* or central area, are the government house, post-office, telegraph office, primary school and rest house while to the north and south are bazars. The population is made up chiefly of Uzbeks with a minority of Hazara and Tajik people. Major Yate said that they are Chagatai but this may well be the name of an Uzbek clan. Haibāk is less than 1,000 m above sea level but it is cool even in summer, from which comes the popular phrase “Samangan night”, which means a fine night. Samangan is the old name of Haibak, and the rest house is now called “House of Samangan”.

The cave-temple of Takht-i-Rustam, the subject of this report, is situated in the south-west corner of the town, less than 2 km from the *meidan*. From here low hills begin to rise to the west. Although unfortunately Hsüan-tsang did not record them, a group of caves are here dug into the limestone mountain. They still retain traces of antiquity, though the severe destruction wrought by Muhammadans and the complete clearance effected by re-users have resulted in the disappearance of all the images and stucco decoration. “Takht-i-Rustam” means the Throne of Rustam, who is a hero among the Iranian speaking people.

The site was first reported in 1886 and 1888 by Captain M. G. Talbot and Major C. E. Yate, who were in the British Boundary Commission. It was further explored in 1923 by A. Foucher, who published a preliminary report with sketches of the caves.

In August 1959, travelling from Herat to Kabul through Maimana and Balkh, we visited the site at Haibāk and realized that the caves are rare examples of excavations into limestone rock instead of conglomerate, in having a large lotus flower carved on the ceiling in Cave 1, and in having a large stūpa hewn from the natural rock in Cave 6. Subsequently in September 1960, we proceeded directly from Kabul to Haibak and spent about one month surveying the caves. In this we had the help of M. Gholam Sakhi, a member of the Kabul Museum.

CHAPTER ONE CAVES AT THE FOOT

[Pls. 2~22]

The area is surrounded by a spur reaching down from the western hill and a small independent hill, which forms a small basin, which is shaded on the east by a plantation of trees irrigated by a *juui* or small conduit. On the summit of the spur is situated a stūpa cave and at the foot of the north hill are five caves ranged side by side (Pls. 1, 2-1, Plan 1). Since the site is quite isolated yet at the same time not far from the town, the monks enjoyed tranquility on the one hand while on the other they could beg easily.

As the ruins of a later wall still stand and much repair work is found in Caves 2 and 3, some travellers seem to have been here until quite recent times. Scattered potsherds are very common, but these date from the 11th century.

[CAVE 1] The main room is domed (Plan 2), while the ante-room has no ceiling (Pl. 2-2). The latter is rectangular, measuring 18 m by 11 m. The entrance descends into the main room by means

of three steps. On each side of the entrance is a window to give light. Another window opens not in the outside wall, but upwards in the hillside itself, a feature made possible by the comparative thinness of the outside wall. In China as well as in India, the outside wall was usually cut down so deeply that the entrance and the window are located one above the other on the same wall. The windows are all roughly made with larger openings on the outside than on the inside.

The main room is round and domed, measuring 10.50m across and 10.80m high (Pls. 4, 5). On the back wall are two niches one above the other which probably contained stucco images. In the Yün-kang caves in North China, the upper niche usually contains a Maitreya seated in cross-ankled position while the lower has a Sākyamuni Buddha seated in cross-legged position. The lower, i.e. main niche has a projection in front, seemingly a staircase. The niches have completely rounded arches while their back walls are flat, differing from the curved back walls usually found in China. On the back walls are many small holes originally for pegs by means of which the images were attached.

Nothing remains on the lower parts of the surrounding walls which have very rough surfaces. The upper parts have carved lotus flowers arranged in four horizontal rows. Except for a few pieces these are much decayed. The lotus flowers are heavy with eight petals. The stamens are arranged in a circle and the ovaries are dotted. The spaces between the flowers are filled with flowers with three or four petals (Pl. 7).

At its top, the wall curves so abruptly that the dome becomes very flat. On this domed ceiling is carved a single large lotus flower in full bloom. The receptacle has seven ovaries in the centre surrounded by radiating lines for stamens. There are 26 petals in one radius and these are arranged in 9 rows. A peculiarity is that each petal has an ovary and stamens. At the outside of the bloom small petals are carved between the large ones (Pl. 6 Plan. 3.).

[CAVE 2] Cave 2 stands just beside Cave 1 (Plan 4). The outside wall is broadly cut, measuring about 42m in length, and at several parts it has been repaired with mud and brick (Pl. 3-1). At each end is now an entrance with steps leading downwards, but originally there were another four such entrances between the present two. The floor inside is on a lower level than the outside ground level but because of the scanty rainfall, there is no danger of water entering the cave.

Entering the cave from the west entrance, one is faced with a long corridor or passage with vaulted ceiling, measuring about 12m in length (Pl. 9-2). On the left is a side room and at the end a back room, which is rectangular, 7.50m by 3.00m (Pl. 10-2). The ceiling is vaulted but there is no niche. Just outside the back room is a round depression in the floor, the use of which has not yet been ascertained (Pl. 10-3).

The side room is rectangular, measuring 5.00m by 2.50m (Pl. 10-1). The ceiling is vaulted. The back wall has a deep niche with rounded arch. It is entirely discoloured by smoke and since no trace of an image can be made out, it would appear to be an alcove for a lamp. Just below and on the left wall is another niche. In the floor is a round deep hole with a drain (Pl. 10-3) but since this is situated in the centre of the room it is unlikely to have served for water storage. Could it have been used for an oven or stove?

In the east wall of this side corridor are two entrance holes each leading to a long corridor ex

river. Situated around the *meidan* or central area, are the government house, post-office, telegraph office, primary school and rest house while to the north and south are bazars. The population is made up chiefly of Uzbeks with a minority of Hazara and Tajik people. Major Yate said that they are Chagatai but this may well be the name of an Uzbek clan. Haibāk is less than 1,000 m above sea level but it is cool even in summer, from which comes the popular phrase "Samangan night", which means a fine night. Samangan is the old name of Haibak, and the rest house is now called "Hotel of Samangan".

The cave-temple of Takht-i-Rustam, the subject of this report, is situated in the south-west corner of the town, less than 2 km from the *meidan*. From here low hills begin to rise to the west. Although unfortunately Hsüan-tsang did not record them, a group of caves are here dug into the limestone mountain. They still retain traces of antiquity, though the severe destruction wrought by Muhammadans and the complete clearance effected by re-users have resulted in the disappearance of all the image and stucco decoration. "Takht-i-Rustam" means the Throne of Rustam, who is a hero among the Iranian speaking people.

The site was first reported in 1886 and 1888 by Captain M. G. Talbot and Major C. E. Yate, who were in the British Boundary Commission. It was further explored in 1923 by A. Foucher, who published a preliminary report with sketches of the caves.

In August 1959, travelling from Herat to Kabul through Maimana and Balkh, we visited the site at Haibāk and realized that the caves are rare examples of excavations into limestone rock instead of into conglomerate, in having a large lotus flower carved on the ceiling in Cave 1, and in having a large stūpa hewn from the natural rock in Cave 6. Subsequently in September 1960, we proceeded directly from Kabul to Haibak and spent about one month surveying the caves. In this we had the help of M. Gholam Sakhi, a member of the Kabul Museum.

CHAPTER ONE CAVES AT THE FOOT

[Pls. 2~22]

An area surrounded by a spur reaching down from the western hill and a small independent hill, contains a small basin, which is shaded on the east by a plantation of trees irrigated by a *juui* or small conduit. On the summit of the spur is situated a stūpa cave and at the foot of the north hill are five caves ranged side by side (Pls. 1, 2-1, Plan 1). Since the site is quite isolated yet at the same time not far from the town, the monks enjoyed tranquility on the one hand while on the other they also could beg easily.

As the ruins of a later wall still stand and much repair work is found in Caves 2 and 3, some travellers seem to have been here until quite recent times. Scattered potsherds are very common, but these date from the 11th century.

[CAVE 1] The main room is domed (Plan 2), while the ante-room has no ceiling (Pl. 2-2). The latter is rectangular, measuring 18 m by 11 m. The entrance descends into the main room by means

f three steps. On each side of the entrance is a window to give light. Another window opens not on the outside wall, but upwards in the hillside itself, a feature made possible by the comparative lowness of the outside wall. In China as well as in India, the outside wall was usually cut down so deeply that the entrance and the window are located one above the other on the same wall. The windows are all roughly made with larger openings on the outside than on the inside.

The main room is round and domed, measuring 10.50m across and 10.80m high (Pls. 4, 5). On the back wall are two niches one above the other which probably contained stucco images. In the Yün-kang caves in North China, the upper niche usually contains a Maitreya seated in cross-ankled position while the lower has a Sakyamuni Buddha seated in cross-legged position. The lower, i.e. main niche has a projection in front, seemingly a staircase. The niches have completely rounded arches while their back walls are flat, differing from the curved back walls usually found in China. On the back walls are many small holes originally for pegs by means of which the images were attached.

Nothing remains on the lower parts of the surrounding walls which have very rough surfaces. The upper parts have carved lotus flowers arranged in four horizontal rows. Except for a few pieces these are much decayed. The lotus flowers are heavy with eight petals. The stamens are arranged in a circle and the ovaries are dotted. The spaces between the flowers are filled with flowers with three or four petals (Pl. 7).

At its top, the wall curves so abruptly that the dome becomes very flat. On this domed ceiling is carved a single large lotus flower in full bloom. The receptacle has seven ovaries in the centre surrounded by radiating lines for stamens. There are 26 petals in one radius and these are arranged in 9 rows. A peculiarity is that each petal has an ovary and stamens. At the outside of the bloom small petals are carved between the large ones (Pl. 6 Plan. 3.).

[CAVE 2] Cave 2 stands just beside Cave 1 (Plan 4). The outside wall is broadly cut, measuring about 42m in length, and at several parts it has been repaired with mud and brick (Pl. 3-1). At each end is now an entrance with steps leading downwards, but originally there were another four such entrances between the present two. The floor inside is on a lower level than the outside ground level but because of the scanty rainfall, there is no danger of water entering the cave.

Entering the cave from the west entrance, one is faced with a long corridor or passage with vaulted ceiling, measuring about 12m in length (Pl. 9-2). On the left is a side room and at the end a back room, which is rectangular, 7.50m by 3.00m (Pl. 10-2). The ceiling is vaulted but there is no niche. Just outside the back room is a round depression in the floor, the use of which has not yet been ascertained (Pl. 10-3).

The side room is rectangular, measuring 5.00m by 2.50m (Pl. 10-1). The ceiling is vaulted. The back wall has a deep niche with rounded arch. It is entirely discoloured by smoke and since no trace of an image can be made out, it would appear to be an alcove for a lamp. Just below and on the left wall is another niche. In the floor is a round deep hole with a drain (Pl. 10-3) but since this is situated in the centre of the room it is unlikely to have served for water storage. Could it have been used for an oven or stove?

In the east wall of this side corridor are two entrance holes each leading to a long corridor ex

tending 41m. It is vaulted, 3.70m in height in the front corridor (Pls. 8-1, 9-1), and 4.20m in the rear corridor (Pl. 8-2). At the east end of the front corridor is a niche and along the north wall a long bench, from which 13 holes lead through into the rear corridor. Because of these compartments the villagers call it a *bazar*. Although the compartments are different in construction from those of the vihāra in Pakistan and India, they most probably also served as monks' cells.

The rear corridor is narrower and higher, and of course darker than the front one. No common bench is here provided.

[CAVE 2A] On the east wing of the outside wall, is found a small cave facing west (Pl. 3-2). Entering by steps, the inside is rectangular, with a niche on each wall. The niches probably served as alcoves in the monks' cells (Plan 4).

[CAVE 3] This cave also comprises ante-room and main room (Plan 5). On each side of the entrance is a window serving the ante-room while above in the slope is a window for the main room (Pl. 11). The windows are usually irregular which differs from those in India and China.

Descending steps, the visitor enters into a rectangular and vaulted room (Pls. 12-1, 13-1). Though the steps have recently been repaired, the inside floor must have been built below the outside ground level since it was first excavated. The size of the room, 6.50m by 13.50m, is spacious and it contains nothing except a niche on the east end. The use of the niche has not been ascertained but the semi-dome of the ceiling suggests it might have been used as platform for images. The semi-dome has squinch arches at each corner (Pl. 18-6). Everywhere there is repair work and bad discoloration from the smoke of recent occupiers.

The entrance gateway to the main room opens a little to the west on the north wall (Pls. 12-3, 13-2). At the front it is arched and 2.70m wide, but it soon narrows to 1.40m with a flat ceiling. On each side of the narrow passage are slender pilasters. A squinch arch is found at the bottom of the arched ceiling.

The entrance passage opens near the west corner of the main room front wall. The main room itself is peculiar in that it does not lie parallel with the axis of the ante-room. It is about 10.80m square and has a large niche on each side.

The niche has a fine round arch supported by slender pilasters, and inside lines were cut for decorative purposes at capital height. The niche on the back wall has a notched decoration between these cut lines (Pls. 14, 17), while the niche on the side wall a squinch arch at each corner (Pls. 15-6, 18-3~5). The platform of the side niche is higher than that of the central niche. The latter has a projection for a staircase as in Cave 1. Compared with these niches, the niche on the front wall is particularly shallow and roughly made (Pl. 15-2).

Above the round arch of each niche is carved a beam and squinch arches which support a dome (Pls. 15-1, 17, 18-1~2). This differs from the dome in Cave 1 in that it is completely round in shape with a finely carved surface. The bottom line of the dome rests on the squinch arches at the corners and on short pilasters at the tops of the round niches. The pilasters are short but have bases and capitals.

Although the surface of the dome is smooth, the walls in the niches are remarkably rough, which suggests the existence of an original plaster facing. The stucco images were originally set on the plastered walls, but these, of course, are now all lost.

PART ONE HAIBAK CAVES

[CAVE 4] This cave is of slightly more complicated construction comprising four rooms (Plan 19). The ante-room, measuring 6.70m by 5.80m, opens to the sky (Pl. 19-1). At the south-west corner is a round depression of uncertain use. There are two entrances, one leading from the east part of the back wall and the other from the north part of the west wall. The former gives access to the middle room and the latter to a small side room.

Behind the middle room lies the rear room which is rectangular and vaulted. It measures 4.40m long and 3.20m wide. It is completely bare with only a round hollow in the front floor. At the sides of the doorway are small holes, which might have supported doors. It may have been a monk's cell.

The middle room, 5.00m by 5.50m (Pl. 19-2), has a continuous bench on three sides. From this doorway leads to the rear room. On the north part of the east wall is an alcove.

In the centre of the floor is situated a large square tank (Pl. 20-4), 1.60m square and 1.60m deep. In one corner of the bottom of this is a round hollow, which may have been useful for scooping up water. To this tank leads a conduit from the side room. This tank is so devised that it collects all water from the side room, the floor of which slopes slightly down towards this room. The ceiling is quite high and round with a window to the front. A squinch arch is placed at each corner.

Entering from the side entrance one finds at the bottom a small room, which is so narrow that one monk could hardly have lived inside it (Pl. 20-1). To the right of the visitor is an entrance to the side room, which is rectangular, measuring 6.20m by 3.50m (Pls. 20-2~3). The ceiling of this is vaulted. All round the side walls is a long bench, which continues even at the entrance although here it is somewhat lower. Thus if water gathers on the floor, it is naturally collected by the conduit and led through the east wall into the tank in the middle room. There may thus be some truth in the villagers' claim that this cave is a bath. A slit for the conduit, on the wall between these two rooms, is large enough to allow a person to pass through.

[CAVE 5] This is a very peculiar cave (Plan 6). First a straight, very narrow passage was excavated (Pls. 21-1, 22-1), and then to the right of this a doorway was opened. The inside 2.30m wide and 1.00m deep is somewhat rectangular and vaulted. On the floor are two holes connected by a conduit which then runs underground to the east. The other end of the conduit opens at the base of the west wall (Pl. 21-3), and leads up and out of the wall through a narrow slit (Pl. 21-2). If one pours water into the conduit, it flows easily through the underground conduit and out of the cave (Pl. 22-2). It may, as the villagers say, be a lavatory or a steam bath.

Above the arched entrance are cuts for a lintel, which may have served for fixing some kind of door.

CHAPTER TWO STUPA CAVE ON THE SUMMIT

[Pls. 1, 23~31]

[CAVE 6] Cave 6 or Stūpa Cave occupies the summit of a spur (Pls. 1, 23). It is separated from the other caves by 240m and is 38m higher (Plan 1). The outside which faces west has three openings (Pl. 23), among which the southernmost only leads into this cave (Pl. 24-2). At each end of the outside

wall is a square hole dug into ground level rock. These may be holes for erecting posts for a row of *stambas* to indicate that it is a holy place (Plan 7).

The entrance tunnel is about 17m long with a flat ceiling (Pl. 24-4, Plan 8). No decoration was found on the walls, but there is just at the top of the tunnel and to the left a kind of chamber higher than floor level (Pl. 24-3).

Emerging from this entrance tunnel, the visitor is faced directly with the mass of the dome backed by the shining sky. The stūpa stands in the open air not in the cave. Turning to the left, he may go around the stūpa clockwise, i. e. perform the Buddhist *pradaksina* rite, and this stūpa sanctuary was originally planned for this purpose. The passage is about 2m wide, ascending a little to the north and then descending to the south. To the right the dome continues with a well-smoothed surface and to the left is the rough wall of the cave, of which one-third is almost vertical to the upper edge, while the lower two-thirds are concave in section. This is of interest in that it seems to show the method of excavation from both the upper and the lower levels. Facing the dome and to the right of the entrance tunnel is a quite commodious room, though this is now completely filled with earth.

The dome measures about 28m across and is about 8m high. It is roughly spherical with a slight angularity where it turns at the top (Pls. 25, 26, 27, 31-1). On top of the dome is carved out a square *harmikā* 8.00m by 8.00m. It faces south-west and thus does not agree with the direction of the outside wall (Pls. 28, 29).

A *harmikā* was originally a railing on the stūpa enclosing the *chatra* or umbrella, but later it became a single square block as we see it here. Sometimes railings in relief are shown but here on three pilasters and a beam are carved on each side. On the top of the *harmikā* there is a small square base for the *chatra*, which measures 2.30m square and has in its centre a round hole 0.80m across and 0.60m deep (Pl. 28-3). Of the original *chatra* nothing is now known.

In the south-east side of the *harmikā* is a tall, arched entrance (Pls. 29-1, 31-3~4), giving access to a round and domed room in the centre of the *harmikā* itself (Pl. 31-2). Certainly this was intended to be the reliquary room. The wall and the floor are neatly cut, but now nothing else remains.

Although this dome was excavated within the cave, it is unusual in that it is exposed to the open air. Moreover, to make its summit visible from the outside, the surrounding rock was cut down leaving only the north side. In addition, on the surface of the outside rock were cut several shallow drains leading water to the tank on the south side. This is of rectangular shape, about 6.50m by 6.00m and still holds fresh water. Two square windows and a flight of steps were provided for lighting and access respectively. Although the drains have recently been re-cut and the stepped entrance newly repaired, the whole construction preserves the character of the initial design which is basic in the locality.

This stūpa cave has fundamentally the same meaning as the so-called chaitya caves in India but differs greatly in style. It is not apsidal as are those in India and is unique. It gives the Takht-i-Mustam site a most holy atmosphere.

Several monks' cells were excavated by the side of this cave and the spacious hall in the entrance

tunnel is perhaps one of them. The room at the side which is placed parallel to this is another (Pl. 24-1, Plan 12). The latter about 18m long and less than 5m wide is similar in being long with an entrance tunnel. At present, it gives the appearance of being another entrance to the cave since its back wall has collapsed. However, originally it was a commodious room with flat ceiling and not an entrance. The wall is neatly cut and widens in the north-west corner (Pls. 24-5~6).

To the north of this room, opens another small room ii (Pl. 30-1, Plan 12), irregular in shape and with two entrances. Along these entrances, the floor is deeply excavated, suggesting that the room may have served as a raised bed. In this depression were found pot-sherds, as well as iron fragments of a saw and knife, and small bronze fragments (Fig. 3). A begging bowl of the fine red pottery may be attributed to the Kushān period.

Side room iii is situated on the east side opposite the dome (Pl. 31-1, Plan 12). It is small and irregular in shape with two entrances. The outside rock has a flight of small, irregularly cut steps, by means of which one may ascend the east side.

A. Foucher thought that this cave was unfinished and that the annex rooms were used for the accommodation of labourers during excavation. The excavation may have been stopped either when they found the crack in the dome or when the Ephthalites invaded the area. Although this question is difficult to prove, it would seem that the cave was in fact completed. It is certain that there was no intention to make the whole stūpa visible from the open. However, ignoring the problem of the side rooms, the arrangement of the outside wall and the water tank (Pl. 30-2) show the original idea of the cave. Finally, mention must be made of the engravings of goats found on the *harmikā*, on the dome and on the south wall of the side room ii (Pl. 30-3, Fig. 4). They are line engravings and very primitive in style, reminiscent of those frequently found in Pakistan and India. In Afghanistan A. Foucher reported two examples from Gorbānd and Lāghman,²⁾ and in Iran we saw some on the stone work of Passargadae, which seems to have some connection with those on the stone in Palestine.³⁾ The date is said in India to be the 5th century B.C. to 10th century A.D., but the examples found here belong to the post-5th century A.D. group. They seem to have been pastime activities of the masons during the construction of these caves.

CONCLUSION

Although it is difficult to say which part of the whole complex was earliest, the stūpa cave or Cave 1 on the south spur may be the original centre of this group. The fact that the stūpa cave faces west, disregarding the direction of the *harmikā*, may be related to the northern caves, of which one has a fine view from the front of this cave. The northern caves face southward towards the stūpa cave. As Cave 3 occupies the centre, it may be the earliest followed by the other caves on each side. Among

1) A. Foucher; *La Vieille Route de l'Inde de Bactre à Taxila* (MDAFA, 1) Vol. 1, Paris 1942, pp. 126, 127.

2) A. Foucher; *Op. cit.* Vol. 2, Paris 1947, Pl. XXXIX.

3) E. Anati; *Rock Engravings in the Central Negev* (Archaeology, 8-1) 1955.

them, Cave 1 and 3 contained images for worship. It may be remarked that the group comprising the two image caves and one stūpa cave as well as the vihāra cave and including bath and lavatory caves forms a well equipped temple.

The beds in the vihāra cave number only 13, but additional accomodation may have been provided outside the caves. The water tank for storing rain water, the floor sunk below the outside ground level and the inward slope of the windows are all typical features of a dry area.

The existence of bath and lavatory in the caves attached to the vihāra cave indicates how the monks actually lived in these caves. In India caves often had such facilities just like ordinary temples. The Kānheri caves in particular had many such facilities. However, in Chinese Turkestan only a few monks' cells were found, while in China there was only image and stūpa caves.

Such a large lotus flower as is seen on the domed ceiling in Cave 1 is unique, but a lotus flower of similar style may be seen on the lotus throne in Taxila. In China caves and niches of the Northern Wei period often have a lotus flower on the ceiling, the largest being in Cave 13 at Lung-mên.

The stūpa in Cave 6 is, as previously mentioned, quite unique. It has no base but springs directly from the ground. The dome is not very high, but it differs from the Dharmarājikā Stūpa in Taxila and the Great Stūpa in Sānchī. The large relic room as well as the pilasters are also remarkable.

Special mention should be made of the domed ceiling, the round arch and the squinch arches. They all seem to be closely related to brick construction. However, domed ceiling and round arches are found even in the earliest rock-cut caves in India, i. e. in those of the 3rd century B.C. Only the squinch arch must have its origin in brick construction.¹⁾ Its home may have been in Iran as for instance in the Palace of Ardashir (A.D. 226-242) at Firuzabād. It soon spreads as far as Chinese Turkestan where it is found in the Mirān site.²⁾

In Gandhāra one finds the ogive arch and in India the chaitya arch, but never a round arch. In Haibāk, neither the ogive nor the chaitya arch are found. The predominance here of the round arch may show close connections with Sasanian art. The destruction of the site is usually attributed to the invasion of the Ephthalites in about A.D. 460. Thus the construction of the caves was, of course, earlier than this date. But it is not completely certain that the Ephthalites destroyed the site. However with most probability, the caves may be attributed to the 4th to 5th centuries A.D.

In Afghanistan, besides Bāmiyān and Haibāk, there are several places where there are many caves. However, almost all are small and excavated from conglomerate rock. Among them, a special mention must be made of caves at Basawal, Hadda and Darunta near Jelālābād, and Bālā-Murghāb, Murcha and Panjdeh in the Murghāb valley.

[BASAWAL] In the bank immediately facing Daka, is a rock hill named Kōh-be-Doulut, where more than 100 caves are found.³⁾ The caves are usually rectangular and vaulted, being 3.00 to 3.60m wide and 6.00 to 9.00m deep. They were probably all used as monks' cells.

[HADDA] Hadda has been identified as the Hsi-lo 嚧羅 of Hsüan-tsang.⁴⁾ In addition to the mar-

1) O. Reuther; *Sasanian Architecture* (A Survey of Persian Art, I) London and New York 1938, p. 502.

2) A. Stein; *Serindia*. Vol. 1, Oxford 1921, pp. 485-538.

3) W. Simpson; *The Buddhist Caves of Afghanistan* (JRAS, N. S., 14) London 1882, pp. 319-323.

4) A. Foucher; *Les Fouilles de Hadda* (MDAFA, 4) Paris 1933. W. Simpson; *Op. cit.* pp. 328-331.

ruins in the open which have been explored by the French Mission, an early report by W. Simpson records some caves.¹⁾ On Tapa Zargaran is the cave named "the Palace of Hoda-Rajah" (Fig. 5).

It is rectangular, measuring 15.00m by 22.50m. The entrance is in one of the long sides, and another opening is situated in the left wall. In the centre a square post, 7.10m square, and a rectangular post, 10.00m by 7.00m, remain. They are not stūpa-pillars such as are found in China, but only what remained after the excavation of the monks' cells on three sides of the caves as in the vihāra caves in Darunta.

Another cave, 3.90m square, has a dome provided with squinch arches (Fig. 6). In the walls are two niches at each end, while in one wall there is an entrance at the middle. This was certainly a cave for images. There is also a rectangular vaulted cave.

[DARUNTA] On the hill of Pheel-Khana tope on the left bank of the Kabul river, are many ruins of temples and stūpas, while by the riverside are found some remarkable caves.²⁾ Among them an almost square vihāra cave, 12.30m by 12.60m, has a square post at the centre. It contains in all 10 rooms: three in each of the south and north walls and four in the east wall (Fig. 7). There seems to be a cornice at the top of the square post.

Another, called a *bazar*, has rooms facing the river and connected by a narrow tunnel running along the bank (Fig. 8). Although it only has five rooms, it resembles the *bazar* cave in Haibāk.

[MURGHAB] Among the low hills not far from Bālā-Murghab and on the left bank of the Murghab river, are two caves lying parallel, both 2.10m wide and 9.00m long, and connected by a tunnel with an arch pointed in section (Fig. 9). At Murchak are also a few caves.³⁾

Near Panjdeh in U. S. S. R., are caves at Besh-Deshik, Yaki-Deshik and Gharebil all excavated into a sandstone mountain. In constructing a most complicated cave a straight passage was first excavated in the rock. This was 2.70m wide, 2.70m high and 45.00m deep. In each side of this an additional 7 or 8 rooms were excavated. Each room is usually rectangular, 2.70m wide and 2.70 to 3.60m long, with an entrance 0.60m wide and 1.20m long. They all seem to be monks' cells, and some of these have yet another room or rooms, a well or passage connecting them with other rooms. Some of the upper rooms, to which access is by a staircase, seem to have been intended for storage purposes. The rooms and passages all have vaults pointed at the top, and just beneath the vault run a slight drip (Fig. 10).

No evidence is available by which one might date or identify the builder of these caves. However, it is most probable that they were made by Buddhists prior to the 7th century. By the entrance a cache of coins of the 8th and 9th centuries was found, and it is assumed that they were buried after the cave was abandoned.

[BAMIYAN] Bāmiyān is recorded by Hsüan-tsang as Fan-yên-na 梵衍那. It occupies the valley of Surkhāb which is upstream in the Hindu-kush. The caves dug in the conglomerate cliff facing south are said to number more than 20,000, though they have never been accurately counted. At the west part stands a colossal Buddha 53m in height and at the east part another colossal Buddha 35m in

1) W. Simpson; *Op. cit.* pp. 324~327.

2) De Laessoe and M. G. Talbot; *Discovery of the Murghab* (JRAS, N. S., 18) London 1886, pp. 92~102.

3) A. et Y. Godard et J. Hackin; *Les Antiquités Bouddhiques de Bāmiyān* (MDAFA, 2) Paris et Bruxelles 1928, Figs. 13, 15, 16.

height. Like the niches neither have a front wall. There are four other large Buddhas seated in niches. However, the caves usually measure 5.00 to 6.00m across, and are very varied in shape, some being rectangular, some square, some octagonal and some round. The rectangular caves are vaulted and the square caves domed or corbelled. The corbelling may have originated in Central Asia, where it is customary. From Central Asia it spreads both to the Far East and to India. The temple of Pāndrenthān in Kashmīr is famous for its corbelling.

In Bāmiyān, there is only one stūpa cave, identified as G by A. Foucher, while almost all the others were intended to house images, probably of stucco. A cave for images, i. e. a shrine cave, an assembly cave and a few caves serving as monks' cells are often combined in one group (Fig. 11).

In India, the chaitya caves have exactly the same plan as the apsidal temple in the open, and the vihāra cave is nothing more than a vihāra with monks' cells on four sides. Beyond the Indus, neither chaitya cave nor apsidal temple is found, while vihāras are often found in North Pakistan and a few exist in Afghanistan. As for the vihāra cave form, a few degenerate examples only are found in Afghanistan.¹⁾

The stūpa cave of Haibak, as previously stated, is not apsidal but in type rather resembles those of Gumpatri in India. In size it may be compared to the Great Stūpa in Sānchī and the Dharmarājikā Stūpa in Taxila. However the Haibak dome is quite different from these, being slightly angular at the shoulder, which suggests a later date.

In short, the caves in Haibak, though of Buddhist inspiration, are Romano-Sasanian in style as indicated by the round arch and the dome with squinch arches. They also show elements of Central Asian style as for instance the corbelling. Image worship also predominated in these caves as well as in those of Bāmiyān in which respect they differ from the early caves of India. This tendency in Afghanistan spreads into Central Asia and then still further into China. In China, the stūpa and the image were worshipped equally in the first period, but gradually the emphasis changed. In the 4th century, the images, in the Yün-kang caves were already more popular objects of worship than the stūpas, while by the 6th century, they had achieved a complete predominance as is seen in all the Yung-mên caves.

K. Nishikawa and S. Mizuno

¹⁾ J. Barthoux; *Les Fouilles de Hadda* (MDAFA, 4) Paris 1933.

PART TWO

KASHMIR-SMAST CAVES.

INTRODUCTION

In India, cave-temples were first created as early as the 3rd century B.C. and during the following thousand years more than 1,200 caves have been excavated in a number of sites. Approximately seventy-five percent were inspired by Buddhism and the remainder by Hinduism and the Jain faith. Among them are many famous caves such as those of Ajantā and Ellūrā. The excellent study *Cave-Temples of India* by J. Fergusson (London 1880) gives a good general idea of them.

Pakistan, however, contains only one cave-temple called Kashmir-Smast. Unlike those in India and China, it is a natural cave in the limestone mountain, and only later was provided with several additions inside.

On the 16th of October, 1959, S. Mizuno, S. Tanaka and Mr. Ahmad Istiaq Khan visited this cave and in 1960, from the 3rd to the 16th of November S. Tanaka, K. Nishikawa and H. Chên stayed here and made a general survey of the site. Mr. Rishad Khan, the owner of the bungalow on its summit, most kindly placed his bungalow at our disposition and arranged all necessities for our work. For his help we are very grateful.

Driving about 20 km from our camp at Shāhbaz-garhī, we arrived at the small town of Rustam. From there we drove about another 16 km along rugged paths northwards arriving next at the pond of Pirsai, a small village at the bottom of the valley. Here, we loaded our baggage on camels and walked up a steep path leading to the summit. After about 3 hours on foot we at last arrived at the saddle of Kashmir-Smast, and could enjoy through a deep glen a distant view over the expanding plain of Babuzai. To each side of the saddle the mountain range ascends and on one peak of the left range stood the bungalow where we were to live (Fig. 13).

H. B. Garrick who about 80 years ago reached this spot after an 8 miles walk from Babuzai described his journey as follows:—

Starting at 7-30 A.M., losing no time in climbing up the difficult path, we did not gain the lowermost remains till noon, and commenced mounting the perpendicular rock that lies immediately under the great cave, which we made at 1 P.M. Though the whole of this ascent is very difficult and steep, obliging one to rest at every 50 paces or so, the perpendicular rock at foot of the *gha* is absolutely perilous. As I have before stated, this rock is *perpendicular*, as a wall; and in journeying to the great cave the foot is cautiously placed in natural fissures, which occur at intervals.

regular intervals, and there are also, fortunately, a few strong weeds springing from the crevices of this rock, and these afford a hold for the hands. A few of my servants, more venturesome than their fellows, who accompanied us, were warned not on any account to look back into the fosse at our feet (in which, with the exception of floating clouds, nothing was discernible), as dizziness is known to seize those who contemplate this abyss. I was accompanied in this expedition by upwards of thirty experienced mountaineers carrying their weapons—extremely long matchlocks, with which they amused themselves by shooting the wild monkeys, and mountain-goats found here in great numbers. Singing was another pastime these brave fellows indulged in, and right well they sang too; it is a strange fact that, though singly most unattractive, when their voices are combined and accompanied by the *rahab* (the Persian and especially Afghan guitar) their ghazals sound remarkably well among these vast mountains. (pp. 111, 112)¹⁾

As this was then at a period when British rule was not yet fully established in the area, it is natural that he took his expedition so seriously and was conscious of an element of danger. However, nowadays things are quite different. The land is peaceful and the people cheerful. Nevertheless, monkeys, mountain-goats, hares and birds still abound and the place provides an excellent hunting ground.

Descending a little to the Babuzai side from the saddle, a small steep path to the right leads up to the cave. To the left are three spurs projecting from the south into the valley. In the cave as well as on the spurs ancient ruins in great number are to be seen.

Kashmir-Smast means “the Kashmir cave” in the Pashto language. Kashmir, of course, is a country lying north of Pakistan and India and for a long time it seems to have been considered in the Pashto as something of a holy or fairy land, to which one might reach through this cave. Such a tradition is attached not only to this cave but also to several other places. W. Simpson for instance records the same tradition about the Basawal caves near Daka in Afghanistan.²⁾

The first report on the Kashmir-Smast cave was made by H. B. Garrick, then assistant to Sir A. Cunningham. He visited Charsada, Shāhbaz-Garhī and this site in 1881 and 1882. In 1888, H. A. Peane, previously governor of Chitral or Swat, also explored this site, and with special reference to ancient geography he contributed an article *Note on Udyana and Gandhara* to the Journal of the Royal Asiatic Society (N. S., Vol. 18), which contained a full description of the cave together with his own sketch plan. As he identified Hsüan-tsang’s Po-lu-sha city with the present-day Palo-Dhe according to Cunningham,³⁾ the T’an-to-lo-chia-shan or Dandaka parvatah over 20 *li* north-east from it is naturally attributed to the Sanawar range on the boundary of Buner. The small cave occupied by Prince Sudāna and his wife may be identified as the small cave at the bottom of the valley, and the cave of the hermit as the great cave called Kashmir-Smast.

In 1915, A. Foucher published his momentous work *Notes on Ancient Geography* in the *Mémoires* of the Archaeological Survey of India, and, though he had not visited the site, he identified Po-lu-sha as the present-day Shāhbaz-Garhī contrary to Cunningham’s thesis, and the T’an-to-lo-chia-

1) H. B. Garrick; *Report of a Tour through Behar, Central India, Peshawar, and Yusufzai* (ASI, 16) Calcutta 1885, pp. 111–112.

2) W. Simpson; *The Caves of Afghanistan* (JRAS, N. S., 14) London 1885, p. 319.

3) A. Cunningham; *Ancient Geography of India*, Calcutta 1871, p. 60.

han as the Karamar range. It would follow that Kashmir-Smast found no place in Hsuan-tsang's record. Although Foucher's attributions have not been decisively proved, Deane's thesis is certainly far from convincing. It seems to us that Kashmir-Smast is not commented on, at least in Chinese literature.

CHAPTER ONE GREAT CAVE

[Pls. 33~37]

A steep and narrow ledge extending about 100m along the precipitous cliff leads up to the great cave in Kashmir-Smast, and in some parts of the ledge the masonry of the steps remains in quite good condition. The entrance opens to the south, being about 20m wide and of equal height. It is not man-made and is irregular in shape. Looking down from here, the ravine extends to the west and opens onto the large plain of Babuzai. It is here about 1.100m above sea level. To the right of the entrance a hollow 8.00m wide and 4.00m deep has been dug which even now may serve as a temporary shelter for hunters (Pls. 33, 34-1, Plan 11).

About 30m within the cave is a heap of stones suggesting an octagonal room. 40.00m further on in a commodious recess is a wall, the original purpose of which cannot now be surmised. There are scattered about some large burnt red bricks which suggest a Kushan period construction. A flight of steps ascends from here and at the foot of this is a water tank. Finally the flight of steps turns to the right and disappears into a heap of fallen earth. To the left a great crevice extends far into the rock of the wall.

The flight of steps seems once to have continued to the top of the rock where there now stands a shrine lit by sun-light from the upper window. The window, of irregular rectangular shape, looks out to the other side of the mountain range. The atmosphere of this most secluded part is very still and rather bright. It is about 30m wide with completely irregular natural walls.

The distance straight to the bottom is about 130m and it extends to the right about another 50m making a total of about 180m. The floor is not flat but ascends to the end, which is 50m higher than the entrance. The natural wall is, of course, everywhere quite rough and in some places largely covered with lime accumulation.

[OCTAGONAL ROOM] Since it is almost entirely broken away, only the octagonal plan is perceptible. However, when Deane visited the site in 1888 he saw a flight of steps 5.50m wide and 2.40m long in front of the octagonal room. The room measures 5.24m from right to left and 3.23m from front to back, and the walls are made of the schist which abounds in this mountain. The masonry is the usual type in which stone blocks are interspersed with small thin pieces. Deane even found small earthen lamps or *chiraghs* in the niches which then existed in the walls, and he heard that a *sheeshum*-wood coffin had even been found in the room and that it had been carried off by the natives. Although this may be true, it would be dangerous to assume that this room was primarily intended as a tomb (Pl. 34-2, Plan 12c).

According to Deane, there was a small square room to the right of this octagonal room, but we could find no trace of such a room. In 1888 near this building Deane excavated four carved planks of a box, two plaques and a pilaster about 1.20 m long. Of these we reproduce the two plaques here. They are enclosed in a trefoil arch. One of the subjects (Fig. 15) is a dancing Brāhman or *rishi* posturing to the music of a demoniac band composed of four musicians playing a flute, a drum, and two clapping hands. V. Smith thought the figure was a dancing Shiva (Natesa), but it is difficult to determine the identity for certain. The other plaque (Fig. 16) represents a Brāhman receiving with contemptuous gesture a young man who carries an earthen pot suspended from the fingers of his left hand.

It is not easy to date these two plaques, but V. Smith suggests an 8th century date.¹⁾ The figures resemble those on the bricks from Mirpur Khās²⁾ and those on the wall in Nālanda, and more particularly the carving of the cloud pattern is close to the floral-scroll in the door-jamb from Bhumara. They most probably date from the 7~8th centuries.

[WALL] There remains a part of a wall. Although the whole construction of the building is not clear, the wall forms part of the south side of the building standing on the platform. It measures about 0.80 m in thickness and the masonry is similar to that of the octagonal room (Pl. 35-2, Plan 12d).

[WATER TANK] The water tank is rectangular, being 5.25 m in length, 3.40 m in width and 2.30 m in depth. Its masonry is of ashlar and completely plastered with lime. The front side has a flight of steps. The same construction is seen in the court of the Dharmarājikā Stūpa, Taxila.³⁾ On the right side of the tank a wall remains, though here too, the original construction of which it is part is not known. The tank must have been for bathing and although it is now empty, it must once have received plenty of water (Pl. 35-1, Plan 12b).

[FLIGHT OF STEPS] The flight of steps is made of ordinary masonry and measures about 2.50 m in width. At a height of about 4.00 m is a landing about 5.00 m wide, and about 8.00 m higher still. The flight turns to the right and extends about another 7.00 m. Although the top of this flight is now buried in fallen earth, another flight is found along the bottom wall (Pl. 35-3).

[MONKS' CELLS] To the left of the bottom wall is a large crevice, at the entrance of which is a small tank. Deane records how he was told that treasures were found in this tank by the Gujars who frequently lived in this cave. However, it is difficult to surmise what they might have been. Penetrating into the crevice one finds a stone wall (Pl. 37-2) and a flight of steps, and making a sharp turn one enters a narrow gallery, along which for a short way progress can only be made by crawling on hands and knees. At some places the surface of the rock has acquired a high polish caused by the constant passing of former occupants. Inside are at least three hollows which may be assumed to be monks' cells. Here we found some earthen lamps.

In 1881 Garrick discovered a Gupta inscription at the entrance of this crevice. The inscription read "The religious gift of Krishna Gupta". Deane also found a few characters in Pali at the top of the steps. However they are all now obliterated and cannot be found.

1) Vincent Smith; *A History of Fine Art in India and Ceylon*, Oxford 1911, pp. 365, 366.

2) Some examples are seen in Prince of Wales Museum, Bombay.

3) Benjamin Rowland; *The Art and Architecture of India*, Harmondsworth 1956, Pl. 79.

4) J. Marshall; *Taxila*, Cambridge 1951, Vol. 1 p. 247.

It is through this crevice that the villagers believe they can reach Kashmir.

[SHRINE] In the innermost part of the cave stands the shrine on a large block of masonry set on the natural rock. It is square and clearly visible in the calm light of the sun penetrating through the upper window. This shrine is the centre of this cave, measuring 3.80m square on the outside and 2.20m square on the inside. The east wall has an entrance and the west wall a small trapezoidal niche for a lamp. The roof may have been as large as those in Takht-i-Bahi, though now it has almost entirely collapsed. Inside, the dome is set on a square plan with a squinch at each corner. The four squinches make a quadrangle producing a cavity at each side of the wall. On the outside a cornice with bracket-heads is still preserved (Pls. 36, 37-1, Plan 12a).

Inside there is no trace of either a stūpa or a statue.

CHAPTER TWO TEMPLE-BUILDINGS IN THE OPEN

[Pls. 32, 38-48]

Of the three spurs, the southern one forms a rugged precipice while the northern two have been levelled and still preserves temple ruins. At the foot of the middle spur is a large well which may have supplied the water for the ancient dwellers in this valley. Crossing over the bottom of the valley to the slope below the great cave one finds ruins scattered here and there (Pl. 32, Plan 9).

[MAIN TEMPLE] The main temple remains on the middle spur which is made up of a natural block of stone supplemented by masonry. The temple was constructed on the platform of masonry and still retains large walls. In the centre is a large hall about 12.50m square (Pl. 38). The north wall has an entrance with a pointed arch (Pl. 39), and above it a niche though this for some unknown reason was later filled up. The east and south walls, each has an entrance about 1.50m wide, while the west wall has a window above its four sides cut on the slant. The same type of window is found in the ruined temple of Tharēli near Jamār-Garhī and at Abbasahebchina in Swat.

To the south of this wall are two small rooms, which are 7.50m by 3.50m and 5.50m by 3.50m respectively, and on the partition wall traces of the staircase to the higher level are just visible. Across the commodious court are also several rooms to the east and north, while attached to the hall at the west are several rooms on the lower level (Plan 10).

On the north edge of this spur stands a square shrine about 3.30m square (Pl. 40). It faces west and has a cornice just beneath the roof. The inside, measuring only 2.00m square, has a dome provided at each corner with a squinch with an edge of one-quarter of a circle (Pl. 43-2).

The large hall may have served as an assembly hall and the others as the refectory, kitchen, monks' cells and shrine. However, the plan of the buildings differs completely from that in Taxila.

[RUINS ON NORTHERN SPUR] The northern spur was also enlarged by means of strong masonry but now comprises only cultivated land with a barn and some heaps of stone. The following remarks are found in Garrick's record of 1881.

After traversing about 5 miles—the whole distance from the top of the mountain to its foot is

said to be 8 miles—the remains of a temple (*Büt Khana*) becomes visible, and on using a powerful fieldglass, some images are also seen amongst these ruins, which are comparatively insignificant, few, and roofless. Higher up, the chasm is flanked on the north by a large artificial plateau of cultivable soil, close to which are traces of a large square tank and numerous massive walls; on the south, by an early fortress built of large, partially-dressed stones, interspersed by thin wedges of the same material. (p. 112)

The description is clearly of these two spurs, but we could not discover to which images he refers.

[SMALL CAVE] A small cave is situated just at the foot of the slope which ascends from the east of the main temple. It was excavated into the schist hillside in which respect it differs from the great cave. The entrance doorway, 0.90m wide, has a few steps cut in the rock and on the side reveals small holes intended to hold doors. The interior is 3.40m deep, 2.50m to 3.40m wide, and 1.60m high. The walls are not smooth but retain the irregularity of the natural rock. A square cavity presumably held a lamp. No doubt, it was occupied by monks (Pl. 44-1, Plan 13b).

[RUINS ON NORTHERN SLOPE] Although the buildings have almost entirely collapsed, the platforms constructed with strong masonry are still visible on the slope (Pls. 46-1~3). Similar to those in Jamargarhī, Tharēli and Abbasahebchina, they seem to have comprised three or four rooms clearly indicating that they were the living quarters of monks. One of the walls has an opening with a pointed arch (Pl. 45-3), and another, located in the upper part, is made in ashlar masonry but in the rather rough construction which indicates a somewhat late date (Pl. 46-3).

[SHRINE ON RIDGE] Another square shrine occupies the rocky summit of the south spur (Pls. 42-1, Plan 13a). It measures 2.20m square on the outside and 1.10m on the inside. The entrance facing east is 0.60m wide and has two projections from the slanting sides, similar to those in Tharēli and Birkōt and Udegram in Swat.

It is domed with a small straightly cut squinch (Pl. 42-1). The masonry was made of blocks dressed on one side and interspersed with small flat stones. The surface, as usual, seems to have near Jamargarhī been plastered. Under the roof is a cornice decoration.

[SHRINE ON SUMMIT] On one peak of the range in which is the great cave stands also a square shrine (Pl. 43-1), with a rectangular platform 10.00m by 12.00m. In construction it is identical to the shrines mentioned above. The west wall contains the entrance, its reveals slanting slightly outwards, while the south wall has a small niche with a pointed arch. It is 2.50m square outside and 1.50m square inside. The dome has a triangular squinch at each corner (Pl. 42-2). The masonry seems to be slightly rougher in comparison with the other shrines.

To the south of this, side by side stand three other shrines varying in size, 2.50m by 2.00m, 2.00m by 2.00m and 1.50m by 1.00m.

[RUIN OF BUILDING NEAR SADDLE] The bungalow of Mr. Rishad Khan is situated on the summit of one range which ascends from the saddle dividing the Pirsai and Babuzai sides. It occupies the upper part of a tall platform piled up with stones. As the base of the bungalow still retains the ancient masonry with moulding (Pl. 44-2), the present bungalow must have been rebuilt on the ruin and the

W. Simpson; *Op. cit.* p. 319.

the platform must be of the original plan though the masonry itself does not preserve the original style.

[WELL ON SADDLE] To the left of the path is a well full of old masonry (Pl. 45-1). In Gandhāra, though many ruins are called wells, some of them are clearly the relic chambers of stūpas. However, this would appear to be a real well.

[RUINS AT PIRSAI] Just behind Pirsai village a spur descends from the north-east and at its end several temple ruins are visible (Pls. 47-1~2). Opposite the village is a long conglomerate cliff commanding the dry river-bed. Several small caves are excavated into this but these are now discoloured by smoke and almost entirely collapsed (Pl. 48). As W. Simpson early assumed in the case of Basswal, they may be the cells of Buddhist monks.¹⁾

CONCLUSION

As described above, all the ruins inside and outside the great cave have common features, especially in construction and masonry. They could appear to be almost contemporaneous. However, one finds here neither sculpture nor coins scattered about. There is no means of knowing to what religion and to what time it belonged. But, there is a possibility that it may be a public building, either religious or royal, since it is situated in such a lonely mountain without any means of supply. Moreover one can not find in the building any trace of the splendour usual in the residence of a king or a lord. Accordingly, it must be assumed that it was a Buddhist temple like similar ruins in the mountain nearby.

Even in this Gandhāra district, the centre of Buddhist worship was equally the stūpa. But, there is no trace of a stūpa at the site. Contrary to this, there are here many square shrines, which are similar in size and construction, having a square plan surmounted by a dome resting on squinches. Generally the types of squinch may be divided into five: 1° without special device, 2° several layers of triangular squinches, 3° several squinches, 4° niche with semi-dome and 5° conical vault.¹⁾ The squinches in this site all belong to Type 1, though small variations are found. The shrine in the central group has a circular edge on each corner; that in the great cave has another quadrangle at a right angle to the square plan; those on the ridge and on the range top have a small triangle at each corner. The first variation is found in Takht-i-Bāhī and Tharēli (Fig. 9), and is the most simple while Type 2 is found in Sanghao, the type with several triangle squinches at each corner is a complicated variant of the third type.

Under the eaves of the shrine there is usually a cornice with brackets arranged in a row. But the shrine on the ridge is provided with a similar design on the pedestal. Similar cornices are found in the shrines at Takht-i-Bāhī and Tharēli and on the stūpas at Shankardār and Amulūk-dāra in Swat.

The front side of the shrine always has a small wall on each side of the opening, in which respect

1) *Squinch Arch* (Encycropaedia Britanica, 21) 14th Ed., London 1829.

it differs from those of Takht-i-Bahī which have no wall on the front. Moreover, here such small walls on the front are cut on the slant and provided with a projection at each end. But in Birkat and Udegrām in Swat and Tharēli the small walls are straight at the end.

In this site, each shrine stands independently, but in Jamargarhi the shrines are set side by side around the round stūpa and in Takht-i-Bāhī around the square stūpa. Remarkable, is the row of shrines. But, in Kashmīr-Smast the shrine is not only independent of the stūpa but also independent of each other.

Among the shrines in Takht-i-Bāhī excavated in 1871, the two have still retained the big roof and then following after them the other shrines were restored.¹⁾ As such a big roof was later found also at Bālo²⁾ and at Abassahebchina³⁾ in Swat it may be natural to suppose the shrine in Kashmīr-Smast to have had also such a big roof.

As in the ruins of Tharēli there are scattered about Buddhist sculptures, the site clearly belongs to the Buddhist. There is a main building with vaulted ceiling nearby. Among them are a row of shrines around the stūpa and also independent shrines; one resembles the shrine on the ridge and the other is like that in the central group.

In Sanghao, among the main buildings are found square rooms each having a dome. Also in Abassahebchina there is a similar shrine, supposed by the Italian Archaeological Mission to have had the Buddhist image.

For the masonry, the schist abundant in this valley was used with some few variations. The 1st type consisted of somewhat oblong blocks laid among the thin stone pieces in layers and in columns. The 2nd type is the same but having no thin pieces in columns; and the 3rd type is almost ashlar with very few thin pieces. The first type is frequent and the third rare. However, these may be only variations in the semia-shlar semi-diaper type according to the category in Taxila. The only exception is the water tank in the great cave, which is made with rigid ashlar masonry. Even the construction was at first commonly plastered with lime in several layers.

Although the tri-lobe arch was found on the wood-carvings from the great cave, the usual arch is the ogive, which is found in the openings in the main buildings, and in the small niches on the shrines. In Gandhāra the ogive is usual excepting in the case of the stūpa decoration. It is entirely contrary to the prevalence of the round arch in Afghanistan. The lack of the latter may have some concern with the comparative rarity of the squinch arch. Afghanistan seems to have been influenced much more by Romano-Sasanian brick architecture.

It is only a conjecture to suppose which was earlier the buildings in the great cave or those in the open air. However, at first was the great cave of natural origin. The central buildings, of course, would serve for the public life of the monastery and the nearby buildings for living quarters. The water might be carried from the bottom well and the food begged for on both sides of Pirsai and Abuzai. In the great cave there was the assembly hall, the water tank and the shrine. It is not the

1) D. B. Spooner; *Excavation at Takht-i-Bahī* (Annual Report of ASI, 1907-08) p. 133.

2) A. Stein; *An Archaeological Tour in Upper and Adjacent Hill Tracts* (Memoirs of ASI, 42) Calcutta 1930, Figs. 6, 7.

3) G. Tucci; *Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat* (East and West, N. S., 9-4) Rome 1958.

PART TWO KASHMIR-SMAST CAVES

storing place as supposed by Garrick,¹⁾ but is supposed to have been respected as a special holy place. Possibly, it may have been the upper temple corresponding to the lower main temple. Some monks' cells inside do not argue against this assumption, and the shrines on the range may be places for pilgrimage of resident monks and of visitors.

As mentioned above there is nothing datable, and only from the general features and from the Gupta inscriptions found by Garrick in the great cave, it may be dated to the flourishing time of Buddhism, or rather the later half of the period i. e. the 5th to 6th century. Moreover, the wood carvings found by Deane suggest that the cave has been used until later, i. e. the 7th to 8th century, and the pot-sherds scattered about in side and out side the caves show even later occupation, i. e. about 11-12th century, However, it may only have been sparsely occupied.

K. Nishikawa and S. Mizuno

1) Garrick; *Op. cit.* p. 116

PART THREE

ARCHAEOLOGICAL SURVEY IN NORTH AFGHANISTAN

1

Our archaeological survey in North Afghanistan in 1960 had two main objectives: one was the measurement of the caves of Takht-i-Rustam, Haibak and the other a general survey of archaeological sites in North Afghanistan. While S. Mizuno, S. Tanaka, K. Nishikawa and N. Odani were occupied with their work on the caves, we made journeys from Haibak to Aq-chāh and Pul-i-Khumri and to Khanabād. We were accompanied by two additional members: by Mr. Gholam Sakhi of Kabul Museum and also inspector to our mission despatched by the Afghan Government and by T. Katsufuji, a member of our Jimbunkagaku-Kenkyūsho, Kyoto University who was then studying at Kabul University. They were both of very great help to us in a somewhat trying climate and the former especially was an indispensable guide, adviser and interpreter. We should like to record our warmest appreciation of their kind services.

The narrow ravines of the Hindu-kush contain many caves cut into the cliffs and on the plains we found many tepes. They are large and high in the broad downstream areas of Band-i-Amīr and the Khulm rivers but small and low in the downstream basins of the Kundūz river. Several collections of antiques in Mazar-i-Sherīf, Bāghlan and Kundūz, which were collected from nearby sites, clearly demonstrate the archaeological character of the region. A full description of these is included in the Japanese text and an English summary only is given here.

For convenience of description, the pottery classification is given first.

- 1) Shār-i-Banu A (Figs. 153-1~30; 154-1~6, 10~44, 47~49; 133-1~3) This type roughly coincides with that of Begrām I and II,¹⁾ and, according to Diakonov's chronology,²⁾ belongs to the Greco-Bactrian, Tokharian and Kushan periods. Some goblets from Shār-i-Banu were published by Carl.³⁾
- 2) Preshon A (Figs. 164; 134-1~10) A fine wheel thrown pottery with red slip on light brown body. It includes also a slightly coarser ware. The vessel shapes differ from those of Shār-i-Banu. The Preshon-tepe revealed no goblets such as are abundant in Shār-i-Banu.
- 3) Preshon B (Shār-i-Banu B) (Figs. 165-1~23; 134-11~18, 27) This type called "gray po

1) R. Ghirshman, *Bégram* (MDAFA, 12) 1946.

2) M. M. Diakonov; *Arkheologicheskie Raboty v Nijnei Kafirnigana (Kobadian) (1950-1951 gg.)* (Materialy i Issledovaniya Arkheologii USSR, 37) Moskov and Leningrad 1953, pp. 253~293.

3) J. Carl; *Fouilles dans le Site de Shahr-i-Bannu et Sondages au Zaker-Tépe* (MDAFA, 8) Paris 1959, pp. 58~73.

ery" by J. C. Gardin,¹⁾ is very hard with dark red or dark brown surface. The body contains small grains of white stone, but these stones have often fallen out of the surface giving it a pockmarked appearance. Among this type are cooking pots with a large rim and sharp edge near the bottom, and pots with a bow-shaped handle.

4) Preshon C (Shār-i-Banu C) (Figs. 165-24~32; 166-2~4; 134-22~25, 27~31) This is a fine buff pottery thrown on the wheel. Some pieces are covered with a dark brown slip.

5) Khoja-Ghaltan Type (Figs. 176, 177, 141) This pottery is made of fine clay. Usually it has a buff surface with a dark red core. Very many fragments of large jars have been found, and also three complete specimens which are preserved in the collection from Kuti-Stara.

6) Samarkand Type (Figs. 137-4~6) This glazed pottery is generally known as Samarkand ware, and has black patterns on a white body.

7) Hazār-Sum Type (Figs. 136-8~13) This type has a white slip on a red body, and simple patterns are carried out with green and dark brown glaze. There is also a plain pottery with dark green glaze.

8) Bāmiyān Type (Figs. 137-7~22) This type is found in abundance in Bāmiyān and in Shār-i-Gholghōra. The grafitto pattern is usually covered with a three-coloured glaze, including a green-glaze and a yellow-glaze.

9) Faizabād Type (Figs. 136-14~24) The remarkable aspect of this ware is the blue and violet underglaze design on a white slip. The stamped asterisk in violet often occurs. In almost all cases it is accompanied with brown-glazed and blue-glazed examples; the last two types usually have no design.

10) Another Glazed Type

11) Another Unglazed Type

2

In the regions from Haibāk to Tash-Kurgan, we found no tepes apart from one at Bālā-Hissār in Haibāk. To the south of Haibāk, along the Haibāk river we came across an isolated cave and small groups of caves at Bāgh-Hindu, Drāra-i-Juandan, Khawal, and Sorbōg, the dates of which are not easy to ascertain. About 15km north of Haibāk is situated a large and important group of caves, already reported by C. E. Yate, A. Foucher and J. Hackin.

At Feroz-naqshīr about 24km south-east of Tash-Kurgan is also a small cave, but its date and nature is difficult to ascertain.

In the region north of Tash-Kkurgan are numerous tepes dotted here and there across the desert which extends to the Oxus river. At Shār-i-Banu, excavated by the French Mission in 1938 and 1939 abundant pot-sherds are scattered about, which are illustrated in Figs. 133, 153, 154 and we were told in the Mazar-i-Sherif Museum that the painted pottery in the museum came from Ustkhan-zār about 25km north-east from Tash-Kurgan, but we failed to find the exact site. At Shūl-Tepe about 10km

1) J. Gardin; *Céramique de Bactres* (MDAFA, 15) Paris 1957.

north from Tash-Kurgan, early Islamic and 10~11th century glazed pottery was found.

At the eastern suburb of Mazar-i-Sherif are several small tepes, on one of which we found some Islamic pottery. Among the collections in the Mazar-i-Sherif Museum the following are worthy of particular mention.

- 1) Fragment of painted pottery from Ustkhan-zār north of Tash-Kurgan. We could not find the site, but the pottery, painted in black on buff clay, undoubtedly belongs to the period (Fig. 92).
- 2) Footprint of the Buddha on stone from Andhui. Although the date cannot be ascertained, it is notable for the evidence it provides concerning the western expansion of Buddhism (Fig. 91).
- 3) A stucco head of the Buddha found near Tash-Kurgan (Fig. 93).
- 4) A stucco figure of Shiva brought from Orlamesh. It may have come from the caves (Fig. 90).
- 5) A hoard of silver coins of the Ghaznavide ruler Sultan Mahmūd (998-1030) found at Takht-i-Rustam, Haibak. If reliable, it may be of interest for the dating of caves at Takht-i-Rustam.
- 6) A small pot with pointed bottom and narrow mouth in hard ware. It is said to be a grenade belonging to the Ghaznavide period (Fig. 94). The unnatural breaks in the fragments, for example the vertical fractures of the narrow mouth and of the thick bottom, would support this assumption. Similar fragments were also collected at Shul-tepe, Balkh, Ghazni in Afghanistan and Brahminabad in Sind, Pakistan. The example reproduced here comes from Wu-hsün, Manchuria and is also said to be a grenade dating from the Chin-Yüan period. It is thorny and glazed, with two holes, one large and one small, and the latter may have served for the insertion of the fuse.

We visited a small cave near Aq-Kupruk about 6km from Pul-i-Imām-Bukri, where Hsüan-tsang crossed over from Balkh to Bāmiyān. The cave lies about 3~400m north of the village, facing the Band-i-Amir river and is situated 10m above ground level. It measures 15m wide and 3 to 4m high. The inner wall was plastered with mud and lime, and was originally decorated with polychrome painting. Though this is too badly damaged to recognise its motif, what remains, especially the pigment, suggest a style similar to that of Bāmiyān.

After visiting several sites near Balkh explored by A. Foucher, we roughly surveyed both sides of the northern and southern roads to Aq-Chāh. There were many tepes and on each mound numerous potsherds were scattered about. However, they were most densely distributed in the area north-east of Band-i-Amir river (Fig. 142). Almost all of them, the Halobād-Tepe, Chish-Tepe, Nasrabad-Tepe, Faizabād-Tepe and the Tepe 39km east from Aq-Chāh, usually contain the Faizabād Type of Islamic pottery and Preshon B. On some of them a few examples of Preshon A were noticed.

Along the road from Pul-i-Khumri to Kundūz, we visited Chamkala-Tepe, Lili-Tepe and the other tepes, and Jel-Tepe near Aliabād. At the former two, by chance were found Buddhist stone sculptures, small bronze bells, shell and stone beads. These are now deposited in a public building named Muti-Stara on Lili-Tepe, and some are reproduced here (Figs. 96-104, 170, 171).

Around Kundūz which Hsüan-tsang visited, once on the way to India and again on the way back, we explored Bālā-Hissār, Akhonzada-Tepe, Chehel-Dokhtāran, Khoja-Ghaltan-Tepe and Marzabān Tepe near Chārdara. We noticed that there pottery of Khoja-Ghaltan Type predominates. The most remarkable object is the Buddhist stone sculptures in the collection of Mr. Ghulamsarva.

Nashir president of the local cotton company (Figs. 122-125).

On the way from Kundūz to Khanabād, we encountered a number of small tepes covered with short grass which dot the rice fields. We had no time to examine them in detail.

Prof. S. Iwamura records the finding of a stone pillar base at Char Mosque about 18km north-east of Ishkamish (Fig. 132). No other object was found there but it seems to us that other remains may well be buried under this grave-yard.

After taking a short look at Chār-Klola-Tepe and Temorsho-Tepe, we collected pot-sherds at Cheshme-Kainār-Tepe, Kashkari-Tepe, Oblau-Tepe and Kala-Tepe in the Ishkamish basin. The date and nature of the sites in the Ishkamish basin remain obscure because they yielded only a few pot-sherds.

M. Hayashi and M. Sahara

CONTENTS

PART ONE	HAIBAK CAVES		Page
		S. MIZUNO	
		K. NISHIKAWA	87
PART TWO	KASHMIR-SMAST CAVE		
		S. MIZUNO	
		K. NISHIKAWA	97
PART THREE	ARCHAEOLOGICAL SITES OF NORTHERN AFGHANISTAN		
		M. HAYASHI	
		M. SAHARA	100
BOOKS CITED			80

PLATES

PART ONE HAIBAK CAVES

		Reference Pag
1	1 Caves, General View	88
	2 Stūpa Cave, Distant View	88
2	1 Caves 1-5	88
	2 Cave 1, Outside	88, 89
3	1 Cave 2, Outside	89, 90
	2 Cave 2A, Outside	90
4	1 Cave 1, Front Wall	88, 89
5	Cave 1, Back Wall	88, 89
6	Cave 1, Ceiling, Central Lotus	88, 89
7	Cave 1, Wall, Lotuses	88, 89
8	1 Cave 2, Front Corridor (from right side)	89, 90
	2 Cave 2, Rear Corridor (from right side)	89, 90
9	1 Cave 2, Front Corridor (from left side)	89, 90
	2 Cave 2, Side Corridor (from back side)	89, 90
10	1 Cave 2, Side Room	89, 90
	2 Cave 2, Rear Room	89, 90
	3 Cave 2, Side Room, Water Tank	89, 90
11	1 Cave 3, Outside	90
	2 Cave 3, Entrance	90
12	1 Cave 3, Ante-Room, Right Part	90
	2 Cave 3, Ante-Room, Entrance to Main Room	90
13	1 Cave 3, Ante-Room Left Part	90
	2 Cave 3, Ante-Room, Entrance to Main Room	90
14	Cave 3, Main Room, Back Wall	90
15	1,2 Cave 3, Main Room, Left and Front Wall	90
16	1,2 Cave 3, Main Room, Ceiling and Right Wall	90
17	Cave 3, Main Room, Back Wall, Upper Part	90
18	1,2 Cave 3, Main Room, Ceiling, Right Back and Front Left, Squinch Arches	90
	3,4 Cave 3, Main Room, Right Wall, Niche, Left and Right, Squinch Arches	90
	5 Cave 3, Main Room, Left Wall, Niche, Left Side, Squinch Arch	90
	6 Cave 3, Ante-Room, Left Wall, Right Side, Squinch Arch	90
19	1 Cave 4, Ante-Room, Back Wall	91
	2 Cave 4, Middle Room, Back Wall	91
20	1~3 Cave 4, Side Room, Entrance	91
	4 Cave 4, Main Room, Water Tank	91

21	1	Cave 5, Outside	91
	2,3	Cave 5, Hole, Outside and Inside	91
22	1	Cave 5, Entrance (from inside)	91
	2	Cave 5, Inside	91
23	1,2	Cave 6 (Stūpa Cave), Distant and General View	90, 92
24	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Annex Room i, Outside	92, 93
	2	Cave 6 (Stūpa Cave), Entrance	91, 92
	3	Cave 6 (Stūpa Cave), Entrance, Right Part	91, 92
	4	Cave 6 (Stūpa Cave), Entrance, Tunnel (from outside)	91, 92
	5	Cave 6 (Stūpa Cave), Annex Room i, Right Wall	92, 93
	6	Cave 6 (Stūpa Cave), Annex Room i, Inside (from front)	92, 93
25	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Dome (from entrance)	92
	2,3	Cave 6 (Stūpa Cave), Circumambulatory Path, North and West Sides	92
6, 27	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Dome, East Side	92
28	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, West Side	92
	2	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, South-East Side	92
	3	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, Central Hole	92
29	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, South-West Side	92
	2	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, South-East Side	92
30	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Annex Room ii, Outside	92, 93
	2	Cave 6 (Stūpa Cave), Water Tank, Top Hole	92
	3	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmikā, Engraved Figure of Goat	92
31	1	Cave 6 (Stūpa Cave), Circumambulatory Path, East Side	92
	2-4	Cave 6 (Stūpa Cave), Harmika, Casket Room, Inside and Entrance	92

PART TWO KASHMIR-SMAST CAVE

32	1	Temple Buildings, Distant View	99
33	1	Great Cave, Distant View and Ascending Path	99
34	1	Great Cave, Outside View	99
	2	Great Cave, Octagonal Room	99, 100
35	1	Great Cave, Water Tank	100
	2	Great Cave, Stone Wall	100
	3	Great Cave, Staircase	100
36	1	Great Cave, Shrine, General View	100
	2	Great Cave, Shrine, Outside	100
37	1	Great Cave, Shrine and Window	100
	2	Great Cave, Stone Wall	100
38	1	Temple Site, Central Building	100
	2	Temple Site, Assembly Hall	100
39	1	Temple Site, Assembly Hall, North Wall	100
40	1	Temple Site, Shrine on Edge	100

41	1	Shrine on Ridge	102
42	1	Shrine on Ridge, Inside	102
	2	Shrine on Top, Inside	102
43	1	Shrine on Top, Site	102
	2	Shrine on Edge, Inside	101
44	1	Small Cave	102
	2	Bungalow Site, Base	102
45	1	Well	102
	2	Northern Slope, Building	102
46	1,2	Northern Slope, Buildings, Distant View	102
	3	Northern Slope, Building	102
47	1,2	Pirsai, Ruins on Top	103
	3	Kashmir-Smast, Distant View	97, 107
48	1	Kashmir-Smast and Pirsai Caves	102

PLANS

PART ONE HAIBAK CAVES

	Reference page
a Caves, Section, 1 : 1200 (Measured by Tanaka and Nishikawa, drawn by Tanaka)	88
b Caves, Distribution, 1 : 500 (Measured by Tanaka and Odani, drawn by Tanaka)	88
Cave 1, Plan and Section, 1 : 150 (Measured and drawn by Tanaka)	88, 89
Cave 1, Ceiling, Lotuses, 1 : 75 (Measured by Tanaka and Odani, drawn by Tanaka)	88, 89
Cave 2, Plan and Sections, 1 : 150 (Measured by Tanaka and Odani, drawn by Tanaka)	89, 90
Cave 3, Plan and Sections, 1 : 150 (Measured and drawn by Tanaka)	90
Caves 4 and 5, Plans and Sections, 1 : 150 (Measured and drawn by Tanaka)	91
Cave 6, Plan and Sections, 1 : 250 (Measured by Mizuno and Nishikawa, drawn by Nishikawa)	91~93
Cave 6, Side Rooms i~iii and Entrance, Plans and Sections, 1 : 80 (Measured by Nishikawa and Mizuno, drawn by Nishikawa)	91~93

PART TWO KASHMIR-SMAST CAVE

Site, Plan, 1 : 2000 (Measured and drawn by Nishikawa)	97, 98
a Central Temple, Section, 1 : 120 (Measured and drawn by Nishikawa)	101
b Central Temple, Sketch Plan, 1 : 600 (Measured and drawn by Tanaka)	101
Great Cave, Plan and Sections, 1 : 600 (Measured by Chên and drawn by Tanaka)	99~101
Great Cave, Buildings, Plans and Sections, 1 : 80 (Measured and drawn by Tanaka and Nishikawa)	99, 100
a Shrine on Ridge, Plan and Sections, 1 : 40 (Measured and drawn by Nishikawa)	102
b Small Cave, Plan and Sections, 1 : 80 (Measured and drawn by Nishikawa)	102

FIGURES

	Page in the Japanese Text
1 Archaeological Map of Afghanistan	4
2 Harmika, Cave 6, Haibak	10
3 Finds From Room ii, Cave 6, Haibak	11
4 Engraving of Goat, Cave 6, Haibak	12
5 Hodā Rājah Cave, Hadda (After Simpson)	13
6 Domed Cave, Hadda (After Simpson)	13
7 Vihāra Cave, Darunta (After Simpson)	15
8 Bazar Cave, Darunta (After Simpson)	15
9 Twin Caves, Murghāb (After Talbot)	16
10 Yaki-Deshik Cave, Murghāb (After Talbot)	16
11 Group of Caves, Bāmiyan (After Hackin)	17
12 Archaeological Sites of Gandhāra	22
13 Site of Kashmīr-Smast	23
14 Cave of Kashmīr-Smast (After Deane)	24
15-16 Wood-Carvings from Kashmīr-Smast Cave	26
17 Section of the Kashmīr-Smast	28
18 Building of Jamār-Garhi	31
19 Building of Tharēli	31
20 Variations of Dome	33
21 Dome in Tharēli	34
22 Dome in Sanghao	34
23 Cornice of Shrine in Tharēli	35
24 Variations of Shrine	35
25 Shrines of Takht-i-Bāhi	36
26 Shrine of Abbasahebchina (After Tucci)	36
27 Bāgh-Hindu Cave	38, 39
28 Bālā-Hissār of Haibak	38, 39
29 Drara-i-Juandan Cave	38, 39
30 Sorbōg Caves, First Group	38, 39
31 Khawal Cave	38, 39
32 Sorbōg Caves, Second Group	38, 39
33 Sorbōg Caves, Third Group	38, 39
34 Sorbōg Caves, Fourth Group	38, 39
35 Hazār-sum Caves	38, 39

36	Hazār-sum Cave, Inside	38, 39
37	Hazār-sum Cave, Inside	38, 39
38	Hazār-sum Cave, Inside	38, 39
39	Hazār-sum Cave, Inside	38, 39
40	Kra-Kamār Cave	38, 39
41	Ferōz-Naqshlr Cave	38, 39
42	Old Khulm	38, 39
43	Shūl-Tepe	38, 39
44	South Slope of Shūl-Tepe	38, 39
45	Shār-i-Banu	38, 39
46	Ruined Walls of Shār-i-Banu	38, 39
47	Three Tepes East of Mazār-i-Sherif	38, 39
48	Qual-Muhamad-Khān-Tepe	38, 39
49	Dokhtar-Padsha Cave	38, 39
50	Aq-Kupruk Village	38, 39
51	Dokhtar-Padsha Cave, Niche	38, 39
52	Bālā-Hissār of Balkh	38, 39
53	Balkh seen from Bālā-Hissār	38, 39
54	South Wall of Old Balkh and Bolj-i-Asyaran	38, 39
55	Tepe-Zargaran	38, 39
56	Charkh-i-Falaq	38, 39
57	Nadīr-Tepe	38, 39
58	Takht-i-Rustam, Balkh	38, 39
59	Tōp-i-Rustam	38, 39
60	Asyab-i-Qonak	38, 39
61	Chehel-Dokhtarān	38, 39
62	Gobakli-Tepe	38, 39
63	Tepe-Sala	38, 39
64	Salār-Tepe	38, 39
65	Halobād-Tepe	38, 39
66	Preshon-Tepe	38, 39
67	Chish-Tepe	38, 39
68	Tepe 19 km East from Aq-Chah	38, 39
69	Nasrat-Tepe	38, 39
70	Faizabād-Tepe	38, 39
71	Momlek-Kala-Tepe	38, 39
72	Shasolim-Pocha-Tepe	38, 39
73	Tepe 39 km East from Aq-Chah	38, 39
74	Chamkala-Tepe	38, 39
75	Lili-Tepe	38, 39
76	Tepe 7 km South from Aliabād	38, 39
77	Jel-Tepe	38, 39
78	Bālā-Hissār of Kundūz	38, 39

79	Chehel-Dokhtarān	38, 3
80	Marza-Ramazan-Tepe	38, 3
81	Khoja-Ghaltan-Tepe	38, 3
82	Klōla-Tepe	38, 3
83	Temorsho-Tepe	38, 3
84	Chesme-Kainar-Tepe	38, 3
85	Tepe 200 m South from Cheshme-Kainer-Tepe	38, 3
86	Kashkari-Tepe	38, 3
87	Oblau-Tepe	38, 3
88	Kala-Tepe	38, 3
89	Kala-Tepe, South-East Corner	38, 3
90	Stucco Figure of Shiva from Orlamesh (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
91	Buddha's Foot-Print from Anhui (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
92	Painted Pottery from Ustkhān-zār (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
93	Stucco Head of Buddha from Tash-Kurgan (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
94	Pottery Grenade (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
95	Green-glazed Bowl from Man-kala near Tash-Kurgan (?), Mazār-i-Sherif Museum	38, 3
96, 97	Stone Relief for Stūpa from Chamkala-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
98	Stone Relief for Stūpa from Chamkala-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
99	Stone Relief for Stūpa from Chamkala-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
100, 101	Stone Relief from Chamkala-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
102	Stone Capital from Chamkala-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
103	Stone Relief representing Buddha's Life from Tepe East of Bāghlan(?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
104	Stone Relief representing Buddha's Life from Lili-Tepe(?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
105	Pillar Base from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
106	Pottery Urn and Pillar Base from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
107, 108	Pottery Urn from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
109	Terra-cotta Human Head, from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
110	Terra-cotta Bull Head from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
111	Shell Pendants and Shell Rings from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
112, 113	Bronze Bells from Lili-Tepe (?), Kuti-Stara, Bāghlan	38, 3
114	Pot-sherds from Khoja-Ghaltan-Tepe	38, 3
115-121	Pillar Base from Akhonzada-Tepe (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
122-124	Stone Relief representing Buddha's Life from Akhonzada-Tepe (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
125	Stone Figure of Seated Buddha from Akhonzada-Tepe (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
126	Stone Relief representing a Standing Man from Akhonzada-Tepe (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
127	Bronze Bracelet from Kala-zal (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
128	Bronze Mirror from Kala-zal (?), Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
129-131	Copper Vase Ketab-Khana-Nashīr, Kundūz	38, 3
132	Pillar Base found at Chār	38, 3
133	Potsherds from Shār-i-Banu	38, 3

134	Potsherds from Preshon-Tepe	. 38, 39
135	Potsherds from Balkh 38, 39
136	Potsherds from Northern Afghanistan: 1, 2 Chehel-Dokhtarān, 3~6 Shūl-Tepe, 7 Kafar-Kala-Tepe, 8~13 Hazār-Sum, 14~17, 22, 24 Nasrat-Tepe, 18, 19, 23 Faizabād-Tepe, 20 Momlek-Kala-Tepe 38, 39
137	Potsherds from Bāmiyān 38, 39
138	Potsherds from Begrām 38, 39
139	Potsherds from Barfak 38, 39
140	Millstone from Barfak 38, 39
141	Potsherds from Shūl-Tepe 38, 39
142	Archaeological Sites in Northern Afghanistan	41
143	Archaeological Sites South to Haibak	41
144	Bāgh-Hindu Cave	42
145	Sorbōg Caves	42
146	Hazār-sum Caves	43
147	Decorations in Hazār-sum Cave	44
148	Ferōz-Naqshīr Cave	45
149	Gorge of Tash-Kurgan	46
150	Pottery Grenade: 1 Manchuria, China, 2 Shūl-Tepe, Afghanistan, 3 Brahminabad, Pakistan	47
151	Painted Pottery from Ustkhan-zār	47
152	Impression of Cereal: 1 Shār-i-Banu, 2 Preshon-Tepe	48
153	Shār-i-Banu Pottery (1)	49
154	Shār-i-Banu Pottery (2)	50
155	Patterns and Characters of Shār-i-Banu Pottery	51
156	Begrām Pottery	52
157	Pottery Goblet Restored, Shār-i-Banu Pottery	52
158	Gorge of Tang-i-Shafa	54
159	Archaeological Sites in Balkh (After Foucher)	55
160	Nadīr-Tepe (after Foucher)	57
161	Pounded Earth of Takht-i-Rustam	57
162	Tōp-i-Rustam (After Foucher)	58
163	Asyab-i-Qonak	59
164	Preshon-Tepe Pottery (1)	61
165	Preshon-Tepe Pottery (2)	62
166	Patterns of Preshon-Tepe Pottery	63
167	Pottery Disk from Nasrat-Tepe	66
168	Chamkala-Tepe	68
169	Pillar Bases from Chamkala-Tepe	68
170	Terra-cotta Figures from Lili-Tepe (?)	69
171	Small Finds from Lili-Tepe (?)	69
172	Tepes North of Bāghlan	70
173	Pillar Bases from Akhonzada-Tepe (?)	71
174	Bronze Bracelet from Qala-Zal (?)	71

75	Khoja-Ghaltan-Tepe	73
76	Khoja-Ghaltan-Tepe Pottery	73
77	Moulded Pattern of Khoja-Ghaltan-Tepe Pottery	75
78	Pillar Base from Ranzajon Mosk, Chār	76
79	Archaeological Sites in Chār	76
80	Barfak Pottery	77

PLATES



版



1 Caves, General View



1 Caves 1-5 第一洞より第五洞



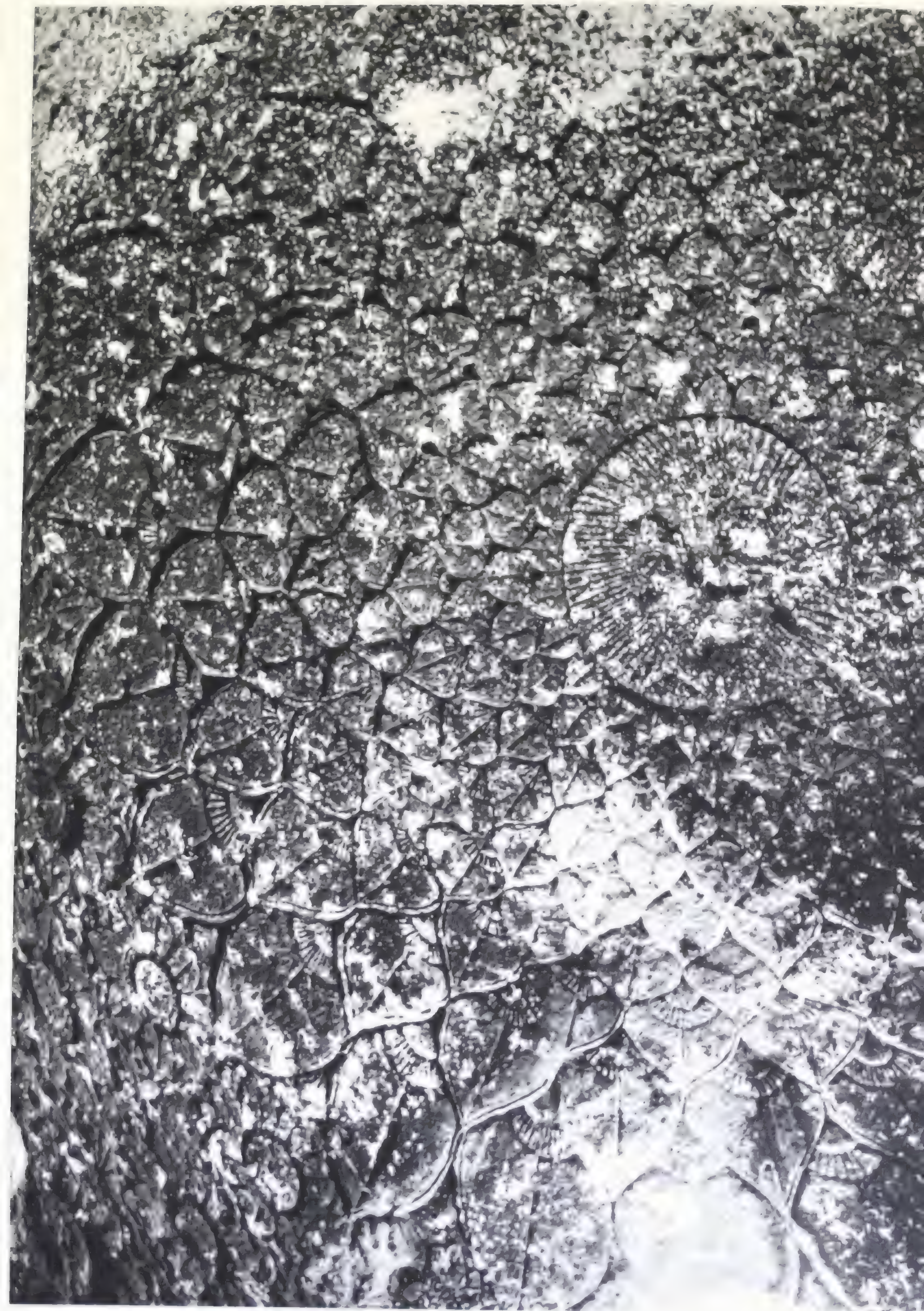
1 Cave 2, Outside 第二洞 外景



Cave 1, Front Wall 第一洞 前壁



Cave 1, Back Wall 第一洞 後壁



Cave 1, Ceiling, Central Lotus 第一洞 天井 中央大蓮華



Cave 1, Wall, Lotuses

第一洞 側壁 蓮華文



Cave 2 1 Front Corridor (from right side) 2 Rear Corridor (from right side)



Cave 2 1 Front Corridor (from left side) 2 Side Corridor (from back side)

第二洞 1) 前廊 (左方より) 2) 後廊 (後方より)



2



Cave 2 1 Side Room 2 Rear Room 3 Side Room, Tank



Cave 3 1 Outside 2 Entrance

第三洞 1) 外景 2) 入口



Cave 3, Ante-Room 1 Right Part 2 Entrance to Main Room



Cave 3, Ante-Room 1 Left Part 2 Entrance to Main Room



Cave 3, Main Room, Back Wall



Cave 3, Main Room, Left and Front Wall

图 1-1 1. 左壁 2. 前壁



Cave 3, Main Room, Ceiling and Right Wall



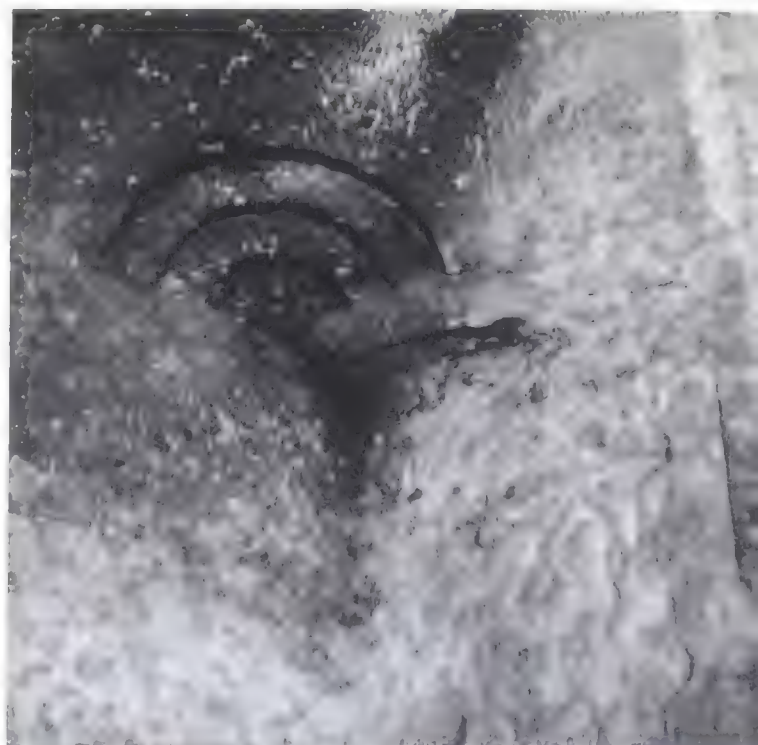
Cave 3, Main Room, Back Wall, Upper Part



1



3



5

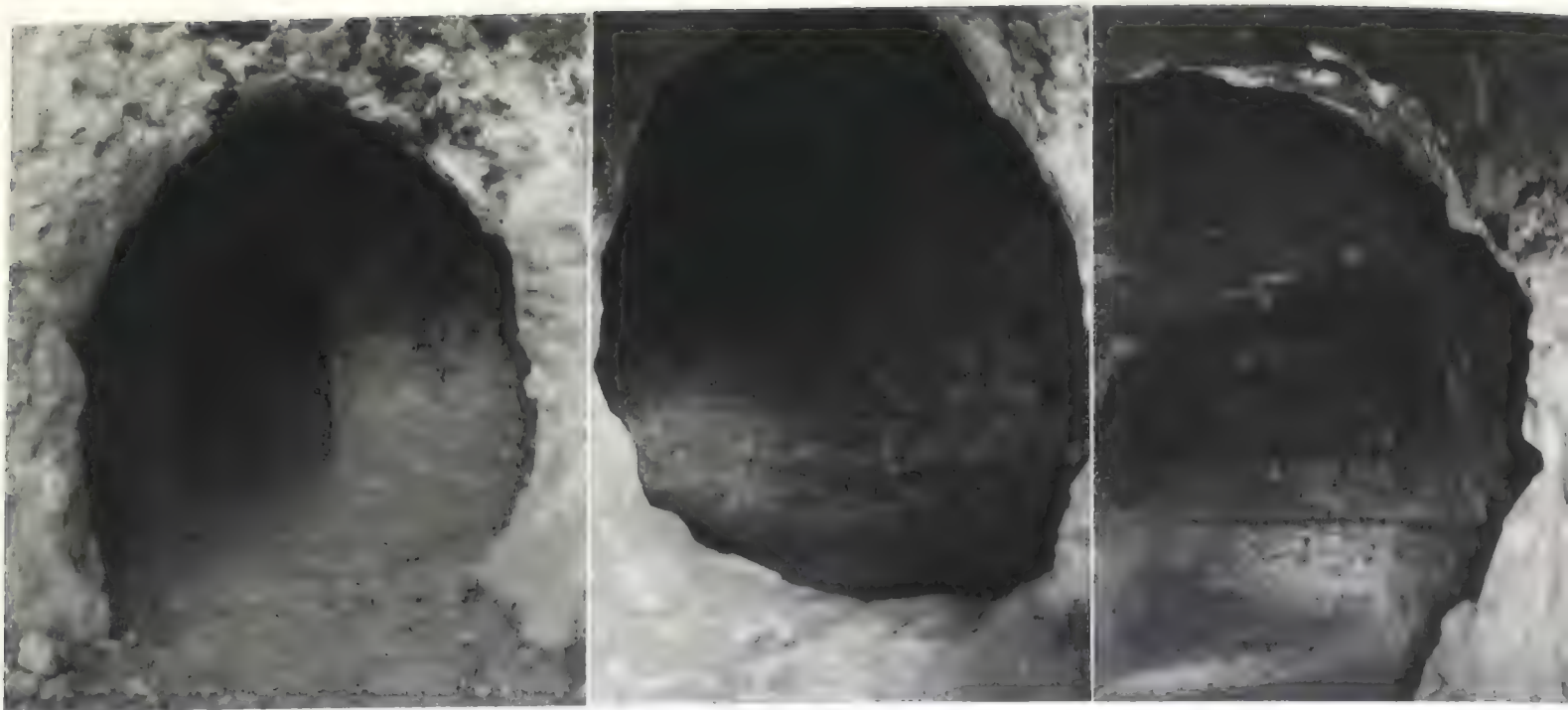


Cave 3, Squinch Arches

第三洞 スキンチ・アーチ



Cave 4 1 Ante-Room, Back Wall 2 Middle Room, Back Wall



1-3



4

Cave 4 1-3 Side Room, Entrance 4 Main Room, Water Tank



1



3

Cave 5 1 Outside 2, 3 Hole, Outside and Inside

第五洞 1) 外景 2-3) 孔道 外側と内側



Cave 5 1 Entrance (from inside) 2 Inside



Cave 6 (Stupa Cave), Distant and General View



1



3



5



Cave 6 1 Annex Room i, Outside 2 Entrance

第六洞 1) 第一側室 外景 2) 入



1



2

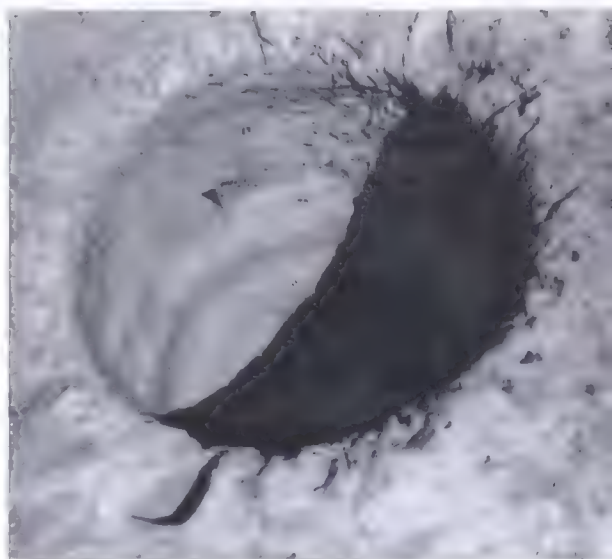


3

Cave 6 1 Dome(from entrance) 2, 3 Circumambulatory Path, North and West Sides

第六窟 1) 鉢鉢部 (入口より) 2, 3) 回廊 北側と西側







Cave 6, Harmika 1 South-West Side 2 South-East Side





1



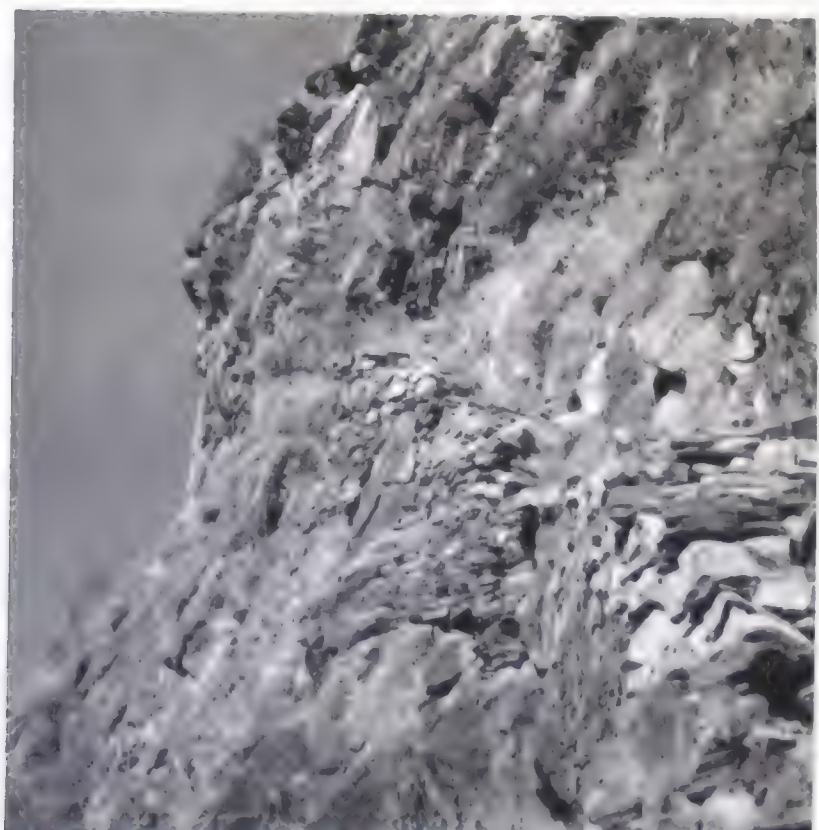
2-4

Cave 6 1 Circumambulatory Path, East Side 2-4 Harmika, Casket Room, Inside and Entrance

2-1 同前東側 2-4 平頭部 円室 内部と入口



Temple Buildings, Distant View



Great Cave, Distant View and Ascending Path



Great Cave 1 Outside View 2 Octagonal Room



1



2



3

Great Cave 1 Water Tank 2 Stone Wall 3 Staircase

大洞 1) 水塘 2) 残壁 3) 石阶



1



2

Great Cave, Shrine 1 General View 2 Outside



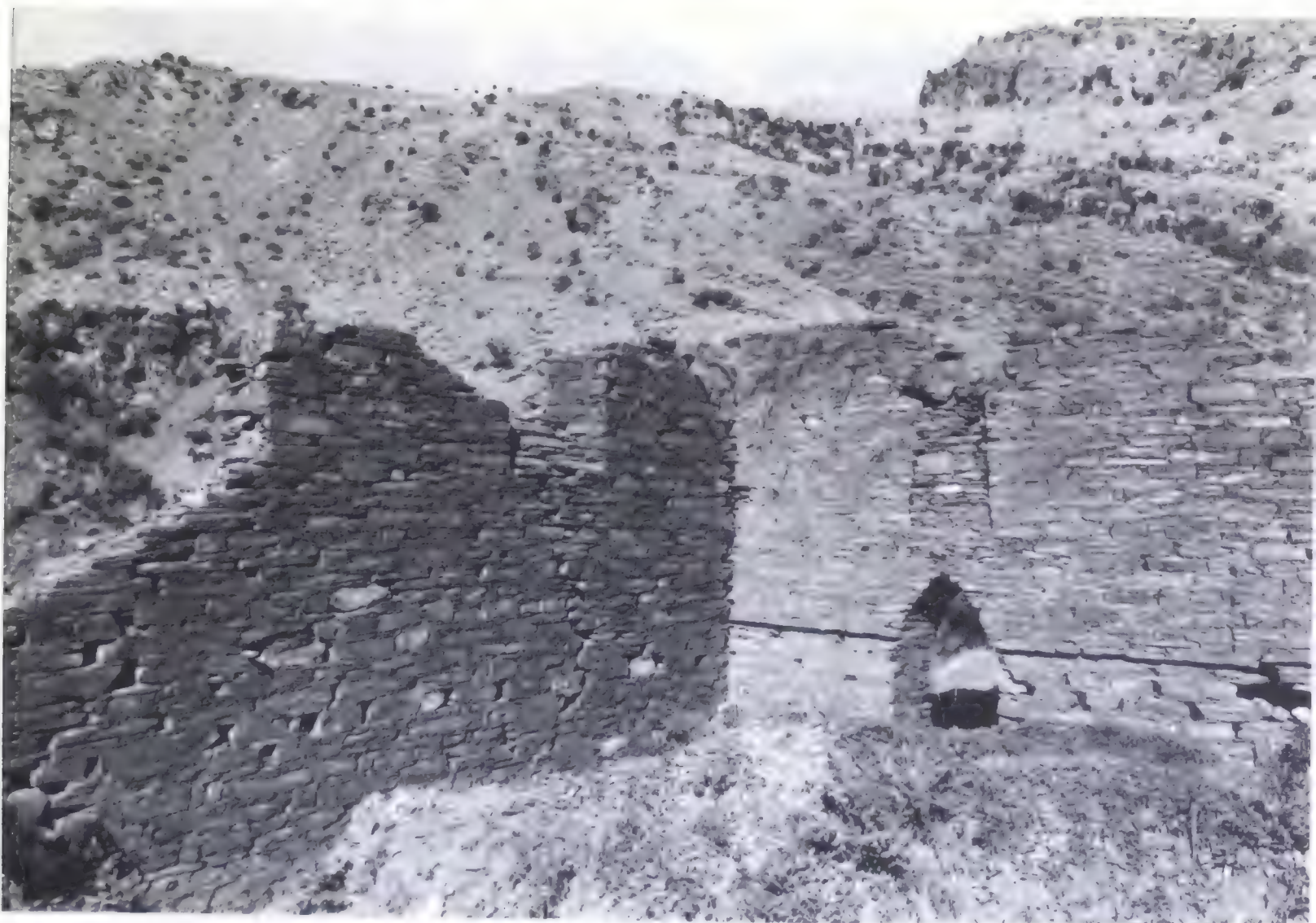
1



2

Great Cave 1 Shrine and Window 2 Stone Wall

洞窟 1) 祠堂と明窓 2) 石垣



Temple Site 1 Central Building 2 Assembly Hall



Temple Site, Assembly Hall, North Wall

中央廟寺 會堂 北壁



Temple Site, Shrine on Edge



Shrine on Ridge





1 Shrine on Top, Site 2 Shrine on Edge, Inside

1) 山頂祠堂 2) 院内祠堂 内部



1 Small Cave, 2 Bungalow Site, Base



1 Well 2 Northern Slope, Building



1



2



3



1



2



3

1 2 Pirsai, Riuns on Top 3 Kashmir Smast, Distant View

1. 2) ピルサイ廃址 3) カシュミル・スマスト遠望

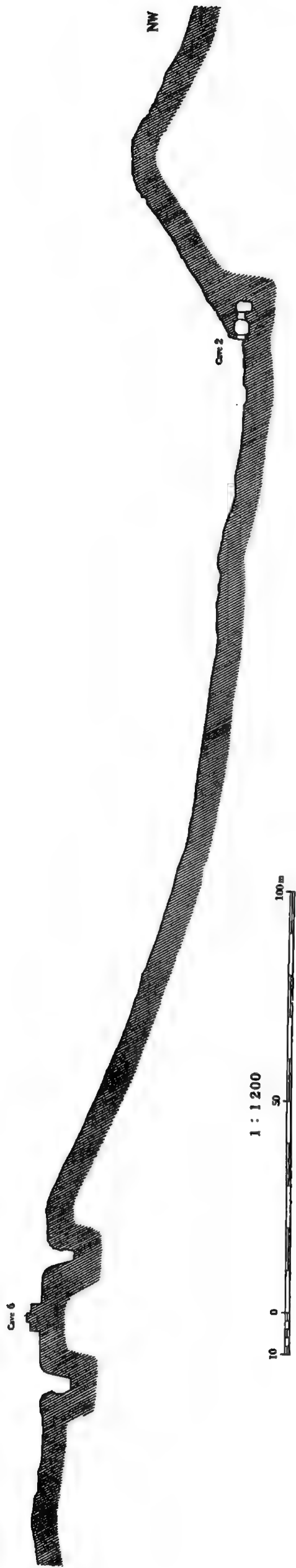


PLANS

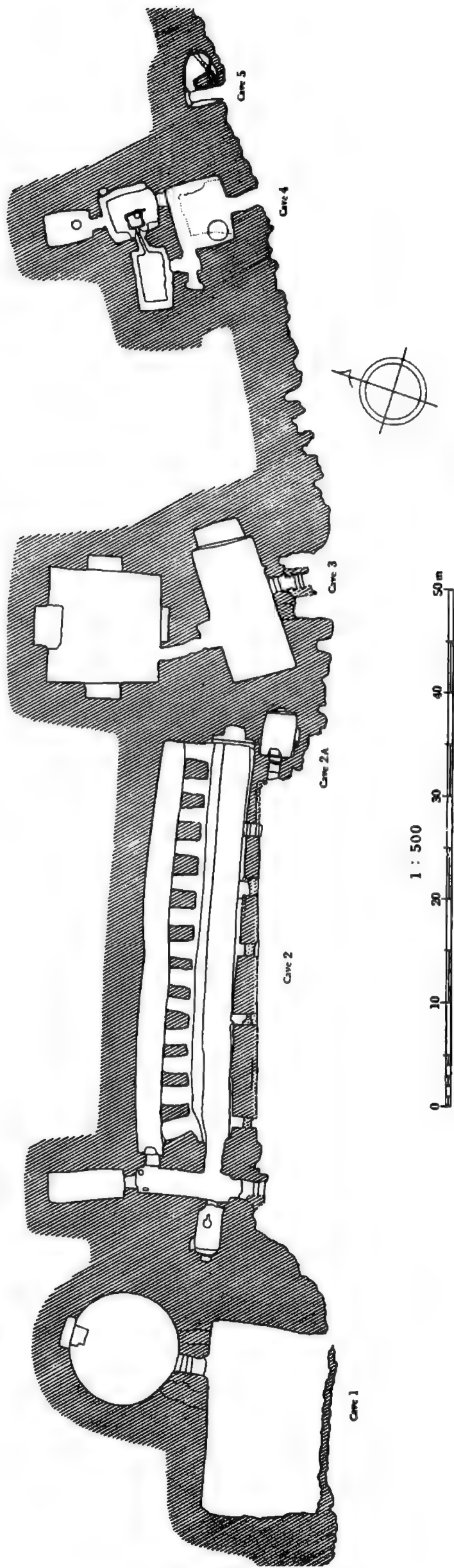
測

図

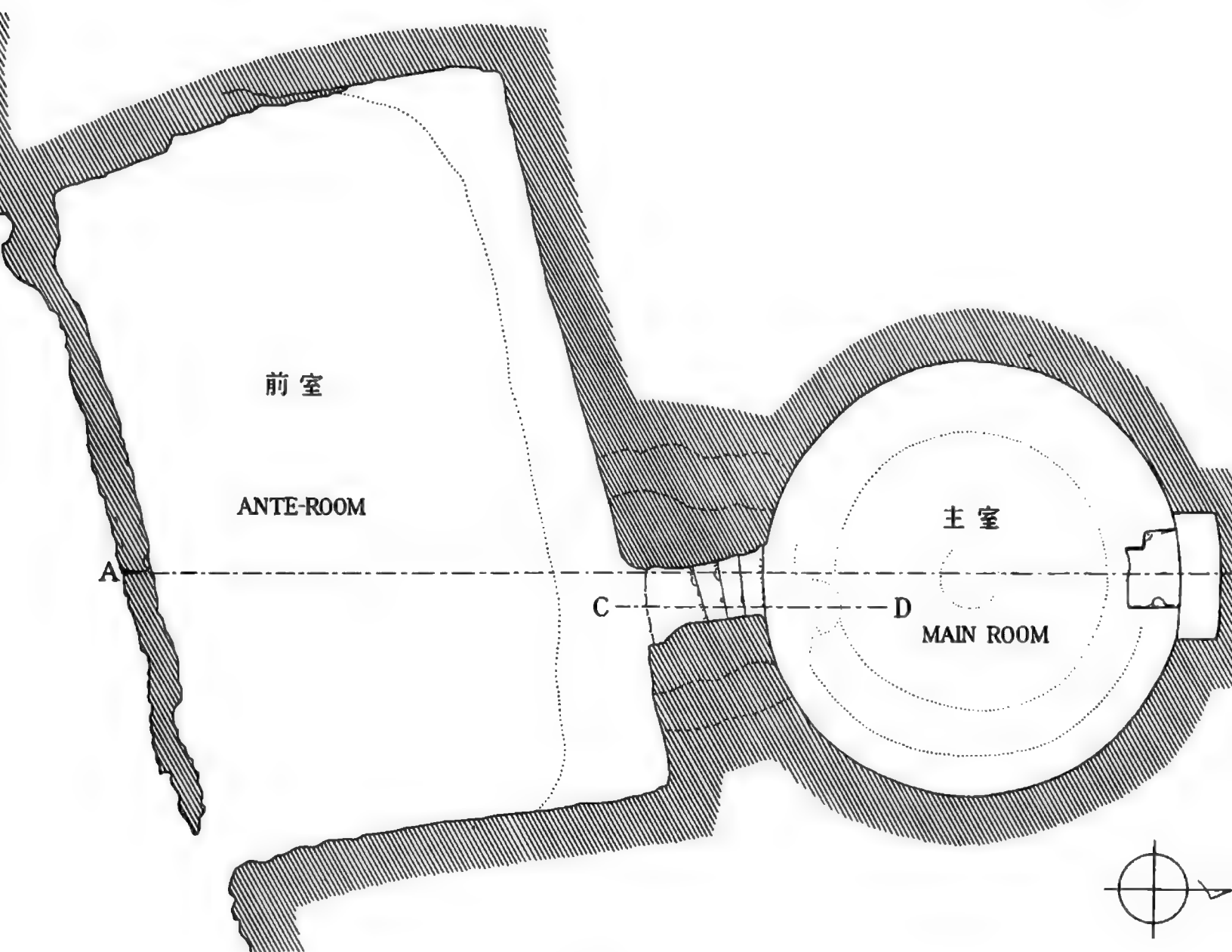
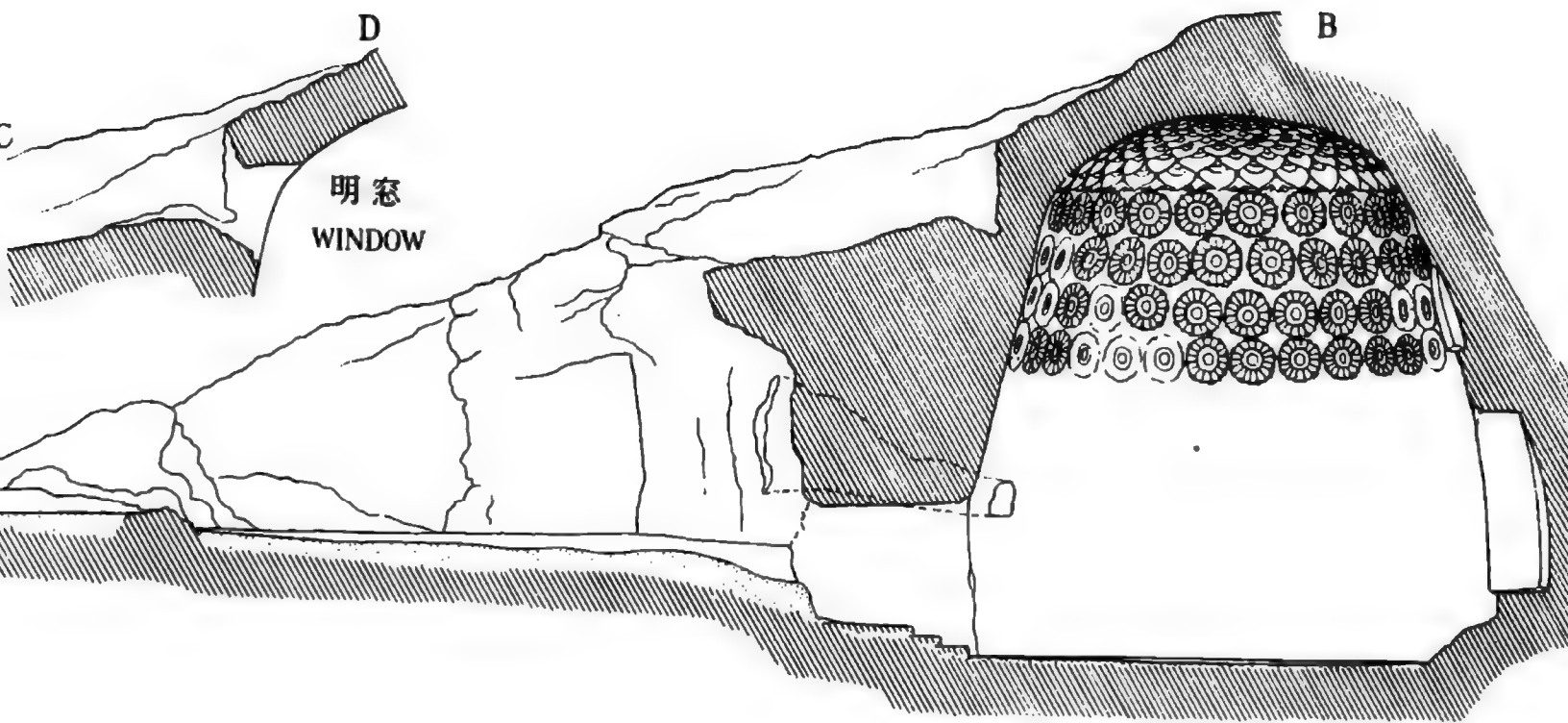
(a)



(b)

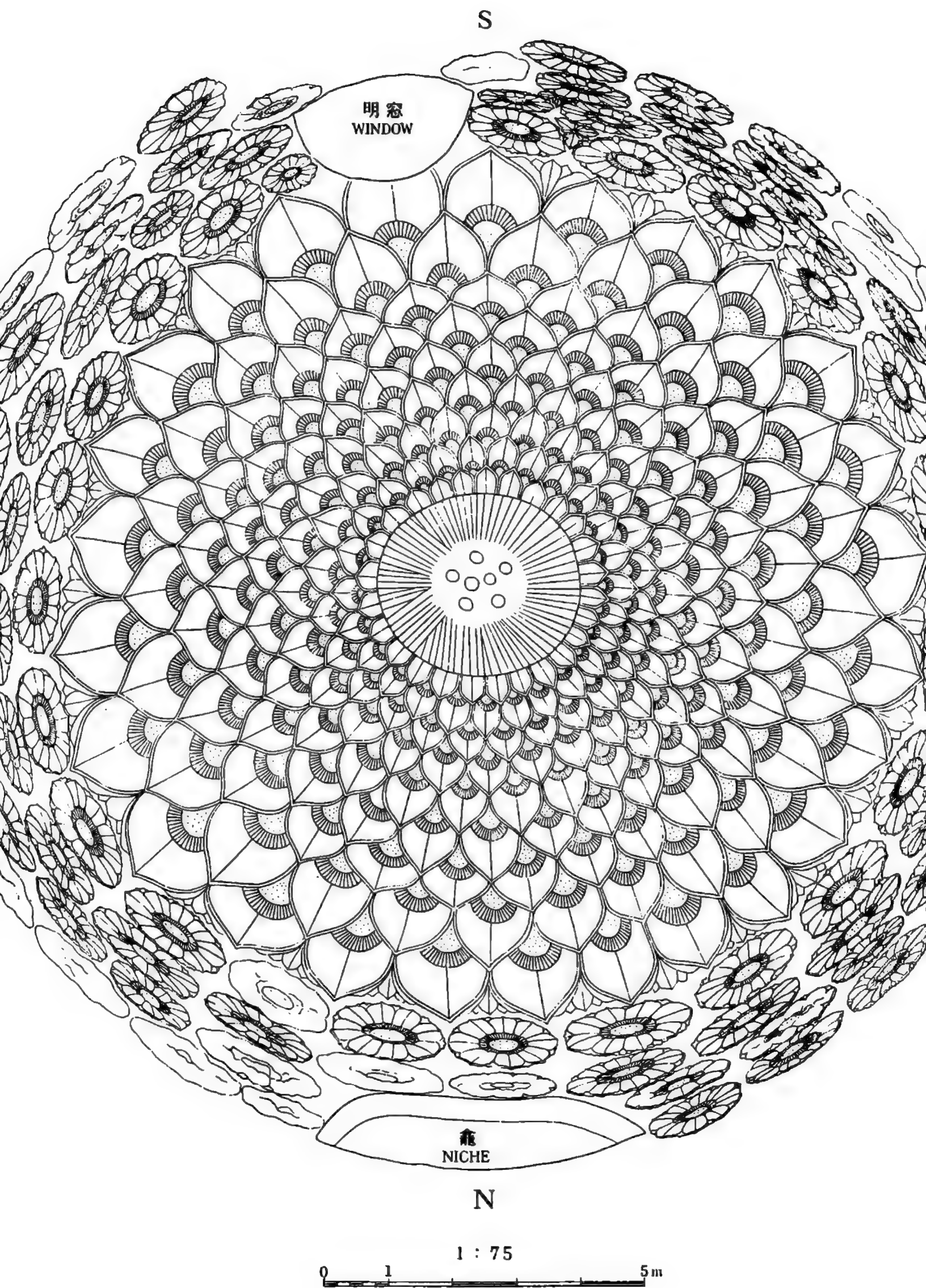


a. Caves, Section 石窟 断面図 b. Caves, Distribution 石窟 平面図

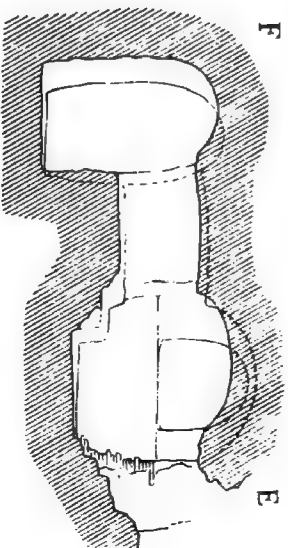
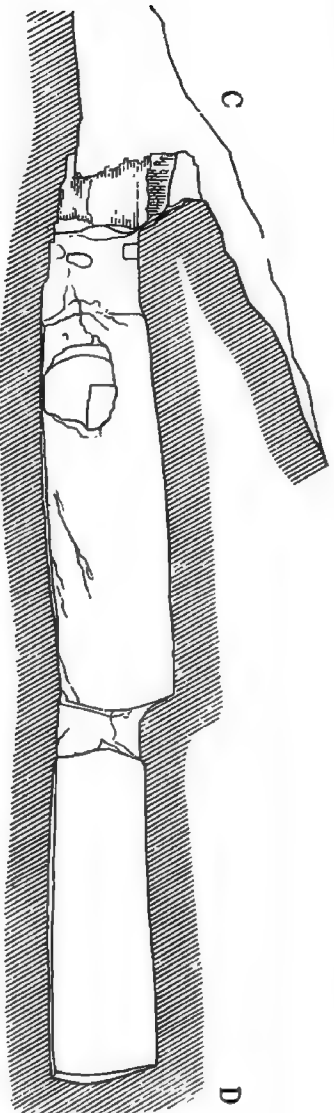
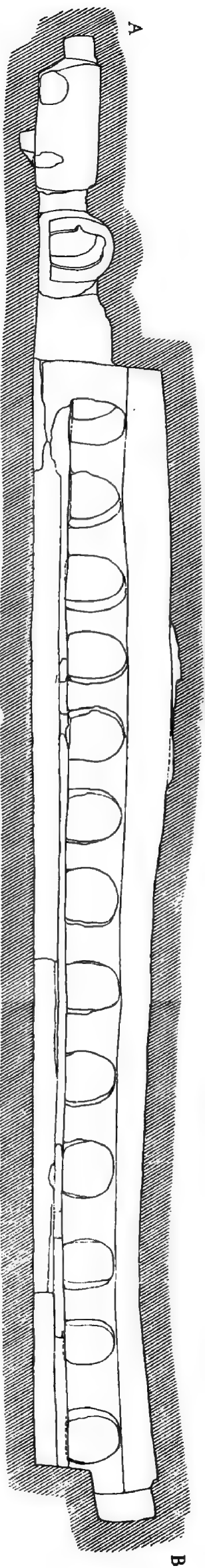


1 : 150

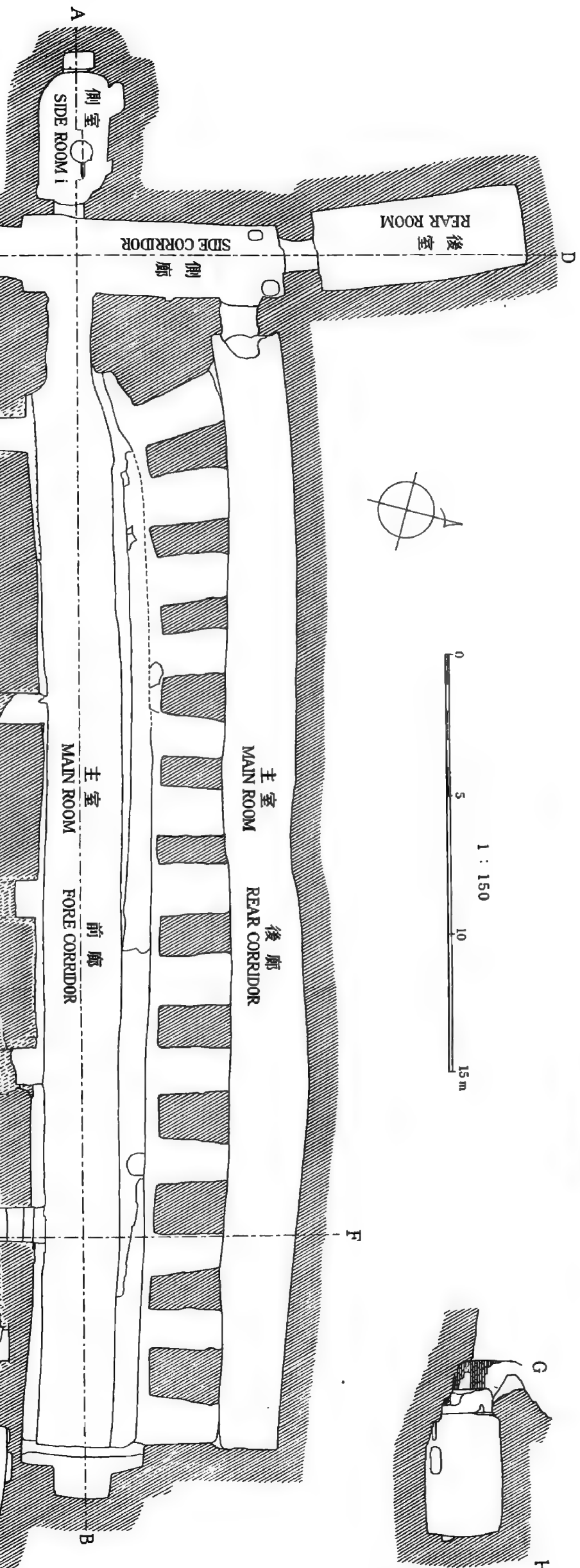
0 5 10 m

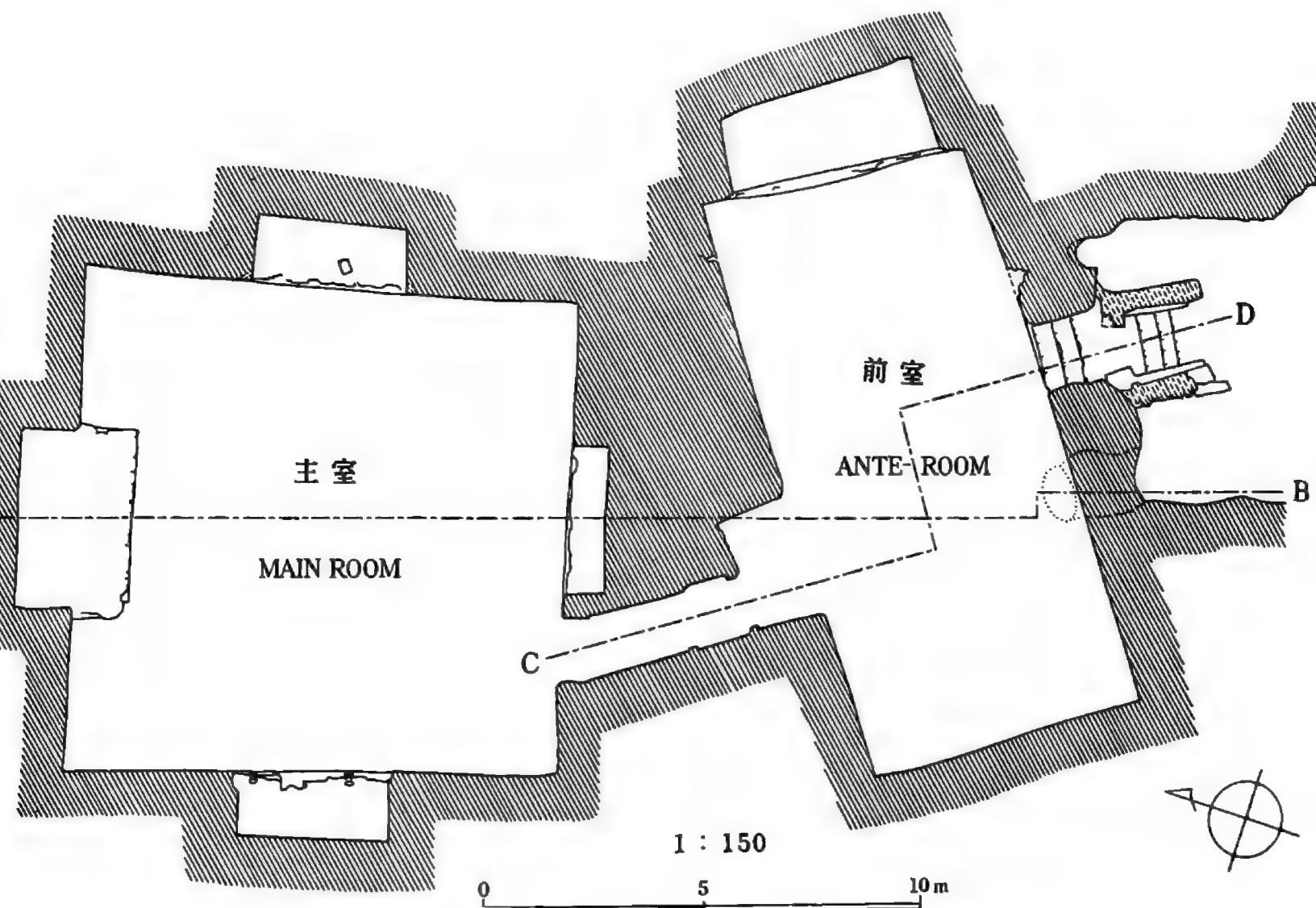
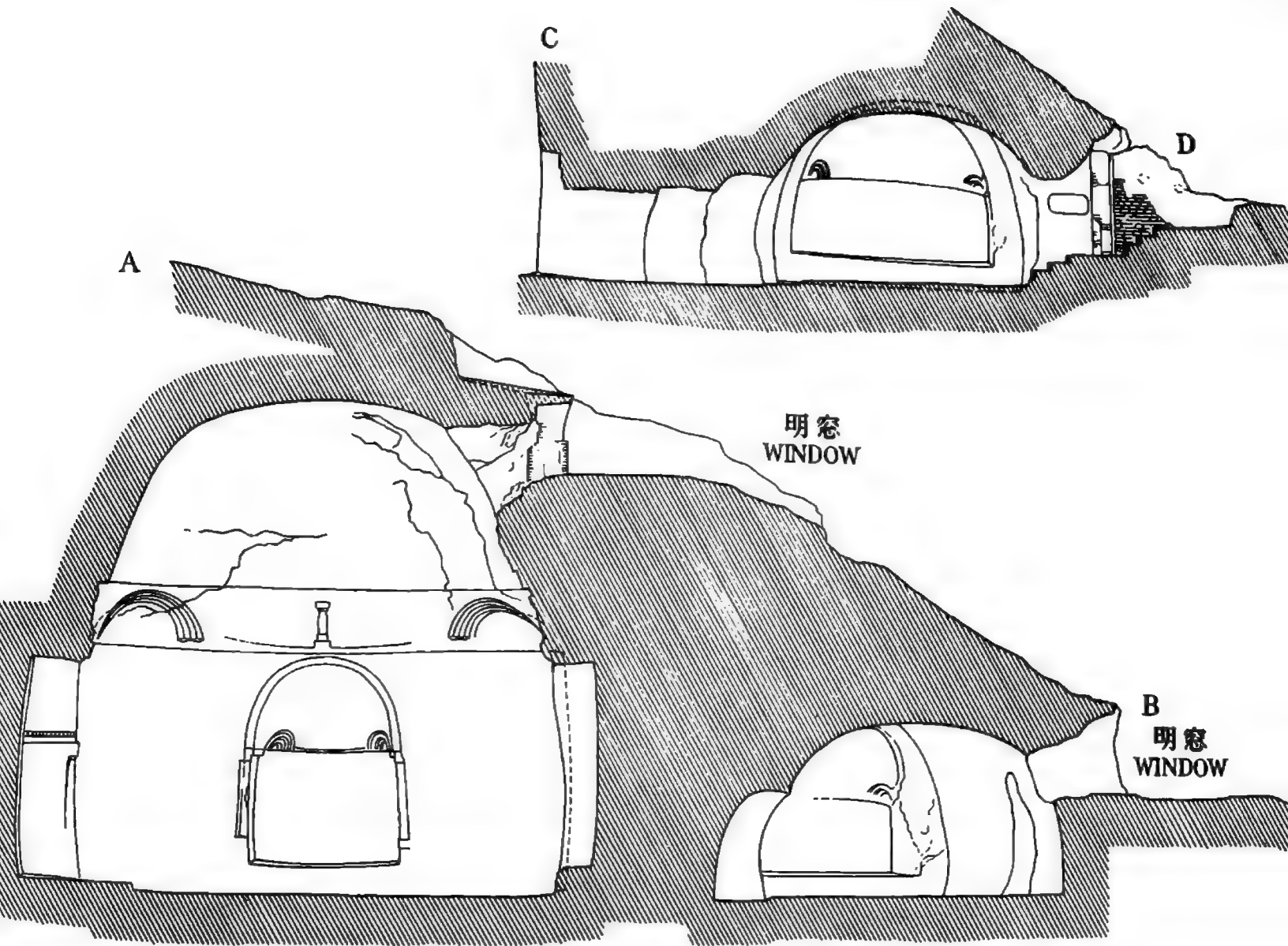


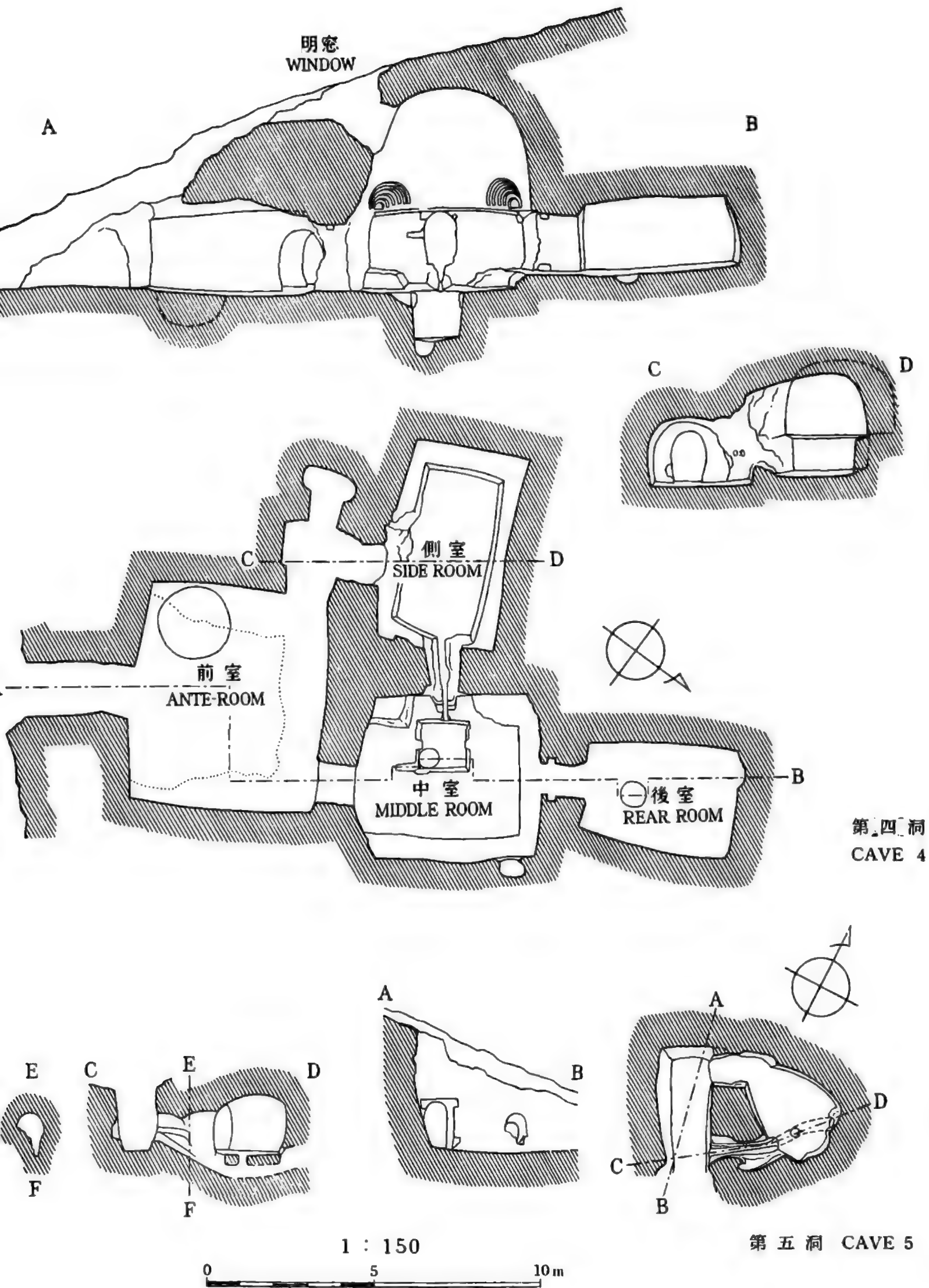
Cave 1, Ceiling, Lotuses 第一洞 天井蓮華図



0 5 10 15 m
1 : 150

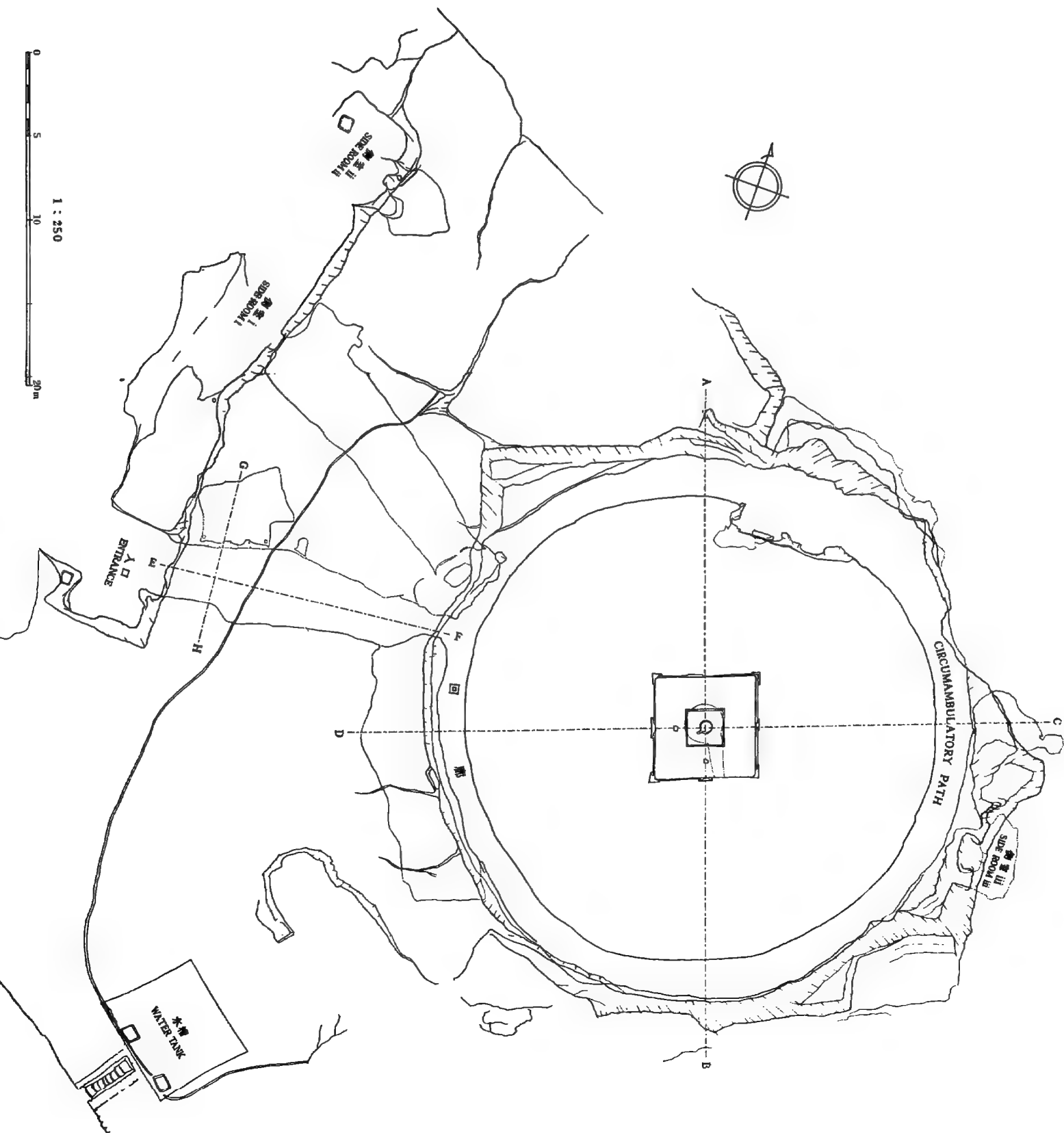
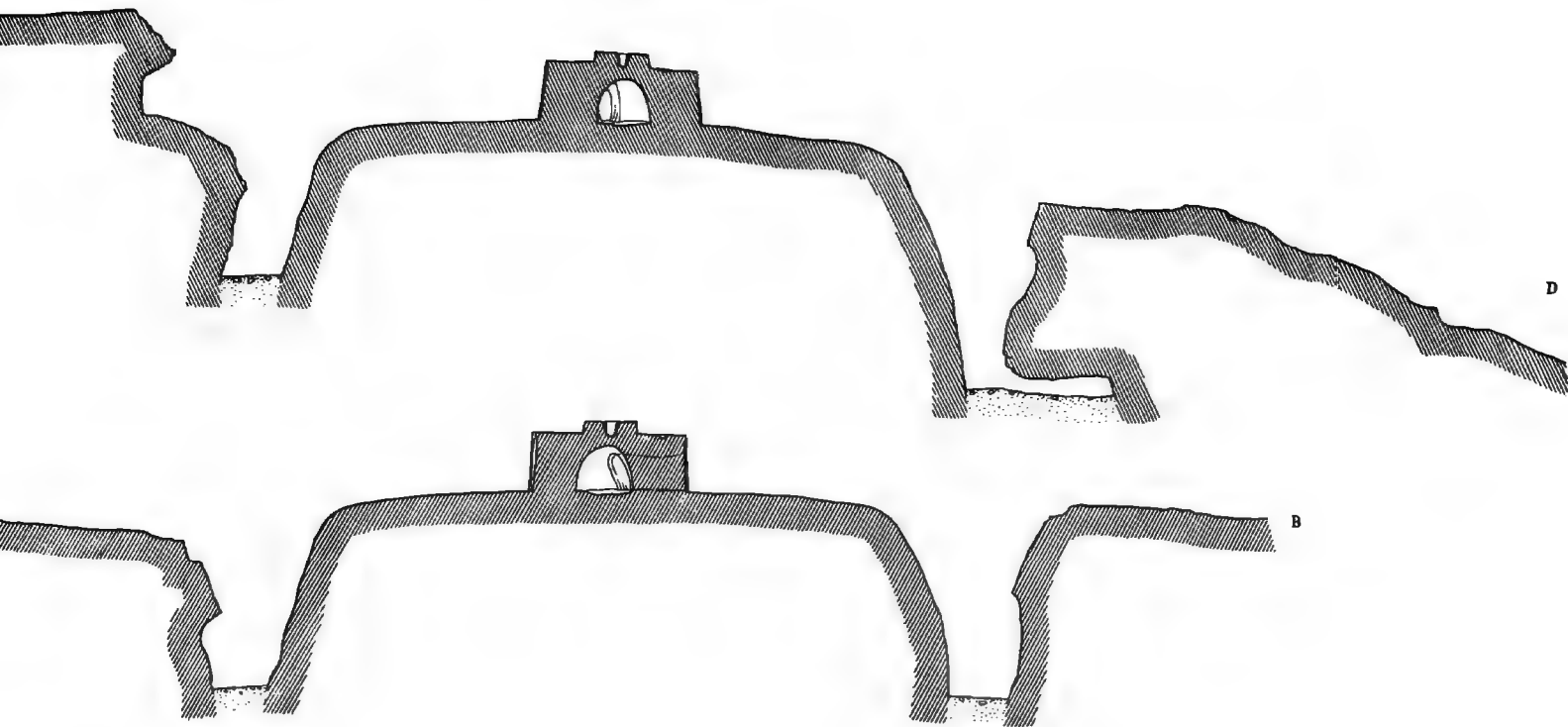


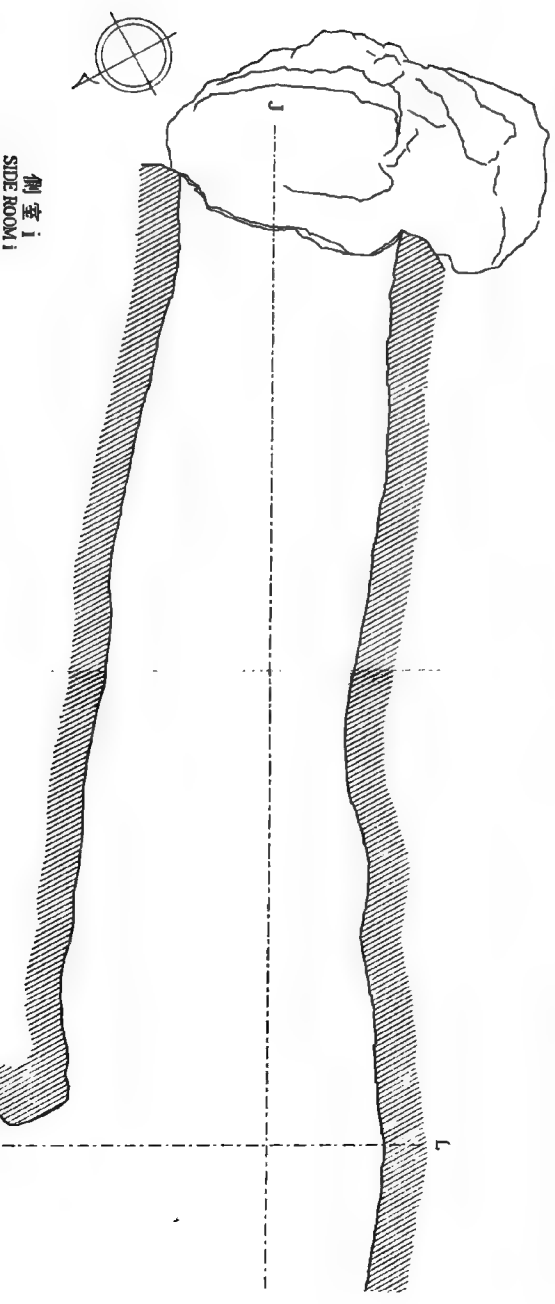
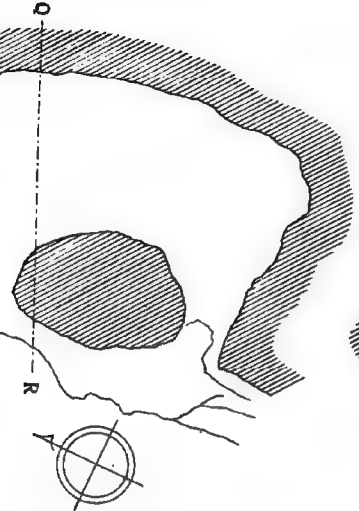
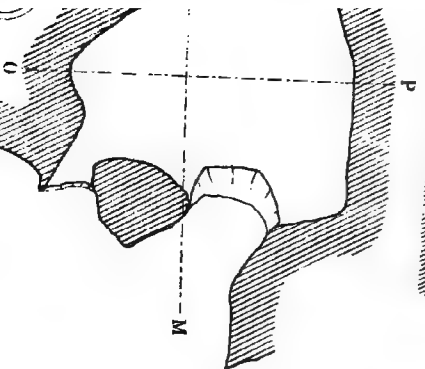
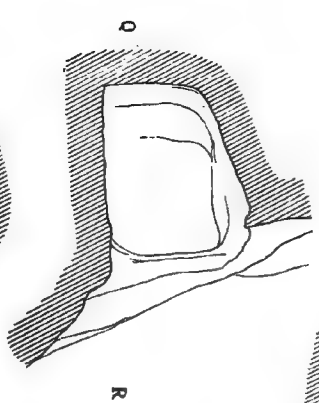
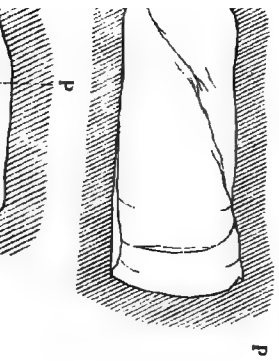
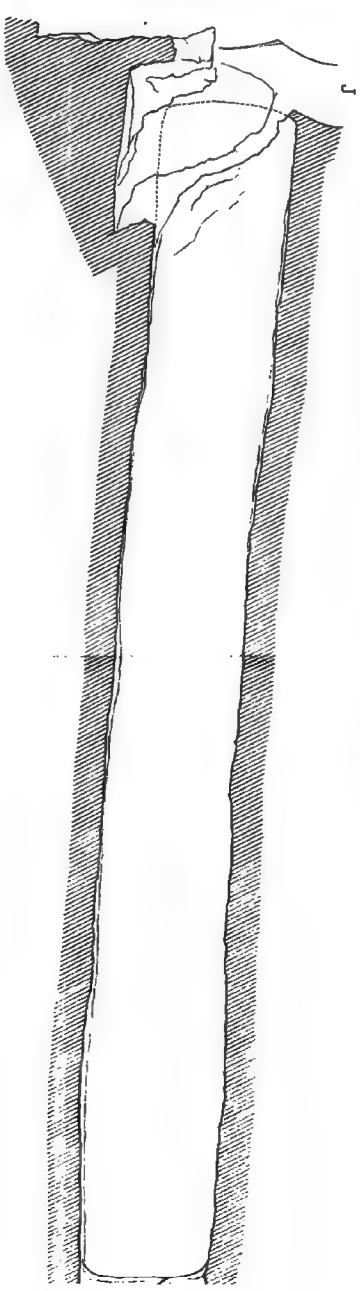
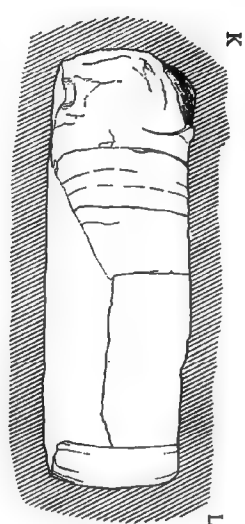
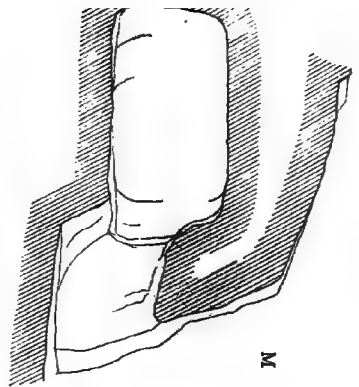
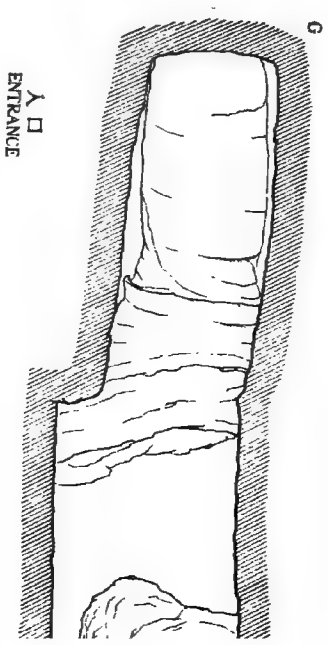
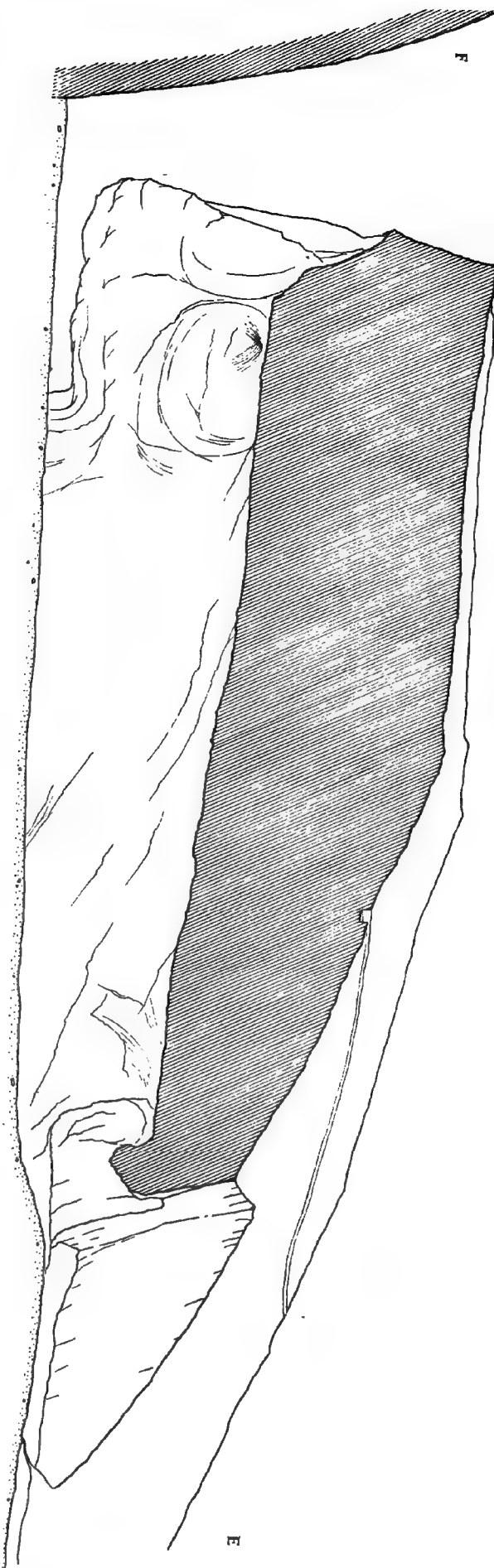




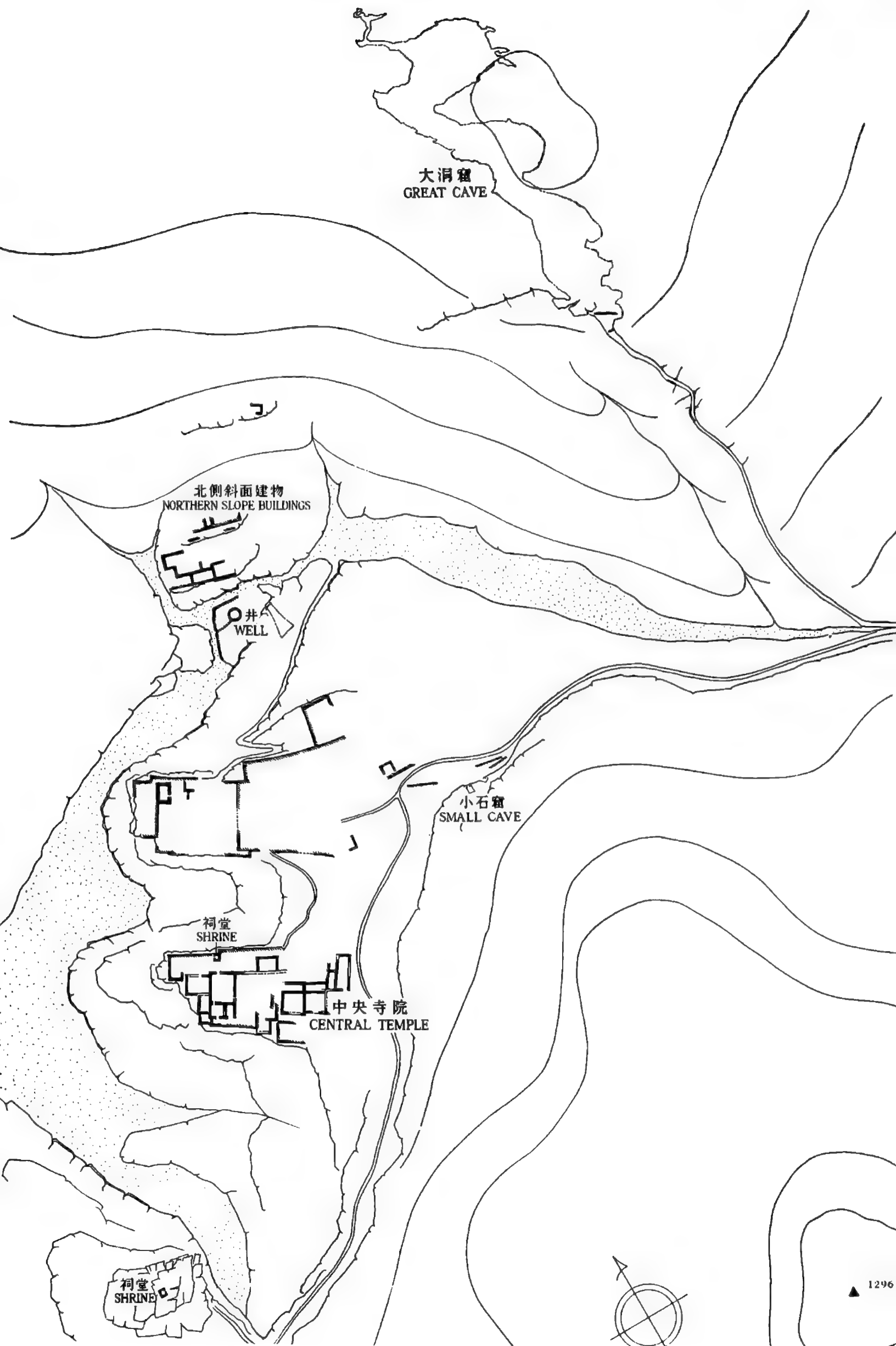
Caves 4 and 5, Plans and Sections

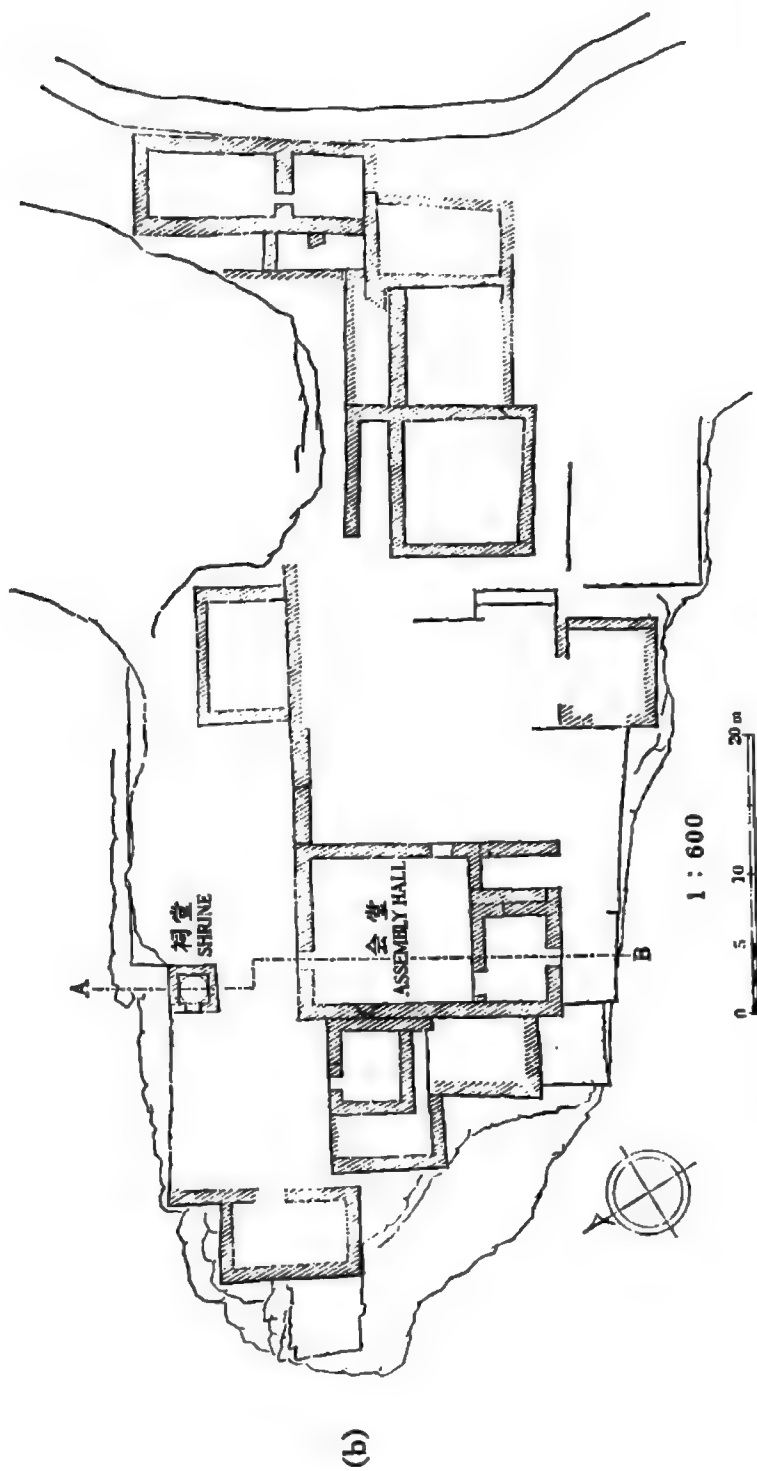
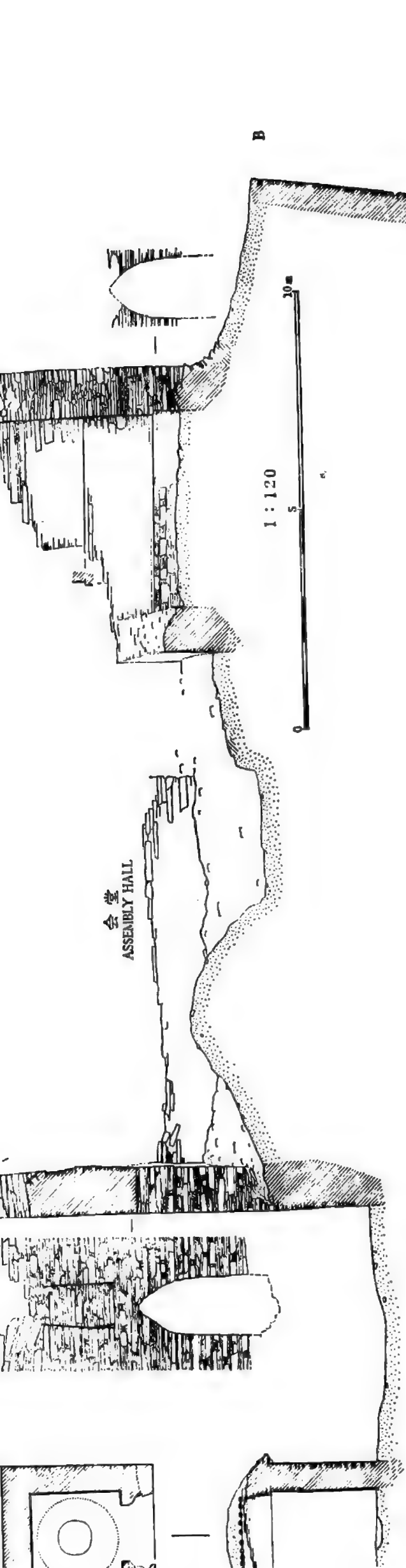
第四洞と第五洞 平図と断面図



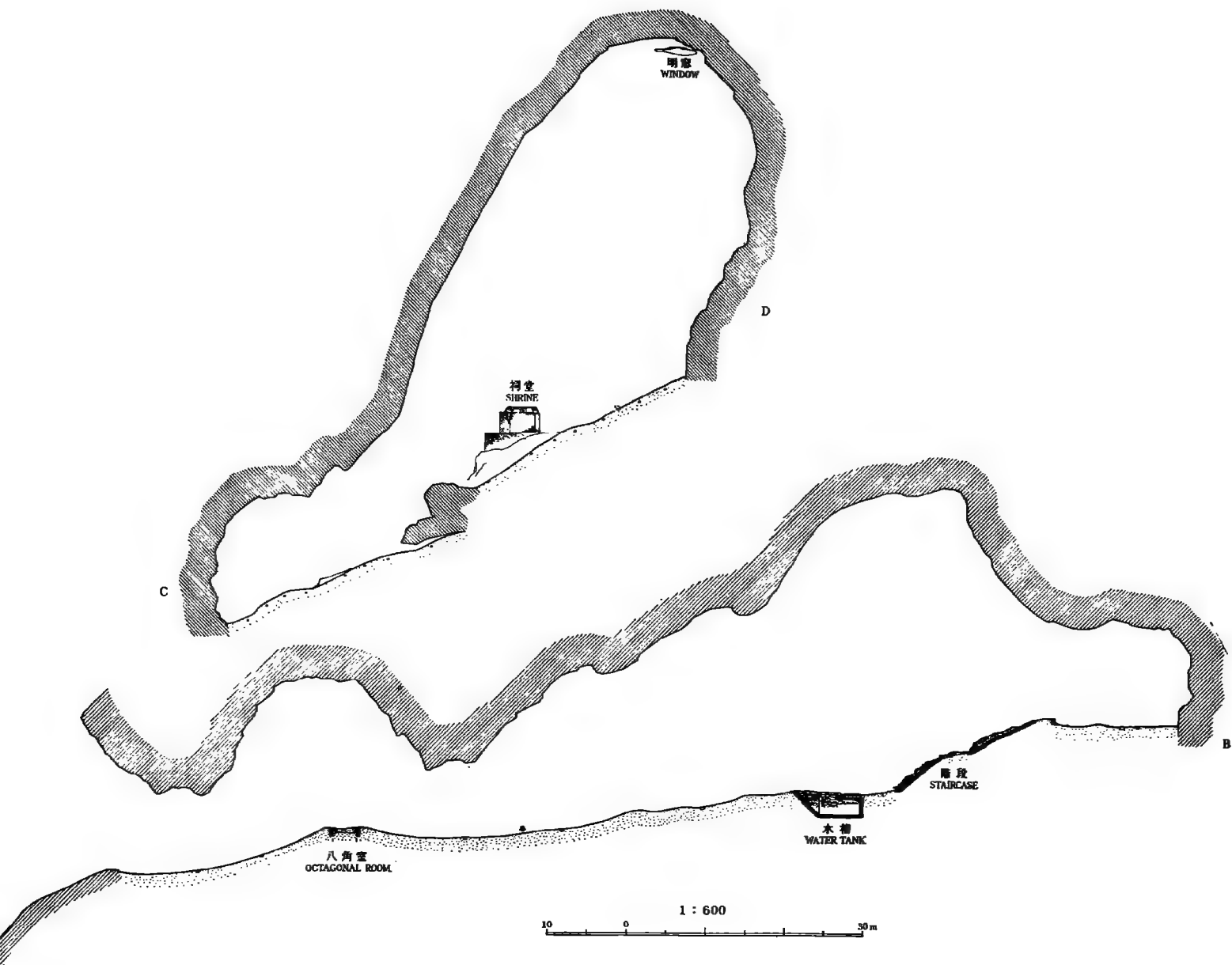


側室 i
SIDE ROOM i

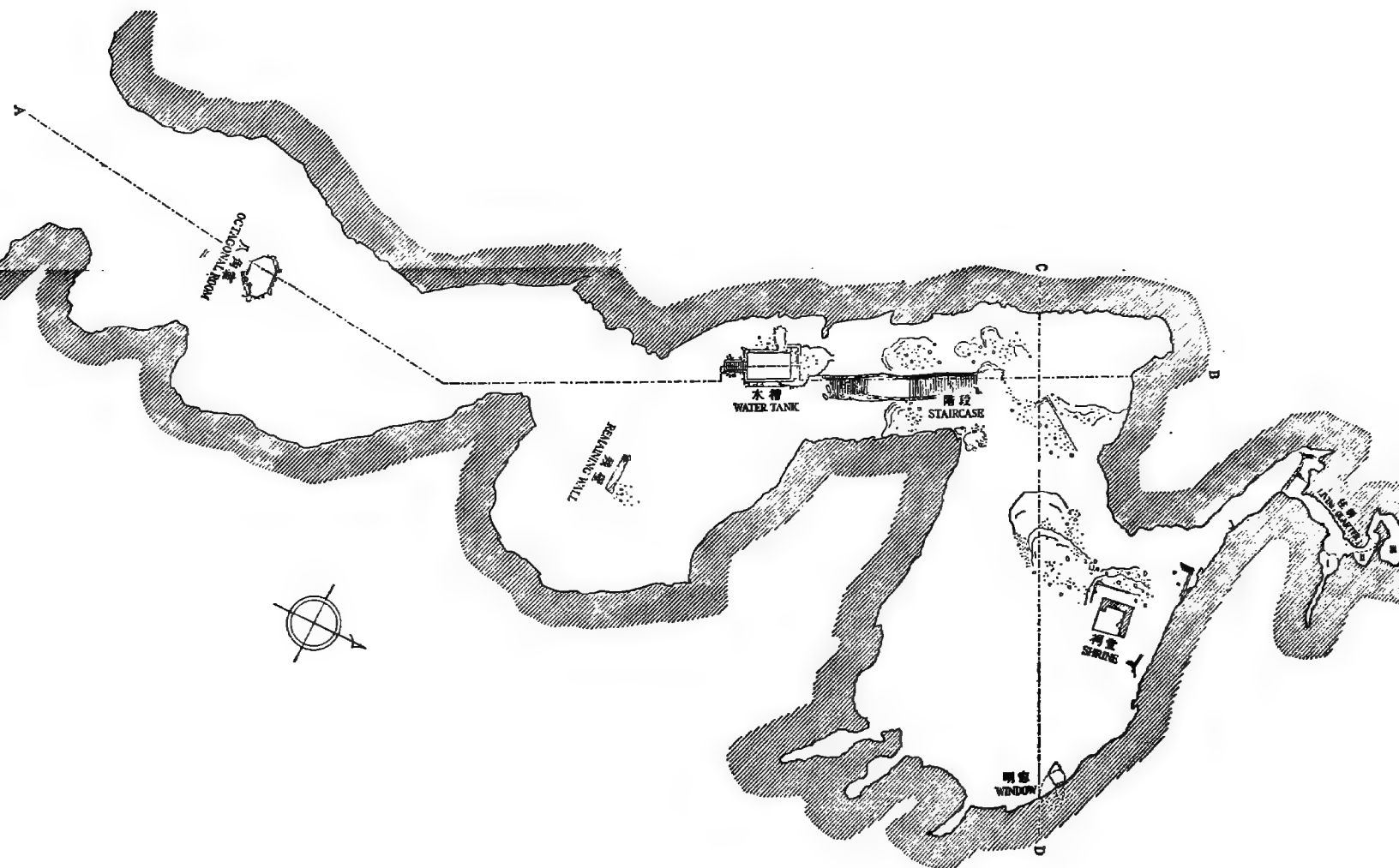


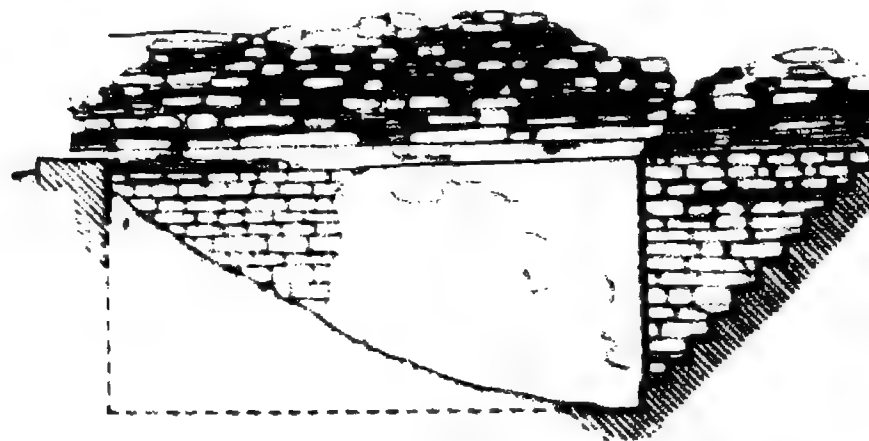
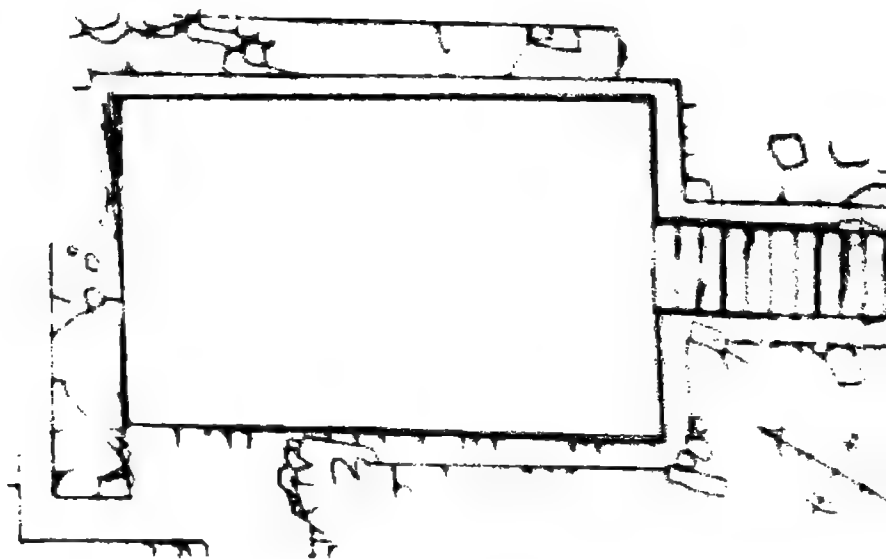
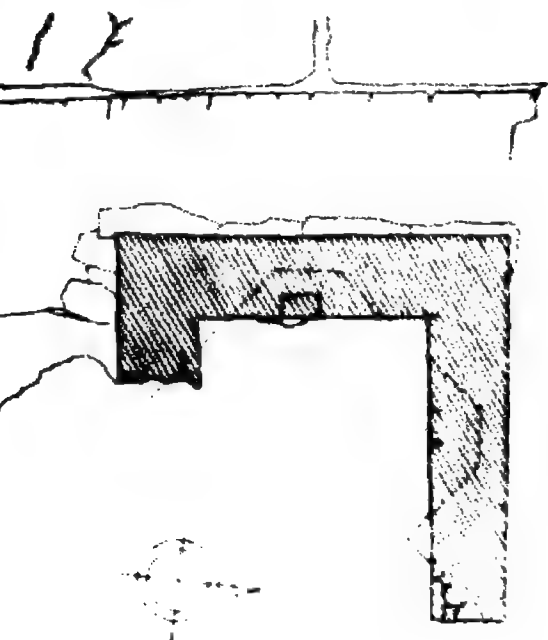
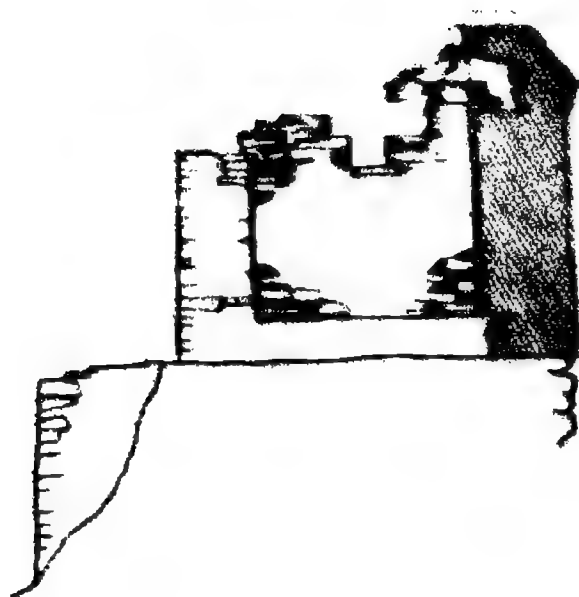
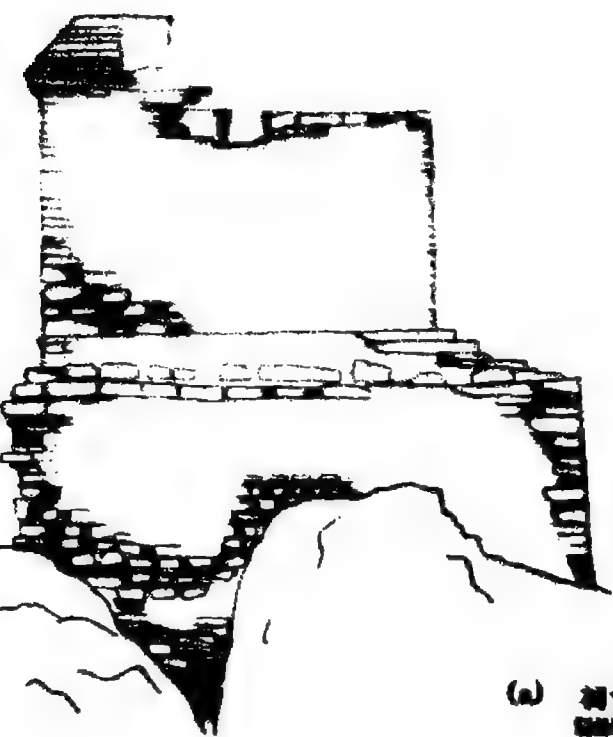


a. Central Temple, Section 中央佛寺 断面图 b. Central Temple, Sketch Plan 中央寺院 平面略图

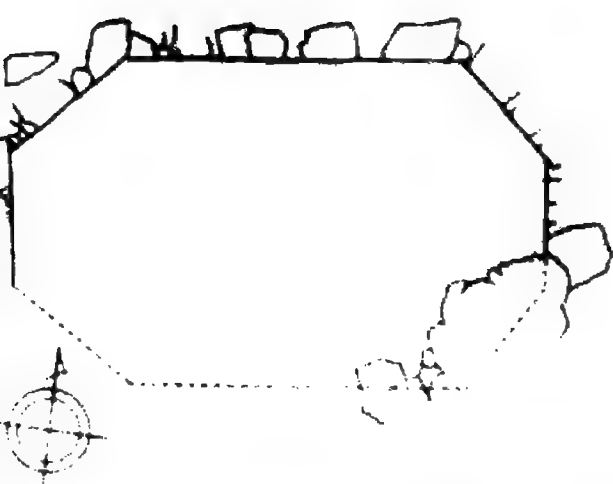


Great Cave, Section 洞窟 断面图

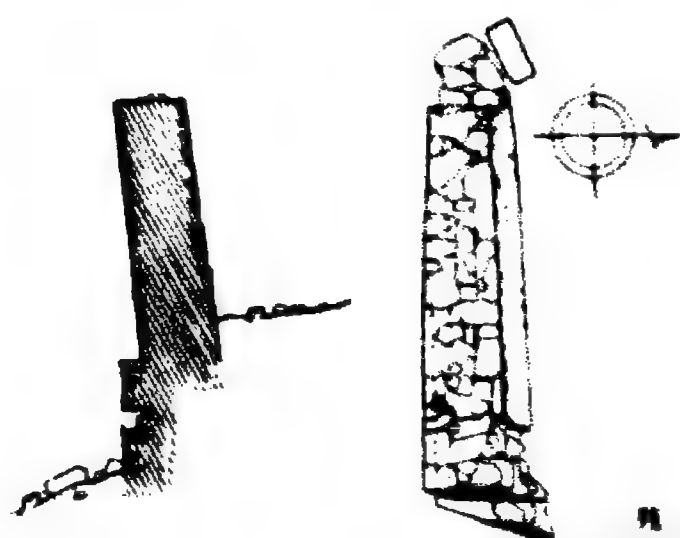




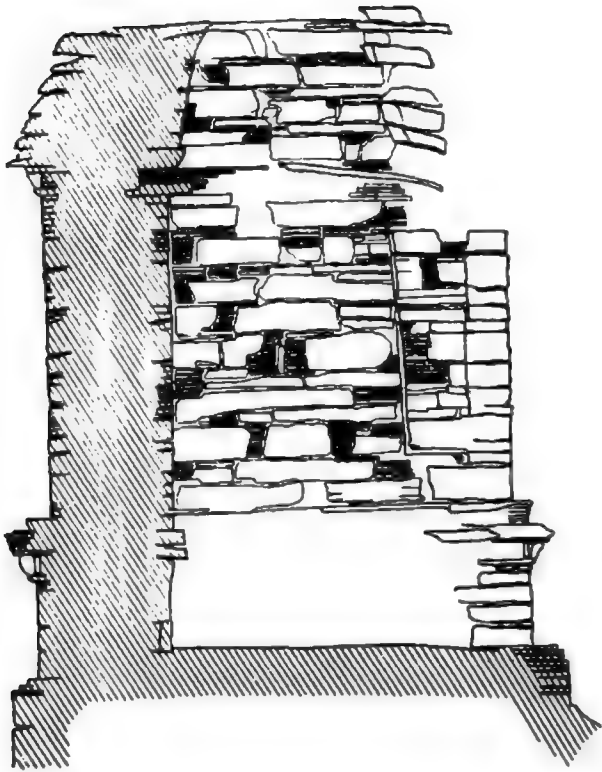
(b) 水槽
WATER TANK



(c) 八角室
OCTAGONAL ROOM

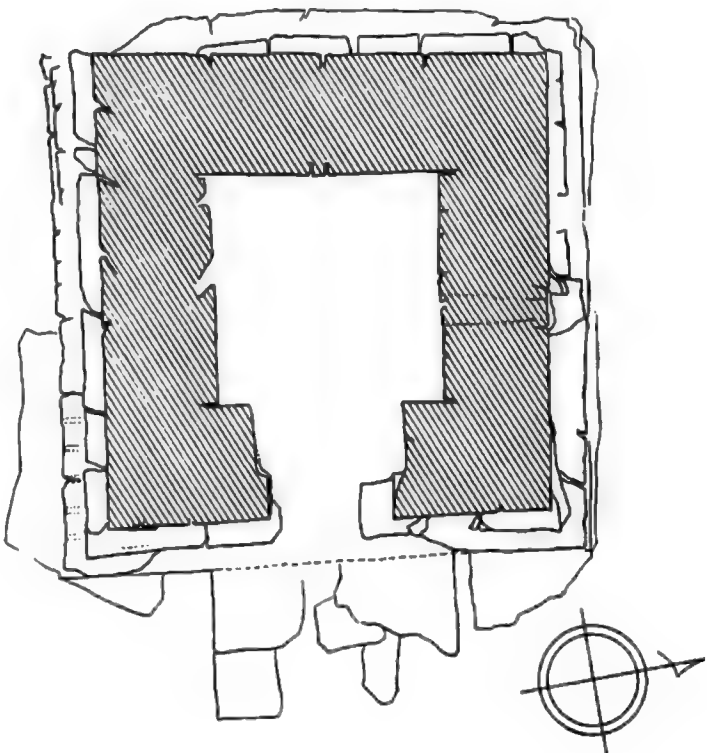


殘壁
REMAINING WALL

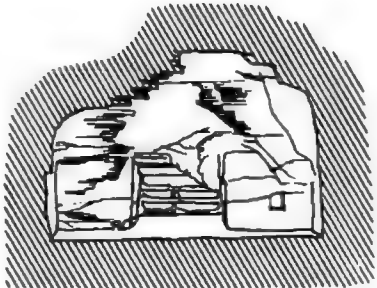
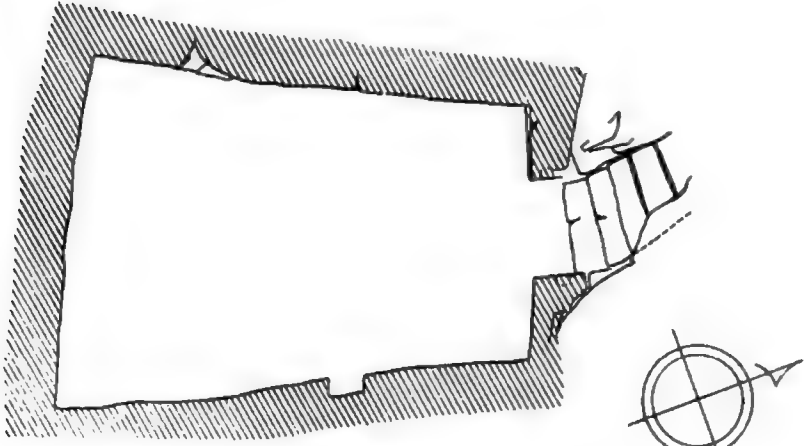
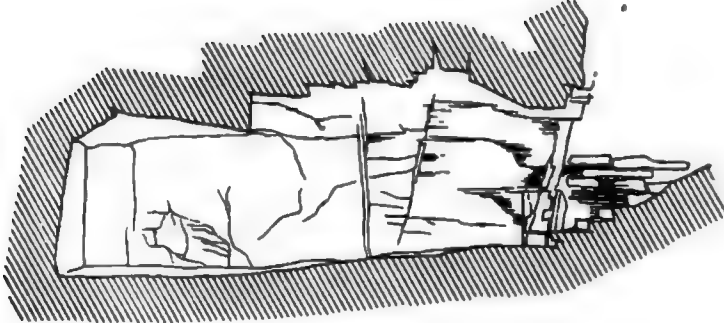


(a) SHRINE ON RIDGE
崖上祠堂

1 : 40
0 1 2m



1 : 80
0 1 2 3m



(b) SMALL CAVE 小石窟

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告

ハイバク と カシュミル-スマスト

アフガニスタンとパキスタン
における石窟寺院の調査
1960

水野清一編

京 都 大 学
1962

© COPY-RIGHTED BY
THE KYOTO UNIVERSITY SCIENTIFIC MISSION
1 9 6 2

PRINTED AND BOUND IN JAPAN
BY THE NISSHA PRINTING CO., LTD.

序

かねて中国の仏教石窟を研究したわれわれは、その源流として中央アジア、アフガニスタン、パキスタン、インドの石窟に大きな関心をよせてゐた。それでアフガニスタン、パキスタンの仏教遺跡の調査をはじめるとあって、まづ、アフガニスタンのハイバク石窟、パキスタンのカシュミル-スマスト洞窟をとりあげた。前者はアフガニスタンにおける数すくない石灰岩の石窟寺院であり、後者はパキスタンにおける唯一の洞窟寺院である。いずれも、仏像をのこしてゐない、壁画をもたない石窟であるが、一方はドームとスキンチ-アーチの、他方は石づみ構築の、すぐれた遺構をもち、仏教の建築をかんがへるうへの、欠くべからざる一面をもつてゐる。調査研究は、かならずしも、いまだ完璧とはいへないが、獲るところにしたがつて、これを公表し、両国の仏教遺跡をひろく紹介するとともに、あはせて大方の叱正を期待するしだいである。

なほ第三部として、アフガニスタン北部の考古学的一般調査を載録した。みな、主として1960年の第二次調査にもとづいたが、1959年の第一次調査の記録も参照した。三篇の執筆者のほか、田中重雄、陳顕明、小谷仲男、および勝藤猛の諸氏が調査に参加し、アフガニスタンからはゴラム・サヒ君、パキスタンからはアーマド・イスティアク・カーン君が協力されたことを記録して感謝の意を表したい。なほ両国文部省および関係諸氏、なかんずく Dr. Abdul Rahim Ziyaee, Director of the Kabul Museum, Dr. Fazal Ahmad Khan, Director of the Department of Archaeology, Mr. Wali Ullah Khan, Superintendent of Archaeology in Lahore, および Mr. M. A. Shakur Khan, Director of the Peshawar Museum が格別の便宜をはかれたことにたいしては、こゝに深甚の謝意を表するしだいである。また、本書の英訳にあたって特別の協力をおしめられた Oxford University, Museum of Eastern Art の P. C. Swann 氏にたいしても、ふかく感謝するところである。

昭和37年 6月13日

水 野 清 一

目 次

	頁
第一部 ハイバク石窟	
水 野 清 一 西 川 幸 治・ ・ ・ ・	1
第二部 カシュミル-スマスト洞窟	
水 野 清 一 西 川 幸 治・ ・ ・ ・	19
第三部 アフガニスタン北部の考古学的調査	
林 巳 奈 夫 佐 原 真・ ・ ・ ・	37
引用文献・ ・ ・ ・ ・	80
英文綱要・ ・ ・ ・ ・	83

目 次

第一部 ハイバク石窟

		参照頁			参照頁
1	1	石窟 全景・ 6, 9, 10	17	第三洞 前室 後壁上部・	8
	2	塔洞 遠望・ 9, 10	18	第三洞 スキンチ・アーチ・	8
2	1	第一洞より第五洞・ 6	1, 2	第三洞 主室 天井 後方右と前方左	8
	2	第一洞 外景・ 6	3, 4	第三洞 主室 右壁 大龕 左右・ . .	8
3	1	第二洞 外景・ 7	5	第三洞 主室 左壁 大龕 左方・ . .	8
	2	第二A洞 外景・ 8	6	第三洞 前室 左壁 右方・	8
4	1	第一洞 主室前壁・ 6, 7	19	1 第四洞 前室 後壁・	9
5		第一洞 主室後壁・ 6, 7	2	第四洞 中室 後壁・	9
6		第一洞 主室天井 中央大蓮華・ . . 6, 7	20	1~3 第四洞 側室 入口・	9
7		第一洞 主室側壁 蓮華文・ 6, 7	4	第四洞 中室 水槽・	9
8	1	第二洞 前廊（右方より）・ 7, 8	21	1 第五洞 外景・	9
	2	第二洞 後廊（右方より）・ 7, 8	2, 3	第五洞 孔道 外側と内側・	9
9	1	第二洞 前廊（左方より）・ 7, 8	22	1 第五洞 入口（内側より）・	9
	2	第二洞 後廊（後方より）・ 7, 8	2	第五洞 内部・	9
10	1	第二洞 側室・ 7, 8	23		第六洞（ストゥパ洞）遠景と全景・ 9, 10
	2	第二洞 後室・ 7, 8	24	1 第六洞 第一側室 外景・	9~11
	3	第二洞 側室 水槽・ 7, 8	2	第六洞 入口・	9, 10
11	1	第三洞 外景・ 8	3	第六洞 入口 右方・	9, 10
	2	第三洞 入口・ 8	4	第六洞 入口 隧道（外より）・ . .	9, 10
12	1	第三洞 前室 右方・ 8	5	第六洞 第一側室 右壁・	9~11
	2	第三洞 隧道・ 8	6	第六洞 第一側室（前方より）・ .	9~11
13	1	第三洞 前室 左方・ 8	25	1 第六洞 伏鉢部（入口より）・	10
	2	第三洞 隧道・ 8	2, 3	第六洞 回廊（北側と西側）・	10
14		第三洞 前室 後壁・ 8	26, 27	第六洞 伏鉢部 東面・	10
15	1	第三洞 前室 左壁・ 8	28	1 第六洞 平頭部 西角・	10, 11
	2	第三洞 前壁・ 8	2	第六洞 平頭部 東北面・	10, 11
16	1	第三洞 前室 天井・ 8	3	第六洞 平頭部 中央孔・	10, 11
	2	第三洞 前室 右壁・ 8	29	1 第六洞 平頭部 西南面・	10, 11

	2	第六洞	平頭部	東南面	10, 11		3	第六洞	刻画ヤギ	12
30	1	第六洞	第二側室	外景	11	31	1	第六洞	回廊東側	11
	2	第六洞	水槽	天井方孔	11		2~4	第六洞	平頭部 円室 内部と入口	11

第二部 カシュミル-スマスト洞窟

32	廃寺	遠景		41	崖上祠堂	・ ・ ・ ・ ・	31, 32	
33	洞窟	遠望と参道	・ ・ ・ ・ ・ 25	42	1	崖上祠堂 内部	・ ・ ・ ・ ・ 31, 32	
34	1	洞窟	外景	・ ・ ・ ・ ・ 25	2	山頂祠堂 内部	・ ・ ・ ・ ・ 32	
	2	洞窟	八角堂	・ ・ ・ ・ ・ 26, 27	43	1	山頂祠堂	・ ・ ・ ・ ・ 32
35	1	洞窟	水槽	・ ・ ・ ・ ・ 27	2	院内祠堂 内部	・ ・ ・ ・ ・ 32	
	2	洞窟	残壁	・ ・ ・ ・ ・ 27	44	1	小石窟	・ ・ ・ ・ ・ 30, 31
	3	洞窟	石階	・ ・ ・ ・ ・ 27	2	バンガロー遺跡 基部	・ ・ ・ ・ ・ 32	
36	1	洞窟	祠堂 全景	・ ・ ・ ・ ・ 28, 29	45	1	井戸	・ ・ ・ ・ ・ 32
	2	洞窟	祠堂 外面	・ ・ ・ ・ ・ 28, 29	2	北斜面建物	・ ・ ・ ・ ・ 32	
37	1	洞窟	祠堂と明窓	・ ・ ・ ・ ・ 28, 29	46	1, 2	北斜面 建物遠景	・ ・ ・ ・ ・ 32
	2	洞窟	石垣	・ ・ ・ ・ ・ 28	3	北斜面 建物	・ ・ ・ ・ ・ 32	
38	1	中央廃寺	中央建物	・ ・ ・ ・ ・ 30	47	1, 2	ピルサイ廃址	・ ・ ・ ・ ・ 32
	2	中央廃寺	会堂	・ ・ ・ ・ ・ 30	3	カシュミル・スマスト遠望	・ ・ ・ ・ ・ 2	
39		中央廃寺	会堂 北壁	・ ・ ・ ・ ・ 30	48		カシュミル・スマスト遠望とピルサイ	
40		中央廃寺	院内祠堂	・ ・ ・ ・ ・ 30			石窟群	・ ・ ・ ・ ・ 32

測 図 目 次

第一部 ハイバク石窟

	参照頁
1a. 石 窟 断面図 1 : 1200 (田中, 西川測, 田中図)	6
b. 石 窟 分布図 1 : 500 (田中, 小谷測, 田中図)	6
2 第一洞 平面と断面図 1 : 150 (田中測, 図)	6, 7
3 第一洞 天井 蓮華図 1 : 75 (小谷, 田中測, 田中図)	7
4 第二洞 平面と断面図 1 : 150 (小谷, 田中測, 田中図)	7
5 第三洞 平面と断面図 1 : 150 (田中測, 田中図)	8
6 第四洞と第五洞 平面と断面図 1 : 150 (田中, 勝藤測, 田中図)	9
7 第六洞 平面と断面図 1 : 250 (西川, 水野測, 西川図)	9~11
8 第六洞 側室と入口 平面と断面図 1 : 80 (西川, 水野測, 西川図)	9, 10

第二部 カシュミル-スマスト洞窟

9 遺跡図 1 : 2000 (西川測, 図)	29
10a 中央廃寺 断面図 1 : 120 (田中測, 図)	30
b 中央廃寺 平面略図 1 : 600 (西川測, 図)	30
11a 洞窟 平面図 1 : 600 (陳測, 田中図)	25, 26
b 洞窟 断面図 1 : 600 (陳測, 田中図)	25, 26
12 洞内建物 1 : 80 (田中, 西川測, 図)	26~29
13a 崖上祠堂 1 : 40 (西川測, 図)	31, 32
b 小石窟 1 : 80 (西川測, 図)	30, 31

HAIBAK AND KASHMIR-SMAST

BUDDHIST CAVE-TEMPLES IN
AFGHANISTAN AND PAKISTAN

SURVEYED IN 1960



EDITED BY
PROF. SEIICHI MIZUNO

KYOTO UNIVERSITY

1962